

# 忘れ得ぬ偉人

若松秀俊



# 忘れ得ぬ偉人

多くの若者を育んだ

フリッツ・カルシュ

松江での日々と

日本への想い

若松秀俊 編



中海の向こうに見える雄峰大山  
(フリッツ・カルシュ自筆画)

カルシユ先生は幼少の頃、まだ見たことのなかった

### 大山の夢を

何度も見たとのことです。

人の世の縁の不思議を感じる言葉です。

きつとこの景色が

最も好きだったのでしよう。



Dr. Fritz Karsch 1893-1971

## 目次

|                       |    |
|-----------------------|----|
| まえがき                  | 一三 |
| 序 章 今なぜカルシユ博士なのか？     | 一五 |
| 第一章 私とカルシユ博士との出会い     | 一六 |
| 第二章 フリッツ・カルシユ博士の生涯    | 二一 |
| 第三章 カルシユ先生の足跡         | 二四 |
| 三・一 日本との出会い           | 二四 |
| 三・二 旧制松江高等学校ドイツ語教師として | 二六 |
| 三・三 外官として             | 二七 |
| 第四章 家族との生活            | 二九 |
| 四・一 メヒテルトの言葉          | 二九 |
| 四・二 松江での生活            | 二九 |
| 四・三 横浜・東京での生活         | 三〇 |
| 四・四 戦後の日本での生活         | 三三 |
| 四・五 帰国後の家族三人の生活       | 三四 |
| 四・六 メヒテルトのアメリカでの生活    | 三五 |
| 第五章 学問と著述             | 三七 |

|                   |    |
|-------------------|----|
| 五・一 恩師 ハルトマン      | 三七 |
| 五・二 カルシュの学術業績     | 三八 |
| 五・三 人智学とシュタイナー    | 三九 |
| 第六章 カルシュと生徒達      | 四二 |
| 六・一 変な外人さん        | 四二 |
| 六・二 プラーゲン         | 四三 |
| 六・三 カルシュ先生との初対面   | 四五 |
| 六・四 シュパチーレンゲーエン   | 四六 |
| 六・五 光は東方より        | 四九 |
| 六・六 ナチヨナーレクライドウンゲ | 五〇 |
| 六・七 強行軍           | 五一 |
| 六・八 学園祭の時         | 五二 |
| 第七章 カルシュ先生のドイツ語   | 五四 |
| 七・一 厳しいプラーゲ先生     | 五四 |
| 七・二 プラーゲ先生の小言     | 五五 |
| 七・三 プラーゲ先生と拳骨教育   | 五六 |
| 七・四 カルシュ先生との出会い   | 五七 |

|                            |    |
|----------------------------|----|
| 七・五 カルシュ先生の思い出             | 五八 |
| 七・六 カルシュ先生とギルソン先生          | 五九 |
| 七・七 カルシュ先生の講義              | 六一 |
| (一) シュトゥーフェンワイゼとシュプルングスワイゼ | 六一 |
| (二) ヴァス イストダス ダーザイン?       | 六二 |
| (三) カルシュ先生の授業              | 六二 |
| (四) マルクスの逸話                | 六三 |
| 七・八 ハーマツヘル講師の思い出           | 六五 |
| 七・九 浜校仲間のドイツ語への思い          | 六五 |
| 七・十 見つけた講義録                | 六八 |
| 七・十一 六十二年前のカルシュ先生          | 七七 |
| 七・十二 カルシュ先生とエンド豆           | 七八 |
| 第八章 カルシュ家周囲の人々             | 八三 |
| 八・一 異人館の人達                 | 八三 |
| 八・二 家を壊したカルシュ先生            | 八八 |
| 八・三 ウッドマン先生の令嬢たち           | 八八 |
| 第九章 同僚や学者との交流              | 九二 |

|                       |     |
|-----------------------|-----|
| 九・一 高橋敬視先生            | 九二  |
| 九・二 ドイツ語教授 小林松次郎先生    | 九四  |
| 九・三 ドイツ語教授 原田和三郎先生    | 九七  |
| 九・四 藤野義夫先生・井坂清先生      | 九八  |
| 九・五 ドイツ語教授 藤野義夫先生     | 九八  |
| 九・六 榊と西田哲学との接触        | 九九  |
| 第十章 日本を去るに臨んで思ふ       | 一〇〇 |
| 第十一章 カルシュ先生以後のドイツ語    | 一〇四 |
| 第十二章 再会、カルシュ先生を迎えて    | 一〇八 |
| 十二・一 八年後のカルシュ先生ご夫妻    | 一〇八 |
| 十二・二 縁者との交流           | 一〇九 |
| 十二・三 カルシュ先生との再会       | 一一〇 |
| 十二・四 三回目の出会い          | 一一一 |
| 十二・五 師遠きより来たるまた楽しからずや | 一一二 |
| 十二・六 カルシュ先生を迎えて       | 一一四 |
| 十二・七 カルシュ先生を案内して      | 一一五 |
| (一) 十月七日 奥谷の万寿寺       | 一一五 |



|                    |     |
|--------------------|-----|
| (二) 魚一の団欒歓迎会       | 一一七 |
| (三) 十月八日 大社参拝      | 一二一 |
| 十二・八 報道 各地での歓迎     | 一二六 |
| 第十三章 再会後の同窓会との交流   | 一二九 |
| 十三・一 カッセルを訪ねて      | 一二九 |
| 十三・二 メヒテルト女史の日本再訪問 | 一三〇 |
| 十三・三 カルシュ先生と田島君    | 一三六 |
| 十三・四 メヒテルトさんを訪ねて   | 一三七 |
| 十三・五 カルシュ先生の想い出    | 一三八 |
| 第十四章 カルシュ先生の追悼     | 一四〇 |
| 第十五章 日本の文化への影響     | 一四二 |
| 十五・一 学問を通して        | 一四二 |
| 十五・二 ヨーロッパの窓口として   | 一四三 |
| 第十六章 高校生の頃         | 一四四 |
| 十六・一 高校時代の想い出      | 一四四 |
| 十六・二 松江高校同盟休校      | 一五〇 |
| 十六・三 昭和六年同盟休校      | 一五〇 |

|                     |     |
|---------------------|-----|
| 十六・四 勉強よりも運動        | 一五六 |
| 第十七章 カルシュ門下の人々と波及効果 | 一六一 |
| 十七・一 学術界へ           | 一六一 |
| （一）レーダ開発の功労者        | 一六二 |
| （二）俳諧の研究を生涯を通して     | 一六三 |
| （三）ワクチン生産の功績者       | 一六三 |
| （四）カルシュ先生のお蔭        | 一六四 |
| 十七・二 実業界へ           | 一六七 |
| （一）ビジネスとドイツ語        | 一六七 |
| （二）松江高等学校と私         | 一七〇 |
| （三）カルシュ先生断想         | 一七四 |
| 十七・三 政界へ            | 一七五 |
| （一）硬骨漢政治家           | 一七五 |
| （二）高校中退の秀才          | 一七六 |
| 十七・四 法曹界・社会活動へ      | 一七七 |
| （一）カルシュ先生との触れ合い     | 一七七 |
| （二）奇人の永井君           | 一七八 |

|                       |     |
|-----------------------|-----|
| 第十八章 淞校を思い出す座談会       | 一八五 |
| 十八・一 何故松江高等学校を志願したか   | 一八五 |
| 十八・二 数学について           | 一八七 |
| 十八・三 その他忘れられぬ学課について   | 一八七 |
| 十八・四 恩師についての回想        | 一八八 |
| 十八・五 物故クラスメートを偲んで     | 一九〇 |
| 十八・六 自習寮と下宿の話         | 一九二 |
| 十八・七 運動部の回顧           | 一九四 |
| 十八・八 左翼風潮の所産的出来事について  | 一九五 |
| 十八・九 三回経験した記念祭物語      | 一九七 |
| 十八・十 大学進学とその後について     | 一九八 |
| 第十九章 旧制高等学校への想い       | 二〇〇 |
| 十九・一 松江高等学校寮歌         | 二〇一 |
| 十九・二 ああ旧制高校！ 友よ！ 恩師よ！ | 二〇三 |
| 十九・三 私も旧制高校生でした       | 二〇四 |
| 十九・四 カルシュの調査に協力して     | 二〇五 |
| あとがき                  | 二〇八 |

|                                |     |
|--------------------------------|-----|
| 付 録                            | 二〇九 |
| A・一 最初の手掛かり                    | 二〇九 |
| A・二 カルシュ顕彰の一步                  | 二〇九 |
| A・三 資料公開の許可と協力呼びかけ             | 二一一 |
| A・四 ドイツ大使からの調査激励               | 二一八 |
| A・五 カルシュ家の歴史                   | 二一九 |
| A・六 旧制松江高等学校でカルシュ在職中に薫陶を受けた著名人 | 二二〇 |
| A・七 著名なエッセイの縁者                 | 二二一 |
| A・八 カルシュ関連新聞報道                 | 二三二 |
| A・九 編者による著作・出版物                | 二三三 |
| 参考文献                           | 二三四 |
| 一 嵩のふもとに（旧制松江高等学校校史）           | 二三四 |
| 二 翠松 旧制松江高校同窓会報                | 二三四 |
| 三 大阪支部会報松友                     | 二三五 |
| 四 東京松高会報                       | 二三五 |
| 五 カルシュ旧生徒の手記                   | 二三五 |
| 六 カルシュ講義録                      | 二三五 |

|          |     |
|----------|-----|
| 七 資料     | 二二五 |
| 八 家族の証言  | 二二六 |
| 九 同窓会員名簿 | 二二六 |
| 十 関連著書   | 二二六 |
| 十一 情報入手源 | 二二七 |

## まえがき

ドイツでほんの偶然から一人の女性と出会ったことが私を大きく変えた。「袖すり合うも他生の縁」というが、全く縁もゆかりもない、存在すら知らなかったカルシュ博士を、今こうして紹介する立場になったことの因縁の不思議さを感じて思う。カルシュ博士の調査では焦点を絞ると殆ど確実に必要な、また偶然に関連情報が手に入るその不思議さを常に感じてきた。多くの人々が自然な形で協力の輪を広げてくれたことに心より感謝している。

私は一九七三〜七五年にドイツ学術交流会の奨学生としてドイツ政府より奨学金の給費を受け、エルランゲン・ニュルンベルグ大学医学部の第一生理学教室でバイオサイバネティクスに関する研究をカイデル教授とブラティヒ教授のもとで行った。ドイツの文化とそれを生んだ風土に若き日に触れる機会をドイツ政府から与えられた私が、四半世紀後にドイツで開催された国際会議の折に、偶然にもカルシュ博士の娘に出会って、この仕事に携わることになったことを、私に賜った天命と考えるようになった。

私はシステム工学をもともと専門としており、縁あって生物・医学をこの立場から三十年を越えて体系的に研究してきた。若き日に東京大学の水島生化学教授の講演に感動し、生体工学に興味をもつて、システム工学を専門とする横浜国立大学の関口隆教授のもとで学んだことが、ドイツ留学に連なり、さらに生体機能の制御や医療機器の開発に繋がった。現在、医学系大学院所属であるが、研究室は医学部出身以外に電気工学、電子情報工学、金属熱工学、化学工学、物理学、農学、看護学など他大学他学部出身の、また外国人の大学院生を容し、外国人との研究も積極的に行っている。

カルシュ博士の調査をしなから、学生時代に私のドイツに対する興味から、ゲルマニストに転向を横浜国

「現在のバイオサイバネティクス研究所である。当時は Prof. Dr. Wolf D. Keidel をリーダーとする聴覚生理学の中心であった。彼は学術雑誌『Biocybernetics』の編集長であった。」

立大学の阿部賀隆教授から勧められたことを折に触れて思い出す。全く見も知らなかったカルシュ博士に偶然出会って以来、種々の施設を訪ね、調査を行っている間に、思わぬ人に出会すこともしばしばであった。そうした出会いが自分の人生の中でどれほど重要な意味をもつて来たのか、またこれからどんな意味をもつことになるのかを考えてきた。この中であって、いろいろと戸惑いもあったが、基本的にはロマンと楽しさを感じるものであった。

以下では、調査の中で知り得たことをできるだけ忠実に、内容の整合性を考慮しながら事実にして編集記述<sup>2</sup>した。

## 序 章 今なぜカルシュ博士なのか？

カルシュ博士の存在を偶然に知り、僅かな手掛かりを辿って事実を発掘し、彼の足跡を追跡する中で私は彼の偉大さを知った。カルシュ博士は直接・間接に接したことのある人以外には誰も彼を知らないほど、日本では残念ながら名の無い哲学者である。だからといって評価に値しないわけではないと思っている。したがって、いまだカルシュ博士なのかといえば、それは隠れたまたは紛れた彼の功績を発掘しまとめておき、同時に彼の縁者が元気なうちに少しでも多くの生の声を収録しておきたいからなのである。実際に、縁者達も自分が元気なうちに統一的に記録して置かなければ、遠からずして、すべての記憶が消滅する運命にあると心配している。これまで彼の縁者以外で、客観的な資料をもとにカルシュ博士を見ようとしたのは私が初めてということ、調査には縁者の皆さんが全面的に協力してくれた。折しも、二〇〇〇年は私が総務理事を務めるドイツ学術交流会（DAAD）の留学生会でもドイツ関連の行事を重ね、去る六月十六日にはドイツ学術交流会創設七十五周年記念式典が、東京ドイツ文化会館でドイツ大使ケストナー博士（Dr. U. Kaestner）、東京事務所所長リンス博士（Dr. U. Lins）、佐藤禎一文部事務次官の臨席の上で催された。併せてデュースブルグ大学のアモン教授（Prof. U. Ammon）の記念講演およびシンポジウム、元留学生音楽家による音楽会を行った。六月二十七日にはドイツ大使公邸に招かれ、その折これに触れたところ、七月になって、調査激励と成功を祈る手紙を戴いた。ところで、ドイツ学術交流会を創設し、ドイツが世界と本格的な学術交流を始めた大正十四年は奇しくも、カルシュ博士が来日した年でもある。DAAD創設七十五周年の昨年はドイツでは周知のように「日本年」にあたり、特に日本との関係を重視した催し物がドイツ各地で行われた。日本をこよなく愛し、多くの人材を育成したカルシュ博士は戦中・戦後の混乱時に埋もれ、殆どの日本人がその存在すら知らない状況にある。私がカルシュ博士を知ったのは全くの偶然であるが、このように状況が熟している今こそ、カルシュ博士を正しく知ってもらう好機であると思う。しかし、これらのことには関係なく、前述のようにただひたすら彼の業績と日本における功績のみに注目した顕彰を行い、後はそれを知った人々の判断と評価に任せるべきかと思っている。



## 第二章 私とカルシュ博士との出会い

シュトゥットガルトのとある小さなホテルでの一九九九年九月五日朝のことである。カルシュ博士の霊が偶然にも、私を導いて、彼との最初の出会いの機会を用意してくれた。カルシュという名前は私にとつては全く未知で、見たことも、聞いたこともない名前であった。当時、私は、二十年來の親しい友人であるデュースブルグ大学のフランク教授<sup>3</sup>が大会長を務めるカールスルーエでの第三回ヨーロッパシステム制御会議の国際プログラム委員として、また「呼吸循環制御」と「眼球運動」に関する発表と座長の任を無事に務めて、会議に別れを告げたところであった。

せつかく同行参加した同僚の張林曉博士と室蘭工業大学の高原健爾博士とも相談して、同四日に週末休暇を利用して、私自身も未だ訪れたことのなかったこのシュトゥットガルトの街に足を踏み入れた。その日の宿を決めてなかった我々は中央駅のインフォメーションで二軒の安価な、一晚九十マルクの小さなホテルを紹介してもらった。どちらにするか、ちよつと迷ったが、こちらと指して、城内公園 (Schloßgarten) の近くに宿をとったのが、この運命の出会いの始まりであった。そのホテルの名はホテルアムフリーデンプラッツであった<sup>4</sup>。

この日の三人でのガストシユテッテ (Gaststätte) での昼食はいろいろと話題が弾み、とても楽しかったこと、そして鶏の丸焼きがとてもおいしかったことを覚えている。街のあちこちを見物する前のことであった。この日は丁度、州知事の誕生祝いがあり、官邸の広場で楽隊の行進と演奏に幸運にも遭遇し、土地の人とも親しく語り合うこともできた。

<sup>3</sup> 専門は互いに異なるが前出の Prof. Dr. U. Ammon と Prof. Dr. P. Frank は同じ大学に勤務し、親しい関係にあることがわかった。  
<sup>4</sup> 何でも人の縁の不思議さを感じる。

<sup>4</sup> Friedenun と出会った場所が Friedenplatz で、その名称が不思議なことに一致していた。また、彼女の日本名は Hide-ko、編者の名前は Hide-toshi である。ずつと後で気がついたことであるが、ここにもやはり彼女の父 Fritz の意志が感じられた。何という偶然であろう。私とカルシュとの出会いに幾重にも偶然が働いていたのだった。

さて、問題の翌朝は仕事の準備もあつて七時頃であつたのだろうか、階下のダイニングルームで三人で朝食を摂っていた。すると、上品な婦人が私の左斜め向かいのコーナーに壁を背にして座った。彼女が食事を始めたとき、我々は丁度食事を終え、この日の予定を勿論日本語で語り合っていた。そのとき、彼女がふと私の方をみて微笑んだ。私が気づいてそのわけを尋ねると、大部分は忘れた日本語の響きをととても懐かしく感じて、自然にそうなったとのことであつた。彼女はマールブルク<sup>6</sup>に在住の地理学と政治学を専門とするフリーデルン(Frau Dr. Friederun Christa Karsch)であることがわかった。懐かしい松江、横浜、東京、軽井沢のかつての暮らしをかみしめるように語ってくれた。そして彼女の父が一九二五年から一九三九年まで旧制松江高等学校で教鞭を執っていたとのことへと順に話題が進展していった。しかし、残念ながら私たちの出発の時間も迫り、別れなければならず、再会を期して写真を取り、住所を伺って別れた。そのとき、低解像度設定のままのデジカメで写真をとったので、後でその出来映えを見たときにちよつと悔んだが、後の祭り

<sup>6</sup> Frankfurt am Main の北八〇<sup>km</sup>に位置する、ライン支流 Lahn に沿った宗教と学問の古都である。 Elisabeth-Kirche はドイツ最古のゴシック教会で随一の聖地となっている。図書館の豊富な大学町としても有名。カルシユの学んだ縁の地である。



1999年9月5日シュトゥットガルトのホテルでフリーデルンと筆者



ホテル・アム・フリーデンプラッツ  
(Hotel am Friedenplatz)

であった。

帰国後、約束の写真をフリーデルンに送ったところ、返事にカルシュ博士の履歴と業績の概略が届いた。戦中、戦後の混乱時に紛れて彼の業績が散逸し、日本では十分に時間がとれず、その後ドイツに戻る機会があってもなおまとめるに十分ではなかったことが推測された。

話に興味をもった私は、松江市役所と島根県庁、島根大学に問い合わせたが、同博士に関する具体的情報は殆ど得られず、私も多忙で、彼女とはクリスマスにカードを交換しただけであった。ただ、関連する史実と人名の確認を細々と行っていた。年が改まり私の周辺に種々事情が生じたこともあって、その前後に十分に時間がとれなかった。しかし、折しも開催されたフランスでの遠隔医療国際会議に参加・発表時に、時間をみてドイツに立ち寄りフリーデルンに会おうとしたが、双方とも時間がとれずこれを断念した。帰国後の四月にやっとこの件に本格的に取りかかることができた次第であった。その後フリーデルンから紹介された姉のメヒテルト<sup>6</sup>に電話と手紙で接することができた。これから得られた情報をもとにして、かつてのカルシュの生徒と縁者の何人かに接触できた。あとでわかったことだが、一九六八年にカルシュが同窓会から招かれて以来、彼女が共に旧交を温めていた数人の住所をアルファベットの形で紹介してくれたのだった。そのなかで国内のカルシュに縁のある最初のキーパーソンである酒井、増田、白石、遠藤、江上に連絡をとることができた。もちろん、住所もアルファベットなので、まず対応する日本語を調べ、さらに電話番号を調べ電話をしたのが実質的な調査の開始であった。酒井からは好意により後に『カルシュ先生（私家本）』のユピ<sup>7</sup>をいただいた。この頃、出雲と松江に直接赴いて何を知ることが可能かを検討するようになった。現在の島根大学の図書館を通じて、古い職員録を見出し、そのときはじめて、私はカルシュが本当に松江で教鞭を執っていた客観的証拠を得ることができた。

<sup>6</sup> 二〇〇〇年四月二十八日に当時人事掛長三原隆がカルシュ博士の職務記録を提供してくれた。

<sup>7</sup> 彼女は自分の名をメヒテルトと書き、署名にも使うことがある。カルシュ博士は Mechuid、幼な友達にメヒテさんと呼んでいた。二〇〇〇年十月に酒井勝郎と自宅で面会したとき、彼はメヒテさんと呼んでいた。英語圏では ch の発音が困難なので、アメリカでは日常は Christian Name の Maria と呼称している。

増田の紹介もあつて、竹原と会つたのはそうした中であつた。奥谷町の自宅で面会することができたが、当時の松江高校の同窓会に關してまったく予備知識のない私には把握できないことであつた。カルシュの住んでいた奥谷町の洋館の前で竹原と写真をとつた。後になつて関連資料を手に入れ、この洋館に個人的に特別に興味を持っている人がいることやカルシュ周辺の同僚ウッドマンとの關係がわかつた。

ところで同窓生の資料を探して提供してくれたのは芹屋の白石であつた。ある集まりで彼が私の話をしたのがきっかけで、見も知らないひとから手紙や資料を受け取ることができた。彼を通じてさらに岡崎、宮田、奥野らの紹介があつた。また、同窓会長の中村、また澤田、田島、松本、藤田などからも元氣でお過ごし、生徒の経歴などの情報を得ることができた。

このころ、同時にメヒテルトからは次々と事実を明らかにする手がかりを得て、彼女が提供するすべての資料を公序良俗の条件下で公開することを任された私は、「カルシュ先生顕彰發起人会」設立と将来の計画立案のために白石、宮田、岡崎、奥野の四氏と芹屋で会つた。

カルシュ博士は戦前、松江高等学校でドイツ語、ドイツ文学、哲学の教鞭をとつていた。一九四〇年からはドイツ大使館に勤務し、両国の友好關係に尽力した。娘が二人あり、そのうちの一人が前記の Frau Friederun Karsch (日本名 ひでい) で、現在ドイツのマールブルクに住む学者である。もう一人は Mrs. Mechtild St.Goar (日本名 ほし) <sup>9)</sup> で、現在アメリカ合衆国テネシー州チャタヌガ (Chattanooga) に住んでいる。一九三九年帰国してから一九四〇年再度来日して、横浜 (一九四〇～四四年)、東京 (一九四四～四五年)、軽井沢 (一九四五～四七年) に居住したとのことであつた。

妹からは時間がなくて十分に話を聞けなかつたが、何回か姉と直接電話で話すうちに、父カルシュの残した資料と絵画、松江の写真およびかつての生徒とその縁者の資料を保管していることがわかつた。日本では圧倒的にラフカディオ・ハーンのことを顕彰され、著名であるが、カルシュの十四年に及ぶ滞在期間から

<sup>9)</sup> 金沢庸治、柴田久美子 (四期文乙柴田午郎は義父) 、「まちづくり会」のメンバーから便りがあり、編者より原著の原本を送付した。  
<sup>9)</sup> Mechtild は一九二八年一月二十七日生まれ、Friederun は一九三七年四月二十三日生まれ。

言っても、松江や松江高等学校で果たした功績は大きいものがあると推測された。おそらく経済的混乱や戦中・戦後の混乱期に当たり、彼の足跡を記録として留めおくことができなかったからと思われる。彼の足跡を追って、故人の縁者が元気なうちに埋もれた彼の功績を明らかにしたいと思い、独自に調査をした結果、カルシュが当時の日本を深く愛し、日本の人を慈しみ自分の持てる知識を惜しみなく生徒に伝えたことがわかった。このことを広く日本の人々に知らせてあげたいと思っている。また彼の日独友好の努力の証を明らかにし、さらにその発展の礎にしたいと思っている。彼の履歴についてはフリーデルンから得たものを翻訳したのが調査に役だった。また、長女メヒテルとカルシュの直接・間接の旧生徒から得られた情報と、外務省、宮内庁、文部省および関連機関、図書館を利用して得た情報をもとに、ほぼ正確に知り得た部分についてまとめてみた。

日本語で書かれたカルシュの職務記録  
(島根大学所蔵)

昭和7年度 松江高等学校一覧  
カルシュ博士の名がみられる(島根大学所蔵)

## 第二章 フリッツ カルシュ博士の生涯

フリッツ・カルシュは明治二十六年二月十九日、ドレスデン近郊のブラゼビッツで三人兄弟の末子として生まれ、昭和四十六年十一月十八日にカッセルで没した<sup>10</sup>。父はヘルマン、母はルイーゼである。彼は、大正十四年より十四年間にわたり旧制松江高等学校で教育に力を注ぎ、多くの人材を育てた哲学者であった。また日本の哲学や宗教の研究家で、昭和十五年から五年間にわたる知日家外交官でもあった。彼の薫陶を受けた著名人には池田、佐藤内閣の自治相の赤澤正道<sup>11</sup>や「長崎の鐘」で知られている元長崎医科大学教授の永井隆<sup>12</sup>などがいる。もちろん、彼の門下には高齢ではあるが健在の各界著名人を多数見出すことができる。彼は明治四十四年ドレスデンにおける国際博覧会で「日本」と遭遇した。

故郷の理系ギムナジウム学校を大正三年に終えドレスデン工科大学に入学した彼は半年後の第一次大戦では志願兵、電信隊勤務であった。大正六年に予備少尉、大正八年には軍役を退き、その後マールブルク大学でニコライ・ハルトマン門下として哲学を学び、大正十二年に哲学博士の学位を取得した。さらに歩を進め人智学の研究組織に加わった。大正十四年日本との縁からドイツ語講師として運命の地の松江へ赴任することになった。同年十月、彼はブラーゲの後任として旧制松江高等学校に着任した。その後何度かの傭継契約した。昭和六年四月七月に一時帰国の間、ハーマヘル<sup>13</sup>が教鞭を執ったが、同年九月再び採用され、昭和十四年三月契約満期に、シュワルベ<sup>14</sup>と交代し帰国した。この間、英語教師のウッドマンを隣人とし、松江市奥谷

<sup>10</sup> Fritzの父はHermann Karsch、母はLuise Kunis、Dresden BlasewitzのMarktplatzで大規模な食肉業をHermannが経営、共同で建てた石造りの建物の主要部分は一九〇一年父の死後に入手にわたった。彼は三、四歳の時エルベ河でおぼれかけた。そのとき名もない労働者に救われたとのことである。九歳の時盲腸から腹膜炎を起こし生命の危機に陥った。彼の長姉Elizabethは乳児の時死亡、次姉Friedaはオーストリアで結婚し、三人の子供をもうけた。子孫は健在という。一九三九年と一九四〇年にメヒテルトは祖母ルイーゼに会っている。(メヒテルト談)。ドレスデンはザクセン地方の首都でエルベ河畔の優雅なバロック調の芸術都市である。カッセルはグリム兄弟で有名なヘッセン王国の首都、美術館・博物館が多い都市である。  
<sup>11</sup> 赤澤正道(鳥取出身)(四期文乙昭和二年卒)東大卒、衆議院議員、池田内閣、佐藤内閣自治相、昭和二十七年逝去  
<sup>12</sup> 永井隆(島根出身)(五期理乙昭和三年卒)長崎医大卒、元長崎医科大学教授、昭和二十六年逝去  
<sup>13</sup> この時期に教わった九期文乙の白石が想い出を述べている。  
<sup>14</sup> 南ドイツボーゼン出身(松本昭談)

町官舎<sup>15</sup>に住んだ。妻エスメラ（明治二十九年生）との間には、長女メヒテルト（昭和三年生）、次女フリーデルン（昭和十二年生）があり<sup>16</sup>。余暇には愛する松江や周辺の田園を精密に描写した。彼の描いた宍道湖、嫁ヶ島、袖師ヶ浦、大山、山陰の農村の風景画が保存されている。また当時の松江の貴重な写真を数多く残している。

彼が任地の松江で若者にヨーロッパの精神を伝えながら、同時に自らの精神生活を磨きあげ、自分のライフワークである人智学的にみた東洋哲学史の膨大な未刊行原稿を残した。当時の日本を深く愛し、日本人々を慈しみ、自分のもてる知識を惜しみなく若者に伝えたカルシュの著書にはカントとハルトマンの比較論述（日独文化協会、昭和三年）があり、その他ドイツに関する著書（同協会、昭和九年）も出版されている。同僚の高橋敬視教授によるハルトマンの著書の翻訳は彼の紹介と協力によるものであった。同博士に関しては、門下の酒井勝郎が「田舎の大学から」（私家版、昭和四十四年）、「カルシュ先生」（私家版、昭和五十五年）で記述し、同窓会誌「翠松」や旧制松江高校史の「嵩<sup>17</sup>のふもとに」でその人柄を旧生徒らが語っている。昭和十四年、帰国当時に予備役将校であった彼は戦場を避け、彼と親交があったドイツ大使のオット仲介によって大使館付副武官として昭和十五〜二十年まで国会議事堂近くのドイツ大使館に勤務した。家族は昭和十五年春から昭和十九年九月まで横浜山手町の米国人フレイジャー（Mr. Frazer）の家に住んだ。その後、暉峻凌三<sup>18</sup>の斡旋で東京世田谷区に元国際連盟派遣代表であった鮎澤巖所有の和洋折衷の家に居住した。

<sup>15</sup> 外国人教師宿舎として大正十三年十一月二十九日落成。官舎と呼んでいた。島根大学管財課によると昭和四十一年から宿泊施設八雲荘として使用された。昭和五十年以後は独身職員宿舎として使用されたが老朽化著しく、現在の居住性は極めて劣悪である。

<sup>16</sup> 夫妻の長男で一九三五年生まれの *Gottfried Hermann Johannes Yoshinobu Karsch* (1935.9.3~9.10) は生後一週間で死亡した。多田教授の名前つけた。（メヒテルト談）

<sup>17</sup> 嵩山（標高三二六メートル）に由来する。松江の東、中海の近くに聳える山。嵩山は高い山を意味する。今はキャンパスに高層建築が立ち並んで視界を遮っているが、昔は周囲一面が田圃で民家が少しある程度で、学生寮である自習寮の丘からの見晴らしはよく、和久羅山・樂山とともに、乙女が仰向けに寝た姿に見立てて、昔から寝佛（ねぼとけ）と呼ばれていた。松江高校生はメツチエン山と呼んでいた（竹原敏夫による）。因みに同じ漢字を当てる嵩山（すうざん）と呼ばれる中国河南省洛陽の東にある中国五嶽の一つの名山がある。また、同名の人物がいる。鎌倉末期〜南北朝時代の臨済宗の僧であり文人である。二度中国（元）に渡り、南禅寺、円覚寺に住した。五山文学の代表的人物で著書に「嵩山集」二巻ある。

<sup>18</sup> 暉峻凌三（東京出身）（十四期文乙二昭和十二年卒）東大文 哲学卒 元帝京大学教授 平成四年逝去

昭和八年から毎年夏には、軽井沢の別荘で過ごした。昭和十五年の夏は、今上陛下が皇后陛下と出会ったデニス場のすぐ近くに住むことになった。翌年からは幸福の谷間 (Happy Valley) の別荘で過ごし、昭和二十二年八月に夫妻と次女が帰国した。彼の未発表の研究は哲学史と人の意識の進化に関するものである。

スイスのドルナツハの「ゲーテアヌム」に収録された彼の未刊行原稿は後に家族の許に戻されている。原稿は解読困難であるが、古代のインド、中国、ギリシャの哲学から始まる一冊約四百頁余のファイル三十七冊を整理中である。全体に流れる彼の意図は有史以来人の思考が、すなわち、哲学がどのように変化してきたのかを示すことであって、彼が大きな興味を抱いていた禅と西田哲学への入り口がやがて明らかにできるはずである。彼はまた資料の中で、学問や内的修練を通して、シュタイナーが唱えた新しい思考に我々が如何にして到達できるかを示そうとした。彼の大部分の実践的仕事はシュタイナーの哲学が如何にカント哲学と関連しているかを示そうとしたことにあり、彼自身が自らを称して行動的人智学者でありシュタイナーの「精神科学」を世に広める教師であると言っていた。彼の娘達は人智学の基本に関する影響を両親から受けた。後に長女は自らその研究を行い、次女は帰国後自由ヴァルドルフ学校<sup>19)</sup>に通い、マールブルク大学で学び、同じヴァルドルフ学校の教員になった。

昭和二十二年ヘッセンで生活基盤を整えたカルシュ博士はマールブルク大学神学教授ハイラー博士を通じて、戦後宗教学者としてご活動の三笠宮崇仁殿下との親交をもった。昭和三十六年には病氣のため年金生活に入った彼はキリスト共同体の古巣のカッセルに移住し、ライフワークである人智学からみた東洋哲学史の研究に専念した。その後、音信が保たれていた旧生徒から昭和四十二年に招待を受け、翌年秋に、日本各地を訪問し多くの旧生徒と親しく過ごすことができた。このことは新聞でも報道された。その際に彼は出雲大社で、至聖の神々に対面する願いが叶えられ、ここで自らの天命に対して神々に感謝の言葉を述べることができた。一ヶ月の滞在後に帰国した彼は金婚式を昭和四十五年に祝い、翌年脳腫瘍で亡くなった。彼は少年期に夢見た風景と全く同じ風景を松江周辺に見ることができたことを自らの人生の終末期に、周囲の者によく語っていたとのことである。

<sup>19)</sup> 起源は一九一九年代であるが、戦時中は禁止された。しかし戦後に復活し、一九八〇年代には世界各地に創られた。



### 第三章 カルシュ先生の足跡

#### 三・一 日本との出会い

フリッツの父はヘルマン、母はルイーゼ、姉がフリーデル、祖父がヴィルヘルムである。ヘルマンは一九〇一年に肺炎で死んだ。

一八九九年春、ブラゼヴィッツの町民学校入学し、一九〇三年に王立ドレスデン・ノイシュタットのギムナジウムに進学した。翌一九〇四年からブラゼヴィッツのギムナジウムクラスに転校した。一九〇六年からブラゼヴィッツの自然科学系ギムナジウムに進み、一九一四年に大学入学資格のアビテュア（バカロレア）に合格した。このときの学校の年報告が残っている。

フリッツは一九一一年ドレスデンの国際博覧会で日本に遭遇した。このとき、博覧会で日本人担当者から黄金のカフスを手に入れており、終生大事にしたとのことである。これを契機にラフカディオ・ハーン著書に出会い、その著書を集中的に読むなかで日本に大いに興味をもつに至った。

一九一四年春にドレスデン工科大学に通い始めた。しかし第一次世界大戦が勃発すると同年十月八日から一九一八年十二月三十一日までドイツ軍志願兵になった。うち一九一七年一月二十七日からは遠隔通信部の予備役に着いた。

彼は、戦後の一九一九年春から哲学を専門、自然科学を副専門として、マールブルクで学業を再開した。ここで、後に妻となったエツメラ・アクセンフェルト<sup>30</sup>と出会った。一九二〇年にはフライブルクでハイデッガーやフッサールの講義を聴き精力的に学んだ。

一九二〇年十二月二十八日に結婚、翌一九二一年からバイセンベルガー通りに居を定めた。その後マールブルク大学でニコライ・ハルトマンの門下生として哲学を学び、一九二三年学位を取得し、その間マルティ

<sup>30</sup> Emmela は一八九六年十月三日 Godesberg で生まれ、一九七八年八月四日 Kassel で没した。彼女にはユダヤの血が四分の一混じっている。伯父は著名な眼科学者 Dr. Teodor Axenfeld とある。（増田、メヒテルト談）

ン・ボルヒャルトを通して一九二一、二二年に人智学を学んだ。この時期は、ドイツでは未曾有のインフレのために適当な就職先も無く、彼の生活は貧窮状態にあった。ラフカディオ・ハーンの影響をすでに大きく受けていたと思われるこの時期に同大学の日本人学生であった長屋喜一と鹿子木員信<sup>ニ</sup>に出会い、ドイツ語教師を求めている和歌山か松江に行くことを勧められた。この出合いはカルシュにとつて彼の一生を決める極めて重要な意味をもつものであった。その後、長屋は何度か旧交を暖めるためにカルシュを訪れている。日本での第一歩は訪問記録から見ても、一九二五年九月二十八日であったと思われる。

八雲立つ 出雲のそら 此あした

雪深くして 風吹き 渉る

昭和二年一月二十四日 長屋

軽井澤 ？？杉の下？？て

北欧の夏の 森を偲びぬ

みずが 信濃の吾に はるばると

みつめれど 浅間は見えぬ

昭和八年八月十三、十七日 長屋

<sup>ニ</sup> 彼等とともにマールブルクで学生の頃ドイツ語をカルシュより学んだ。カルシュは後に「ハルトマンの哲学」を東大教授となった長屋と共同執筆した。禪師であったので禪に関する交際をもった。メヒテルトは再来日時に長屋とは羽田空港で会った。(メヒテルト談) 戦前、一度横浜を訪ねてきた鹿子木員信(かのこぎ・かずのぶ)文学博士(一八八四年十一月三日～一九四九年十二月二十三日)がいたが、どの程度の付き合いがあったか不明である。一九〇四年海軍機関学校、一九〇七年米独留学、哲学者。東京帝大講師、一九二六年九帝大教授、一九二七年ベルリン大教授、ベルリン日本人倶楽部の右翼指導者、言論報国会事務局長、戦後A級戦犯容疑者。大アジア主義を提唱し、大正七年には大川周・北一輝・堺利彦・満川亀太郎・中野正剛らとともに、左右両翼の思想家が結合した老社会を結成した。戦争中は大日本言論報国会で活躍。昭和十九年発行『思想戦大学講座』収録の鹿子木論文「日本思想戦の神髄」で、「承認必謹」の必要性、日本皇道世界観と自由主義的世界観の違い、などに対する論理を主張。

その昔に学びし この町に  
また訪ね来て 共に語りぬ  
一九六七年九月七日夜  
日本に帰る前夜  
四十数年前を回顧しつつ 長屋

### 三・二 旧制松江高等学校ドイツ語教師として

一九二五年十月に月額俸給四百二十五圓でドイツ語教師として採用され、一九二八年三月備継契約を結んだ。俸給は変わらず前と同じ額であった。一九三一年三月に契約満期解約となり、同年四〇七月に一時ドイツ帰国したが、同年九月奏任に準拠採用され、その後一九三四年五月に奏任五等以上準拠扱いで再採用されて、一九三九年三月、契約満期の解約になり、帰国した公式記録がある。

彼の住居は松江市奥谷町官舎であった。一九三七年四月復活祭の期間に火災に遭遇したが、日本人の助力により鎮火した。そのときの印象がますます日本を好きにしたようである。メヒテルトが後年何度もいろいろな人に語っている。出火原因は隣人の英語教師ウッドマン (Herald Woodman) のお手伝いの火の不始末であった。

ウッドマンは一九三二年四月〜一九四二年三月に日本に滞在し、同じ旧制松江高等学校で英語教育を行ったが、戦争のため米国に送還された。彼の妻ヒデは日本人でモニカとエレナの二人の娘がいた。

人智学とともに信奉していたカルシュ夫妻の心配どおり、人智学はドイツ第三帝国で問題になり、一九三四年には関連学会は禁じられた。同夫妻はメヒテルトの将来と今後の教育を心配して一九三九年にドイツに帰国する決心をした。彼らとシュタイナーとの学術的な関係は人智学の発展過程との関連から当然と推定される。

彼に画才があり、パステル絵画をたくさん描いた。例えば当時の宍道湖、嫁ヶ島、袖師ヶ浦、大山、山陰の農村風景の絵がある。以下は、彼が休日に、自ら描いたパステル画の写真である。非常に精密に描かれている。袖師ヶ浦の描写は、現在の風景とは異なり、移転以前のものである。また写真が好きであったので、戦前の松江の写真や当時の高校生の写真をかなりの枚数を残している。

### 三・三 外官として

フリッツは、後にドイツ大使となった大使館付陸軍武官のオット（Eugen Ott）と親交があった。軍の内部にあってナチスからは比較的毒されない位置にいたオットは、理由は明確でないが、フリッツが軍で一緒



大橋川に浮かぶ帆かけ船



宍道湖 嫁ヶ島風景 カルシュ自筆

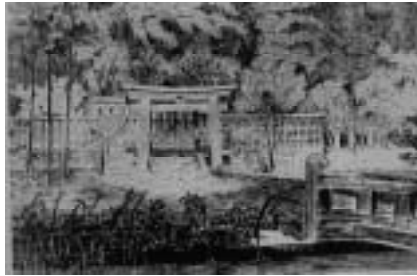
カルシュ博士のカラースケッチ  
自筆の水彩画パステル画



袖師ヶ浦地藏 1927年当時 カルシュ自筆



墓地 カルシュ自筆



月照寺(藩主松平家の菩提寺) カルシュ自筆

に働くのを諸事情から好ましいと思っていたようだ。それゆえ、カルシュの家族はアメリカ経由で一九三九年の春にドイツに戻り、彼は予備役に入った。そして、約半年余の後、ポーランドの侵攻戦争が終わった頃、彼はベルリン防衛軍の司令官の許へ出頭命令を受けた。彼はオット大使の要請もあって、家族とともに日本に戻る旨を言い渡され、東京の大使館付副武官として、外交通過許可証をもって、ソ連と満州を経由して東京に赴任した。

これよりすなわち一九四〇年から終戦までドイツ大使館に勤務することになった。当時のドイツ大使館は国会議事堂から道路を横切った位置にあり、空襲を受け一九四五年四月後半に消失した。家族は同年五月前半に軽井沢に疎開した。そして、八月にラジオを通じて天皇の有名な降伏宣言（玉音放送）を聞いたとのことであった。メヒテルトは自らの立場に拘わらずその心底は、英語の表現では *You can imagine our relief when we heard the famous surrender speech by the Tennes in August over our radio!* であった。そう語っている。

## 第四章 家族との生活

### 四・一 メヒテルトの言葉

『私にとって人生の最も長い期間を日記に書き留めておきました。従って、今日まで私が何時どこで何をし、しかも特定の時間にどこにいたかを容易に検証することが出来ます。私はもはや若くはありませんが、私の記憶は神の加護により今日に至るまで難を受けることなく、それどころか、全く逆に、私の誕生以来私が日本で過ごした二十一年間に起こったことを幾百度となく思い出しましたし、いつでも記憶に呼び起こすことが出来ます。私は何枚かの写真を同封しました。そのうちの一枚は父と母の写真です。これは一九七一年の九月に撮影したものです。父が手術不可能な脳腫瘍と診断された二、三週前に撮影したものです。母と私はよく似ており、私が髪を染めず白髪になってからはとくにそのようです』<sup>註18</sup>

### 四・二 松江での生活

子弟教育は家庭教師の山根夫人によった。日本語家庭教師は中村フデ子で、赤川姉妹は近所の友人であった。メヒテルトの幼馴染みに宮崎県に住んでいる二歳年少の東史がいる。錦織君栄はメヒテルトが乳児のころの保母さんであり、メヒテルトは彼女を「日本の母」として慕っていた<sup>註19</sup>。彼女は父フリッツと千鳥城（松江城）に何度登ったかわからないと言う。人力車にもたくさん乗り、近隣を旅行した。

<sup>註18</sup> これはメヒテルトから編者に宛てた手紙の一部翻訳したものである。写真は第十四章カルシユ先生の追悼に掲げてある。  
<sup>註19</sup> これらの人とは一九九〇年（平成二年）にメヒテルトが来日したときに再会している。



奥谷町官舎の前で 1938年頃



官舎の庭 1927年頃

和歌山など遠距離にも旅行したことを憶えている。毎年夏には六週間近くの休みを利用して軽井沢で過ごした。父は駅弁が好きで、高崎では鰻丼を好んで食べた。しかし、彼女は鰻丼が嫌いであった。フリッツは在日中に日本の宗教との緊密な関係をもったようだ。高野山での修行の経験があり、また禅師との交流もあったようだ。そのなかで、金沢出身で仏教哲学者鈴木大拙と同郷の哲学者西田幾多郎との親交もあったようだ。戦後、鈴木大拙がマールブルクに住むカルシュ夫妻を訪ね、旧交を温めたことを示す一九五四年七月二十日付けの記録が訪問記録(Gästebuch)に残っている。

#### 四・三 横浜・東京での生活

横浜での生活は松江や日本文化に根ざした生活とは異っていた。フリッツは毎日大使館に通勤した。そこではもちろん職務上、東条内閣時代の軍司令部の高官ともしばしば接触していたようだ。彼は家族には一切その話をしなかったが、東京―ベルリン間の通信の暗号化とその解読を行ってきたようだ。すなわち、軍事



軽井沢の別荘 1935年頃

的諜報活動である。メヒテルトは当時の写真を幾つか保存している。すべては枢軸国の間の出来事で、もちろん家族はだれもそれに関与しなかった。横浜市中区山手町四十六Eには一九四〇年春から一九四四年九月まで居住した。住居はアメリカ人のフレイジャーから借用した。メヒテルト自身は一九四〇～一九四四年秋まで大森の東京ドイツ学園に通学し、ここで学んだ<sup>29</sup>。この家は一九四五年春の大空襲で破壊された。その後世田谷に移動した。そのころは、フリッツのかつての生徒であった暉峻凌三帝京大教授の斡旋で東京世田谷区成城に大きな家を借用し、すでに半年近く住んでいた。この住居は鮎澤<sup>30</sup>所有であった。鮎澤は第二次世界大戦前にジュネーブの国際連盟日本代表であったひとであり、当時彼は東京を離れ疎開していたので、フリッツがこの家を引き受けた。この家は和洋折衷の大きな家で、家の後部にテニスコートがあった。洋式の部分は一九六八年まで存在していた。和式部分とテニスコートの土地は高額な相続税のために売却されたと思われる。

毎年夏には軽井沢に別荘を借用した。一九三三年から一九三九年まで、通称ハンダヤマの別荘（別荘番号二四六三、現在は道路）で過ごした。

とある。編者も一九六九～一九七〇年に大森にあった東京ドイツ学園の日本人のための Abendkurs でドイツ語を勉強した。現在は横浜にある。明治二十七年次城県生まれ。十七歳でフレンド平和奨学生。ハーバード、コロンビアの各大学で社会学と国際労働法を学ぶ。卒業後ILO本部の職員、日本の国際連盟脱退（一九三三年）まで約十五年間勤務、その間一九二八年までILO東京支局長。英語に堪能な知米人で平和主義者であったので、戦後はGHQに重用され、占領期の対日労働政策の立案と施行に重要な役割を果たした。一九四五年に労働組合法の原案審議のための労務法制審議委員会事務局長、GHQとの折衝にあたった。のち、中労委事務局長や中労委中立委員などを歴任。晩年は世界連邦建設同盟理事長として国連の強化に取り組む。一九七二年フランスで死去。「現代人物事典」、朝日新聞社編（一九七七年）より



半田は資産家で、多くの森と土地を所有していたと思われる。夏の間そこに住んでいたドイツ人は軽井沢のこのあたりを《フン族の小さな森 (Hunnenwäldchen)》<sup>35</sup>と呼んでいた。というのは、そこは第一次世界大戦の間、多くのドイツ人があたかも虜囚市民 (Zivilgefangene) のようにして住んでいたからだろうか？ともかく三笠ホテルのすぐ近くの小さな森であった。一九四〇年から、前述のように、今上陛下が皇后陛下と出会ったテニス場のすぐ近くで最初の年の夏を過ごした。つぎに幸福の谷間 (Happy Valley) という場所の一九二四番に住み、その後一九四五年四月に軽井沢一九二八番の古い三階立ての別荘に移動疎開した。この家は当時すでに老朽化して倒壊の危険に晒されていた。この別荘から一九四七年八月にカルシュ夫妻と次女が帰国<sup>36</sup>した。カルシュが再来日した一九六八年にはもはや存在しなかった。

カルシュの東郷茂徳や来栖三郎<sup>37</sup>との交流についてメヒテルと証言している。

東郷茂徳はドイツ人イーデスと結婚した。娘の東郷イセとはメヒテルトが東京で一緒に遊んだ仲であったし、その思い出は尽きないという。当時野村吉三郎、来栖三郎両大使<sup>38</sup>に対して、何とか戦争回避を念じて両大使を支えていた東郷であった。「ハル・ノート」の最後通牒から、意に反しての戦争は心苦しく、単独辞職も考えたが、結局思い留まり、開戦の日を迎えた。真珠湾攻撃が大使館員と日本軍部の連絡不手際により、結果的に奇襲攻撃となり苦悩を深めた。戦局が悪化し、東条英機内閣から小磯国昭内閣になっても、徒らに時間

<sup>35</sup> 著者の推測によれば、おそらく文明から取り残されたという意味で古い民俗名の匈奴 (Hunne) という言葉を使っただけと思われる。

<sup>36</sup> 一九四七年八月十四日に吉田鈴江と別れの名残を惜しんだ (Gästebuch より)。Bremer Hafen に到着後、収容キャンプを経て Marburg へ向かった。

<sup>37</sup> 朴寿勝の長男として鹿児島で生まれた彼は東京帝大卒業後、外交官として、駐独大使、駐ソ大使などを経て、開戦直前に、東条英機内閣の外相として入閣した。太平洋戦争では開戦と終戦時の二度にわたり外務大臣を務めた。東京裁判でA級戦犯として、禁固二十年の刑を受け、一九五〇年七月、米陸軍病院で六十七年の生涯を閉じる。

<sup>38</sup> 第三次近衛文麿内閣の陸相の東条が日米開戦回避のために進めていた日米交渉に対して、特に中国での駐兵問題で強行意見を曲げなかったため、近衛は内閣を放棄した。東郷は入閣要請に対し、日米交渉に全力を挙げるといふ条件を提示し、東条内閣入閣を決意した。実は東条も、昭和天皇の意を尊重し一時強硬論を引っ込めて、日米交渉に真剣に取り組もうとしていた。

<sup>39</sup> I recall my father talking about the fact that Kurusu-san was sent on a supposed peace mission to Washington while back in Tokyo the military leaders were planning the attack on Pearl Harbor. じがメヒテルトの生の言葉である。

を浪費するのみであった。大戦中に貴族院議員になっていた東郷は、昭和二十年三月に議会が閉会となると、空襲を避けて、軽井沢に疎開していた。このころカルシユ家との付き合いがあった。その胸中をフリッツに語ったという。なお、来栖三郎の娘エディット (Edita) とも、この地で交流があった旨をメヒテルトが語ってくれた。このころ、カルシユ博士と共通の友人であるスエーデン夫妻<sup>30</sup>との交流もあったとのことである。当時の外務官僚の寺崎英成と米人妻グエンの子どもマリコ<sup>31</sup>の話を書き手がメヒテルトにすると興味深く聞いていた。公的には開戦の当事者が、実は意に反した決定をせざるを得なかった歴史がある。ここに日本も祖国も愛していた、在日外国人の当時の行動を考える必要がある。どれほど、こうした善意の人々、平和主義者を巨大な歴史の力学が苦しめたかを検証すべきであろう。

鈴木貫太郎から、外相としての入閣要請により東郷は、外交面での全権を委任され、終戦に向けて努力する決意を固めた。鈴木自身も、天皇の早い終戦の希望に沿って表面的には強硬論を吐いていたが、心は東郷と一つであった。中立国のソ連に、早期終戦への一縷の望みを託した東郷であった。しかしヤルタの密約で、日本の領土獲得を条件に参戦を決意していたソ連は日ソ中立条約の延長を拒絶し、さらに、長崎に原子爆弾が投下された八月九日に、まだ同条約を蹂躪して戦闘に入った。同日の御前会議で、本土決戦を唱える阿南惟幾陸相と、ポツダム宣言受諾を唱える東郷の意見が激しく対立したが昭和天皇は終戦の聖断を下した。開戦と終戦という多難なときに外相を務め、平和を追求した東郷が戦犯として東京裁判で禁固二十年の刑を言い渡され、拘禁中に病没したことは理不尽な気がするとのことであった。

#### 四・四 戦後の日本での生活

フリッツは外交官であったので、軽井沢で日常必需品、家具、敷物、本、日本美術品、個人所有物は、所有を許可されていたが、一般の他の裕福なドイツ人は家を失い財産は接収された。当時ドイツ人はほとんど

<sup>30</sup> Marie-Anne Gertzと当時の明仁皇太子との写真がある。

<sup>31</sup> 「マリコ・寺崎・ミラー」その頃、来栖三郎全権大使が着任。その来栖は「ルーズベルト大統領から直接昭和天皇に親書を渡すこと。天皇の口添えには軍部も反対できないはず」との提案をした。

この地に残っていないかった。カルシュ一家は強制送還までの期間をここで暮らしたが、日本のインフレーションのためにすべての金銭の蓄えを事実上失い、生活は困窮した。彼女は収入を得るために、国際戦争犯裁判 (International War Crime Trials) のドイツ語⇨英語の通訳の職を得ることができた。その後、ニューヨーク銀行の東京支店で働いた。しかし、ドイツの将来に対する不安から両親との帰国を希望せず、横浜のアメリカ領事館にビザを申請した。ビザが下りたころは両親が帰国準備中であつた。この時期に米軍関係のアメリカ市民のホルトンから結婚の申し込みがあつた。当時両親は東京であれ、アメリカであれ、いずれの場合にもメヒテルトを単身で放置することを望まなかつたので、メヒテルトに結婚を勧めた。

#### 四・五 帰国後の家族三人の生活

一九四七年にドイツ帰国後はソ連の影響下のドレスデンに戻らず、一九二五年まで住んでいたマールブルクを居住地として選んだ。最初は例に漏れず生活に困窮していた。成人教育に携わりながら盲学校の教員として働いていた<sup>88</sup>。この成人教育はフォード財団によつて、戦争中に教育が中断された人々のために行われた。ヘッセン州内では、フリッツは哲学と日本やアジアに関する講演からの収入を生計の補助としていた。その内容は戦前の日本の生活、習慣、文化を眼前に彷彿させる名講義であつたという。

宮内庁で調べた結果から、彼はボンの日本大使館と接触したり、ハイラー博士(Dr. Heiler)を通じて三笠宮殿下と親交があつた様子が伺える。例えば、一九六〇年九月十三日にマールブルクの同殿下のパーティに招待された事実が確認されている。日本週間 (Japan Woche) に招待状はハイラーを通じて彼の手許に届いている。フリーデルンによればハイラーは彼の学生時代からの友人で、マールブルク大学神学教授であつた。フリーデルンは自由ヴァルドルフ学校を経てマールブルク大学で学び、政治学と地理学でそれぞれ博士の学位を取得した。彼女は結婚せず、自ら十八歳まで学んだヴァルドルフ学校で教鞭をとり、二〇〇二年定年退

<sup>88</sup> 酒井は著述「初旅のヨーロッパ三週間」で彼をハイデルベルグ大学教授であつたと記しているが、カルシュの家族からもその証言が得られていない。彼の勘違いであろう。

職となる。

一九六八年秋に、直接の生徒を中心とする同窓会がカルシユ博士を約一ヶ月間日本に招待した。妻エツメラの健康がすぐれず、代わりに長女メヒテルトが同行し、各地で歓迎会が催された。その様子が「翠松（同窓会報）」、当時の赤澤自治大臣のカルシユへの手紙などから窺える。また、カルシユ訪日は朝日新聞や松江の新聞（一九六八年十月五日）、長崎新聞（同年十月十六日）に報道されている。

「少年期にまだ見たことのなかった大山の夢をみたこと。松江を我が故郷と考えたこと。漢字をきれいに書くことができたこと。自らの魂が日本人であると語っていたこと。出雲大社で感謝の言葉を述べた後、自分のすべてが整理でき、終わった感じがすると語っていたこと。日本との関係はすべて自分の運命（Schicksal）であると語っていたこと」が長女メヒテルトによって断片的に語られている。フリッツの定年後、夫婦とも一九六五年からカッセルの養老院で年金生活し、この地で一九七一年に人生を閉じた。そして一九七八年には妻も当地で没した。

なお、関連する写真を寄せてくれた大分出身の江上（鴛海）正孝（十七期理乙昭和十五年卒）は九州帝大医学部卒業後、先駆けて福祉施設の整備などに尽力してきた人であり、健在である。

#### 四・六 メヒテルトのアメリカでの生活

戦後、彼女は国際戦争犯罪裁判の通訳を経て、ニューヨークシティ銀行で働いていた。このときに知り合ったアメリカ人のホルトンと両親の勧めもあって一九四九年に彼との結婚に踏み切った。しかし、結婚生活はうまく行かず、五年後に離婚した。幸い、子供がなかった。一九三八年ナチスの迫害にあつてドイツからアメリカに移住したヘルベルトセイントゴアとは、離婚してから半年後の一九五四年に、知り合い、その年の九月に結婚した。彼はハンブルク生まれでキリスト教洗礼を受けたユダヤ人（Baptized Jew）であった。結婚生活は幸せで、二人には一九五五年にエドワード（Edward）と一九五七年にエリザベート（Elisabeth）の子供が授かった。その頃はもうアメリカですっかり生活基盤もできて、長男エドワードが順調に成長していた。子供が二歳になった。二人めの子供が生まれる頃、フリッツが女婿ヘルベルトとエドワードに会い



家族とともに クリスマスカード  
(江上の提供)



家族とともに クリスマスカード  
(江上の提供)

にアメリカに渡った。

ニューヨークまでの船旅の後、鉄道でチャタヌーガについた。すぐにエリザベートが誕生した。二ヶ月間滞在した。その間にスモークーマウンテンやインデアンの墓を訪ねてみた。

フリッツの生活が貧しかったのでアメリカでの食事をとっても楽しんでいたとのメヒテルトの証言がある。当時フレンチ・フライを原語の「ポム・フリット (pommes frites)」と同じものとエドワードが勘違いして、面白がったとのことである。その後は一九六八年日本に招待された折りに帰路二週間チャタヌーガに立ち寄り、カッセルに帰った。一九七一年秋に三度目の訪問を予定していたが、病気に倒れ、回復を待つて翌年早々渡米しようとしたが十一月に他界した。メヒテルトには現在五人の孫がいる。彼女は夫君とともに日本風の家に住み、日本人とも積極的に交流している。メヒテルト自身、自分の生涯は素晴らしい体験に満ち満ちたものであったと繰り返し語っている。夫のヘルベルトは何も無いところから、総てを築いた実業家であった。英語を学ぶために法律学校に通い、二年でアメリカの法律家の資格を取得した。なお、二〇〇〇年には夫の伝記をメヒテルトが清書しこれを出版した<sup>33)</sup>。

## 第五章 学問と著述

## 五・一 恩師 ハルトマン

カルシユは第一次大戦後マールブルク大学で学び、後にニコライ・ハルトマン(Dr. Nicolai Hartmann)に師事した。ハルトマンはマールブルク大学教授であった。ポール・ナトルプ(Dr. Paul Natorp) およびドルフ・オットー(Dr. Rudolf Otto)らと共に同大学哲学科の三スターといわれたうちの一人であった。カルシユは、ハルトマン教授の許で、論文『Christoph Gottfried Bardili, der Vertreter des logischen Realismus im Zeitalter des deutschen Idealismus』(ドイツ理想主義の時代の理性的リアリズムの代表的人物、クリストフ・ゴットフリート・バルディリ)をまとめた。この研究により、彼は哲学博士の学位を一九二三年に授与された。

ニコライ・ハルトマンはよく混同されるが、エドアルド・フオン ハルトマンとは異なる哲学者である。本邦では後者は、後述するような昭和期の高橋敬視らへの影響に先んじて、明治後期の画家青木繁らに強烈な影響を及ぼしている<sup>30</sup>。彼の芸術は「ものの社会から脱却し、想像力により構築した世界である仮象の社会」に自らを没入するものであった。ヨーロッパの物質文明の発達により、その精神は物質的成果のみの社会に閉じこめられてしまった。そしてまた、そこで、できあがった結果としての物質文明が流れ込んだ日本では、自らを支える精神的根拠が見られず不安定な状況にあることを青木は直観した。彼はこれに対して自分の想像力を培うことで自らの支柱を求めるハルトマンの影響を強く受けた。どこに自らの表現の動機を求めるかを模索するなかで、日本の古代のなかに自分の仮象をみつけた。それを自分の中に具現するために、青木は

<sup>30</sup> 蒲原有明は青木が自分自身の根拠を確かめる「魔法使い、魔術師」と評した。青木の代表作は明治三十七年作の「海の幸」であり、明治四十四年二十九歳で没した。

古代の姿と生命観を合体し、仮象の力を彼の現実の生活のなかに実現し絵画に表現した<sup>36)</sup>。根本の精神の欠落している性急な歩みに対する批判として、人間を肯定する可能性として仮象の世界を描き、仮象の社会を實現しそこで生きることを目指すことの重要性をカルシュも門下生に語っている。このことを別の角度から酒井が六章と十二章で述べているのが興味深いし、日本を離れるに際して第十章で自らも若干触れている。

## 五・二 カルシュの学術業績

カルシュ博士の未発表の研究は哲学史と人の意識の進化に関することである。ドイツ旧字体による記述と書き込みのため解読困難であるが、現在まで一〇〇〇頁余を解読済みであり、古代のインド、中国、ギリシヤの哲学、および初期のグノーシス説 (Gnosticism) に関してはほぼ整理<sup>38)</sup>できた。彼はルーズブリーフの形ですべてを書き綴り、一冊当たり約四〇〇頁余のファイルブックが三十七冊現存している。彼は軽井沢で一九四五年に自らの執筆を停止し、ドイツ帰国後も種々の仕事に追われたこともあって、残念ながら学問に関して十分な繋がりをもつことができなかったようだ。彼は自分が通じていた事項をまとめる作業をせずに、逆におびたらしい数にのぼる追加や訂正を書き込んだ。全体に流れる彼の意図は有史以来、人の思考がどのように変化してきたのかを示すことである。彼が禅と西田哲学に大きな興味を抱いていたことを彼の残した文書中に見出し、どこから日本の哲学に入って行ったのかを明確にできると思われる。

フリッツは自分の仕事の中で、彼が人の思考がどのようにして、今に至ったかを示そうとし、また学問や内的修練を通して、シュタイナーが教えた新しい思考に我々が如何にして到達できるかを示そうと努力した。人が直接知ることのできる肉体的なものから、ひとの知識ではない、しかし接近可能な形而上学的な人の信念に大胆に彼が入り込むことによって、見出したものが彼の哲学である。彼の仕事はシュタイナーの哲学とカント哲学との関連を示そうとしたことにある。フリッツは自らを称して行動的人智学者であり、シュタ

<sup>36)</sup> 言葉は違いが薄田泣菫、藤島武二、夏目漱石らにも共通する時代的主張であった。「自画像を描くまなざし」栗津則雄文芸評論家を参照。  
<sup>38)</sup> 現在メヒテルトが整理中である。

イナールの《精神科学》を世に広める教師であると言っていたとのことである。彼は自分の子供達にも基本的な哲学的思考法を真剣に伝えた。長女メヒテルトは人智学とR・シュタイナーの哲学的洞察法のいわば、一人の「学生」であったとのことだった<sup>35)</sup>。戦後ドイツに帰ると、次女はマールブルクの自由ヴァルドルフ(Waldorff)学校に通いマールブルク大学で学位<sup>36)</sup>を取得し、同じ自由ヴァルドルフ学校の教員になった。この学校は日本では「シュタイナー学校」として知られており、今日の日本の教育論議と関連してこのシュタイナーの教育論応用としての全人教育には興味深いものがある。

彼の著作には日独文化協会 (Japanisch-Deutsches Kultur Institut Tokyo) 出版の「Das Freiheitsproblem bei Kant und Nicolai Hartmann. J. Japanische-Deutscher Geistes Austausch Heft 1 (1928)」や「Die ethischen Grundlagen der nationalen Bewegung in Deutschland. Japanische-Deutscher Geistes Austausch Heft 5 (1934) およびフリッツ・カルシュ 長屋喜一共著 ハルトマンの哲學 東京中文館(一九三七)がある。

### 五・三 人智学とシュタイナー

人智学とはドイツに起こった種々の秘教的な思想を基にシュタイナーが集成し、その生涯を通して展開した一連の思想体系である。通常感覚では捉えられない世界の認識を目標とする。しかし、そこへ到るには、絶対者への帰依や神からの啓示といった旧来の方法ではなく、自身の認識力を広げるため、冷静な、研ぎすまされた意識をもって訓練を行うという、「思考」を重視した神秘思想であり、修業の過程が様々な実践活動となつて現れてくることが特徴である。人智学では、人間は身体、魂、精神(霊)の三つの部分から構成されていると考える。地上では個々の人間の内部にある「精神」は永遠であり、繰り返し地上の「身体」の中に生まれ変わる。地上での生を通して「精神」は次第に成熟して自らの真の姿を認識するようになり、世界

<sup>35)</sup> メヒテルトの主な仕事はドイツの人智学のテキストと本を英訳することである。  
<sup>36)</sup> 彼女は政治学と地理学の博士号をもつ。



がさらに進化して行くときの、自由で自覚的な参加者となる。「魂」は自己認識と感覚の乗り物であり、それを道具、手段として、「精神」は自分を取り囲んでいる「身体」と世界とを認識、経験する。誕生から子どもが発育するにつれて、「精神」と「魂」は「身体」を意志（欲求）・感情・思考のための道具として使うことを次第に学んで行く。子どもは次第に世界を理解し、そこに活発に参加していくようになる。この学習がうまく運ぶように、親と教師は適切な指導をする必要がある。それによって、子どもの「精神」と「魂」は健全に成長し、生まれ変わり、真の姿の認識に向けて発達を続けるという教育思想である<sup>38</sup>。彼の教育理論は、人智学を基にした誕生からこの世を去るまでの人間の生涯全体を教育実践と捉え、同時に、こどもの魂、本性の細部を最大限配慮した理論である。これは単なる机上の理論ではなく、実際に数多くのすぐれた教育実践を生み出してきた。<sup>39</sup>後略<sup>40</sup>。

前記の理論による教育実践は、自由ヴァルドルフ学校あるいはシュタイナー学校の名で知られている<sup>41</sup>。この学校は一九一九年に十二年制の学校としてドイツにはじめて設立されたが、ヒトラー政権下では禁止された。しかし、第二次大戦後再開された。一九八〇年代には世界各地に設立されて発展をとげ、現在に至っている。この理論に心酔したカルシュ夫妻はこれを自分の二人の娘に伝え、姉はこの分野の専門家となり、妹は自由ヴァルドルフ学校で実際の教育に当たっている。シュタイナー学校の教師となることは、この教育の実践と自らの精神的深化の一つと捉えることもできるからであろう。

生徒から見たカルシュとの親交とその影響の具体的根拠はなんといっても、現在元気な人の「生の言葉」である。また、『嵩のふもとに』（旧制松江高等学校校史）の【恩師列伝】と【忘れ難き人々】のなかに「田

<sup>38</sup> シュタイナーに関するWebsiteから引用した。当時、フェヒナー、ブント、ジェームズ、エナリウスなどの二元論的世界観を斥け心理主義的な思想が流行していた。

<sup>39</sup> 広瀬俊雄著、シュタイナーの人間観と教育方法、ミネルヴァ書房 まえがきより一部改変  
<sup>40</sup> エレン・ケイ 「児童の世紀」（一九〇〇）、ジョン・デューイ 「学校と社会」（二八九九）などの影響もあるか？

舎の大学：酒井勝郎」、「カルシュ先生：酒井勝郎」、「カルシュ先生、ギルソン先生：田総武光」、「六十二年前のカルシュ先生：木村登」がある。そこには、ドイツ語を全く知らない生徒に僅かな手がかりをもとに教える才能、ショーペンハウエル、マルクスなどの解説、そして当時の日本の代表的哲学者の一人である高橋敬視教授にハルトマンを紹介し、その翻訳を彼自身が協力したとの記述がある。「高橋敬視先生：勝部真長」にもそのことが書かれている。その後については、「カルシュ先生と田島君：奥野良臣」に直接の師弟関係にない生徒との交流が書かれ、「崧高を思い出す座談会：岡崎、白石、高田、増田、松田、宮田、森山では、生徒へのカルシュの絶大な影響がにじみ出ている。

また「メヒテルトさんを訪ねて：田島康弘」、彼の薫陶を受けて成長した「ワクチン生産の功績者奥野良臣君：青山博」の記事は、如何に彼の授業が旧生徒を当時のドイツ先進科学、ヨーロッパ合理主義へ眼を向けさせたかを雄弁に物語るものである。『翠松』（旧制松江高校同窓会報）にはその後の「チャタヌガの町メヒテルトさんからの便り：木村登」、「チャタヌガの町メヒテルトさんを訪ねて：田島康弘」、「カルシュ先生の長女メヒテルトさん ふるさと訪問：竹原敏夫」、「東京でのメヒテルトさん：田島康弘」、「メヒテルト女史・大阪の四日間：奥野良臣」、「メヒテルトさんよりの回想録」など、極めて人間的なドラマが種々語られている。

その他、カルシュ先生の旧生徒の手記については、枚挙に暇がない。例えば大阪支部会報『崧友』で「カルシュ先生を迎えて」、「老博士はるばるドイツから」、「カルシュ先生を悼み」、「カルシュ先生の授業」などが繰り返し語られていることには大きな意味があると思われる。同様に教師の身である編者からみても、重要な意味があり、教育に対する問いかけでもある。「Brief zu Frau Karsch」もドイツ語で書かれた旧生徒によるカルシュ逝去時のエッセイ夫人あての慰めの手紙である。東京松高会報には「カルシュ先生の訪日について」およびカルシュの招待を計画しながら不慮の事故で自ら完遂できなかった田村のための「追悼田村清三郎君：暉峻凌三」やこれらを書いた新聞記事がある。加えて、雁信、「メヒテルト：渡部忠」や私信を含めてたくさん書簡と関連写真があり、如何に旧生徒から個人的に慕われていたかを知ることができる。

## 第六章 カルシュと生徒達

本章では、かつての生徒の生の声をもとに、カルシュ先生のひとがらを語ることにする。それには、まず酒井勝郎に登場して貰う。彼には「田舎の大学から」高浜印刷（私家版）昭和四十四年、「カルシュ先生」酒井九波堂（私家版）昭和五十五年、旧制松江高校校史「嵩のふもとに」、同窓会報『翠松』などに収められた手記がある。彼は島根県出身で昭和三年に松江高等学校を卒業した第五期理乙生<sup>せうせい</sup>である。東京帝國大理学部で無機化学を専攻し大学院を経て、浜松高等工業学校および日本放送協会技術研究所でテレビジョン技術の研究、陸軍科学学校、多摩陸軍技術研究所でレーダの研究を行い、戦後は島根大教授、琉球大教授として無機化学の研究をしてきた。

彼は「私がカルシュ先生を知ったのは、高等学校でドイツ語会話の先生としてである。今、その初対面を語るに当って、その前任プラーゲ先生について述べておく必要があると思う」と語っている。そこでまず、つぎのエピソードを紹介する。

### 六・一 変な外人さん

「何しろ変わった人ですよ。頭の髪の毛が茶色で目が青いから、確かに外人さんに違いないが、それにしちや小柄で日本人の中でも背の低い方です。だが道を歩かれるときやとても普通の人間にやあの真似は出来ませんね。きつい目で真つ直ぐ正面を見ながら小股でとつとつと歩かれますがその速いこと速いこと、今ここを通られたと思う間に、直に向うの方へ行ってしまうね。その人の朝の散歩がまた変わっています。毎朝だから散歩だと思えますが、朝の運動かもしれませんね。朝決まった時刻に、決まった道を、てくてくてくてくと歩いて来られます。何でも住居は奥谷だそうですが、道は浜佐陀街道です。それであの浜佐陀の

<sup>18</sup> 当時松江高等学校では理科、文科に分かれ英語のクラスが甲、ドイツ語のクラスが乙であった。フランス語のクラスがあった高等学校では、このクラスが丙であった

大橋の袂まで行くと、くるつと向きをかえて、もと来た道を、おんなじ速さで、後も見ずに帰って行かれます」

こんな噂話を耳へいれてくれるのは、家へよく来てくれる百姓女のあきさんだった。喜んで聞いていると、「まだ変わった話があります」と言つて聞かせてくれたのは、その外人さんの家に女中奉公している人の話らしかったが、手伝いとしての仕事は何でもはつきり決められていて時間厳守なので、その点はだらだらしてしまりのない日本人の家庭より気楽で、居心地はいいそうだが、駅へ用があつて使に出されるのに、ちゃんと時計を見て、歩くのに何分と勘定して、何時何分に帰つて来いと決めて出されるのは「閉口だ」と言つていたとか……。

約束時間を遅らすのが習慣になっている、出雲の土地風に困っている私には、めざましい話だが、このパルクチュアリズムの徹底ぶりには恐れ入る。これはプラーゲ先生に違いない。

## 六・二 プラーゲン

松江高等学校理科乙類へ入学すると一週に一回一時間のドイツ語会話の時間があつて、その先生がプラーゲ先生、通称プラーゲさんだった。この先生は始業のベルが鳴ると、「ぱっ」と教室へとびこんで来られる。普通五分位遅れて来る先生が殆どなので、それ位に思つてベルの音を外で聞いて悠々とはいつて来ると、「にっ」と一睨みされて、闇魔帳に遅刻のマークをされる。

さてそのプラーゲさんの授業だがこれがまた大変だ。ドイツ語なるものに初対面でまだアーベーツェーを修業中のこのクラスへとび込んだ最初の時間に、いきなり黒板に大きく横文字の文章を書かれたのである、それも今まで見たこともない。後で聞くとドイツ語の古書体だったそうだが、そんなので書いて、これを一字づつ指して読めとおっしゃる。「無理だ。読めるわけがない」と思っている暇もあらばこそ、どんな全員に当てられる。この先生はこうして当てるのに決まった順をこしらえて居られる。教室で着席最前列の右から左へ順に、一人も抜かさず規則正しく当てて、次第に後列に及ぶのである。だが新入生では誰もこんな

は読めん。当てられて、口をもごもごしていると、「ナ、ナ、ネヒスト」といわれる。ネヒストはどうやら英語のネキストのことらしいので、次の席の者が眼を白黒させていると指名は次へ移る。そしてこの指名順番は、みるみる教室全員に行きわたる。「どうなることか？」と思ったのだが、やがて「なーんだ！」と思うことがあった。それはクラスの中に、昨年入学して留年した人がいたのだ。このクラスメートの存在によって、問題の文のアルファベートが、まず一字づつ読みつくされ、言葉も発音されて文章全体が、「ダスイストアインティッシユ」（これは一脚の机である。）というのだとみんなにわかったのは、始業四十分ぐらいで、三十人の全員に指名が三、四回まわった後だった。

最初の時はまあこれぐらいで済んだのだが、次の時間からはなおきびしい。いつぺん教わったことを忘れて返すことができず、へどもどしている、

「だめ、だめ」というはつきりした日本語の叱声がとんて来る。

そして黒い表紙の闇魔帳に何やら記入されるのだが、これが度重なるとひどい。

「お前のような者は、こんな学校へ入ってくる必要はない。家に帰って田の草取りでも手伝った方がいい。今、百姓は忙しいのだ」

噂によるとこの先生は、青島でドイツ軍側の日本語通訳をしていたのだが、青島陥落で捕虜になった人だとのことだった。日本語にも通じていて達者だった。ある時こんなことがあった。日本語の訳語についてちよつとした意見の違いが、我々との間にあったのだが、その時突然この先生が黒板に立派な漢字で大きく『蘆』と『荻』の二字を書いて、

「この区別を知ってるか？」と聞かれて、みんな閉口させられてしまった。

またある時、神様の話が出て、

「ヨーロッパには神様が一つしかない。日本には、大黒様、恵比寿様、弁天様、稲荷様それにお釈迦様まであって人々が拝む。これを多神教の国といって、サヴェツジ野蛮人の国がそうである」

これを聞いて憤然とした永井隆君は、直接この憤懣を先生にぶつつける言葉を知らず、私に向けてもらした。

「日本を馬鹿にしている。ギリシヤには神様が沢山あるのに……」と言ったが、しばらく考えて、  
「でも、もともと敗戦国の捕虜なんだから、怒ってみても仕方ないね」

日本人の自尊心を逆撫するこのやり方だったが、もともと我々はヨーロッパの学問を志してこの学校へはいって来たものなので、こんなことでは怒れない。猛烈な会話訓練だつて、我々の将来を思つてのこの人のサービス精神の発露なのだろう。ひよつとしたら、私達が志向してるドイツ文化の魂が、こんな所にむき出しにされているのかもしれない。この先生は好かれてはいなくても、会話訓練の辛さを理由に嫌がる人はなかった。

誰かが教室で、突然大声をあげた。ドイツ語の字引を見て、大発見をしたというのだ。「あつた。あつた。ドイツ語に、プラーゲンという動詞があつて、日本語では『苦しめる』とか『いじめる』という意味なんだ」このプラーゲさんは、一学期だけでやめて、帰国された。

### 六・三 カルシュ先生との初対面

二学期の初め、会話のその時間に、教室でみんなが待っていると、ドイツ語主任の高畠先生の後ろへ背の高い偉丈夫の人がついて来られた。「これがこれから諸君のドイツ語会話を受け持つて下さる、ドクターカルシュです」と頗る簡単に紹介して、高畠先生は「ふい」と教室を出てしまわれた。

後に残されたカルシュ先生は、やおら大きな身体を教壇へ運んで挨拶らしいことを言われるのだが、とんと我々にはわからない。話される言葉はドイツ語だろうが、プラーゲさんに猛訓練されたからといって、一週一時間の一学期間では高の知れたものだ。一同ちんぷんかんぷんで、とうとうみんなわからず先生は立往生の格好になってしまった。日本語は片言も御存じない様だ。

「これで会話の授業ができるのかしら！ どうなるだろう」と心配していたら、先生の方から打開策が出た。それは、英語が使いはじめられたのである。聞きなれない訛があつて、わかり難かったが、それでもこれだと中学時代の訓練が役に立つ。聞き返したり等もできたし、いよいよわからなきや黒板に書けばいい。こう

して先生との間に会話の道が開かれると、後は何でもなかった。早速ドイツ文が書かれ、発音から会話の訓練になった。

ここで我々にとって実に見張らせる程意外なことがあった。ドイツ語会話の授業といえば、プラーゲさんの猛訓練しか知らない当時の我々だったので、またあんなやり方が、こんどはもっと強そうなの後任のドイツ人先生で「どんな強行をされるのか」とみんな腹を据えていたのに、話を通じたら一向にそれらしい気配がない。いやむしろ温厚であって、その親切さでは他の日本の先生より勝るとも劣らない。真面目さでも際立っている人だった。一時間にも足りないこの会話の時間だったのに、先生の思いやりの深い人柄と、日本語なしの不利を凌いでやろうとする熱意がみんなの心にひびいた。授業の終わりには「にこっ」とした笑顔を見せて行かれた。

「プラーゲさんとはまるで違うのお……」  
と後でみんなは話し合った。

編者はこの文を読んで、一九六九年夏アポロ十一号が月面に着陸した頃、学習院大学におけるドイツ語の初心者対象の講習会を思い出した。名前をいうのがやっとのドイツ語の力でも、私を含めてクラス全体が不思議なことに授業の内容を完璧に理解できた。いや分かったような錯覚に陥ったことがある。講師の先生は、外国人向けのドイツ語教師養成のためのゲーティンスタイトウートを首席で卒業した新進気鋭のノイバウエル嬢(Frl. Neubauer)であったことを記憶している。言葉の分からない者にも自分の意図を正確に伝える天才がいるものだと思った。後で聞いたのだが、当時弱冠二十四歳とのことであった。

#### 六・四 シュパチーレンゲーエン

カルシュ先生のこの温厚なやり方に対して、批判的な意見もあった。「あれでドイツ語の力がつくだろうか」と言うのだ。なる程このクラスは医進クラスと仇名される程で、医者志望者が殆どだ。医学部へ進んだら、ドイツ語が大切だそうだった。たとい会話でも、日本語を全く御存じない先生についていいのだろうか、

というのがその論旨だった。然し永井君は別な考えでこう言った。

「なる程、プラーゲさんのやり方が続いていたなら、我々の会話の力はもつとつくだろう。だがカルシュ先生に教わっていると、ドイツ語教育をとおして、もっと深いものが教えて貰えると思うので、僕はこのままの方がいいと思う」彼のこの言葉が、私の心を強くゆさぶった。「ビッテ シュパチーレンゲーエン」などと符牒のような片言を操って散歩に誘うと、喜んで応じる先生だった。「アムネヒステンゾントーク」と約束が成立すると、この一行に喜んで参加する私だった。

「先生もこうやって我々に親しくして、日本語を覚えたいし、僕たちもドイツ語に慣れたいので、一挙両得なんだ」この計画の先頭によくたっている永井君は、こんなふうになんか自画自賛していた。

大抵五、六人のグループで、よくフアーラート（自転車）で行った。行った先で、何でも拾って来ては、「ヴァス イスト ダス？」と言って、先生に会話のチャンスを求める。こんな時も返事は些末なことにまで行き届いた。

出雲浦の千酌でのことだった。浜で拾った小石を見て、「ダス イスト デヤ ビム スシュタイン」という返事を貰ったのだが、さてこのビム スシュタインが誰にもわからない。そこで、「ヴァス イスト デヤ ビム スシュタイン？」という不見識な質問を、誰やらが出したら、先生からまた別の返事が来た。「デヤ ビム シュタイン イスト イン エングリッシュ ザ パミス ストーン」

これでもまだみんなはわからない。まさか「ヴァス イスト ザ パミス ストーン？」なんて聞くわけにはいかない。大体考えてみれば、こんな質問がおかしい。「これ何ですか？」と聞けば、ドイツ名がかえって来るに決まっている。そこでそのものの日本名と照らし合わせる。そこにこの話し合いの目的があると思っていたのだが、わからなくて英語名で言って貰って、まだわからないのだ。拾ってきた当人はもとより、みんなもこの石が何石なのか知らないのだ。「小学生が遠足に行つて、先生をつかまえてする質問じゃあるまいし……」と思つて見ていたのだが、先生は更に一層熱心に説明を続けられた。

まず、エルデ（地球）の内部が高温であるという話が出る。そのエルデの内部から、高温のラーヴァ（熔岩）がエルデの表面に噴出して、ヴルカノ（火山）になるといつて火山岩の成因を話されたが、これは中学



校で教わっていてみんな知っていた。「その時ふき出したラーヴァが流れて、ゼー（海）にまでとどくと、急に冷えて【じゅつ】と……」

「ああわかった。軽石だ」「ダズジス ストン フロート オンザ シーウオター？」 永井君が勢込んで英語で聞いた。「ヤー！ フェルシュタンデン」

先生は嬉しそうだ。とにかく難題がこの英独ごちやませ会話で、梟がついた。とことんまで我々の質問をはぐらかさずに答えて下さる先生にはみんながなついた。

小店で駄菓子を買ったらお茶が出た。「ヴィーフィール プフェニツヒ？」とうっかりドイツ通貨の名が出ると、そこは心得たもので、永井君が「フュンフ セン」という。先生が五錢玉を「ぼとん」と盆の中に入れて、にこやかに店番の婆さんに会釈されるという具合で、永井君の考えた通り一挙兩得のシュパチーレンゲーエンだった。

編者はこの下りを読んで、「ああ！ カルシュ先生は少なくとも松江にとつては誇るべく、重要な重い石だったのに、今では誰も振り向いてくれない。まるで、軽石 Kar(u)sch(i) の様に扱われている（カルシュ先生、失礼なことをいってごめんなさい！）」と感じたものだ。昭和の初めに、火山の噴火のように突然日本という地上に現れた熱い、それこそ燃えさかる石であつて、最初は周りに衝撃的に大きな影響を与えてくれたのに、今は冷えて周囲から忘れられてしまっている。たまたま通りかかった私がそれを見つけて、手にとつて昔を偲んでいる。火山岩が冷えてできた軽石は素朴な姿であつて、何の特徴もないように見える。でも小さな穴に残った当時の香りが、今私の手で暖めると膨らんで外に漏れ出で、当時の情景が蘇ってくる。やはり、先生の名前が Kar(u)sch(i) でよかったのだと思っている。

なお、本文中の「永井君」の言葉は後年の永井博士の行動や業績を彷彿とさせる《かるいし》のエピソードであった。

六・五 光は東方より<sup>註</sup>

ドイツ語会話はもう一クラス文科にもあるので、この新任の先生が何を得意とされてどういう質問をすれば、喜んで話に応じられるか等の情報が伝わって来る。そこでこちらでも質問の出し方の相談をした。そしてまず、「何の目的で日本へ来られたか？」と質問して面白かったと聞いたので、我々もそれを聞こうと決めた。

会話の時間になって、この話を希望したら、それへの答えは先生の方でもすでに腹づもりが出来ていたと見えて、黒板に書いたばかりのその日の会話訓練用ドイツ文をさっさと消して別の論文名が書かれた。それはオズワルト・シュペンクラの《デアウンターガング デスアーベントランデス》というのである。難解なこの題名だったがこれをヨーロッパ文明の没落と解説し、ここから話が始められたのだった。

「自分はシュペンクラのこの論文を読んだのだ。それにはこんなことが書いてある」

マテリアリスム（唯物主義）に走り過ぎたヨーロッパのチビリザチオン（文明）

の病態について論じたこの学説は結論として、そのような文明に支えられるヨーロッパ諸国に文化崩壊の時代が来るというのだ。そしてその時期は、西暦二千年頃と予想される。この時全世界の人々の間に混乱が起り、大きな危機に直面すると思われるのだが、そこへ一条の文化的光を投げかけるものが考えられる。それはオリエント（東洋）のゼーリツシュ（精神的）なクルトゥール（文化）に違いないだろう。こんな学説紹介の後で、話がされた。

「私はこのオリエントの光を見ることに熱意を持つ。それでここへ来たのだが、この日本の国は、東洋の国の中で、特に目立った特徴がある。それは他の地域からきた思想や文物を巧みに吸収してこれを融合する力



大根島への遠足 生徒とともに

<sup>註</sup> このタイトルは直接的には、ラフカディオ・ハーンの言葉を引用したものと思われる。

をもっていることである。

ここへ来て見て、ここで目につき、あまりよそで見られないことは、古いウルシュプリュングリツヒ（オリジナル）なものが、新しい今のものと共存して残されていることである。この点を日本の宗教について言うならば、この国には古代神様の信仰がありました。それが今神道に残されているのですが、中世に大陸からブディスムス（仏教）が伝来し、一緒にコンフチヤニスムス（儒教）やタオイスムス（道教）の思想が伝わり、それからクリステントウム（キリスト教）もヨーロッパから伝わりました。それらがこの国の人々の間では、一つのものが他のものを滅亡させるようなことにならず、共存しているのです。このことは世界の識者の注目するところであります」、先生はここで次のように言葉をつながれた。

「私はそのような環境で教育を受けて育つ、日本の若い人々の姿を見て、東方の光を探って見ようと考えて、ここへ来たのであります」

スケールが大きくて、しかも身近にひしひしとする熱弁に、みんなは胸をゆり動かされて聞き入っていたが、話が済んだら、授業時間がもう終わりで、この日の会話訓練は無かった。

本文中で「同質と異質」の「混在と調和」で特徴づけられる日本の文化の一面を他の文化と比較しながら語るカルシュの確かな眼を感じる。このことは、彼の世界の認識から当然のことであるが、その背景は「第五章 学問と著述」、「第九章の同僚や学者との交流」、「十七章カルシュ門下の人々」で、酒井が思い起こしているカルシュの《エービゲシュテレ（永遠の静けさ）》<sup>ま</sup>からも容易に推測でき、彼の人生観を貫く重要なキーワードであろう。ここにもハルトマンの影響や仏教の影響が見られる。

#### 六・六ナチョナーレクライドウンゲ

先生がある日、見なれない緑色の服を着て教室へ来られた。みんなの不審な眼を弾き返すように、いきな

<sup>ま</sup>とわ  
永久の鎮けさでもあろうか。

り発言された。「ダスイストデイナーナチヨナーレクライドウング（これは国民服である）」この言葉に続いて、敗戦後の母国ドイツのことが重々しく語られた。国家の経済的窮乏という苦難を耐え忍んで、国民挙て消費を切りつめることを考えている。その一つがこの服装の規格統一であるという説明だった。

今にして思えば、その後十数年たって、私達の国日本も戦争にまき込まれて、国家非常の際の国策と称する耐乏生活をさせられて、国民服を着せられたのだからわかるが、当時即ち昭和初年の我々には異様だった。でも深刻な思いでこれを聞いた。カルシュ先生はナチオナリスムス（国家主義）に思いを寄せて居られる愛国者だった。

この時誰かが「ドイツの国歌を歌って下さい」と言ったら、内心嬉しそうで、それでも「隣の教室に聞こえては……」と、気兼ねする先生だったが、「大丈夫」といつてせがんだ我々の声に応え、遠慮勝に低い声で歌い出されたのだが、おしまいになって、「ドイツチュランド ドイツチュランド ウューバーアーレス」（ドイツドイツ世界に冠たれ）となると、感情がこもっていた。

## 六・七 強行軍

天気のよいある日、松江へ用事で自転車走らせていたら、途中の持田でばったり、これも自転車のカルシュ先生に行き会った。お互いに挨拶し、私がまず聞いた。

「ヴォヒンゲーエンズイー？（どちらへいらっしゃいますか？）」

こちらの方への案内なら、先生の教え子の中で、私をおいて他にはないはずだ。先生もそう思っておられたらしく、すぐ五万分の一の地図を取り出して、指でさし示された。それを見て私は驚いた。この土地のひとに難所と言つて聞かされていて、私自身まだ行ったことのない加賀の詰坂である。

「そこは難所だから行けません。まして自転車では……」と、とめたが、先生の強行の気持ちはかたかった。地図には道のしるしがあるから行けるという意見である。あまり強く言われるので説得をあきらめて別れ、松江に走った。然しどうも気になる。心配だった。先生がいつか言われた。「日本の山は木が密生していて、ドウルヒゲーエン（通り抜け）出来ない。ドイツの山は疎林でその間が自在に行ける」その日本の山へ自転

車で行かれたのだから、「まず予定通りには帰れまい。下手すると、捜索隊でも出にやならなくなりやせんか」と思ったら、たまらなくなつた。「とにかく後を追いかけて追いついて、いっしょに行くなり、帰るなり、この土地の者としての役を勤めよう」

松江の用事をそこに済まして、大急ぎで引き返し、後を追つた。本庄から手角、中山峠を越して、日本海沿いの出雲浦部落を通つて西行するのだ。ここは一部落越す毎に上り下りの坂道がある。北浦、千酌、笠浦、野井、瀬崎と難路を息せき切つてふつとばし、走り抜けて野波の部落へは行ったが、先行した先生の姿はもうなかった。ここから先はもう詰坂である。仕方なく通りがかりの土地の人に聞いて見た、「外人さんを見なかった？」と。

「見ましたよ、大きな外人さんが自転車で山の方へ行かれるのを。かれこれ三十分も前でしたから、いまんごろあ、はあ詰坂でしょう」

私はこれを聞いて、もうこれ以上追つかける勇気をなくしてしまった。

翌日丁度、先生受け持ちの会話の時間があつた。きつと何かあると思つている私の目の前へ、いつもと少しも変わらない先生が教壇へ出て来られたので、拍子抜けがした。狐につままれたようでもあつた。授業が終るとすぐ教壇に近よつて、前日の詰坂踏破のことを聞いたら流石に、「ゼーヤ シュヴィーリッヒ」(大変けわしかった)という返事だったので、「フアーラート？」といつて聞いたら、手を腰まであげて、担いで行つた恰好をされた。

後日聞いた話だが、この先生は大戦中自転車隊に入隊従軍して、盛んに山野をかけまわつた歴戦の人だとか。道理で強い人、偉丈夫であつた。

## 六・八 学園祭の時

カルシュ先生の口癖は何かして貰うと「ありがとうさん」でした。私どもの松江高校にも他校で見られる学園祭が年に一度あつた。勉強よりもこちらに全力を傾倒する生徒も少なくないくらい張り切るものである。或る年の学年祭の折り、私共理乙クラス三十名の出し物の一つとして模擬店が一軒急造された。飲食店を提

供したりして「まち」のメッチェンなど人々を歓待するのであるが、その店名が「有難うさん」である。おかしな名称ではあるが、これにヒントを得た十四期理乙の生徒は学園祭の模擬店で店の名前を「有難うさん」としたとのことである。カルシュ先生の口癖を真似て麗々しく大きな店名として張り出した訳である。

カルシュ先生の人気が高かった一つのエピソードであろう。

今私は古い昔のことではあるが、鮮明に覚えていることもあってこの一部を述べた。ドイツ語を教わったことは勿論であるが、その他重要な人生哲学の一端を教えられ、私の後の仕事に重大な影響を与えた私の大恩人でもある。今天国におられる先生に、私共の模擬店名「有難うさん」の写真に大きな熨斗を付けてお返ししたいと思うのである。

この頃は今でいう未成年の飲酒はどうであつたか。キリンビールのテントの模擬店はなかなかモダンであつたようだ。すし、ライスカレー、煮物、うどん、しるこ、紅茶、ミルク、ケーキ、コーヒなど一〇〜二〇銭(?)で売っていたようで、現在の大学祭の模擬店とそっくりである。



模擬店の前での記念写真 (奥野の提供)



14期生寄書き 教職員の名前も見える(奥野の提供)

## 第七章 カルシュ先生のドイツ語

カルシュが着任するまでと着任後のドイツ語教育について旧制松江高校の生徒が語っている。教える先生の人柄によってその方法はだいぶ違うようだ。

前述の酒井勝郎の「プラーゲ先生」に続いて学年は一年先輩の高校時代にドイツ語に精を出し、東京都庁に勤務、画集も世に出している米田勇次郎の思い出を紹介する。続いて同期で昭和二十一年四月に松江で内科医院を開業し、昭和五十三年有志とともに寮の台地に記念樹と記念碑を贈った鈴木繁徳<sup>あ</sup>のプラーゲに関する思い出を語って貰う。

### 七・一 厳しいプラーゲ先生

最初の授業時間のこと、よく覚えている。生徒の一人は先生の指名で「アラ、マー」と黒板に書かされた。先生の意図するものは、英語でハコネをヒャコネ等というのは邪道でアはどこまでもアで、ドイツ語はそのつもりで発音しろということだったらしい。

先生は、熱心は熱心だったが教え方が厳格で、質問した答えをいちいち、闇魔帳に記入したようだった。そんな風だったので生徒の反発を受けて学級全体がサボタージュし、楽山に逃げて行ってしまったりしたことがあった。ドイツ語主任の小林先生が心配そうに教室へ来たことを覚えている。そういうことがある前に、プラーゲ先生<sup>あ</sup>はドイツ語の歌をうたって聞かせようなど言っていたが、それは沙汰やみになった。先生は「私はプラーゲといわれているけれど、本名はブラギウス（苦惱）というのでよく当たっているでしょう」と自分のことを皮肉って言った。

<sup>あ</sup> 米田勇次郎（島根出身四期文乙） 東大法学部卒、鈴木繁徳（島根出身五期理乙） 九大医学部卒 医学博士  
<sup>あ</sup> 著作権という概念が日本になかった時代に勝手に西洋の文献、音楽などを使用したことを訴えたが、政府はこれに十分に取り組まなかった。日本の著作権の父ともいわれる。

後年東京の音楽界で、《ブラーゲ旋風》と称して音楽の版權をブラーゲさんがやかましく言って騒がれたが、これあるかなと思つた。先生は西洋人としては小柄なひとだった。

米田勇次郎（四期文乙）

# 七・二ブラーゲ先生の小言

外人の先生から直接外国語を習うなんて、生まれて初めてのこと。ともあれ珍しくもあり、嬉しいことでもあった。ところがこの先生案外ときびしい。何分にも毎日コッピドクやつつけられるので、ある日とつぜん、わるどもがいたずらを思いついた。チョーク一本残らずかくしてしまった。……先生来て見て、ちよつとさがしていたが、それと気づいて、ひらきなおった。

「……日本の将来を背負つて立たねばならない君たち……」に始まつてジュンジュン。「今ドイツは、敗戦国として復興に立ち上がつて懸命である（ものを大切にすることなど）。外国人の私が、外国でこのようにしているというのにどうしたことか。将来が案じられて仕方がない……」

一人立ち、二人と立つて、スゴスゴと。純情な小学生そっくり。チョークはもどり授業再開。

なるほど、T先生の如き、毎時間ま新しい長いやつで大きな字を書かれ、折れるとまた新しい分を出す、といった具合이었다。

それにひきかえブラーゲ先生、小さなチョークのヒトコグを箱の底からさがし出して、三本指の先にツマシで、やつと書ける位の小さな字で書かれる。

その頃生徒間の噂。

「ブラーゲさんは毎日カルトツフェル（ジャガイモ）ばかり食うチョルゲナ。あとを全部本国に送金しつちよるとや。それに、となりのボーマン（英）さんなど、月給が足りなくて、まだアルバイトまでしつちよるとや」などなど。

二十年後、思いがけず、私もがこの前轍をそのままふんだ。あの頃私はこのドイツ魂のあれこれを想起こしてガンバッタことである。

鈴木繁徳（五期理乙）



## 七・三プラーゲ先生と拳骨教育

旧制松江高校から同窓会誌が送られてきた。開いてみると、以前に同校で教師をしていた外国人教師のニュースがかなりのページをとっている。私が同校に通学していたのは大正の末頃という古い話だが、私はどうした嵐の吹き回しか、入学許可になったのは文科乙類という主としてドイツ語を教える科で、英語は従であった。理科乙類という、やはりドイツ語を主とするグループは、殆ど医者志望の連中ばかりであったが、ドイツ語などという思いもしない外国語を主とする科に入れられた私は、中学一年の時に初めて英語を習った時のことを思い出したりしてやや憂鬱であった。

当時の外人教師はプラーゲというやかましいドイツ人で、教えられるわれわれは毎日戦々兢兢であった。一年半あまり経ってその先生はドイツに帰られ、代わりに来られたのはカルシュという先生で、笑顔を見せる大男であった。以前と違って教え方もやさしく、ほっとした記憶がある。奥谷に新築された外人官舎に住んでおられ、可愛らしい女の子が居た。後年その女性はアメリカで結婚、松江に来遊された時には、私もみんなと一緒にその奥さんに会い、うろ覚えのドイツ語のうたを歌った記憶がある。

ところがである。今日この外人教師プラーゲ先生と、カルシュ先生とのことを思い出してみると、この二人の先生は性格も教え方も全く正反対なのである。一方は拳骨をふりあげる程のこわい先生。他方はいつもにこやかで、甘えたい程の大男の先生。しかし私が今でも思わず口をついて舌に乗せるドイツ語は、やかましいプラーゲ先生に教えられた詩である。ある時プラーゲ先生が暗唱して来いといわれた「インメン湖」という詩の一遍を、私は覚えていなかった。「シバタハコノゴロ、ベンキョウシナイデス」とさんざん叱られた。しかし今でも私の口をついて出てくるドイツ語は、プラーゲ先生から拳骨をはらんばかりに教えこまれたことばかりである。あれだけいてねいに教えられたカルシュ先生なのに、ドイツ語に関する限り殆ど記憶がないのである。

戦後五十年、この頃青少年の教育問題がやかましく、我々の若い頃に較べると、その教え方などともずい分変わったらしい。少しきつく生徒を叱って、新聞で非難されている先生もある。しかし六十年前に、拳骨を

はらんばかりにしてブラーゲ先生から教えられたドイツ語が、今でもすらすらと私の口から出るのに、やさしく丁寧に教えてくださったカルシュ先生に習ったことは殆ど忘れてゐる。平凡な学生であつた私の経験では参考にもならぬが、私は「拳骨先生」の効果を価値あるものと信じて疑わない。

柴田午郎(四期文乙)

#### 七・四 カルシュ先生との出会い

先生との初対面は、大正十五年四月某日私が松江高等学校に入学して間もなく初めて外人教授の講義を受けるようになったときである。しかもドイツ語は、今まで一度も聞いたことがなく、その発音、抑揚、文字等全く新鮮なものばかりで、印象が深いものばかりであつた。大学を卒業したばかりの若い日本人ドイツ語教授から初めてドイツ語を習った時、いきなりドイツ原語で黒板に書かれて、全く解らず、ローマ字で書いて下さいと頼んだ所「何いつてるんだい」と怒られた後だけに、カルシュ先生が、ローマ字でドイツ語の講義を始められたのには、皆んながびっくりして、先生の優しさをしみじみ感じた次第であつた。先生は偉丈夫で、やさしい口調で、丁寧に解かり易く、ゆつくりした講義をされた。凹んだ眼で髭剃り跡の青い顔が印象的で、背の高い先生の前の机が、妙に小さく見えた。如何にして、難しいドイツ語を、初心者に解からせるか、苦心して居られたようでした。我々の要求を容れて、よくローレライの歌を、独特の美聲で何度も歌って頂いたことも忘れることは出来ない。

所がその様な先生に対して、ある時、突然授業ボイコット事件が起こりました。理由は今だに思い出せません。然しその時先生は、少しも慌てず騒がず、ドイツ語主任教授の高島先生を呼んで来られ、無事事件を解決されたことがあります。温厚な真面目な先生に一時的にせよ大変な御迷惑をおかけしたことを、深く反省しています。

私が、松江高等学校を卒業して、九州帝国大学医学部三年生(昭和六年、一九三一年)の時、カルシュ先

生に、偶然お会いすることになったのが再会ということになります。それは日本眼科学会百周年記念誌第二卷二二八頁に、写真と共に記載されている通りです。当時、世界的に有名なドイツの眼科学者の阿克センフェルト教授が、カルシュ先生の奥様の伯父様に当たられ、日本眼科学總會に招待されて、日本各地を巡回講演をされた折り、九大眼科にも、寄られる機会がありその時カルシュ先生は、まだ松江高校の教授をしておられ、先ず、松江から岡山に出て来られて、阿克センフェルト教授一行に合流され、教授に随行して福岡に來られた時、九大眼科講堂の後方から、カルシュ先生を眺めたのが再会であり、その時親しくお話しすることが出来なかったのが今でも残念に思っています。その時の模様が次の如く記載されています。《明くる四月二十三日の夜、九大庄司教授は、日原医学部長、今井助教授、熊本の高安ら数氏と、阿克センフェルト父子とカルシュを博多駅に迎えた。宿舎は福岡唯一の共進亭であった。二十四日は午前中、病理学の中山教授が考古学の権威なので、太宰府、都府楼、観世音寺などの史蹟を案内した。昼食後、日原学部長の案内で、松浦聴長を訪れ、眼科教室の中庭で医局員全員と記念撮影を行った》とあるが、残念なことには、九大眼科医局での写真が見当たらず、岡山大学眼科医局での写真を借用した次第である。

二〇〇一年五月二十九日・九十三歳六ヶ月 増田義哉（六期理乙）

## 七・五 カルシュ先生の思い出

永井隆博士にすめられ長崎医大に入学、昭和十一年に卒業した後、開業医として永く地元に残った坪内謙吉が七十幾年の昔の記憶を手紙で語っている。

私が旧制松江高等学校に入学したのは昭和三年（一九二八年）である。ドイツ語が第一外国語で将来大半が国立大学の医学部か農学部に行く理科乙類であった。

カルシュ先生の初授業の時、コックさんの話をされ、その時しきりにコックさんのオス、メスという言葉が出て、あつげにとられ、それがコックさんの男女と判ったことを今でも覚えている。また当時ドイツよりグラーフチェッペリンが日本に飛んで来て、先生がそれを非常に誇りに思われ、日本人としての感想を聞かれ

て、それが同級生の奥村通君にあてられた。彼は咄嗟のこととして《ヴィルコンメン グラーフチェッペリン》とのみ言ったが、先生は非常に喜んで満足の笑みを浮かべたことを記憶している。また、先生がかねて誇りに思ってた居られた時々の口に出されたローレライの話を「ビッテ、ローレライ」と言うところからその話を何回となくしたものである。後年欧州旅行をしてライン河にローレライを見てカルシュ先生を懐かしく思い出したものである。

二〇〇一年四月二十七日 坪内謙吉<sup>48</sup>（八期理乙）

## 七・六 カルシュ先生とギルソン先生

次に直接にはカルシュ先生の教え子ではないが田総武光<sup>たぶき</sup>がちょっと別な角度から先生を眺めた様子を紹介する。彼は昭和六年八期文甲卒で後に鳥取大学教授となり、英語の教育に尽力した。

私が湊高に入学した当時の外人講師は、ドイツ語のカルシュ先生と英語のミアーズ先生の二人であった。二年の時であったと思うが、町で外人に出会ったので話しかけると、新任の英語講師ギルソン先生であることが分かった。当時奥谷町に外人講師のために、欧風の白亜の官舎が、まるで双子のように、行儀良く二軒並んで建てられていた。ギルソン先生はその一軒に入居したばかりであった。たまたま、私は近くの井原家に下宿していたので、片言の英語で会話をするのが楽しみで、よく先生の所に話しに行ったものである。先生も日本語が分からないので私と行動を共にするのを喜んでいた。そのうち、一人暮らしの不便さから、私の下宿している井原家の離れに引越して来た。先生は六畳の間に、私は三畳の間に住むことになった。こうして二人は親子のように行動を共にすることになったのである。

夏休みになると、二人は一緒に隠岐観光や大山登山など方々一緒に歩きまわった。隠岐では、西郷の近くで、珪藻土の山肌に無数の穴居があつて、その一つに、壁画のあるのをみた。どういふ訳か今でもその壁画

<sup>48</sup> Der Rhein の名勝 Lorentzstein (ローレライの岩)  
坪内 (青木) 謙吉 (島根出身) 長崎医科大学卒 元医師会理事、医博)

がはっきりと記憶に残っている。ギルソン先生は僅か一年で松江を去り、アメリカに渡った。その後全く消息が絶えてしまった。

一方、カルシュ先生は、夏休の間ずっと大山に家を借りて過ごするのが常であった。ギルソン先生と私が大山登山をした時、カルシュ先生の所に立ち寄ったことがある。先生は浴衣を着て下駄ばきで庭に出て来た。椅子にかけて長々と話が続いた。カルシュ先生は、必ずイエス、イエスと二回繰返して相槌をするのが癖であった。今でも、そのイエス、イエスが耳に聞こえて来るようである。その時三人で写した写真が今も手許にある。それを見る度に、当時がなつかしく偲ばれる。

さて、カルシュ先生が帰国してから、二十年以上も経過していた頃と思うが、先生の教え子で、その多くが医師になった卒業生のグループが、先生を日本に一ヶ月招待したことがある。その折、アメリカ在住の先生の令嬢（今はセイントゴア夫人）が来日して、先生の講演の通訳などをして、先生の滞留中ずっと一緒にいた。私が湊高に在学した頃は、令嬢は二才か三才の可愛い子どもであった。



カルシュ夫妻とメヒテルト官舎の玄関にて



ギルソン英語教授、田総武光（八期文甲）  
ともに大山にて撮影

私は久方ぶりに先生に会いたいと思ったので、先生の滞在していたホテル一畑に泊って先生とゆつくりお話することができた。出雲大社に参拝した時も、一緒であったので、ゴア夫人とも親しく話をすることができた。

先生が亡くなった後、昭和四十七年に娘の夫が家族連れでドイツに留学した時のことである。娘達は私の依頼で、老人ホームに住んでいたカルシュ夫人を慰問してくれた。夫人は大変喜んで涙を流したということである。日本がなつかしくて、部屋一杯に日本の色々な品が飾られていたと娘が話してくれた。その夫人も亡くなり、セイントゴア夫人にも既に孫ができています。月日の流れをしみじみと感じるこの頃である。セイントゴア夫人からは、毎年必ずクリスマス・カードを、時々写真も送って頂いている。ご主人は大きいスーパー・マーケットを経営しているそうである。

田総武光（八期文甲）

## 七・七 カルシュ先生の講義

### （一）シュトゥーフェンワイゼとシュプルングスワイゼ

カルシュの講義の一端を酒井が著書の中に残している。

西洋人と東洋人の思考、理論のすすめ方の間に、大変な違いがあるのです。西洋人の場合は、ある目標を立てて、理論を進める時、用意周到に誤りなく一步一步と積み重ねて進み長年月かかって、ある結論に到達するのです。これを評してシュトゥーフェンワイゼ（階段的）と申しましょう。ところが東洋人の場合、仏説等によく見るのですが、途中の理論段階は素通りして、いきなり結論に到達します。これをシュプルングスワイゼ（飛躍的）といきましょう。前者西洋人のそれとこれとを比較します。要するにこれは東洋人が瞑想的で直観力に勝れているということによるからでしょうが、瞠目にあたいます。要するにこれは東洋人が瞑想的で直観力に勝れているということによるからでしょうが、瞠目にあたいます。

(二) ヴァス イスト ダス ダーザイン？

「カルシュ先生」 酒井勝郎 著より

ある日我々の方から要求した。

「ビット シュプレッヘン ズィ ウンス フォン デヤ フィロソフィー (どうか我々に哲学について話して下さい)」

カルシュ先生が哲学専攻の偉い人だと誰かが聞いて来ての、この要求だったのだが、この要求がクラス全員のものだと判じ取られた先生の顔には、喜色があった。早速例の如く黒板の文が書きかえられ、まず、

「フィロソフィー イスト ツー デンケン ヴァス ダス レーベン イスト (哲学は人生とは何ぞやと考えることである)」

こう書いて、これを読み説明されました。これが哲学の入門のようです。それから次に、「ヴァス イスト ダス レーベン？」(人生とは何ぞや？)と一歩すすみました。正にシュトウーフエンワイゼです。

この文も一語ずつ発音して読み説明し、少々具体的な例話もありましたので、みんなは了解です。そこで次に移りました。

「ヴァス イスト ダス ダーザイン？」(存在とは何ぞや？)

こうなったら誰にもこの解答はないわけですが、「哲学とは？」という我々の質問に対してはこれであます所ありません。

先生はここで、「ダス イスト アレス」(これですべてだ)と言ってチョークを投げられました。

「カルシュ先生」 酒井勝郎 著より

(三) カルシュ先生の授業

カルシュ先生は、まことに人なつくく、親切な哲学者という感じで、毎日のように先生から三年の間、ドイツ語の教育を受けました。とくに教科書として採用されたレクラム文庫の哲学書を記憶しております。現

象学派に属するハルトマンの哲学が、その本に書かれていましたのを感じ銘深く想起します。

当時先生の教壇に立たれた姿、黒板にいろいろ書かれたドイツ文学、学校に往復のときの先生の愛用されていた自転車、それから奥谷の先生の住宅にあてられた官舎などの模様はいまだに、まぶたの裏にありありと浮かんでまいります。それらの先生の言動の数々が、当時のわれわれ高校生の人間形成に少なからぬ影響を及ぼしたと存じ感謝に堪えません。

「湊友」九号よりカルシュ先生来日時に 奥 貴雄<sup>ち</sup>（六期文乙）

#### （四）マルクスの逸話

昭和六年の冬か昭和七年の早春の卒業前に二階の教室において、カルシュ先生が当時日本では高校生、大学生たちが大きな関心をもっていたカールマルクスの逸話について、生徒の質問に答えられているところの写真が手元にある。この時の授業は九文乙一同の心に今でも深く残っているものである。（白石談）  
この経緯については宮田がこの後の「見つかった講義録」のなかで詳しく述べている。

#### （五）カルシュ先生と一緒

次の写真は昭和六年に、カルシュ先生が一時ドイツ帰国した時に校内の集会所で九期文乙が催した送別会が済んで、その座敷の外側の縁側で撮影したもので白石の提供によるものである。前列左より二番目白石、三番目はクラス担任の心理学が専門で後に東京音楽学校に転任された山下先生、四番目はカルシュ先生、後列左より二番目岡崎、三番目宮田、後列右より三人目に鹿野らの顔が見える。

この時の想い出を白石が次のように語っている。

※ 奥（大橋） 貴雄 東大法学部卒 勸銀、鹿島組、相互銀行社長岡山理大講師、大阪学院大教授など歴任



昭和六年早春にカルシュ先生の一時帰国時にクラス一同の相談の結果、先生の送別会の開催を決めた。準備はクラス総代の役にあった朝日重雄と白石磷の二人で担当した。この役はクラスと学校事務局や各教授との連絡役であり、これを誇りをもって高等小使と呼んでいた。会はとても和やかで日独語が入り交じった賑やかなものであった。昼食だったか早い夕食だったか、食べものが何であつたかは忘れた。しかし、カルシュ先生と膝をつき合わせての会食は確か最初のことであつた。カルシュ先生は本当に喜んでいて。いつもの微笑をたたえて日本語なしの会話をつづけた。

最後に私が生まれて初めてのドイツ語で閉会の挨拶をして拍手を受けて会は終わった。その時カルシュ教授が私に微笑みながら握手をしながら短いドイツ語で何か言ってくれた。しかしこの言葉が私には聞きとるこ  
とができず、またこれを先生に聞き返すとなつたドイツ語の作文もできず、今日にいたるまでその意味がわからずにいることが残念で仕方がない。



カルシュ先生のマルクスに関する講義風景



昭和6年3月 カルシュ先生送別会  
(カルシュ先生の一時帰国時に)

ところで、閉会の辞が私に決まった時に日本文で原稿はすぐ書いたが、ドイツ語に直すときに「俺が助けたる」と言った者が一人現れた。鹿野明である。教室の椅子席はアイウエオ順のため鹿野、白石と「シ」で三年間つづいて並んでいた。それで早くから鹿野とは仲良しの一組であった。先の写真の最後列右から三人目の小男である。この鹿野が私の原稿を読みながら、一心にドイツ語の辞書をひき、一年生の時苦しんだ文法の教科書を引き出して、私の意見を聞きながら書き上げてくれた苦心の作である。彼は昭和六十三年に昇天しているが、この送別会は私にとっては大事な学友が残してくれた大切な思い出であることを付記しておきたい。

白石磷（九期文乙）

#### 七・八 ハーマツヘル講師の思い出

カルシュ先生の不在中に代理講師であったことがある。同先生は正式の先生の不在中だけという気軽さからか、それとも牧師の立場から日本人と話を交わされることに慣れていたのか、我々生徒に対しても、ドイツ語を教えてやるとか、もっと勉強が必要だとかの、先生らしい堅苦しさは全然感じられない穏やかな物腰の人であった。それが、七十年以上経った今、同教授の存在すらも忘れていた旧生徒が多い理由だと思う。私には只一つだけハーマツヘル先生についての思い出がある。一人の同級生がカルシュ先生に対するのと同じように気楽に考えて「先生、ドイツ語の歌を唄ってください」とお願いした時の返事が日独語チャンポンで「私の声はカラスの声です。Ich kann nicht singen.」であった。職業柄、賛美歌は得意の筈なのにと思っただけ、それ以来私達は歌のおねだりをしなくなった。

（平成十三年二月九日白石記）

#### 七・九 淞校仲間のドイツ語への思い

新文乙生（九期文乙卒）に課せられた中学とは大違いの学科であるドイツ語について皆で思い出を語っている。

松田——大体高校は自由の学園で特に文科は語学以外は合格点だけとっておけばよく、充分な余暇がもてる、いい学校だったと思う。それで文乙はドイツ語だけは夜必ず復習して予習もしてないと、ついてゆけないと思つて一心に勉強したよ。藤野先生、高島先生の音読、カルシュ先生の会話と歌は思い出深い。

増田——叔父から大学で経済学部に行くならドイツ語をやれといわれて、文乙を志願したが、藤野教授の文法は一時間に二十頁のスピード講義で楽ではなかったね。(全くの声)

岡崎——ABCの発音さえもできない我々に何と高島、小林、藤野、高橋、カルシュ先生達で毎日三時間ペー  
ースで鍛えられたドイツ語は大変なものだった。同じ文乙にいた次兄から中学校の英語みたいに先生は丁寧に教えてくれないから自分でやるしかないぞ、と釘をさされていたのでドイツ語だけは熱心にやったよ。

森山——片山双解独語辞典も引けないままで「ペーター、カーメンチント」の独解をすすめ、更には「デ  
ンケン、ウント、レーベン」でドイツ的生き方を学ぶ毎日であつたと思う。グラマーのテストについて今ではドイツでも余り使わない《ヒゲ文字》で直して返して下さつた藤野先生の情熱には今でも胸うつものがあるよ。

高田——ドイツ語はよく勉強したね。一年生の秋恒例の弁論大会が開かれた時にドイツ語で演説しようと思つて、大新聞の社説に出た「階級闘争の弊害」を自分なりに翻訳して小林先生に見せたら全面的に訂正されたものの、とにかく全部暗記して「フアルシュフォンクラッセンカンブ」の題名で演壇に立つて一席ぶつた。これをカルシュ先生が聴いておられて「シェーネレーデグマハト」と大変褒められた。戦後に同じ衆議院議員として一緒になつた七文甲福永健司<sup>8</sup>先輩から「一年生のくせにドイツ語で演説するんだから驚いた奴だよ」とよくいわれた。(感嘆の声あり)

白石——ドイツ語が大事だとはよく知っていたが一学期はいつも落第点ばかり。それは放課後にはランニングの猛練習で疲れる上に夜はストームや《活見》に費やして明かに勉強不足だ。二、三学期は大慌てで岡崎

<sup>8</sup> 福永健司(七期文甲) 滋賀県出身、陸上選手(棒高飛び) 国會議員連統四十年、國務大臣七回、衆議院議長歴任

に試験の『ヤマ』をかけてもらおう等して、ギリギリの及第点に辿りついたのが実情。ただ高島先生のドイツ語の時間は劣等生なりに面白く楽しかった。

高田——何といっても《カルシュ先生》だ授業前の点呼「アッサヒ、アダチ、イシワラ、イジュミ、イジュイン……」を思い出すね。(同感の声) 辻が言いにくかったように《ツチ》と発音したのではないかな。(ソウの声)

宮田——《高島先生》、在学中は教頭で恐い先生であつたがドイツ語の講義は人間味豊かで温情の深い先生であつた。晩年に奈良のお宅をお訪ねしたことがあつたが九十五歳の高齢まで近畿大学や大阪音楽大学の先生をつとめられた実に立派な先生であつた。

森山——《小林先生》もユニークな教授だつた。快適な音読だつたが、訳す時の日本語がうるさかつた。(一的―性)は一切使わない。《彼、彼女もだめで頑固に《その人》と言いつつ、「山をよじ下る」「荷物を積み下ろす」などが考えた末に出てくる訳語であり、「くそにもならん」と嫌なものには吐き棄てるようにぶつける言葉には迫力があつた。副保証人だから高田、岡崎、小島などでお宅に押しかけると「さあやりましょう、酒を飲んだ人間に悪人はいないよ」と酒を我々にすすめるあの姿は正に大人であつた。<sup>たいじん</sup>

岡崎道夫、白石磷、高田富之、増田輝男、松田美太郎、宮田正信、森山岩治<sup>2</sup>

<sup>2</sup> 岡崎道夫(静岡出身) 東大経済、三菱鉱業、住友金属工業を経て、住金物産 元副社長、白石磷(山口出身) 京大経済 日紡、ユニチカ、レナウン社長など歴任、高田富之(埼玉出身) 東北大法文法通算十期 衆議院議員 共産党、後に社会党所属、増田輝男(東京出身) 京大経済、日本鉱業、三井精機、東洋精機など歴任、松田美太郎(鳥取出身) 東大政治、日本興業銀行、大興製紙、宮田正信(大阪出身) 京大国文、文博、滋賀大学教授 著書「雑俳史の研究」、森山岩治(新潟出身) 東大法独法 日本穀産鉱業、経済企画庁、行政管理庁、本州四国連絡橋公団など歴任

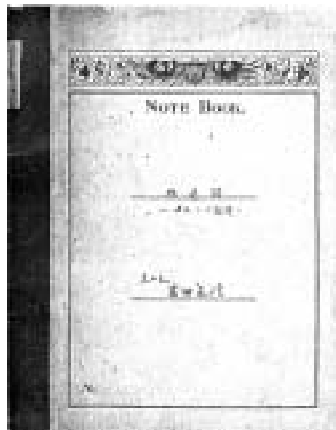
## 七・十見つけた講義録

宮田正信からある日突然カルシュ先生の講義録発見のニュースを聴くことができた。それを以下に紹介する。彼は大阪出身の国文学者で、京都帝大国文学科卒後滋賀大学教授などを務め、俳諧・俳句研究の大家で昭和四十五年文学博士を授与されている。著書に「雑俳史の研究」があり、毎日研究に勤しんでいる。

まず驚いたことは、これ程几帳面にノートを取ったことだ。編者は嘗てドイツ人のドイツ語の授業を聞きながらメモを整然とペンを走らせることが簡単にはできなかった。カルシュ先生は手紙の書き方を図解しながら教えたそう。ドイツの歌を教えたり、当時の授業を彷彿とさせるノートには細かく講義の内容が伺える。できれば編者の私も聞けたらと思った。おそらく、聞き取りの練習と思うが、添削も丁寧で、思い出しに語られた先生の答案用紙の返却の様子が眼に浮かぶ。以下、彼の編者宛の書簡をもとに綴ってみた。

前略 先にお知らせしましたカルシュ先生の御講義ノートのコピー同封お目にかけます。何とかまともなご報告が出来たと思います。が何分七十年前も前の高校生の書き留めたもの、今開いて見ても読み解けぬ所だらけです。取り敢えずありのままの姿を御覧いただきます。

表紙に《ドイツ語 ―カルシュ教授、文二乙》とあり、第二年（昭和五年度）の始めに新調したものです。「カルシュ教授」とあるのは当時の青年の頭の中では先生方の身分職階などは一方向に無頓着だった証拠です。教室にお迎えする先生はどなたも均しく教授だったのでしょう。表紙の肩に白抜きに写っているのは貼紙で《独語 カルシュ》とあります。ノートはやや厚冊で前半がカルシュ先生の御講



宮田青年のノート(1930-1932年)

義メモで第三学年末まで二ヶ年分です。後半は余白として利用したもので第三学年で受けた論理学の講義ノートの一部が混入しています。今日御目にかけるのはその後半部を除いた前半の表題通りのもつぱらカルシュ先生の御講義に関する部分です。今、本文各頁の左右の肩に数字で仮りのページ数を書込みました(一―六五)。これによって巻首に空白のままになっている〈INDEX〉欄に仮に見出しをつけてみました。各頁の冒頭の一語を書き上げただけのものが多く、全く機械的な作業であり御役には立たないかと思いますが。

本文の記事はすべてノートです。まことに粗末なかつての高校生の残した気儘なメモにすぎません。当時ドイツ語を第一外国語に選んだ文乙生のドイツ語は先生四人がかりの授業をうけました。うち御三方のものは几帳面に定期に学期試験がありました。カルシュ先生の分は別枠で、特に時間を定めて試験を受けた記憶がありません。その替り、平常随時または毎週持続的にテストに類するトレーニングがありました。いわば毎週が実地訓練の連続で、終始マイペースで先生に向い合っていればよかった訳で、開き直って先生の



手紙の書き方の授業のノート



宮田青年の宿題の添削結果

一言一句聞きもらすまいとノートを採る必要が全くなかったので、たまたま手許に残ったこのノートは今となつては我ながら自分の書いたものが読み解けないものに相成った次第です。事情御諒察の上御笑覧いただきたいと存じます。

そんな訳でこのノートの大半は私の個人的な断片的なメモにすぎません。とりわけ御講義のキーワードの

類の語彙の羅列のページが少なくありません。いずれも先生が熱心に御話し下さった当時の御様子が、バラの語彙の累積の向うに浮かんでは来るのですが、それを纏めて当時の御講義に組立て、再現することは、今の私の理解力、再現力では正に至難の業です。かりに試みてみても、教壇のありし日の先生のお姿の周りに、一つ一つの言葉が浮遊して、その日の御話のテーマをおぼるげに探り求めるくらいが関の山で、断念せざるを得ません。そんな訳でこの度はノートのありのままを御覧いただくことにしました。ついては次に二三気付いたことどもを認めて責をふさぎたいと思います。

(頁一) *Donnerstag* で始まっていますから、昭和五年四月早々の木曜日から開講だったことが判ります。当日は「東京からははるか北の国ドイツのこと何なりとお話ししましょう」くらいで先生のお話が始つたらしい。しかし続いて、出しぬけに *Der Vulkan* が出て来ます。それが次の *unsteigen* とどうつながるのか。間を置いて次の三行は筆蹟が改まっていて別の時間のことのようですが、*Mythologie* の話で、これはさきの *Vulkan* と関連がありそうですがよくわかりません。

(頁二) *Einbaum* 以下はドイツ古代の農耕社会の話らしく、(頁五) は話題が改まって丁寧な挨拶の仕方と女性の挙措などから都市生活の話が、先生の板書の図解とともに進行した様子、それを写し採ったメモから窺われます。先生は多くの松江近郊の風景画を残しておいでになることをこの度はじめて知りましたが、教室でもよく黒板にチョークで図解して、説明下さったことが今更に思い出されます。

このノートでも、頁・九、十二、十四、十五、二十三、四十、五十三などの稚拙な私の転写にも、ありし日の先生の板書して下さる後ろ姿が偲ばれます。

(頁十六)で手紙の書式の解説が終ったところで、(頁十七)に *Lorelei* (Heine) に話題が変わって気分転換で肩の凝りをほぐして下さるお心遣ひと思われれます。ここは全部先生の板書して下さったものを書き写したものです。次に出て来る(頁二十一～二十三) *Die Nationalhymne* (頁五十一) *Soldatenlied* (頁五十二～五十三) *Der Lindenbaum* (頁五十四) *Heidenröschen* <sup>52</sup> (Goethe) もすべて同様です。

<sup>52</sup> *Heidenröschlein* じゃがいも。意味は同じ。

どの歌の場合にも一行一節づつ黒板に向かってチョークを走らせつつ、あのやはらかい低音のハミングで確かめるように書き進まれた後ろ姿が目につかびます。その後皆で節廻しを辿りつつ歌い覚えたことでした。少々肩のこる真面目な話題が続いたあとの、それはまことに寛いだ楽しい一時でした。ことに上記後半の三曲は毎時連続しています。これは一寸異常ですが、これには訳がありました。

(頁五十五)の首めに(一九三二・一・八第三限)とあります。そこから第三学年の、卒業までの残り少ない最後の授業が始まっています。実は、その前年(昭和六年)は晩秋十一月初めから約一ヶ月間同盟休校という異常事態が起っていました。そのことの顛末と反省、評価はさし置いて、先生方も吾々生徒も、疲労困憊の態で、父兄や町の方々にもいろいろと御心配をおかけしました。その騒動が曲りなりに結末を迎へた十二月の初め、あと三週足らずで正月休暇の直前の時期に、この三曲が集中的にノートに残されています。

この度の若松さんの思いがけぬ御発議がきっかけで、手許に眠っていたこのノートをとり出し、これらの記録に再会したのは正しく奇縁でした。今この三曲の歌を書き留めた時期を背景において、これらの歌曲を眺めていると、今まで気付かずにいたことに、今更ながら心打たれるのです。ほかでもありません。これら三曲の裏からにじみ出て来るカルシュ先生の深く温かい無言の教育愛ともいうべきやさしさに心打たれるのです。その時は私同様に、おそらくはクラスの誰しもが、そんなことに気付かずに過ぎ去って来たと思います。他でもありません。ほぼ一ヶ月振りに教室に戻って来た私達は、私達自身はそれに気付かずとも、カルシュ先生の御目からは、一月前の生徒とはやはりどこか違って見えたにちがいありません。顔つきからだけでも、どこことなく以前とはちがって荒れすさんで見えたのでしょうか。それを目ざとく嗅ぎ取って下さった先生の温かい思いやりのお心から出た、咄嗟の御処置であつたろうと思います。この三曲連続の歌の時間を間に置いたおかげで、正月明けからは平常心で大学進学準備に専念出来たのだらうと思います。

ハイネの *Lorelei* や *Lindenbaum*、*Heidenröschen* は和訳の歌詞で、すでに耳に馴染みの歌でしたが生のドイツ語で歌ふ感動はまた新鮮でした。とりわけ私達を喜ばせたのは *Soldatenlied* でした。明治以来の吾々の聞き訓れ歌ひ馴れて来た日本の軍歌の概念には収まりどころのない歌で、その刺激は強烈でした。こんな軍歌があつたのかと深く心揺さぶられる思いがしました。当時広く読まれていたレマルクの *Im Westen*



*d. 20 März von Kobe  
Heverkusen  
Deutsches Schiff  
Hamburg-Amerika Linie  
Mai Genua*

Nichts Neues の悲惨の一かけらもなく、ただ第四節に Wenn im Felde blitzen die Granaten、weinen die Mädchen um ihre Soldaten. Ei warum! Ei darum! Ei bloß wegen Tschiderassa, Bunderassasa! とサラッと唱ひ流した所がありますが、それもあとにつづく楽隊の囃し詞の繰返しで消し去ってしまふアツケラカン振りです。これは恐らく電信兵として第一次大戦に従軍された際の先生の唯一の戦場土産だったのかもしれない。これは友人達が卒業後も折にふれては口ずさんで当時を思いやる愛唱歌の一つとなりました。今でも時々話題になる懐しい歌です。

さて筆のはずみで後回しになりましたが、ノートの冒頭に戻ります。(頁二)に次の如くあります。

これは第二学年の年度末に、ノートの巻首の余白に書き込んだもので、この年昭和六年四月から七月にかけて、先生一時ドイツに御帰国の際の御予定表です。昭和六年早春 私達は学校の集会所で学級主任も同席して貰ってカルシウ先生の送別会を催しました。まことに粗末なものでしたが、先生を囲んでの心楽しい集いでした。その時の写真が白石君の提供した「昭和六年春カルシウ先生送別会」の一葉です。その後 旅行日程が確定した時、教室で御伺いしたのが、この日程表です。ここには三月二十日神戸港出帆、御乗船は Hamburg-Amerika ラインのドイツ國籍の Heverkusen 号で、五月初め Genua 着となっています。船は更に南下 Gibraltar 經由 Hamburg までの航海だったらしいが、先生はゼノア上陸、陸路 Milano 經由 Alps 越えて故國にお入りになったようです。ノートにはその次に船会社名らしいものとその所在の図示らしいものがあります。

三月二十日はすでに学年末休暇に入り、学校は入試の最中で、私は大阪の自宅に帰省していました。当時の記憶では先生の御出帆に間に合ふように神戸港停泊中の御乗船宛に、心もとないドイツ語で、御旅行中の安全と無事の再度の御来日を希って書状を発送しましたが、はたして先生の御手許に届いたかどうかは分らぬままです。船は貨物船と聞いていました。それはともかく、今は空路、まる一日もかければ行けるところですが、ゼノアまで一ヶ月半近くもかけての船旅で御苦労なことでした。ドイツからは一度絵葉

書便りをクラス宛に頂きました。永らく教室の掲示板に押ピンで止めてありましたが、いつの間になくなっていました。

またノートの方に話を戻します。(頁五十五)以下は昭和七年正月明けから三月初めにかけての和文独訳の連続です。これは恐らく教頭で、ドイツ語教授の筆頭の高島先生あたりの御要望によるものかと思われます。近づく帝大受験に備えての特訓です。何かの問題集によったものです。(頁四十五)の第二問には(Showa 2, 東大法科)とあります。昭和二年の東大法科入試問題です。先生が九月御帰任早々からそろそろ始まっていた。それが十一月の一月月簡の空白をうけて、年明けと共に急にきびしくなったものと思われます。中には一寸首をかしげる様な詰屈たる文章が少なくありません。さぞ先生も御苦勞なされたことと思います。勿論他の御同僚先生方の支えがあつたに違いありませんが、それにしても大変だったでしょう。御授業は先ず問題文を生徒の誰かに板書させて、それを先生が翻訳して下さるという手順で進行了ました。しかしこれが実際の大学入試にどれほど役立ったのかは何ともいえません。それより第二学年から日常的に私達銘々に、毎週短い自由作文をドイツ語に翻訳して来る宿題を課されました。それを次週の時間の始めに試験用紙を配布して清書して提出させられました。そのあとで前週提出した分に、先生が丁寧な添削して下さったものが、銘々に返却、必要に応じて個人的批評をいただきました。型にはまった問題の翻訳よりは、この方がどれだけ楽しく身についたか分らないと思います。

卒業以来約七十年の空白ですっかり忘れてしまいましたが、たまたまこのノートに挟み込まれて残ったものが少数見つかりました。なつかしい先生の御手蹟を昔を今に伝えてくれています。いささか面映ゆいですが、これも二、三コピーで御目にかけます。御笑覧ください。

これをノートの紋切型の入試問題集の独訳と比べて見て思うのですが、入試問題集の方は目先の功利一点張りて無味乾燥、先生もあまり気が進まなかったのではと思います。さきに白石君が提供された先生の御授業風景の写真(マルクスの講義風景という説明付のもの)はその一齣です。先生のうしろ黒板の右が問題文で、ノート(頁六十二)の⑦の場面です。日付は分かりませんが、昭和七年一月末か二月初めと思います。私の

記憶では、問題文の方は学友の故中村雄光（義明）君の筆蹟です。味もソツ気もないただの翻訳の作業で、つい時のはづみで先生もタイトルのような方向へお話がそれたのだろうと思われます。それはともかく、これらの問題文集による翻訳の授業よりは、私共が銘々勝手な自作の文章を翻訳して差出した稚拙な自作自訳の方が、どんなにか先生には楽しんで頂けたのではないかと思ひます。たまに「ふ」などの評価を頂戴すると嬉しかったものです。その他このノートの断片記録から伺われるように、平常の御講義の話題はまことに多彩でした。（頁三十三



昭和7年早春、卒業を前にして 文科三年乙類  
別れの会(宮田の提供)



松江高等学校正門玄関 昭和7年当時  
九期生卒業記念アルバムより(宮田の提供)

（三十五）の *Süddeutsche Dialekt*<sup>53</sup> 以下のドイツ方言についての御話など、他では聞けない話題だったと思います。その前にある四ページ（頁二十八～三十一）に及ぶ *Die Ballade* の *Yohn Maynard*<sup>54</sup> のお話などもそうだったと思います。

以上とりとめもなく書き認めました。御役に立てば幸せです。乱筆御読づらいと思います。あしからず。そろそろ寒さに向います。くれぐれも御大切に願います。

平成十二年十一月十日

宮田正信

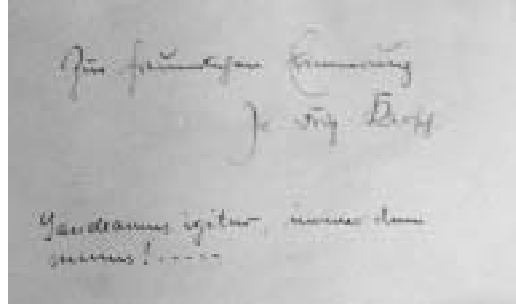
若松秀俊様

<sup>53</sup> *Süddeutscher Dialekt* 南ドイツの方言

<sup>54</sup> *Yohn Maynard-Ballade*（物語詩）の主人公と思われる？（宮田談）

右は九期生が卒業直前の一九三二年二月末、授業のあと教卓の上で書いたものである。自署の下のラテン語で書いたドイツの古い学生歌を指さしつつ、意味を説明してくれた先生のフンフィンという鼻声で耳底から蘇ってくる。宮田によればこれは Wilhelm Meyer Fröster の Alt-Heidelberg 第二幕第九場でも学生の合唱する歓喜の歌《ガウデアムス》の歌詞である。

なお、下の写真は松江高校九期文乙卒業記念アルバムに宮田の提供になる写真である。



カルシュ自筆のラテン語の一節  
九期文乙卒業記念アルバムより 宮田の提供



表題文字（カルシュ自筆）宮田の提供

七・十一 六十二年前のカルシュ先生

当時の授業風景を雄弁に物語る木村 登の手記がある。彼は東京出身で昭和十年に十二期文乙を卒業し、東京帝大文学部独文科で学び大学卒業後に朝日新聞特派員記者として活躍したひとである。

ある日、配られてきた朝日新聞の夕刊の一枚の写真を見ていた。黒板を背に一人の黒衣の教師が、机にかがんで講義をしている。生徒たちは十代の終わりに近いようだ。

「私にも、こんな時代があったなあ」

昭和一ケタ時代の松江のころのことどもが、思い浮かんできた。次の瞬間、写真の説明をみて驚いた。なんとこの写真はそのものずばり、松江高校の教室での出来事なのである。そして私が、なにげなく『一人の教師』とみたその『教師』には『カルシュ』というドイツ人講師』という説明がつけられていた。

これが六十二年前のカルシュ先生なのか。それにしてもいまみるカルシュ先生は、いまや七十を超えた私からみて、うらやましいほどお若い。若すぎるのである。そこでこの新聞の切り抜きを、チャタヌーガのカルシュ先生の娘さんのメヒテルトに送った。別掲の手紙はメヒテルトからの返事である。メヒテルトもこの写真を見て「アメイジング（びっくりしました）」

といったが、私も夢をみているような気持ちである。メヒテルトさんは、この写真の解説者である片山



病床にあった十四期文乙の暉峻凌三からフリーデルンへの書簡

光治<sup>ひかり</sup>先輩について「お目にかかったことがあるに違いない、と思います。カタヤマさんというお名前は聴いたことのあるお名前ですから」と書いている。……後略

木村 登（十二期文乙）

写真は別時期に<sup>てるおか</sup>暉峻からドイツに送られた手紙である。

## 七・十二 カルシュ先生とエンド豆

次は遠藤捨雄である。彼は京都出身で昭和十一年卒業十三期理乙の生徒で、京都帝大農学部農業化学科に進学し、京都に住んでいる。

カルシュ先生と云えば、我々は大柄のかなり福々しい、中年の外国人を思い浮かべます。私の兄は、松江高校の第一回の生徒でして、よく騒いだ連中だった様ですが、ドイツ人の先生が嫌いで、わざと怒らしたりして、授業の進行を遅らせたりしていた話を聞いていたモノだから、自分の場合は、一体どんなドイツ人が現れるのか、大いに興味をもつて、初めての授業を待ち受けていたのです。

ドアを開けて入って来たのが、他の先生と同じ様に、広い袖に朱色の長い紐のついた、黒い大きいガウンを着た大男でした。ニコニコしながら、入って来ました。大股で、窓の所まで歩いて、*Das ist ein Fenster.*と言ったのが、授業の始まりだったことを思い出します。欧州大戦（勿論、大正はじめの）では、砲兵大尉で従軍したという噂を聞いて、サモアなんと思つた程の体格の良い人でした。家（官舎）へ遊びに来ないか、と言われたのか、勝手に押しかけたのかは忘れたが、とにかく数人の者が、時々、先生の家に押しかけたものでした。ある日のこと、先生が奥様に「今日は遠藤君が来るよ」と言われたのを、横で聞いていた小学校

一〇二年の年頃の娘のメヒテルトちゃんが横で聞いていて、エンド——エンドマメ——豌豆——遠藤、妙な名前だなと思ったそうである。このことが、後年——五十年も経ってからの話に繋がるので、此処に一応、書いて置きたく思う。

ある時に、「今、ドイツから交換学生が東京に来ていて、その中の一人が松江に来るから、話に来ないか」と先生が言った。野次馬根性もあつたが、よい機会とばかり、何時もの連中が先生のお宅に集まつた。

先方は大学生であつた。こちらに残念ながら、高校生。歳から言えば、こちらの方が上の者もいるのに、とにかく、そのドイツの学生は威張りたがつて、シャクにさわる。自慢顔に、彼は、グライダーで遊ぶ話をし出した。発進の時は、人力で引つ張ったりはしないで、オートバイの後輪に、ドラムを着けて、それに綱を引つ張らせると言う。松江付近では、グライダーは未だ見られない時代ではあつたが、朝日新聞から出していた月刊の航空雑誌には、毎号、日本でもグライダーで遊んでいる記事や写真が載つていた。そして、日本では、自動車の一方の後輪にドラムを着けて、地面から浮かせて、それで発進させている写真や記事ばかりである。その方が安定感もあり、工作もし易い筈だ。不十分なドイツ語で、其れを言うのだが、先方には理解ができない。自動車の後部車軸に差動装置のあること自体を知らないらしい。（私は、中学一年の時に、島津製作所の作った模型を見ていたし、雑誌「子どもの科学」にも自動車の構造は出ていた筈だ）

この論争？を見かねて、というか、聞きかねてと言うか、カルシュ先生が中に入って「遠藤の言うことももっともだ」と言つて、ドイツの学生に説明してくださったことを思い出す。私達は、先生が科学的な知識もあり、哲学にも詳しい、と聞いていたが、倫理や哲学の知識に触れる機会はなかった。噂だけ、誰かが、「カルシュ先生と呼ぶよりも、ヘルドクター、と呼んだ方が喜ばれるぞ」と言つていたが、言つてみたことはない。

私は一九四四年に戦地から戻つて、陸軍航空燃料工場に配属せられた。此処で、前の世界大戦中にドイツがやったという木材の糖化を日本でも行うことになった。どの文献を見ても、二つの方法が、数行載つていただけだった。基礎実験が終わつて、テストプラントを行う鉛の一トンが既に無かったのを思い出す。カルシュ先生は、野戦では、どんな仕事をされていたのか。仕事の合間に考えたりしたものだった。

——そして、世界大戦は終わった——



戦後、兵庫県の会社に居たときだが、カルシユ先生が日本に来られるとのことを、同窓会から報せてきた。大阪で歓迎会をやると言ってきたも、その為に会社を休む訳にはゆかないし、残念に思ってたところ、旨く大阪に出張を命じられた。先生の喜ぶ顔を想像しながら、姫路城の写真を買って鞆に入れて、大阪での仕事が終わってから、ホテルに電話したら、ナント、歓迎会に出られていて、ホテルでは、会場の名も、場所も知らないと言う。世話役の家に電話したが、やはり奥様も、聞いていない、知らないと答えて、スゴスゴと大阪を去ったことを思い出した。今なれば、会の幹事役に聞いて東京のホテルに送るとか、間に合わなければドイツの家を聞いて送り届けるのが常識だろうが、まだ、今のうちに郵便事情が良くなって、思いつかなかったものと思う。ガツカリするだけに終わってしまったのが、残念である。

ところで、次のことは彼らが日本に来られた時に知ったことであると思うが、先生が松江を引き上げて、ドイツに戻られたとき、日本に居るオット大使から「ドイツに居たら、戦争に引っぱられるぞ。日本に來い」と言われて、日本に戻られたとのことである。（オット大使とは親しい友達だったとか）一家全部で来られたのなら、娘さんも、終戦の頃は立派な大人になっておられるはずだ。メヒテルトさん、日本語が上手なばかりでなく、字も書けるのだ。後に、メヒテルトさんと文通するようになって、彼女が良く日本語を覚えていて字も上手なのに感心したことがある。

つぎに、メヒテルトさんとの交友を書いて置きたいと思う。

メヒテルトさんが日本に来て居て、京都には何日の何時に来る。知っている人は迎えに来て欲しい。ということが、同窓会の支部から言ってきた。京都では誰が迎えに出るだろうか。医学部を出た連中は、学位をとったら皆、各地に散ってしまふ。文乙の人は居るに違いないが、果たして誰がそうなのか知らない。しかし、支部長の松原先生は迎えに出られるだろう（先生は物理の教授だったが、そのときは大津の短大の学長だった）。とにかく、その時刻に駅まで行って、松原さんを探せば、彼女が『おばあさん』になっても、判るはずだと思つて、列車の着く時刻に行つてみたのに見当たらない。おかしい、思いながらも、「ホテルが判つて居るのだから、ホテルに行けばよい」と考えて駅を離れた。（駅で会えなかったのは、私のミスだったのだ

が、省略する)。駅前の交差点へ来たら、数人の人が居て、その一人が小さな声で、アッ、エンドウさん、と言って私を見つけてくれた。引き続いて、女の声で「遠藤さん！」と言うのが聞こえた。皆が驚いたのだ。が、ホテルに着いてから、彼女が説明してくれたのが、前述の「昔、カルシュ先生の官舎に私が行ったとき、エンド、エンドマメ、遠藤」を思い出したと言うのであった。メヒテルトさんは、金閣寺を見たいと言うので（支部の世話役の蓮仏さんと一緒だったと思うが）金閣寺に一番近いところに住んでいるから、私が案内することに決まった。彼女は大柄である。（私——一七三センチ——が圧倒されるくらい。体重は遙かに私を抜く）幸いなことに、彼女は日本語ができるので、私は英語もドイツ語も話さなくて済んだ。

彼女がアメリカに帰ってから、あちこちで撮った写真を彼女に送ったら、礼状が来た。こちらの手紙はワープロで打って、フリガナを付けて置いたのが良かったそうだが、彼女の日本語も大したもの、漢字も書けている。喜ばれたので、何年かはフリガナを続けたが、横着して省いたら、偶然かも知れないが九八年には、日本婦人代筆で手紙がきた。（その婦人は竹内さんと言って、ノースカロライナ州から遊びに来て居られ、お父さんの名は為信、お祖父さんは平太郎、昔は松江の奥谷に居られた由）

さて、夫人は毎年、クリスマスカードを送って下さるのだが、英語以外の外国語が入っていたり、謹賀新年という字が入っていたりする。この頃は息子さんや娘さん達の写真は無く、老夫婦お二人の写真ばかりだが、何時もご主人の胸に、大きいメダルが下がっているか、置いてあるので、何のメダルか聞いてみたら、お二人がメンバーになっているグルメの会（ギルド）の「Chaine des Rotisseurs 一二四八AD」巴里（パリ）で開かれたもので、名誉と歴史のあるグルメのクラブです、との回答で、ご主人は名誉会員だそうです。



セイント・ゴア夫妻 メヒテルト ヘルベルト

ご主人は八〇歳を超えて居られるのに、お元気で欧州は勿論、お二人でオーストラリア、ニュージーランドなどにも行かれたそうです。

以上のことなど、他にも、何人か、メヒテルトさんと手紙の交換をしている人もあるので、ご存じの方も多いと思うのだが、ご主人が元々はドイツ人であることを、ご存じない人が多いのではないかと想着て、次のことを紹介したいと思います。何時のことだったか、私がライン河を船で下ったことを述べたとき「ローレライの少し下流に、ST. GOAR (Sankt Goar) という町があるが、そこが主人の故郷である」ということであつた。偶然か、私は、その町を覚えていた。やはり、ST. GOAR (Saint Goar) はドイツ人であつたのだ！そして、歴史のある家の出かと思つたことがある。

遠藤捨雄 十三期理乙



課外活動の様子 13 期理乙遠藤の提供



カルシュ夫妻 メヒテルト フリーデルン 中村啓成  
(17期文乙中村の提供)

## 第八章 カルシュ家周囲の人々

次は、戦後に旧制松江高校を卒業した、松江を良く知り、松江を愛する松本昭<sup>昭</sup>が子供の頃に自らの目で見たカルシュとウッドマンの家族の様子とそれを見る当時の日本人の外国人をみる雰囲気を紹介する。とくに、松江高校ゆかりのいわば最後の建物である外国人教官用の官舎が消滅しかけているのを案じながら、鋭い小学生の目を通して記憶を中心にまとめたものである。文中、ウッドマン・エレーナがとても魅力的に描写されている。

## 八・一 異人館の人達

小学校のかえりには、しょっちゅう遠回りして道草くつていたものだが、その際、三角屋根の洋館は、かならずのぞいてみる重要なチェックポイントであった。例えば、お正月のお昼前、戸口に栗色の長髪を二本に編んだ女の子が着物を着て出てきていた。よそ行きの晴れ着ではなく、ぬくそうなふだん着だったようだ。乳母車に小さな子を乗せていたから、メヒテルトさんではなかったかと思う。あの頃はそれだけで目をみはる驚きだった。

昭和十年の春、ウッドマン家のエナちゃんが北堀小学校の三年生に入って来た。男女別のクラスになったので、直接のつきあいはなかったが、廊下の帽子かけの名札にあるエレーナ・ヒデ・ウッドマンのかな文字は、よく目に



カルシュ家の庭から見たウッドマン家の様子1937年に消失

松本 昭（島根）二十五期理科二組（昭和二十二年卒）阪大理学部化学、元大阪府科学教育センター部長、元日赤愛知短大教授

ついた。何かそこから世界がのぞける小さな窓のようにみえた。先日久し振りの小学校同窓会で、近所だった中井照子さんからエナちゃんのことを聞くことができた。奥谷の官舎に遊びにいくと、玄関からすぐに、茶色の木のてすりの付いた階段が上がっているだけで、ちがうなと感じた。

ままごと遊びの道具をエナちゃんは何も持っていないくて、本物の皿やカップそれにしちりんまで持ち出してきた。学校では、初めのうちは先生の早口にまごついていたが、じきに良くできる子になって、クラスの役員をするようになった。毎日おいしそうなお弁当をメイドさんが届けてきた。

「なかでもチキンライスの赤いごはんが珍しくて、それに黄色の卵焼きがふんわりのもつて、いいにおいがしてきてね……」  
カルチャショックもいろいろあったわけだ。

一九三七年三月末、ウッドマン家が昼火事で全焼した。お留守だったらしい。作りなれない異人館は、外観はよく出来ていても、暖炉の煙道はできが悪かったのか、おふろの火が流れ出たらしい。早速やじ馬で焼け跡見物に行った。カルシュ先生らしい方が見舞客の応対<sup>3</sup>をなさっていた。あの頃、春先のフエーン現象による大火災は毎度のことで、松江市民は火事にはよくなれていた。近所の人に、通りがかりの人も加わって、となりのカルシュ家の荷物を片っぱしから運び出して、近くの玄関の広い家あたりにあずけたらしい。どうせ異人さんに言ってもわかりやせんだろうからと、だまって持ち出したにちがいない。



ウッドソン夫妻とモニカ  
とエレナ(1933年)

<sup>3</sup> このとき、エツメラ夫人は妊娠九ヶ月で人力車で駆けつけた蔵光医師が彼女を知人宅に避難させた。メヒテルトは用意された産着をバスケットに詰めしっかり抱えていた。「おもしろ紙十号」奥谷町の西洋館について(松本昭著、一九九九年より。四月に二女フリーデルンが生まれたのは前述のとおり。

カルシユさんたちにとつては、半分ぐらいはどろぼうにあつてると思われてもしかたなかったと思う。わたしがのぞいた時はまだ家の中はすっきり空っぽの状態だった。その後たちまち荷物が戻ってきて、ささいなものまで一つとして紛失していなかった。これにはびっくりしたと、メヒテルトさんの最近のお手紙に述べられている。幸い、奥谷町住民のプライドが保てたわけでよかったが、日本語には「火事場どろぼう」という単語がちゃんと存在している。

ウッドマン家は、北堀町前丁の学校の近くに移られて、以後異人館は一軒だけになった。

初夏の頃、午後おそくまで校庭には近所の生徒が遊んでいた。ときどきは卒業生も交じっていた。当番で理科室の片付けを遊び半分にやっていて、水を飲んでいたら、窓枠に腰掛けていたウッドマン家の長女モニカさんが、「わすも……」といって乗り出して来たのにはびっくりした。こいつ外国人のくせにズーザー弁使ってけしからんと、めちやくちな理屈がかけめぐった。しかし、つつしんで水道水を汲んでさしあげた。何せ、迫力があつてたくましい姉ちゃんであつた。

エナちゃんの唯一の自慢は、軽井沢や野尻湖の話だった。

ウッドマン御夫妻は子供達を師範付属校ではなく、普通校の北堀に入れて、出雲弁を話すその辺の子供と同様に育てながら、年に数回は、外人の多いリゾートにでかけてバランスをとる工夫をなさっていたらしい。このあたり、じっくり腰をすえて日本社会と取り組む姿勢が感じられる。

軽井沢のことなど離れ過ぎていて、珍しくはあつてもねたみを買うようなことはなかったが、

「六年の時いじめやっちゃたのよ、スパイだとさかいで」ということが生じたそうだ。

「アメリカ人は平和が好きな国民だよ」

とエナちゃん一生懸命言っていた。とのことである。それがもとで学校を休むということはなかったから、しつこいものではなかったらしい。逆に、帰国後は日本のスパイ扱いで苦労したそうである。ともかく、火事と戦争はウッドマン先生にとつて大きな挫折であつたに違いない。一九四二年戦争中、御一家離日。

一九三九年カルシュさん御一家が去られた後、「今度のドイツ人さん、えらく若いで」と聞いた数日後、シュワルベ御夫妻が、長いブーツをはいて、腕を組んで、赤山のごろた道を驀進して来るのに出つくわした中学生は、ただぼうぜんと見送った。

「なんだありや？松江にやあわん！」

若きドクトル・シュワルベちと氣負いすぎて来日されたのではないかと思う。

一八九一年（明治二十四年）小泉八雲一家が去って後、約三十年後、やっと松江に西洋人家族が住み始めたわけ、それがこの奥谷の二家族と母衣町カソリック教会の神父さんだった。そのせいか、奥谷入り口の桑原商店にだけ、四角い大きな食パンがあった。一般市民にとって、パンはあんパン、張り込んでジャムパン、クリームパンであった。京店のまつ屋にシュークリームがあったが、すごいごちそうであった。桑原には高級なアイスクリームもあつたそうだが、見たこともなかった。自転車に旗たててくるアイスクリン<sup>85</sup>しか知らなかった。

松江の町で高等学校が都会文化の窓口の役目を果たし始めた時、奥谷の外人さん二家族の存在は、意外に重要な国際文化交流の効果をあげていたのかもしれない。

うちの近所の好奇心豊かな年寄りのお百姓さんとおやじとの話しを小耳にはさんだ。

「ためしてくれと野菜の種わたされましてね、こげななっぱができました」

「先生（たぶんカルシュ先生）根もとのところ折って、塩かけてかじられますで。しかし、こげなくさいもの、ほかに食う者おりませんわ……」

うちのおやじは、ていねいに洗ってこさせてから試食した。

「あちらさんは洗わんとそのままで……」

「あんた下肥でそだてたでしょうが」

<sup>85</sup> 横浜でも使われていた単語であった。NHK「ふるさと日本のことば」による。メリケンなどと同様の訛

「そらそうですが、雨が洗っちゃいます」

このなつばセロリだったと思う。カルシュ先生、回虫をおみやげになさっていないければいいが。当時、西洋野菜では、レタスがチシャという名で普及していた。ただし酢みそで食するものであった。このお百姓さん、西瓜、トマト、いちごなどを売りに入り込んだらしい。

「トマトはわしら生でしか食べませんが、あちらさんは煮て食べるようです」

メロンを栽培する設備は無かったたので、その頃出始めたまくわ瓜とメロンの交配種をいろいろ試作したらしいが、どうもほめてもらえなかったようだ。

一九四五年、松高二年になった春、戦局は日に日に傾いていたが、学校を閉めて日立安来工場に移動することになった。皆の荷物を積んだ荷馬車のしりに乗って汽船場に向かっていた。北田町の渡し橋のそばで、シュワルベ先生にたまたま出会った。自転車でしたらしく同行して送ってくださった。何の話もせず、ただ手をふって別れた。この頃既に、ドイツ戦線は総崩れになっていた。寂しそうなドクトル・ハンス・シュワルベの後ろ姿が思い出に残った。

戦後シュワルベ先生は再度来日されて、大使館に長年お勤めになった。松江にも度々おみえになったらしいが、くわしい情報がない。

メヒテルト・カルシュさんは二度来訪され奥谷の家をご覧になっている。

エレナ・ウッドマンさんも、是非松江に行きたいと繰り返し述べたお手紙を、だいぶ前に出されているが実現していない。

現在の松江では、島大の外人学生も珍しくないし、外国観光客も多い。一八九〇年に松江に入った異人さんラフカディオ・ハーンは、近所の古老の言によれば、まわりの俗人にとっては異様な人、無気味な存在であった。そうした気持ちでの対応は、ハーンと家族に不愉快な思いをさすことも度々であったらしい。

約三十年の後、この官舎の周りの市民には、はるかに余裕ができていた。珍しい異国の客人を、居心地よくしてあげようとの善意の人々が大部分であったと思う。



そして奥谷のあのあたりは、今もほとんど変わらないが、まことにいい環境であった。豊かな森や竹やぶは、千手院や春日神社その他の寺社をかこんで、適当に明るく木立である。子供の足で一回りしてくるのにも手ごろである。幼年時代をここで過ごしたメヒテルト、エレーナのお二人が特になつかしい思いを強く持っていていらっしゃるようだ。毎日午後のお客さんのカラスが何時ごろに現れるかまで、精確に観察して記憶されているのには感心する。

八雲が発見した神々の国の残像とは別に、この娘たちや家族の方々が、落ち着いた生活のなかでとらえた昭和初期の松江、山陰の姿は、地方の歴史の中には非記録しておきたい大切なものに思われる。そのためによすがとして、あの山陰にたった一軒の異人館があと一日でも長く残ってほしい思いである。

松本 昭(二十五期理乙二)

## 八・二家を壊したカルシュ先生

昭和十年の頃、私の年齢は昭和と同じですから、いまで言えば小学四年生のころ、両親が松江高校生相手の下宿をしていました。私も高専の教師をやっていたので、先生が生徒の下宿を訪ねることなど考えられないのですが、カルシュ先生はそのあり得ない訪問をやつてのける変わったひとでした。というのも、当時外国人といえど子供にとつて怖い存在で、生徒をたずねてきたのはよかつたのですが、二階でドスンドスンと音がしたので、天井の方を見ると座板を支える梁が折れてしまったからです。とにかく大柄な先生の体重がこんな珍事件を起こしたようです。この梁はもちろん補強をいれ、今も健在ですが、これを見るたびに当時のことを思い出します。このときの高校生は十三く十五期生と思われまふ。

前田俊明

## 八・三 ウッドマン先生の令嬢たち

山陰なる松江の地は中央とは少しく離れておりまして、神代から続く出雲の人々はやはり大陸系かと思わ

れる容貌が多いのですが、時にふれてダーク・ブラウンの髪に鼻筋の通った二人の美少女を見かけました。松江は小さな都市ですので、日曜日など出歩いておりますと人出の多い松江大橋畔や県庁付近などでよく見かけたものです。

誰やる？と思っていましたら、某日、大橋付近の大山なる喫茶店に、スキー山岳部の先輩と入っていましたところ、突然先輩が紅茶のカップを置いて私の背後へ視線を送りました。振り返りますとその少女が一人の婦人として来てコーヒーを注文していました。「あれはウッドマン先生の娘のエレナとモニカや」と先輩は申します。「そして、あれはウッドマン先生の奥さんや！」

さて、そのウッドマン先生とは旧制松江高校で英語を教えていた小柄なアメリカの老人でありましたよ。昭和十六年入学の私どもにはドイツ人のシュワルベ先生とこのウッドマン先生とがおりました。

ところで当時、ナチスドイツと我国は同盟関係でしたが、高校の学園は何よりも自由を尊ぶ風潮がありましたゆえ、私どもはナチズムには反発を感じる毎日でした。従って、若くてナチズム一辺倒のシュワルベ先生よりも穏和なウッドマン先生の方に親しみを感じる教官や生徒が多かったと思います。

然し、時勢は次第に変わり始めました。松江高校に合格し、城山の桜花の下を逍遙した四月には、対独戦準備中のソ連と日本との間に日ソ中立条約が結ばれました。

その頃には私は、ウッドマン先生のお宅へ、英会話の練習を口実に時々伺いましたが令嬢には殆ど逢っておりません。

その内、六月二十二日には独ソは交戦状態となり、ドイツ機甲部隊の破竹の進撃にシュワルベ先生の方の意気は大いに上ります。そんな物情騒然たる内に夏休みが来て京都へ帰省しますと、

「その内に変なことがおこる。どうやらアメリカと……」

とのひそひそ話を耳にしました。七月二十八日には日本軍の仏印進駐が報じられました。やがて英米と衝突



エレナ・ウッドマン 1936年頃

する南進の始まりでした。

秋が来て松江に戻りますと、この都も何となく緊張が漂い始めておりましたが、ウッドマン先生のお宅は戦争の翳りを感じさせない唯一の場所でした。お互いに戦争や政治の話は避けていたためかも知れませんが。先生の奥様は日本人であり、当然二人の令嬢は混血児であります。あの時代、日本人社会に囲まれて暮らしていた先生の心境は果たしてどの様なものだったのでしょうか。

昭和十六年も十月に入りますと、東京では外交交渉の是非をめぐって近衛首相は東条陸相と対立するに到りまして、その十六日には近衛内閣は総辞職に追いこまれます。こうなりますと、在日外国人のなかでもドイツ人は背を聳やかし、英米人は肩を窄めて歩く様になりました。

秋が深まるにつれて、喘息が持病のウッドマン先生は健康も勝れなかった様で休講が続きましたが、お見舞いに参上します私に、「モンペはアングリーだ」とか言ってられたのは日本の時局に対する柔かい風刺を含んでいたのかも知れませんが。それでも、世間には既に不足していた甘いお菓子や本物の香高いコーヒーを出していただいたのは、日本人生徒に対する思い遣りだったのでしょうか。

先生との話題はアメリカ映画の《駅馬車》とか《オーケストラの少女》があり、またスタインベックの農民小説なる《怒りの葡萄》に及びましたのも、私《寓のふもと》の若き日の一駒でありました。

ところで当時の日本は外国書籍の入手などは今の様に容易なものではなく、外国人（欧米人）と接する機会も、ミッシェン関係の例外を除いては殆ど無く、勿論テレビ等はありません。欧米の生活や習慣を窺うのは彼の地で作られた映画が唯一の覗き窓であり、これ以外にはその様なインフォメーションは皆無と言った次第で、この窓を通して私どもは彼の地の生きた生活様式や考え方、また日常話される会話の発言を吸収していた訳です。



エレナ：松江高女一年生  
(1939年) 松本より提供

しかし、やがて運命の十二月八日が参りました。先生の一家は軟禁されたと聞いて私のお宅を訪れる足も跡絶えておりましたが、年が代わったある寒い日、厚い毛皮の外套を着たウッドマン先生夫妻とふたりの令嬢が大きなシェパードをつれて散歩しているのを見ました。

奥様は、「あらま、近藤さん、宅にはもう刑事もさんいませんから遊びにいらつしやい」と言ってくれましたが、あれが先生と御家族を見た最後でした。御一家はその後、交換船で帰米したと聞いております。

今でこそ、欧米は勿論、世界の何処でも一飛びで行ける様になり、多くの日本人が海外の風物に触れたり、そこで生活したりしております。

しかし、私の旧制松江高校の時代、ウッドマン先生のお宅は、狭いが海外を覗くことの出来た、そしてやがて非常に閉ざされていた窓の一つでありました。

近藤 茂（二十一期理甲二）

## 第九章 同僚や学者との交流

カルシュは愛娘を伴って尊敬するラフカディオ・ハーンの家を訪問したことを懐かしんでいた。以下の写真は高島ドイツ語教授とメヒテルトとともに撮ったものである。

### 九・一 高橋敬視先生

高橋敬視先生は、明治二十四年三月十七日、宮城県桃生郡大谷地村の出身。同地の飯野川町の小学校、高等小学校を経て三十七年県立仙台一中に入り、四十二年四月、二高の第三部（理乙）に進み、医学部志望であったが、大正元年京都帝大の文科哲学科に入ったのは、当時人気のあった西田幾多郎助教授に魅かれたからでもあろう。しかし、後年、同先生は「西田さんのは、あれは哲学じゃない。宗教ですね」と批評していた。

大正四年七月に京大を卒業と同時に、二高のドイツ語講師に招かれたのは、恩師の登張竹風が高橋のドイツ語の実力を認めていたからである。翌年、教授となり主として理乙にドイツ語、ラテン語を教えていたが、大正十二年三月、新設の松江高校に招かれ、哲学、修身、ドイツ語を担当して、昭和十六年九月、依願免官となるまでの十八年間、松江高校の看板教授であった。その間、大正十四年一月から文部省在外研究員として独・英・仏に出張を命ぜられ、四月、神戸を発つて翌年十二月に横浜に帰朝するまで、欧州全域および米国を旅行し、ギリシヤはもとよりトルコ、エルサレムまで足をのばし、愛用のカメラで風景、遺蹟を撮ってきた。その写真は、『新講



ハーンの旧居を訪問したときのフリッツ・メヒテルト・高島

西洋倫理学史』にいくつも収められている。

洋行の直前に出版した『西洋哲学史講義』（大正十四年初版、大同館）は、波多野精一著の『西洋哲学史要』だけしか存在しなかった当時の哲学界に四六一頁に及ぶ大冊の西洋哲学史を、しかも弱冠三十四歳の地方の高校教授が書下ろしたものととして識者の注目を浴び、その後長く版を重ねた。われわれ淞高三年生のテキストとして毎年使われたが、この本を哲学の教科書として採用したのは一高をはじめ各高校にみられたのである。

フリッツ・カルシュ博士は、マールブルク大学でニコライ・ハルトマン教授のもとで学位を得た学者であったが、松江高校に赴任して高橋教授と知り合うに至って、ハルトマンの哲学、倫理学を紹介した。高橋先生はその縁で、ハルトマンを研究し、ついにハルトマンの著書の殆どを翻訳した。すなわち『倫理学』、『存在論の基礎付け』、『歴史哲学基礎論』、『可能性と現実性』、『實在的世界の構造』の著書がある。さらに『ニコライ・ハルトマンの哲学』の著書もある。

先生の著書は大正十二年の『科学と宗教』が処女作であるが、昭和十一年の『倫理学原論』（理想社）は、松江高校での講義ノートをまとめたもので、わが国の倫理の問題を「将来の人と道徳」の項に要約した名著といつていいが、これが日華事変進行中の右傾化しつつあった文部省幹部の間に問題となり、自由主義的傾向を助長するもので、文武行政に合わないというので、ついに高橋先生の教職辞退を勧告するに至った。

先生は当時文部省督学官をしていた加藤恂二郎を頼って上京し、相談したが、ラチはあかず、ついに昭和十六年九月九日付で依願免本官となった。退職金二千八百円。従三位勲四等に叙せられた。恩給証書、年一三二八円下賜。しかし当時、先生は長女が東京の専門学校に留学中、未成年の男子二人を抱えて、生活はラクではなかった。そこでせつせと本を書かれた。『心と生命の哲学的研究』、『意志の自由と人間の責任』、『肉体自体の哲学』などがそれである。<sup>80</sup>

<sup>80</sup>

①意志の自由と人間の責任 大東出版社 一九四六、②倫理学原論 京都印書館 一九四七、③心と生命の哲学的研究 京都印書館 一九四八、④肉体自体の哲学 光の書房 一九四八、⑤歴史哲学基礎論 晃文社 一九四八、⑥概説西洋哲学史 晃文社 一九四九、⑦現代存在論の諸問題 上智大学文学部哲学科 創文社 一九五四、⑧西洋倫理学史 高橋敬視「他」 宝文館 一九六〇

終戦となり進駐軍は戦時中その職を追放された自由主義者の復職を勧告した。昭和二十一年十二月十八日付で、先生は文部教官一級に叙せられ、松江高校教授に返り咲かれたのである。しかるにさきに胸を患っていられた先生は、二十三年十月十日ついに病に倒れられた。享年五十七歳。

勝部真長<sup>かつべまさはる</sup>（十三期文甲）

#### 九・二ドイツ語教授 小林松次郎先生

先生は寡黙、素朴な風貌、超然的態度の故に名物教授に列せられているようだが、先生の本質はその様な点にはない。先生の言行が風変わりに見えるのは、まわりの世間的平均人間の方からで、先生御自身は極めて天然自然、正直に振舞って居られるだけで、何がおかしいのか考えてみたこともなかったのではなからうか。《頑固松》の異名もあった。確かに御自分の考えに頑固なまでに忠実で、他人の彼是の思惑など毛頭気にかけるような方ではなかったが、俗に言われる超然とか、冷ややかな無関心等とは全く異なる。己には厳しく、言葉の選択に慎重な先生の性格によるものと私は考えている。

こんなことを申し上げたら先生は例の《下らん》《問題にならん》もう一つ甚だ教授らしからぬ表現だが、《糞にもならん》の三つの常套語で片付けられるだろう。

先生は吾々が入学した昭和四年の初めに、二年間のドイツ留学から帰朝されたばかりだったはずだが、坊主刈りの先生がいかつい肩に黒い教授ガウンを引っかけて、のっそり教壇に上がる姿には、所謂洋行帰り等の風情等は少しもなかった。

言葉の少い先生は、教室でも挨拶とか訓辞のような余計なことは一切喋らない。遅刻の弁解、代返も聞き流して授業に入る。生徒の読む下手なドイツ語を黙然と聞きながら、窓越しに遠い山並みに見入っている生

<sup>80</sup>勝部真長（東京出身）十四期文甲昭和十一年卒 東大文 倫理卒 東大講師、東京女高師、お茶の水大、昭和音大教授歴任。カルシュ夫妻の Gistebuch に依れば、一九六三年十二月十四日に彼らの自宅を訪れている。「初雪の降るや 古城に訪ねきた 昔語りつドイツ語の師と」の言葉を残している。

徒の横顔はロダンの《考える人》のようであった。

ドイツ語の教授について、先生はしつかりとした信念を持って居られて、全く頑固なまでに忠実であったから、生徒は面喰うことが多かった。

一国の言葉は、その国の歴史、文化、国民生活の所産であるから、外国語を学ぶにはその国を学ぶ態度でなければならぬ。夫々の言葉の持つ本当の心を解することが肝要で、単純に辞書にある日本語を引き当てれば済むというようなものではない。外国語を書物の上だけで勉強するとあれば、まず情緒あふれるロマンを読むがよい。文章も美しく、音律も良い。理論書を読みたがる青年が多いが、哲学のない理論は役に立たない。美しい文章を正しい発音で繰り返し読んでいると自然に《ヴォルトゲフール》が分かって来るものだ。ドイツ語はドイツ語で理解した方がよい。無理に日本語に直すと文章本来の意味を失う。文法の修得もそのために必要である。

以上のようなことから、教室では問題が起る。時々先生はテキストを自分で読み始めることがある。美しい発音で流れるように読んで行かれる。時々独り言のように注釈されるが、逐語的には訳してくれないから頁はどんどん進む。初めの一、二頁は下調べもしてあるが、次第に生徒の方はあわて出す。

ご承知の通り年間の試験の総点が及第の境であり、文乙でドイツ語が一つでも注意点なら落第は必至だから気が気でない。他の先生ならば何とか講義を脱線させて進行にストップをかける悪知恵もあるが、小林先生には一向効きめが無いのである。

ところが先生も時々妙な日本語を創出される。例えば、《よじ登る》という言葉はあっても《よじ降る》という日本語は無い。ドイツ語は大変律儀だから両方がある。この場合先生は平気で《よじ降る》のである。生徒は得たりと大騒ぎするが、先生は平然として、日本語に無ければ無理にせんでもよい。分かればいいさと片付けてしまう。

また雪崩がシュトツセンするを《衝く》と訳された時、暖国産の私にはそのような言い方があるのかどう



か分からなかった。が、実感のある表現だと思うと申し上げると、先生は「僕の国の新潟ではそう言うんだよ」と遠くを見るような表情で答えられたことを思い出す。

テキストが『法学入門』のような理論書となると面倒である。試験に出たのが、先生が吾々の辞書的日本語を認めなかったところで、さてどうしたものか。答案を提出しながら「これで宜しいですか」と聞いたら、先生は一読「フン、くだらん」と横を向かれたが、減点にはなっていないかった。

学年末になると低空飛行組の陳情で、最も苦手とされる先生の御宅に押しかける。先生は何の用かとも言われず平然と会って下さるが、話が要点に及ぶと「あれはドイツ語が全然分かっておらん。問題にならん」の一言で終りである。当人は悲観するが、試験に出席して答案を出している限り及第最低点だけは頂戴出来るのが常であった。

副保証人をして頂いている生徒は、時々先生のお宅に呼ばれて夕食の御馳走になった。吾々の御膳には御心盡の料理が並ぶのに、先生の方には豆腐一丁入った鉢がのっている。それで手酌の酒をうまそうに飲む。こんな時でも先生は教室同様言葉少ないのだが、吾々の勝手な会話に耳を傾け、時々合槌を打ったり、例の常套語を呟いたり、珍しい笑い声を発したりしながら盃を重ねる。静かな楽しいお酒だが本当によく飲まれた。

一度皆で相談してスコッチを提げて行ったら黙って見ただけで全然飲まれなかった。

先生は御自分から話題を出されることは殆どない。文部省の期待した思想善導はもとより、教訓めいたこと、経験談等は全く口にされないから何を伺ったか記憶に残っていないが、一度故郷新潟の話をされたときは、心から楽しそうに初めて先生の感傷にふれたと思ったことを覚えている。飲む程に陶然とした先生は、言葉も態度も少しも変わらない。特に酒仙の感があつた。先生の遺稿『高級独逸文典』の序文にカルシュ先生も



ドイツ帰国に際して、同僚よりの寄せ書き (1939年)

《盃を傾けながら物静かに沁々とした口調で話す彼の姿が今も眼のあたりに浮かぶ》と書いて居られる。

《あの過ぎ去った美しかりし日々の想い出の、如何に夥しく浮かび来ることか》  
そのカルシュ先生も世を去られた。

私は思う。小林先生は決して奇人でも変人でもない。良寛和尚に似て天然自然、あるが儘の無心で人に対することのできた大徳として、名物教授の筆頭に列せられて然るべきであろう。

#### 九・三 ドイツ語教授 原田和三郎先生

たしか二年の折クラス担任をして頂いた原田和三郎教授は、また理科甲類のドイツ語担当でもあった。ドイツ留学から帰朝されて間もなくの頃であったように聞いていたが、講義が始った初日、自分は将来小説を書いてみたいと洩らされたように記憶している。教科書は、『スイスのゲレー』といわれたというケラー『緑のハインリッヒ』の著者)の小説を使用されたように思うが、内容は殆ど忘れてしまい、表題だけを臆げに覚えていた。

また、何時であつたか講義の途中で、自分は眼鏡があわなかったため、ノイローゼになりかけていたが、幸い松江駅北の古瀬眼科で眼鏡の処方が間違っていたのを見付けて貰い(恐らくは乱視があつたのであろうか)助かった、古瀬博士は名医であると述べられたことが、不思議と頭にのこっており、後年、医療に従事するようになってから、いわゆる不定愁訴をうったえる病人を診て、視力について話すとき、いつでも、原田教授のお話を受け売りすることになっている。学校の授業では、こうした余計なようなことが、案外のちになつて役立つのかも知れない。原田教授のご健在をお慶び申し上げる。

森永 寛(十七期理甲二)

#### 九・四 藤野義夫先生・井坂清先生

昭和十八年秋、ある休日の午さがり、短艇部クルーの私たちは、両先生を松江大橋の北詰で「やくも艇」に迎え湖上に漕ぎ出した。戦局は既に敗色濃く、校内では専ら国民服姿で通されていた両先生も、今日ばかりはくつろいだ浴衣がけで乗込まれ、私たちを相手に明るく談笑されていた。そして湖心に近くなつた頃、藤野先生がふと独り言のように「湖はいゝなあ。本当に湖はいゝよ」と繰り返して洩らされたことが、その白生の風貌とともに今なお耳朶によみがえる。外国語を専攻教授されていた名コンビ気鋭の両先生が、山陰の田舎街にも例外なく追ってくる厳しい時局の下でどのような想いで過ごしいられたか、お二人とも逝かれた今となつては確かめようもないが、さりげないこのお言葉のうちに、仕舞い込まれていたリベラルな胸襟が秋天の湖心でほんの一時ほころびたと推察するのは思い過ぎであろうか。余りにも短すぎた両先生との出逢いではあった。

古山甲子男（二十三期文二）

#### 九・五 ドイツ語教授 藤野義夫先生

藤野義夫先生はドイツ語の先生で、大変御世話になりました。私のある学期の成績が七点だったので大変喜んでおりましたところ、先生が「ちよつとこい」とおっしゃるので先生のお宅に参りました。

すると先生は「藤田君、君のドイツ語は七点ではなく四点だよ」とおっしゃるのです。「ではなぜ七点戴けたのですか」と尋ねますと、「君は面白い男だからだ。高等学校と言うのは学校の成績だけで点数をつけるところではありません。人間全体で点をつけるのです。私があるに七点あげたのは、あなたが非常に面白い人間だからです。決してドイツ語が出来るからではありません。ドイツ語自体は四点です」とのことでした。

それから私が東京大学を卒業した後、東京で先生にお会いする機会がありました。その時、先生が面白いことを言っておられました。「昔の旧制高等学校の時は、教室に入っていくと人間的にこれはかなわん、こいつは恐ろしい男だなという感じのする男が沢山いたものです。最近はそのような学生がいなくなつたので寂しい」とのことでした。私も六十二歳になった現在、若い人を見てこれは相当な大物になる男だなと言う

ことがよく解るようになってきました。自分が若い人を見てその人の将来が読めるという立場になった時に初めて、先生がおっしゃっていた自分が見て恐ろしいような男がごろごろいるとおっしゃった意味が、よく解るような気がする様になりました。

藤田 田(二十五期文二)(昭和六十二年記)

## 九・六 禅と西田哲学との接触

彼の遺稿からそして門下生の若き日のカルシュの言動から推測を交えて彼の思想の概要を述べてみる。彼の思想はひとの内部の普遍的意識が経験とともに発展すると考えている点、西田哲学に相通じるものがある<sup>30)</sup>。世界を内外分離して、すなわち主観と客観から世界を見るデカルトやカントの思想とは異なるものである。近代の自然科学の基礎である二元論とは異なり、古来のインドや中国の精神と自然の認識に近い見方をしてきたようだ。事物に精神と自然が時には対立的要素として存在することは明白であるが、それらは機能であって独立した実体ではあり得ず、不可分の側面であり、その内部で統一調和している姿であるとのこと。彼の言葉の中で「永遠の静けさ・鎮まり」が印象的である。主観からの客観への一方的な認識から、または相互に異なった背景をもつ人とは対話を通してとうてい互いに理解し合えない<sup>31)</sup>。

カルシュはシュタイナーや人智学に通じる思想の持ち主であるが、西田幾多郎と同様に、個体と全体との分離はあり得ないし<sup>32)</sup>、認識そのものが意識の反映であり、観点の違いや意識の発展段階によって世界が異なって見えるというなかで、より深く自分の意識の中に自分を埋没できるかというところで、永遠の静けさ・鎮まりを求めていたようだ。編者もこれまで、自然科学を通して、変化する世界をどのように見るか、どのようなように見えてくるかを一人の科学者として外から追求してきた経験からカルシュ先生について考えてみた。

<sup>30)</sup> カルシュの遺稿の一部とその翻訳に関するメヒテルトの手紙から推測した。

<sup>31)</sup> イラン・イスラム共和国大統領の滞日中の講演「文明間の対話」(二〇〇〇年十一月二日)で、古代ギリシャ哲学、東洋の哲学を例に引いて、鏡に映し出された世界、非存在から来る存在、深層から響く声、聞くことによる対話などを日本と外国との文化の相互関係を例に挙げて述べていた。カルシュ先生について知ったことを照らし合わせてみて、この講演の中で彼もカルシュと同じような「永遠の静けさ・鎮まり」を語っていたように思った。

<sup>32)</sup> 西田は「主観と客観」「個体と普遍」「現実と理想」の二元論を否定している。西田幾多郎の思想 小坂国継著 NHK出版参照。

## 第十章 日本を去るに臨んで思ふ

カルシュが日本を離れるに当たつての手記が残っている。これは松高校友會報 第三十三號に掲載された *Gedanken beim Abschied von Japan* の翻訳文である。翻譯 小山利三郎、翻譯校閲 藤野義夫 教授とする原文はドイツ語である。なお、翻訳原稿は旧字体のまま掲載する。

私が一九二五年の秋日本に来てから十四年になる。十四年間松江で高等學校に教鞭を執ることが出来た。松江で働いたこの歲月と同僚の先生方や生徒達との接触とを回想して、非常に嬉しくまた非常に満足である。以前私が獨逸で松江に來ないか、との勧誘を受けた時、この松江という名前は私には初耳ではなく、すでに一九一九年にラフカディオ・ヘルンの本でこの町や美しい島根半島、大社、美保關のことなどを讀んでいた。もう其の時分から、一度この綺麗な國と其処の人々を見ることが出来ないかなと云ふ憧憬が心に起つてはいたが未だとても満たされそうにも無かつた。ところが一九二五年どうしても日本に行かうと決心した。途端にこの憧憬が復た強くなった。否、むしろこの憧憬が手傳つたからこそ承諾の決意をしたのである。でも當時はまだ松江でこんなに永年働き、此の國殊に此の美しい松江近邊がこれ程すきになつて、此處が第二の故郷と云つた様なものに成らうなどとは思ひもよらなかつた。しかしたとひ外國でも十四年も居て、しかも努めて人々や景色に胸襟を開いて接するやうにして居る裡には、もう其處にしつかり癒着した様に離れられなくなるものであつて、今去るに當つても新興獨逸で働けるとの歡喜もさることながら、松江に居るのはもう此でお終ひかと思つて、何となく残念な氣がする。

一体そんな氣が起るといふのが主に此の永年の間中同僚の先生方や生徒の側から――苦樂孰れの場合にも――親切、懇篤にして頂き惜しみなく助力して戴くことが出来た為であり、また私並びに私の家族にとつて此地での生活が此の上もなく快適であり暮らし良かった為である。全職員生徒、友人諸君に衷心感謝致して置き度い。一つの學校に十四年も務めて居ると、此の學校の歴史の一部分を共に生き、此の學校の繁榮と發展に眞心から關与していると云つても恐らくは差支ないであらう。事實私自身さうだと云へる。今去るに及んで

私の心からの顧ひは、本校の今後の發展加之同僚の先生と生徒の将来の幸福及び生活に懸っている。而し茲で其上に想い起されるのは今は本校に働いて居られない先生や卒業生のことである。古い生徒達から時に便りを頂き、其の人の様子を聞くのが私には常に大きな喜びだったが、将来も獨逸に在って嘗て松江高等學校で相識った同僚の先生や卒業生のことを何か聞く時はいつも實に嬉しいに相違ない。それから先生や生徒で既に今は世を去られた方々も今偲ばれる。皆私には忘れられない人達だった。其の中特に多田教授が思ひ出される。多田教授は學校で急逝されるまで、私が松江に居を定めた當初の親切な友人だった。教授を始め亡き先生方の追憶に榮あれ―更にまた卒業生で職場に出、祖國の為祖國の偉大と将来のために喜んで若い前途ある生命を捧げられた人達をも只々謹んで想い起す。私は嘗ての世界大戦の参加者として、自己の生命を犠牲にすることがどんなに意義深いか、よく計り知ることが出来る。《人其の友の為に己が命を捨つる、これより大いなる愛は無し》とヨハネ傳福音書十五章十三にも既にある。

さて私が現に共に体験したのは學校の歴史の一駒丈でなく、この松江の町の歴史、すてきな近邊の地方の歴史の一部分にも及ぶ。松江はここ十四年間素晴らしい發展を遂げた。今日、松江の新しい綺麗な橋を渡ったり、綺麗な街路を見たりすると、十四年昔の松江の面影はもう認められない位である。とは云へ松江の様に、往古の記念を失わず無事今に傳へ、今も風致を特徴づける昔ながらの名所たる城と、町の昔のすがたとを其儘保存した好ましい日本の町に住めたことは、私が常々實に嬉しく思っていたことだった。新しい物を非常に喜びながらも、流石に傳統的な物に對して敬虔であり、祖先から今日に傳はった歴史的な遺産を重んずるといふのは、實に國民の品格が深遠であるいい證據である。

先生や生徒と共にした數多くの遠足の途上、或いは獨り散策したり自轉車を驅ったりした時、私は繰返し繰返し確信を増した。―日本は何と風景美豊かな國だらう―山と海とのかくも見事に融合している自然を見るのは、外ならぬ獨



枕木山から望んだ大山遠望 カルシュ自筆

逸人の私には特に意外の体験だった。さてかう言ひつつ私が眼前に髣髴するのは單に松島、天ノ橋立、宮島の様な日本の名所奇勝のみでなく、特に此の大山と三瓶山との間の景色の餘りにも「知られなさ過ぎる」美しさなのである。此は實際もつと有名になる丈のねうちがある——幾度私は枕木山や朝日山の上に立つて夕日に映える陸と海とを瞰望し、あの印象深い平和な風景に見入ったことだらうか——此の出雲の國の老木鬱蒼たる神社佛閣の美しさ——海——入江——島嶼——さては遙かに淡くかがやく隠岐の國の山々を配して青く透き通った日本海の美しさ——獨逸の友達に一度この絶景を見せてやり度いと思つたことが何度となくあつた。また秋田圓道を歩いて農夫達が精出して働く様を見、時が経つに従つて彼等の苦役から受ける印象として、唯尊敬の念丈が起きる様になった時に、我が新興獨逸も亦農夫の勞働を重要視し尊重している理由が特別はつきり理解することが出来た。私がかく日本及び日本の人達を良く知ることが得たのは、偏に大へん親切に援け知らせて下さつた總ての友達のお蔭だと有難く思ふ。

さらに彼の言葉が続くが、そこに移る前に若干補足しておきたい。というのは、彼の言葉には、後の世から見た場合に到底肯定できないものが見られるからである。しかしながら、そうした論述を後世の我々が受け取る時には、彼の置かれた環境と時代を十分に考慮して理解する必要があるからである。

すなわち、文面は、当時彼が日本に住んでいて、ドイツの現実を何も見ることができず、報道もドイツからの新聞のみであつて、そこから判断したことや感想であつて、多分に感覚的な文章である。それゆえ、ドイツの歴史からみて第一次大戦後に巨額な賠償で國が困窮し、完全に自信をなくしていたドイツ人を鼓舞して、經濟の復興を成し遂げたそのリーダーとしての單純な賛同であると思えない。彼が妻とともに信奉した人智學が一九三四年にはヒトラーによつて禁止されていたこと、妻がユダヤ系であることからいつて恐らく情報制約のもとでの言葉であらう。しかし、彼がこの文を残したことは紛れもない事實である。彼が精神論者であり、唯物主義的な共產主義を阻止しようとした當時の風潮と言葉に惑わされ、ナチスの本質を見抜けなかつたと思われる。このことは、當時のドイツ内外の政治家、国民いや外国の要人についてもそう言えることであつたし、国民はおろかナチスといえども意図しなかつた変節と同時に巧妙に隠蔽した意図的変

節からも、彼の本来の信条からはずれたような文章を彼が書き残した背景が推測される。

このことは、我が国でも事情は同じで、勇ましき軍国主義を礼賛し、反対のものが、生きられない時代であつたことを振り返れば、理解できないことではない。彼が軍籍にあつたこと、大使館員であつたこともこのことを推測させるに十分である。表面上のことがらが影響したようで、帰国後の生活も思わしくなく、彼の實力にふさわしい職業に就けなかつたようだ。しかし、彼の宗教哲学的興味、日常の行動、後のドイツ国家から永年勤続の公務員としての恩給が認められたことなどは間接的ながら、彼の行動が心配されるようなものでは無いことを物語っている。以下、彼の残した言葉をそのまま紹介する。

私が一九二五年故郷を出た時、獨逸は苦難なあの戦争時代のすぐ後であつて、その後凡ての獨逸人には耐へ難い時代がつづいた。我々獨逸人は全く我等の總統アドルフ・ヒトラーの力で、其の時代を切り抜け、殊に當時凄まじくせまりつゝあつた禍多き共產主義の危険を放逐し得た。それで私は眞に新しい獨逸に歸ることになる。しかも此の際今まで私が働いていた日本の國が私の祖國獨逸と親善關係に在り、協定を結び、それにより我々の兩國は伊太利とも共同して世界史を決定するが如き強力なブロックを成していることは私の最大の快事である。日本、獨逸及び盟邦伊太利は今や民族的には數知れぬ相違があるにも不拘、銘々の歴史上同様な任務に直面して居る。三國は互ひの國民文化と歴史とを尊重し合いつつ此れを自力で進め更に發展させ、以て世界平和に大いに寄與せんとする點に於て一である。

私は茲日本に於いて我が祖國獨逸の變貌を誇りに喜ばしく語り得たばかりではない。同時にその變貌に依つて此兩國が愈々近づき、今では親善關係に結ばれて居るのを目のあたり経験し得て實に満足である。それ故私も最大の關心を以て、日本が恐らく日本史上最大の任務たる東亜の秩序と和平の任務を果たさんとして、現代行ひつつあることに賛意を表するものである。實に在留獨逸人として、また同盟獨逸國民の感情からして、私は、私の在留國日本が其の歴史的使命を首尾よく達成されんことを祈つて已まない。而して、一國民は各個人が夫々其の所に在つて祖國の為に全力を盡す時にのみ、かかる使命の達成を見ることが出来るであらう。



## 第十一章 カルシュ先生以後のドイツ語

カルシュの後任として当時若きハンス・シュワルベが昭和十四年十一月～二〇年八月に、旧制松江高等学校ドイツ語講師として勤めた。ナチの本質を知らず血気にはやった人であったことが当時の生徒である近藤茂<sup>64</sup>の手記にある。しかし彼は戦後新生ドイツの大使館新聞情報担当員として日独友好に尽力し、一九七三年までの駐日ドイツ大使の活動を中心とする日独外交史の編纂を行っている<sup>65</sup>。このころ近藤が教わった藤野義夫先生についても併せて語っている。

ドイツと日本が戦争に敗れてから、もう四十年以上の歳月が経ちました。ハンス・シュワルベ先生については数年前、在日ドイツ大使館に先生が勤めているとの話を人伝に聞きましたが、その後大阪に於ける旧制松江高校二十一期の同級会に出席しましたところ、シュワルベ先生が行方不明になっているとの噂に接しました。

話が一寸変わりますが、思い出しますに、曾って私は《若き獅子たち》なる映画を見まして肝銘を受けたことがあります。ナチスを信じ、ヒトラーに私淑していたドイツ青年将校が敗戦に直面し、第三帝国の崩壊という、彼には信じられぬ事態を知って自信を失い、自分の生き方がわからなくなつてさすらうところをアメリカ軍の一兵士に射たれるままに若い命を失うというものでした。マーロン・ブランドが講演していましたよ。

さて、あの当時、ナチス青年だったシュワルベ先生は講義の折りに触れて《第三帝国》を賛美した一方、《西部戦線異常なし》の著者なるレマルク等は死刑に価するとさえ申しおりました。私の同級生には『彼はナチズムとヒトラーを讃える様に、ドイツ政府から命令されているのではないやろか』とか、「ナチズムを肯定

<sup>64</sup> 近藤 茂（二十一期理甲） 京大医卒 大阪医大、ニューヨーク医大客員教授、医学博士

<sup>65</sup> Deutsche Botschafter in Japan 一八六〇・一九七三 Tokyo（一九七四） Herausgegeben von H. Schwalbe und Heinrich Seemann

しやへんと、シュワルベさんは職を失うからあんな講義をするのや」等と申している者もありましたが私、今にして思えば、先生は本気でヒトラーとナチズムを信じていたのではないかと考えられるのですぞ。そして、そこにシュワルベ先生の悲劇があつたのではないでしようか。《第三帝国》をあたかも一神教の信者のように信じ、ヒトラーの「我が闘争」を心の底から肯定していた先生は、戦後急速に民主化されて行つた西ドイツの考え方や行き方について行けなかつたのではないでしようか。

私も、日本帝国の崩壊を告げる敗戦の報を知つた、あの八月十五日の午後は天地が崩れ落ちた様な虚無感と違和感に襲われたものです。立ち直れるまでにはすこしの時間がかかりました。また、文科系にいたため学徒出陣に逢つた旧制松江高校の同級生にも、生き方がわからなくなり、復学に相当な歳月を要した親友もおります。《若き獅子たち》でマールロン・ブランドが扮した青年将校の気持ちはわからないでもありません。しかし、此処ですこし見解を変えて、敗戦前のことを考えてみたいと思います。

『独裁は悪い、全体主義は良いことではない。ナチズムやファシズムは怪しからん。』等と言うことは、敗戦後になつてからなら言うのは容易でしょう。平和、民主主義、反戦などと叫ぶのも同様でありますぞ。しかしですね、戦前や戦中に於ては、生命と身体を賭けなければならぬ発言でしたよ。恐らく当時のナチスドイツに於ても日本と同様、またはそれ以上の勇気を要する行動でありましたでしょう。

いずれも、戦前、そして戦中の旧制松江高校に在学しておりました、一人の老人の思い出と思いつくままのお喋りであります。

先にハンス・シュワルベ先生のことを書いてしましまして、恩師の一人なる藤野義夫先生のことを後にまわしてしまいましたが、これは特にシュワルベ先生のことを書いたと言うよりは、あの『シュトルム・ウント・ドラング』とも申せます時代に旧制松江高校、ひいては我が日本を包みこんでいた世界の情勢がわかつていただければ何よりと思ひ、私なりに拙い筆を走らせた訳でありまして、これらが真打ちの二十一期理甲二におけるドイツ語の講義であり、勿論名物教授の一人なる藤野義夫先生の思い出と言う次第でありますぞ。

藤野先生には私はよく叱られました、不勉強のためであります。特に一年生の講義が始まりました頃は、冠詞や名詞の語尾変化を間違えますと、先生の額の静脈が腫れ上がったのをよく憶えております。あれは叱られるよりも恐ろしかったですよ。恐らく『こ奴め、全く致方ない奴だ。』と思われていたのではないのでしょうか。当時のドイツ語は未だ、あの風格のあるヒゲ文字でありましたぞ。ヒトラーはナチスドイツの版図が欧州の東西へ拡がるにつれてこの書体をやめ、ヨーロッパ諸国に共通するアルファベットに変えたそうです。

ところで、当時の旧制高校の先生はなかなか風格のある方々がおられました、藤野先生は御友人の井坂先生などに比べますと、小柄で細い体格でしたが、講義ともなりますればその眼光は炯々として、時に鋭く、時にして師としての慈愛に溢れ、時にして過ぎ去りし青春を偲ばれるのか潤っておりました。

事実、藤野先生はその昔、ドイツの作家なるヘルマン・ヘッセと文通があったと申します。ボーデン湖畔に住むこの文豪とね。

ヘッセの作品は当時の旧制高校生の間でよく読まれたもので、お値段も手頃な岩波文庫所載のものが愛好されまして、制服の上衣のポケットにこれを入れますと、文庫本の上縁が一センチほど出て見えます。これが黒いマントに下駄を穿いた青年たちの見栄のひとつでしたな。

戦争が次第に激しくなると物資が統制され、書籍が少くなると、先生は原著をタイプしたものをガリ版で刷って講義に使われました。私は、ドイツ語は文法には音を上げていたのですが、文章になるとすこしは読める様になりました、このガリ版刷りの教科書のなかに、ヘルマン・ヘッセの『失われたポケット・ナイフ（タッシェンメッサー）』なる作品があったのを、この年齢になっても私、今尚懐かしう思つて



昭和12年頃の高校生の服装  
14期生卒業アルバムより(奥野の提供)

おります。たしか、あの作品にもボーデン湖なる地名が出ていた様に記憶するのですが。

私、今にして思いますに、ヘッセに於けるボーデン湖は、藤野先生では松江の宍道湖ではなかったかと考えられるのです。そしてそこに、あの山陰の小都市に住んでおられた藤野先生のロマンのひとつを感じるのがあります。

藤野先生とハンス・シュワルベ先生 淞友 第十一号 昭和四十七年十二月の記事より近藤 茂(二十一期理甲二)

この様に自由な環境で自由に行動する中で自由に考え、自然に学問に入り、また実業界に、あるいは政界に入り、やがて大活躍した数多くの生徒にただ驚くばかりである。その中で、外国人が夢を育む教育に果たす役割は想像以上のものがあつたようだ。

今日、教師から押し寄せる知識のみの吸収を良しとする学校教育、そしてそれらを咀嚼し自分のものにする時間が十分に持てない教育の現状を思うにつけ、今の高校生・大学生が物理的な設備はともかく、とても貧弱な学習と修養の環境に置かれているような気がする。このような環境こそが大切なのになぜかこの部分が一番軽視されているようだ。「<sup>おも</sup>学びて<sup>おも</sup>思考はざればすなわち<sup>くら</sup>罔く、<sup>おも</sup>思考いて学ざればすなわち<sup>あやう</sup>殆し」が今の教育に決定的に欠けていると思えてならない。そしてそれが、やがて社会に出てからのヒトの度量や力量の差を生むような気がしてならない。

## 第十二章 再会、カルシユ先生を迎えて

一九五五年の七月当時のカルシユ先生の様子を国立予防研究所部長の多ヶ谷勇が日本医事新報で語っている。彼は新潟高出身で松江高の卒業生ではないが、十四期理乙で昭和十二年卒業の奥野良臣の指導を受けた経緯がある。

### 十二・一 八年後のカルシユ先生ご夫妻

この年七月、西ドイツマールブルクにベーリング・ウエルケ社を訪れるために下車した時、駅でうろうろしていたら、「日本の方ですね」と上品なドイツの老人から日本語で声をかけられた。私が抱えていた風呂敷包みでそう判断したとのことであった。この方が戦前松江高校でドイツ語を教えて居られた、フリッツ・カルシユ先生で、奥様と一緒に、休暇で旅行するお嬢さんを駅まで見送りに来られたところで、私の風呂敷包みに目をとめられたのである。ベーリング・ウエルケ社の見学を終わって、お誘いをお受けしてカルシユ先生のお宅に伺い、奥様がわざわざ炊いてくださったご飯をご馳走になり、いろいろ日本のことなどをお話した。

先生ご夫妻は大変日本を愛しておられ、是非もう一度行ってみたが、この年ではもう雇って貰えないから残念だと云って居られた。(中略)

お嬢さんは既に結婚され、先生ご夫妻だけで静かに暮らしておられるとのことであった。今はマールブルクにも数名の日本人が滞在していて、時々先生のところへお邪魔しているとのことである。(後略)

日本医事新報 二一七六号 「カルシユ先生のことなど」 多ヶ谷勇著より

## 十二・二 縁者との交流

一九五六年三月二日に平井信義、一九五七年五月七日に梶川俊吉<sup>※</sup>、一九五八年十月二十三日に田村忠雄<sup>※</sup>がマールブルクを訪問している。そして一九六八年七月二十三日に元同僚の藤野義夫が二晩宿泊し、松江の想い出を語り合っている。なお、東京での再会を約している。一九七〇年七月十四日には長屋が訪問し「日々是好日」を Gästebuch に残している。

マールブルクは旧師を訪ね

古城の緑は三十年の昔をしのぶ

先生のご健康を祈ります

二十七年ぶりの再会を神に感謝しつつ 梶川

三拾年振りにカルシュ先生ご夫妻に

お会いして菅田ヶ丘を想起して感慨無量

級友 徳山、奥村、坪内<sup>※</sup>兄等の

心からなるお土産をお贈りしました。

梶川君のサインをみて一層懐かしい

昭和三十三年十月二十三日 九州小倉市 田村忠雄

<sup>※</sup> 梶川俊吉（七期文乙）東大独法、元大阪・東京高検検事、元近畿・関東公安調査局長、元最高検察庁検事、昭和三年松江高校生徒会長  
<sup>※</sup> 田村忠雄（八期理乙）九大医卒、元小倉市立病院副院長、元北九州市立戸畑病院長、医博、陸上競技部のキャプテン、十六・四「勉強よりも運動」を参照  
<sup>※</sup> 徳山（伊藤）英太郎（東医出身、夷元杏雲堂病院外科部長、医博）、奥村通（千葉医出身、内科医）、坪内（青木）謙吉（脚注<sup>※</sup>参照）らはすべて八期理乙卒

つぎに十四期理乙の奥野良臣に再会の経緯と因縁を語って貰う。彼は大阪帝国大学医学部卒業後研究一筋の道を歩み、大阪大学医学部教授、その後同大学微生物研究所長を歴任している著名な免疫学者である。

## 十二・三 カルシユ先生との再会

高校に入ると、すぐ先生にドイツ語を教わるようになった。その難しさと先生の巨体に圧倒されて不安になった。しかし先生の温顔と愛情が伝わり、間もなく楽しい授業に変わり、その時教わったドイツ民謡ローライは五十年以上過ぎた今日でも、他の乙類出身者と同様、私は正確に歌えるのである。

高校卒業して二十四年後、一九六一年の暮<sup>⑧</sup>に、私はマールブルグ大学衛生学のジイーゲルト教授に会いに行ったとき、その町にカルシユ先生が住んでおられ、手紙を出しておいたのですぐ会いに来て下さった。昔の先生と少しも変わっておられず、気安く市内各所を御案内下され、大学の教師や学生もよく来るというドイツ風のレストランで御馳走になった。そしていろいろ昔話や、松江のこと、高畠さんは、小林さんは等と、懐かしそうにお聞きになった。食後は市街を御案内頂いたが、各民家の門口には建築の年号が小さい数字ながら明瞭に刻まれていて、千七百何年とか、中には千六百年代のものもあって、マールブルグは城や立派な教会のある古い由緒のある都市であることがわかり、先生が静かに余生を送られるにはまことに相応しい所と思われた。

夕刻わざわざ駅までお送り下され、奥様からとておみやげを頂戴した。中にはクッキーなど多種類のおやつが入っていて、母親が可愛い子供に旅をさせる時に渡すようなやさしいお心遣いを感じられ、忘れることはできない。別れ際のヴィーダーゼーエンの言葉通り再びお目にかかれることができればよいが、思いながら車中の人となった。

ところが数年後に、日本で再びお目にかかれたのである。新潟高校出身で京大薬学部から私共の研究室へ

<sup>⑧</sup> カルシユの *Calchud* によれば一九六一年十一月二十三日である。『二十五年振りでカルシユ先生に拝肩、お元気な先生を見ても先づ安心しました。マールブルクの古城を案内して頂き、昔話を懐かしく拝聴。アクセント先生のお話も印象的でした。『有難うさん』の名付親の先生に有難うさんと申し上げ』

来ていた加納晴三郎を研究のためにジイーゲルト教授のもとに留学の世話をしたのが一つの機縁となった。その町にはカルシュ先生が居られることを話しておいたので、加納は留学中先生に大変親しくして頂いたとのことであった。帰国後加納は、先生が訪日を熱望しておられることを塩野義製薬の湊高出身の末松さんに伝え、そこから岩城専務など更に多くの同窓生の方々に話された。そして賛同を得て、先生を是非お迎えしようとなった由で、それが間もなく実現したのであった。

カルシュ先生が来日されると、松江、大阪、東京等各地を訪ねられたようであるが、大阪では「クラブ関西」にて先生を囲む楽しい歓迎の会が、多数の教え子と、その関係者を混えて盛大に行われた。その際先生は一人の妙齢の愛嬢をご同伴になつていた。このひとともに後に湊高出身者と深く関わることになるのである。

十二・四三回目の出会い  
「カルシュ先生と田島君 その一」 「カルシュ先生」 奥野良臣（十四期理乙）

私が久留米大病院長に就任して間もなく、昭和四十二年（一九六七年）六月から、約三ヶ月を要して、世界一周の旅に出る機会に恵まれ、その時を利用して、先生にお会い出来たのが第三回目の出会いであります。その時の日記が幸いにも残っておりまして、それには六月十七日、宿泊地のフランクフルトから、先生の住んで居られたマールブルクを一人でお訪ねしたと書いてあります。

ドイツで初めてこの汽車の旅で、心細く切符は、教えられたとおり *Sontag Zurückfahrkarte nach Marburg* と窓口で云ったら、往復切符が買えた。マールブルクはフランクフルトから約一時間で着いた。カルシュ先生自ら、改札口まで出迎えて頂き、感激の握手を交わしました。七十三才とは思えない程のお元気で、駅から、大学病院、古城、ケルンの教会より古いエリザベート教会などを案内していただき、お宅に行つた所、奥様は少し体調を壊して居られたにも拘わらず、羽織を着て出迎えて頂いたのには、びっくりしました。日本茶のもてなしを受け、室内の飾り物が、皆日本式であり、掛け軸などをかけて、細かい所まで気を配つて頂いたのには恐縮の至りであつた。同席の加納晴三郎三夫妻と一緒に、古城に登り、レストランで色々な御馳走にあつまり、特に *Schnitzel* の鳥肉と *Pils* と本場のドイツビールが、とてもおいしかったとあ



る。夕方先生、並びに加納夫妻のお見送りを受けて、無事フランクフルトのホテルに帰りました。マールブルクの想い出は、今だに、はつきりと蘇って来ます。

増田義哉（六期理乙）

## 十二・五 師遠きより来たるまた楽しからずや

皆さんの目にもとまったことと思いますが、このように朝日新聞をはじめ各新聞に大々的に報道され、なつかしい私達の師フリッツ・カルシュ先生 (Dr. Fritz Karsch) は昭和四十三年九月二十七日遙々西ドイツから日本にやって来られました。

先生は大正十四年十月から昭和十四年三月まで十四年余り、私達の母校に在職され、第四期から第十八期の文乙、理乙のものが教えを受けました。先生は今年七十五才になられ、ますます御元気で、一度日本に是非行ってみたいとの希望を漏らしておられましたので、私達同窓会で御招きしようではないかということになり、同窓会本部の田村清三郎が中心になって、全国の同窓生に檄を飛ばし募金運動を推進しました。皆さんから一口五〇〇円ということで醸出して頂き一五〇万円を目標に先生の滞日費用を作りまして、一ヶ月半にわたる先生の来日が漸く実現いたしました。これについて献身的な労をとられた本部の田村理事は不幸にも先生の来日を前にして不慮の事故のため急逝され、その後を継いで二十三文甲の吉村一夫が担当理事として世話の一切を引受け、東京の十四期文乙の暉峻凌三をはじめ、各地支部役員のご協力で、滞日一ヶ月半の旅程も無事に終了いたしましたし、先生はご機嫌うるわしく、十月末日御帰国になりました。残念ながら先生の奥さんは身体の具合が悪いので一緒に来ることができず、アメリカに嫁いでおられるお嬢さんのメヒテルト・セイント・ゴア夫人が、自費で介添役を申出られ、終始先生と行動を共にして下さいました。先生と違ってメヒテルトさんは日本で育たれたので日本語は極めて御達者なので通訳の役もして頂きました。そうしたカルシュ先生父娘を迎えて、たびたび各地で同窓会の会合が持たれ、何十年振りに再会する旧師、教え子の楽しい日々が繰り広げられました。まことに嬉しい限りであります。残念ながら東京でのニュースが本号には間に合いませんでしたが、当大阪をはじめ、松江、岡山、大津など各地の様子は別項の通り各位が書きくだ

佐藤内閣当時の赤澤自治大臣が多忙の中カルシュ先生父娘らを歓迎してくれた。彼はカルシュ先生にとって最初の教え子の一人である。赤澤がまだ高校生の時、理想を掲げて堂々と論を張り、当時の政治家と渡り合ったことは前述した。鳥取県出身の政治家として党派にとらわれず、活動したことが当時の新聞でも報道されている。

さいました。本年における私達松校同窓会としての最も意義深いビッグ行事となりましたことを、皆さんと共に喜び、先生の益々の長寿御健康を遙かにお祈りしたいと存じます。

「師遠きより来たるまた楽しからずや」より



1968年10月5日 島根新聞による報道



1968年10月5日 朝日新聞による報道

## 十二・六 カルシュ先生を迎えて

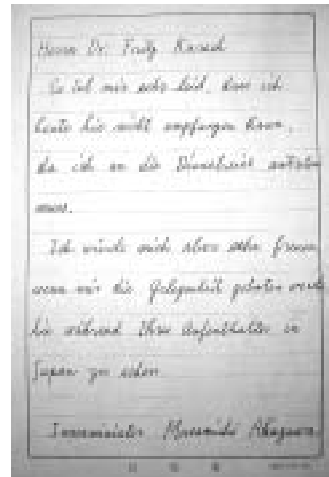
日本医事新報に当時久留米大学教授の六期理乙卒の増田義哉の歓迎の言葉がある。

我々旧制松江高等学校時代のドイツ語の恩師カルシュ先生がマールブルクで元気に暮らしており、日本を再び訪ねてみたいという熱望を持っているという記事が、国立予防研究所の多ヶ谷勇先生によって、三年前の本誌「炉辺閑話」に記載されたのが、今回のカルシュ先生を日本に招く端緒となったわけで、この点、多ヶ谷先生に更めて御礼を申し上げる次第です。

実は、昭和四十二年七月のある晴れた日、私はマールブルク駅頭でカルシュ先生と感激の握手を交わしました。その後、マールブルクのあの美しい古城の辺りを共に散歩しながら、また先生のお宅において、先生が如何に日本を愛しておられるかを再認識し、《また生ある間にもう一度日本に行きたい》という熱望を持つておられることを、言の端の間に感じ取った私は、帰国するや先ず松江高校同窓会福岡支部にはかりました。次いで本部にもはかり、また本誌にもその旨のことを載せて貰い、全国的な運動に盛り上げました。そ



赤澤らのカルシュ父娘歓迎の挨拶



カルシュ先生宛の赤澤自治相自筆のメモ

の結果、松江市の本部で、田村清三郎が中心となつてこの運動を推進して貰ったところ、漸く軌道に乗つて、やつと十月初めに日本にお迎えすることが出来ました。

先生は東京―松江―岡山―広島―福岡―長崎―大阪―東京―軽井沢と廻られて、十月末日本を離れました。我々福岡支部の者は、十月十四日午後六時から、福岡市帝国ホテルで、内海支部長以下十八名集まつて、心からなる歓迎を申し上げたのでした。先生は長女のメヒテルトさん、今はゴア夫人を連れて、一昨年会つた時と少しも変わらぬ、七十五才とは思えない元氣な姿で、懐かしい昔語りに、時の移るのもわからない有様であつた。お嬢さんが、とても日本語が上手で、にがてのドイツ語で話す必要がなくて、皆大助かりでした。

翌日は長崎に行かれ、翌々日また福岡に帰つてこられるというので私は佐賀駅までお迎えして汽車に同乗して博多に行き、福岡空港までお供したが、飛行機の中に消えられるまで、振り返り振り返り手を振つておられた先生の姿は、忘れることが出来ません。いつの間にか私の目は涙でかすんで、先生の姿もボンヤリとしか見えなかつた。先生も空港改札口を出られる時、涙をためておられたようでした。カルシュ先生萬歳！

福岡空港から飛び立つ飛行機を眺めながら遂うっかり「是で私の duty は終わった」とつぶやきました所、隣に立つて居られたメヒテルトさんが聴きとがめ「duty ではないでしょう」と云われ、一本とられたことを、今でも忘れることは出来ません。 増田義哉（六期理乙）（平成十三年五月二十九日脱稿・九十三歳六ヶ月）

十二・七 カルシュ先生を案内して

（二）十月七日 奥谷の万寿寺

「ここに、大きな銀杏の木がありました。覚えていますか、さかいさん」

カルシュ先生は、昔の思い出の地、奥谷の万寿寺門石段の所で、案内の私にこう言われた。昔の記憶をたどると、万寿寺といえは、その門前の銀杏の木で思いだす程なので、

「もうなくなりました」

と答えた。一行は、メヒテルトさんと、松原先生だ。門をくぐって、すぐなつかしそうに、左手の墓場へ行き、「ああ、あれもある……。」ここだ。ここだ。」と一つずつ、思い出を二人で話し合って居られる。私はそつと先生にきいた。「この寺の和尚さんに、お会いになりますか」

「ええ、会います」と、よどみない返事だ。早速庫裡の玄関で、女の人に旨をつげた。

「方丈さんを、御存じの方ですか」

「さあ私はよくわかりませんが、御存じないかもしれませんよ。でも先生が一寸あいさつなさるのでしよう」

「ハイ。ではおつたえしましょう」

私は、戻って、先生に、坊さんへの申込みのことをつたえて待った。しばらくすると、本堂の縁から声が聞こえた。「よう。なつかしい人が来られましたなあ」私はびつくりした。

白衣の老僧が、縁側に立つて居られる。私は、はじめてだが、噂にきく勝平老師にちがいない。カルシュ先生と旧知も旧知なつかしい人なのだ。私は全く知らなかった。すぐ玄関へまわり、靴をぬいで上がった。メヒテルトさんは、昔しよつちゅうここへ来たとおっしゃる。私は恨み言をいった。

「この坊さんを知っていらつしやるなら、前もって、一寸、ひと言おっしゃっておいて下さればいいのに」二人はただ笑って居られるだけだ。本当は私も嬉しいのだった。奥へ通り、山のせまった静かな庭に見入り、外国から来たこの二人が全く故郷へ帰った人のように、心の底から懐かしさを味って居られる。

「エーヴィゲ シュティレ（永遠の静けさ）」

という語が囁かれていた。

「寺の茶を、あがりませんか」と老師。

「いただきます」と先生……。茶室へとおされた。案内の私が、ここで、先生に紹介して貰うという逆なことになったわけである。松原先生を加えて四人が客で、老師の接待を受ける。勿体無いことだ。先生は無理にかしこまる。

「そんなことせんで、足は投げだして」

「そうですか」頗る気楽な茶室だ。しまいには、先生は、書院の明かり窓の所へ腰掛けたいと仰言る。

「ああどうぞ」と、気軽に、置いてある物を、片脇へ寄せて、並んで腰掛ける主人だ。円転滑脱……。これで、礼儀を崩さない見事な茶席だ。京都からの、そば煎餅がうまい。話は静かだが、一言一言意味が深い。

「この頃の若者は、何でも知っていて、本当のことが一つもわかっていない」

「本当のことはこの永遠の静けさの中でこそ考えられるのです」

カルシュ先生が、松江にこれ程会いたい人をもつて居られ、そのことを一言もつたえて下さっていなかったそのゆかしさに心をうたれた。つづいて、春日神社、桐岳寺、千手院とまわったが、どこも懐かしい所で、特にメヒテルトさんは、嬉しそうだった。私も自分でうれしくなり、もうこうなると案内ではなく、ついてまわって、説明をきく始末だ。そこらじゅうから、昔親しかったおばさんが、顔を並べて、二人の来訪を喜び、世話役の私までお礼を言われた。

## (二) 魚一の団欒歓迎会

雨模様のこの日、枕木山行き予定を変更し魚一料亭で、団欒を主にした歓迎会をして、少々疲れ気味の先生に、楽しく憩って貰おうという、吉村さんと、私の企画だ。

二階の広間で、先生とメヒテルトさん、それに松原先生がお客様だ。先ず、集った人の紹介だがこの人達はみんな変わっていて、毎日入れかわり立ちかわる人達と、一寸ちがう。ドイツ語も話せず勿論旧知でもない。それで、先生から何かをきかせて貰いたい人々だ。島大教授河野憲善、哲学専攻。それから米子から来られた、藤原一善。この人は自作の美しい藤瀬の布を進呈して、喜ばれた。安達吉矩、この人は枕木山麓の百姓で、この日、中止した枕木山行きの世話役だ。実は山駕籠を天井から引き降ろして、準備し、先生を駕籠で寺まで担ぐと、頑張っていた人だ。今日は仕方がないのでこの会に参加した。自家製の椎茸ときくらげを持って来て、食膳を賑わしてくれたのである。先生が若者教育に、これから心をつくそうといわれたので、私は、私の研究室の学生小山桂子さんを、特に誘った。この人も喜び勇んで加わってくれたので、全く風変わりなグループであった。

夫々紹介がすむと、早速催しものはいった。

先ず最初に、魚一のおかみさんの義太夫節披露である。

「東西、東西、ただ今より、お耳に入れますのは、三十三間堂棟木の由来、平太郎住家の段、木遣音頭、相勤めする太夫、吉村よしの太夫、三味線、松尾ひろ、東西東西……」拍子木を入れての吉村一夫さんの口上は、本格的だった。日本古典のエスプリを、団欒のうちに、気楽に、なまで聞かせてあげることができるのは、一寸外にはあるまい。「デンデンデン」と、太棹がひびき「早や東雲の街道筋……」とはじまると、お二人は熱心に本と首つびきできいて居られる。いよいよ最後の木遣唄になり、三味の調子が派手におさめて終り、満座の拍手……。

つづいて、松尾さんの三味の調子が、突然変って、安来節になった。そうすると待っていたように、安達吉矩さんが、仲々艶のある声をはり上げて、一つうたった。さて、お次の番ということになり、私は河野先生を動かした。先生にうたつて貰いたいのを、用意してあったのだ。

唄

めもはろばろと

とおいくにからめづらしや

とどきましたる玉手箱

むかえにでかけたぢいばあさん

ダンケダンケダンケシェーン

字余りの安来節は歌い難いが、先生は、実に見事に歌いこなされる。

何のことはないこの先生のお家芸（しょうぎょう）の声明（しょうめい）の節まわしがこの字余りの安来節に巧に応用されるのだ。

私は大発見をした。声明は日本歌曲の元祖だとおっしゃるこの先生に感服したのである。次に、貝殻節、それからしげさ節、関の五本松と、一通りこの土地の民謡がうたわれた。

そのあとに、出て来たのは、藤原一善さんの歌詞、曲共自作の、童謡と歌曲の披露だ。  
初めテープレコーダーが使われたが、もどかしくなって自分で歌われた。

ケロケロケッケッケ

かえるがないた

おおめばちくり

なきました

こんなかわいい童謡から

こぶしよこぶし 白い花

春の光がとんできて

むくげのからをそつとぬいだ

ぽっかり白い花だった

という少女向き、それから

来し方をただはるぼろと草枕

旅をし行けばやくもたつ

いつものくには ももの花咲く

という成人向みである。

この歌の特異なメロディーは、欧米のものと異様で、特に、メヒテルトさんの心を強くひいた。これを、程々  
にして、次にうつった。私の思いつきである。

「メヒテルさん歌をうたいませんか」

私は持って来た童話集を取り出して、頁をめくった。幼時奥谷生活をした間に、きつと歌って覚えて居られ



るにちがいないと思ったからである。果してこの計画はあたった。大変嬉しそうに話に乗って来られ、思い出の歌がさがしあてられた。

てんてんてんまり てんてんまり

てんてんてんまりの てがそれで

どこからどこまで とんでった

垣根をこえて 屋根こえて

おもてのとおりへとんでった とんでった

大成功だった。二人声を揃えてうたつて、喝采された。更に「牛若丸」と「青い目の人形」が思いだされた。私はここですかさず約束した。

「この歌三つ、私が紙に書いて、東京へもって行きますから、サヨナラパーティーで、一緒にうたいましょう」

これから、お二人を囲んで話が少しむずかしくなった。

「ヨーロッパの幼年教育で、アートをどれ位重視して取り入れてありますか」

藤原さんの質疑だったが、これはヨーロッパでも不十分で、若者教育のこれからの問題として首がかしげられた。吉村さんの哲学用語の質問もここではさまり、むずかしくなりすぎた。

「今日は、家庭的団欒の会で、こんなむずかしい話はしない約束でした」

「いや。これ位はいいですよ」とメヒテルトさんはおっしゃる。

然しこれは程々にしなければならぬ。この昴奮を名残にして散会したのは五時だった。

(三) 十月八日 大社参拝

へいづもの入口」出雲大社は、島大の竹原敏夫先生、島大の田総武光先生、それに錦織君栄さん、世話役の吉村一夫さん、先生とメヒテルトさんの主客をかぞえると、仲々大部隊だ。松江から自動車二台つらねて、昼頃大社着、私は日の出旅館へ先行し、神社内の案内を、都合よく運ぶように手配して待った。宿へつくと、すぐ静かな部屋で休憩する。小坪に面した、肘掛け椅子で先生は、小庭に見とれて居られる。静かなこの小庭は、秋の日射しを受けて、頭の芯まで鎮めてくれる。秋色をつけ初めた、もっこくの葉が、なんともいえずつややかだ。軒先には、海棠の実が面白く鈴実りをしている。先生の深い沈思にさそわれて、みんなも憩った。日本の憩いかもしれない。

やがて、大社の風味「出雲そば」が運ばれ、メヒテルトさんの「これこれ」というはなやいだ声につられて、みんな、すすり食いをした。先生もうまそうにして、懐かしがって居られる。

本当に大社の出雲そばは、うまい。

案内は、町役場観光課の水師重吉さんに、頼んでおいた。竹原先生の御親戚の方が神社に居られ、きいてみたら欄宜さんで、どうせ参拝すれば、お世話して貰わねばならん今西さんとのこと、私もよく来るので顔見知りの方だ。こういうわけで大社案内は、我々としては、最上の人揃いだった。

〈巫女舞〉 水師さんの先導で参道を通り、拝殿へ向かう。手を洗い、口をすすいで、拝殿の前の、大きな注連縄の下、賽銭箱の前の雑踏にまじり拝礼する。見ると、何処から来たのか、派手で怪奇な恰好をし、きつちりしたずぼん姿の娘さんが四、五人、まちまちな姿勢で、それでもみんな、拝んだ形だけはしている。メヒテルトさんと私は、顔を見合せて苦笑した。彼女等は、何か願いことを心に持っている。それを思つて拝んでいる。然し大して信じてもない。私は嘆かましいような、頼もしいような、どっちともつかないのだが、無関心でもない妙な気持ちだ。メヒテルトさんも、冷静に微笑んで居られるから、案外私と同じかもしれない。

「今巫女舞がはじまりますよ」

水師さんの耳打ちで、私はカルシユ先生の足止めをした。先生は熱心に拝殿を見て居られる。ドードーンドンドン ポコポコポコ……ピーピーヒョロロロ……かみおろしである。

大きな御幣が振られ、参列者の心が祓い清められて、それから巫女さんが、静かに立って、神前に進み拝礼する。白衣に緋の袴である。神前からいたいたものは、右手に榊、左手に鈴である。これを両手にかざして、足取りゆるやかに、お前を四角く巡回する。笛の音が、颯々として、満座の心を微妙に動かす。ジャラッ ジャラッ と巫女は、何歩目か毎に鈴を振る。

「神様が出て舞っているですよ」

巫女の白い袖口が、すっかり縫いつけてあって、手は全く出さず、袖布の下から、鈴と榊を握っている。その尖った袖先が、ピンと上向いているその恰好も、何か得態のしれぬ情緒に、我々の心を導いて行く。

「この舞は、大変古い古代からのものようです」

先生はフーンと、まじろぎもせず、これをみつめ、やがて舞が終り、どうと太鼓が激しく鳴って

「神様がもうお帰りになりました」と、私が言うまで凝然として居られた。

拝殿脇の庭で、可愛い鳩にたわむれ、つづいて、庁の舎へ案内された。ここに今西彌宜さんが居られたのである。日本の近代的建築が、一通り説明されて、古代出雲の壮大がここで、感を深くした。口をすすぎ、手を清め、白衣を着て、いよいよ神前へ参拝することになった。

〈玉串奉奠〉 今西さんの先導で、八足門へはいる。中で白衣正装の神主さんに、恭々しく、お祓いを受ける。つづいて参拝である。我々は、もつと近づいて、最後の門 棲門の入り口まで行って拝礼が、できるのである。

「玉串奉奠を代表の方にしていただきます」

カルシユ先生が進んで玉串を受けとられた。その手付きの不確かなのをみて、少し私は心配した。

「うまくできるだろうか」

みんな一列に並んで行くので、当然先生の直ぐ後に、メヒテルトさんと思  
ったが、若し間違つかれては困ると思って、私がぴったりと、先生のうしろ  
へついて行った。

棲門のすぐ前、大社がその偉容を、直接眼前に現わし、我々が感激する所  
で、先生は悠然と玉串を捧げ、くると枝をかえし、見事にこれがすんだ。  
私はほっとして、拝礼、拍手の順を少々リードした。実にうまくいった。正  
装し、笏をもって立って見守る神主さんも、先生のこの敬虔に、感じ入って  
いた。

神前を引きさがり、巫女さんの注ぐ、お神酒をいただき、しばらく大社の  
建築の話をきいて、八足門から退出した。

〈千古のたたずまい〉参拝を終えてでると、今度はまた、水師さんの案内だ  
時間もありないので、神社をひとめぐりして、いろいろな、神様の話がさ  
れた。

「大社の両側にたっている、一寸小さいお社は、摂社と申します。御覧の通  
り、三社ございますが、みんな、大国主様にお仕えしなされた、女神様、  
つまり我々の社会で申しますと、奥様であります」

「ハハアー……」とメヒテルトさんの声……。

「この両側に並んでいる、細長い建物は、神様のアパートでして」

「ええ、そうですね。きいて知っています。いづもは、十一月神在月で、全国から、神様が集るのでしょ  
う」と先生、

「御存じのようですね、これを、十九社と申しまして、毎年十一月になると、お祭りをするのです」  
水師さん……。



出雲大社の参拝

楽しく、和やかにこの一行は、大いお社をひとめぐりして、おみくじの紙が、無数にぶら下っている杉を脇目にみて、千家さんの庭へ行った。

「五百年もたつ松があるから、行ってみましょう」と水師さんの提案だ。

私は、先生が少し疲れ気味だと思って、あの庭で、腰が降せると考え、賛成した。

全く古いスタイルの庭だ。池があつて、その中の島に、古い古い松が、見事に栄えている。これが五百年か、と私は思うが、古いで否定もできない。伸ばし放題なら、三百年位で、大抵落雷か、暴風で寿命がつきるが、これは毎年剪定がしてあるらしく、実によく枝が張っている。すぐ後ろにある濃緑の山を背景にして、この見事で整然たる老松、人工の極致のような松だ。何だか大社を象徴してゐるような松だ。

「あの松の下、鶴はつくりものでしょう」

「ええ、そうです」

「あつ。亀は生きている。動いた」

鶴がつくり物だから、亀もそうだと思つたら、そうじゃない古代の遺物のような恰好の亀が、石の上でじつと甲羅をほしているのをみてみると、時に一寸首をまわす。足を一本一寸動かす。全く千古の風景に、呼吸を合わせる仕草だ。この庭で休んでいるうちに、我々もこの千古の呼吸にまきこまれそうだ。

先生はまた、《エービゲシュティレ》を思い出して居られるらしい。

〈神話の風景〉 奉納山の展望台にたつた。涯しない海と、弓なりの浜を見ているうちに、国曳きの話が思いだされた。「向うに見えます一寸高い山が、三瓶山であります。昔の名前を佐比売山といひまして、神様が、国をひっぱった綱の端を、つないだというのであります。その下に長くつらなってみえます、白い砂浜が、藻の長浜、即ち引つ張った綱です。今私共が立つて居りますこの杵築が、崎を引つ張り寄せたというのです」と水師さんの説明だ。

「そうです。八束水臣津沼命が、乙女の胸すきとらして、三つよりの綱打ちかけて、『国来、国来』と引き給うたというのでしょう」

と、私が風土記の一部をそらんじた。古代人が国曳きの物語をつくった、奇抜で膨大な空想力に感じ入った。つづいて、戦乱時荒んだ日本人の心を徳川時代の大平に引き込んだ、歌舞伎踊の先祖、出雲お国の記念塔へ案内し山を降りた。

序でだから、日の御崎まで行つてはどうかという意見と、強行軍は止めようという意見とその中間をとって、礫岩まで行つた。国ゆずりの談判の時、両方の式神、式御雷神と式御名方神が石投げ競技をここでなさり、その時投げ給うた石が「それその海中に点々と、白波をかんで、点在してる岩であります」と説明された。ここでも思ひは、古代人の荒唐な説話とそれを作り上げる、膨大な想像力が心ゆくまで味わわれた。何の為此の荒唐な説話か。先生の頭には深い思ひがひそんでいるらしい。

みんなは風景の壮大に心を洗われた。

〈コインシデンス〉 案内をすべて終り、後は日の出旅館のあの部屋で、ゆっくり、お別れのお話し合いでしようということになった。

この時に、とても楽しいものがでてきた。それは、この時まで錦織君栄さんが大事に抱えて来た風呂敷包みの中からだったのである。

「まあ、うれしい。おにぎり、私、これ大好き……」

「そうメヒテさんの大好物でしたね」

先生の家で、お手伝いしていたこの「きみえさん」は、幼時のメヒテルトさんのすみずみまでそらんじている。みんなもこの、時を得た御馳走の相伴にあずかった。成程、私達にも、この少々塩気があって、手のひらで握った、この塊りに、懐かしい幼児の思ひ出が香って、うまかった。

「やっぱり日本の味、おふくろの味だ」

先生もいよいよ別れるとなると、何か私達に言い残したい様子だ。私達も喜んで先生の言葉にきき入り、メヒテルトさんの説明に耳を傾けた。

「人間と人間との間には、お互の思っていることを相手に通じ、これをわからせる為に、言葉がある。所がその言葉が二人の間に交されて、その二人が、一つの言葉で同意しても、考えていることが必ずしも一致していないことがしばしばある。これが世の混乱のもとである。私は、この人間同士の思い違いを一致（コインシデンス）させることに努力したい」

「父は、それで以って、ヨーロッパの歴史を見て本を書きます」と、メヒテルトさん。

私は先生が万寿寺で、『エイヴィゲシュティレ』と言ってなつかしまれたこと、大社で、神というものに接して、感にふけられたこと、等を考え合せ、これは、古代人が悩んだ、お互い同志の不一致を、この境地にひたらせることによって、コインシデンス（一致）に導く努力をした、日本の昔の人の知恵を思っておられたのではなからうかと考えてみた。

このことは、私と先生との間の、言葉の不便で、深く話ができず、何れ出でるだろう先生の御本を拝見したいと思っている。帰途は、自動車を空車で帰し、北岸の電車にのった。

昭和四十三年十一月二十日記 「田舎の大学から」 酒井勝郎著より

## 十二・八 報道 各地での歓迎

カルシユ博士は松江市西川津町の思い出深い旧制松江高校講堂（現島根大学講堂）で「回顧と展望」と題した講演をメヒテルトの通訳によって約三十分行った。この後に同窓会全国総会が開かれた。講演のあと記念写真撮影と乾杯、メヒテルトさんも「野バラ」を独唱した。なお、校章を染め抜いたはちまきを締めて当時の学生歌「青春の歌」を合唱した。博士は講演に先立ってこの日午前中松江赤十字病院を見学、また午後一時過ぎに、博士訪日の実現に奔走しながら、その実現を前に不慮の事故で亡くなった十三期卒業生で同窓会理事で県立図書館次長であった田村清三郎の墓参をした。メヒテルトさんとともに花束を供え彼の冥福を祈った。なお、現在は事務室であるかつての教官室や昔の姿をとどめる本館や中庭を散歩した。

この様子は、NHKのインタビュー放送で採り上げられ、新聞でも詳しく報道されている。次は小倉の料亭でのひとときである。左写真はメヒテルの隣に座している江上正孝による。



旧制松江同窓会での会食



旧制松江同窓会での会食



旧制松江同窓会での会食

《老博士はるばるドイツから 教え子三千うれしい招待 全国巡り長崎に》

(前略) カルシュ博士はゆかりの地松江を振出しに京都・大阪など関西、中国、北九州と回り、十四日の夜長崎市についた。現在市内には医師の道祖尾久太郎<sup>3</sup>さんから十名余りの教え子があり、十五日には全員そろって市内の料亭で歓談、思出話に花が咲いた。終戦直後の混乱期に日本を去ったカルシュ博士にとって、現在の日本は見違えるばかりに復興、見るもの一つ一つが目を見張るように素晴らしいという。

道祖尾 (さいのお) 久太郎 (鳥取出身) 六期理乙 長崎医科大卒 耳鼻咽喉科開業医 医博 昭和五十九年逝去



しかし世界ではじめて原爆の洗礼を受けた広島と長崎の感想を「現在でもいたまじい傷あとが残っているものと思っていました、そのような影はみじんも感じられません。本当に日本の復興力はすばらしい。だが今でも原爆による後遺症で、ベッドに横たわったまま不幸な毎日を送っている国民がたくさんいると聞いて心を痛めてます」と話していた。



長崎新聞社より提供

### 第十三章 再会後の同窓会との交流

一九七〇年酒井勝郎がヘルシンキの長男夫妻を訪ねた折に、年金生活のカルシュ先生を訪ねている。このときの旅の印象を語っている。

#### 十三・一 カッセルを訪ねて

カルシュ先生を訪ねたのは昭和四十五年六月二十七日でした。フランクフルトのホテルに泊まっていたので、朝早く列車で行ったのです。

「ようこそサカイさん」

と大きい身体のカルシュ先生が、カッセル駅のホームに出て、車室から出て降りた私の手を握って下さった時、私は嬉しくて、握手のまま、深々と日本式のお辞儀をしまいました。

先生のお住居はこの町にある老人ホームでした。先ずそこへ寄って奥様を交えて松江の話をしました。先生方は三十年前の松江の思い出、それに私が今の松江の話をつなぐというわけで、話せば尽きないものです。奥さんは番茶をいれて、話しの途中何杯も注いで下さる松江流のもてなしでした。

今日先生は、まず駅に私を出迎え、平素あまり使い慣れない日本語をできるだけ無理して使って居られるらしい。話をしていううちに、熱意がたかまって私の胸にひびいた。日本ではどう口で伝えようとしても伝えきれなかった、ヨーロッパの神髄を、この若かりし頃の弟子が、今この土地に來たのをいい潮に、教え込もうという気持ちだ。私の心は無性に弾んだ。まず、奥さんといっしょに番茶を飲みながら、松江の思い出話を楽しみ、昼はカッセル名物の魚料理を御馳走になる。それから先生のリードがはじめられた。早速博物館に行く。

ここでドイツの歴史、ヨーロッパの歴史、古代史等ひと通り見て、次にルネッサンス当時の画家レンブラントの絵を沢山見た。ここにレンブラントの絵の多いことは、その出生地アムステルダム博物館のそれをしの

ぐのだそうで、それはこの画家を特別に遇した土地の領主の縁故によることだ。絵を一つ一つ見て、そしてそれに懇切な説明があった。それからこれに関して、この画家を理解して支持した領主、その領地の住民、これがライン中流東岸の広大な地域の、農民の気風とつながるという、スケールの大きい文化の話になった。生硬なドイツ魂が、じつくりと強く、先生の口から私の胸にひびく。夕刻カッセル駅でお別れするまで、つききりでお話ししてくださった。

異国で、こんな幸せな思いの日が過ごせたとは……、まるで夢のようだった。ヨーロッパ大陸へ足を踏み入れた最初の日に、カッセルでカルシュ先生にこうしてヨーロッパ入門の手ほどきをしていただいたことは、とても意義あることだった。

初旅のヨーロッパ三週間 酒井勝郎著より

### 十三・二 メヒテルト女史の日本再訪問

一九八九年九月、カルシュの教え子や知人との旧交を温めることを目的にした、日本訪問の希望の手紙がメヒテルトから木村登（十二期文乙）に届いた。東京（十五～二十日）、松江（二十～二十六日）、京都（二十六～二十七日）、大阪（二十七日～三十日）がその日程であった。以下、翠松四十・四十一号の竹原敏夫（十九期理甲一）、田島康弘（十四期理甲）奥野良臣（十四期理乙）らの記事をもとに、その様子を記述する。

彼女が日本を再び訪ねたいという内容の手紙のコピーが木村から届き、松江での世話を依頼された。前回世話をされた方は高齢のため、今回は田島と竹原が奥野らとともに受け入れの準備を始めた。彼女は東京と松江を訪ね、その後、松原教授に会い、京都も見物したいとの希望であった。京都での接待に野村隆一（二



カッセルの老人ホーム 矢印がカルシュ夫妻の住居（江上提供）

十二文一)が推薦された。二月初め計画が具体化すると、田島は大阪の奥野にも協力を求め、各地の世話役と密接な連絡をとり綿密周到なプランを立てた。

三月十五日夕刻成田到着以来十六日間のメヒテルトの日本滞在中、各地で有志による心温まる歓迎の座敷や立食パーティが催された。「翠松」三十八号の予告記事を見て遠隔地から何人もの照会があり、東京または松江に来て歓迎会に参加した。彼女は淞高関係者以外にも多数の人々に面会した。カルシュの教え子や知人との旧交を温めることを第一義とした来日の目的を果たし、三十日夕刻成田から無事帰国した。

なお、帰国後、『ふるさと』再訪の回想録を「翠松」のために寄稿を受けた。カルシュの略歴から説き起こし、各地で彼女の心の琴線にふれた思い出のハイライトを簡にして要を得た文章で表現してくれた。

東京(十五、二十日) 来日後の東京での歓迎会は十七日学士会館で開かれ、八人が出席した。この会の幹事を田島康弘と酒井勝郎(五期理乙)がとともに務めた。荻原憲三(五期文乙)、酒井勝郎、渡辺駿(六期理乙)、木村登、田島康弘、中村啓成(十七期文乙)、稲生肇(十七期理甲一)長曾一彦(二十二期文乙)など出席者には文乙理乙の人が多く、会話にドイツ語を混え、和気藹々の中に話がはずんだ。

メヒテルトは、十七日から三日間、酒井宅に宿泊し旅の疲れを癒した。東京滞在中は、暉峻凌三(十四期文乙)の病氣見舞、愛知県半田市からかけつけた稲生の家族や私共家族との親交、かつてメヒテルト宅にホームステイした通産省勤務の荒井との二十年ぶりの再会、奥谷町の隣家に住んでいた赤川姉妹との再会、西独でカルシュ博士に世話になったという宇都宮在住の橋本等、多くの知人にも面会した。そして、二十日羽田空港から出雲空港へ、生まれ故郷の松江へとメヒテルトは飛び立った。

松江(二十、二十六日) 二十日午後に出雲空港到着、田総武光(八文甲)と竹原のほか昔のお手伝いの四人も出迎えがあり、懐かしい故郷松江の湖畔「ホテル宍道湖」に着いた。二十二日夕方、皆美館の湖を見下ろす二階の座敷で歓迎会を開いた。開会前に控室で新聞二社の取材があり、市民も彼女の来松を知ることができた。

松江での歓迎会については、古い教え子の一人である同窓会副会長の鈴木繁徳(五理乙)に相談して協力

を得た。歓迎会の挨拶で同氏は自分の娘の里帰りを迎えるように愛情をこめて呼びかけ、「メヒテさん、何十年も前に松江を去られた恩師の娘さんが、外国からはるばる訪ねて来て、各地で教え子が多数集って歓迎するなんて、滅多にないことだ」とねぎらい、乾杯の音頭に応えて彼女も「Zum Wohl」と杯を挙げ、春宵の一刻、歓談は尽きることなかった。

出席者は、鈴木繁徳夫妻、増田義哉（六期理乙、福岡市から参加）、田総武光（鳥取市から参加）、富田幸美（八期理乙）、庄司保親（十文甲）、高橋定（十文乙）、石倉愷（十三期理乙）、山口清（十四期理甲二）、西上一義（二十六期理三）、石倉浩人（島根医大）、中村フデ子（彼女の日本語家庭教師）、錦織君栄（乳児の頃の保母、彼女の「日本の母」）、中村トキエ（住込のメイド）の各氏と竹原夫婦の十六名。錦織と中村は「再びお会いできたのは夢のようです。先生は心温かい方でした」と目をうるませていた。同夜は皆美館に一泊、翌朝も晴上り、美しい松江での旧知による歓迎会では、庭から穏やかな宍道湖の風景を満喫した。

二十四日午後、小雨の中を境港市の庄司邸での茶の湯に招待され、鈴木夫妻らとも同伴して重要文化財の茶室で若夫人の点前により抹茶の接待を受けた。同日夕方、彼女の一番古い友達、東史が都城市から到着、会食した。翌日は冬に逆戻りしたような寒さであったが、ふたりで昔一緒に遊んだ奥谷の官舎の近くの神社や寺院と近隣に今も住んでいる幼なじみ数人の家を訪ねた。午後はふたりを足立美術館に誘い、日本画と庭園美を鑑賞した。二十六日朝は、松江駅で十数名の見送りの人となごりを惜しみ、岡山を経て京都へ向った。竹原は岡山まで同行し、彼女の新幹線乗車を確認して別れた。

大阪（二十七〜三十日）メヒテルトは京都の宿泊先のタワーホテルからタクシーの車窓を通して。満開の桜花を見ては日本の春を確認した。少々休憩をとってから、奥野と加納とともに三人で、万博公園と日本庭園等をゆっくり散策した。翌日は、雨の中を三人で歓迎会場たる大阪倶楽部に到着した。夕方の歓迎パーティーでは、奥野が最初に、田島の努力に始まる本会開催迄の経緯を話し、カルシュを偲び、メヒテルトへの歓迎の辞と記念品の贈呈を行った。日独両語の入り交じる涙ながらの謝辞が述べられた。次いで最年長である

ニ  
伏見（中条 礼次郎（香川出身）五期文乙 京大法学部卒 弁護士



東京学士会館での旧知による歓迎会



松江での旧知による歓迎会

伏見礼次郎（五期文乙の）の音頭で乾杯した。和洋とり混ぜた料理と、カルシユの思い出から、四方山話に会話がはずんだ。司会でもあった岡崎道夫（九期文乙）が先生から教わったというドイツの軍歌を原語で歌って、和やかな座は一層盛り上がった。他にも、メヒテルトの幼時の写真、それが貼られた思い出のアルバム、宍道湖の落日を撮った芸術写真、さらには個人的なお土産品の持参が続いた。やがて散会し、メヒテルトは満悦の様子で奥野の家に戻った。翌日ミネアポリス市と姉妹都市の茨木市の重富市長からは記念品が贈られた。

三十日には新大阪から白石・奥野らの見送りを受け、新幹線で東京へ戻り、田島夫妻らが成田空港まで同行した。一九六八年にカルシウムとともに来日して以来二十二年ぶりの再来日であった。彼女は崧高関係者以外の人々にも多数会うことができた。来日の目的を父フリッツの教え子や知人との旧交を温めることを第一義としたので、観光にあてる時間は少なかったが、期待以上の目的を達し、忘れ難い彼女の心の琴線にふれた思い出の数々を胸に、また日本につきぬ名残りを惜しみつつ、この日の午後六時五十分発のデルタ航空で帰米の途についた。



1990年3月29日 来日歓迎会  
白石とともに 3月30日大阪駅にて



新大阪駅での白石、奥野らの見送り

メヒテルトから送られてきた名簿に載っていた旧生徒で、このとき参加した溝上三郎<sup>ニ</sup>に手紙を差し上げてみ

溝上三郎（奈良） 阪大医（七期理乙昭和五年卒） 一九九九年三月逝去

た。返事にはすでに彼が他界したこと、仏壇への報告の旨とともに数枚の写真を併せて同夫人が提供してく  
れた。



大阪での歓迎会 岡崎、宮田らが見える



大阪での歓迎会 溝上三郎より提供



### 十三・三 カルシユ先生と田島君

カルシユ先生は、文科、理科を問わず乙類の生徒を長年教えられたので、忘れ難い思い出を持ってもらえる方が多いことと思う。また湊校以外にも印象深かったと見え、例えば私の専門分野の雑誌「日本医事新報」にも先生のことが他校出身者により掲載されたことがあって、先生の影響力が偲ばれるのである。

畏友 田島康弘<sup>32</sup>君は理甲出身であるので、カルシユ先生に教わっていないと思うが、私が何故このお二人を並べて書きたくなったか、そこが世の中は不思議というか、楽しい所なのである。

高校入学と同時に入寮すると、田島君と私は入口が同じ隣り合う部屋であったので、顔を合わせるが多かった。彼は逞しい大男であったので相撲部かと思いきや野球部とのことであった。

私は貧弱な体であるが、並外れの野球狂であったので、話がはずみ、いつの間にか非常に親しくなり、下宿の引越しには手伝いならぬお邪魔に行ったりの仲であった。また大学では工学部と医学部のちがいはあっても共に阪大であり、卒業後今日まで変らぬお付き合いをさせてもらっている。

田島君が石油精製業界で活躍し、社長であった時、招かれて見学させてもらったが、整理整頓の田島式管理が隅々まで徹底していた指導力に流石と感服したことがあった。

なお、彼の実家が、吉野杉の集散地である新宮市にて木材会社を経営しておられた。共に阪大生であった時代、私の下宿へも時々見えて、私が基に夢中であることを知って、態々彼のお父さんの方から立派な樞の五寸碁盤の寄贈を受けた。身分不相応な贈り物に感激して裏面に「贈奥野良臣君、田島康弘」と揮毫してもらい、今も多用しながら末代までのわが家の宝となっている。

高校を出て五十年を過ぎた今、戦後来日されたカルシユ先生の娘さんと、田島君の娘さんが、奇しくも広大なアメリカの同地に住み、大変親交を深めておられると聞いている。湊校が取りもつ縁とは云え、不思議という他はない。カルシユ先生と田島君を併記した理由はここにある。この辺の事情は是非田島君から披露

<sup>32</sup> 田島康弘（和歌山出身）十四期理甲二昭和十二年卒後、阪大工 応化卒 キグナス石油精製（株）元社長

して頂きたいと思う。

カルシュ先生と田島君 奥野良臣（十四期理乙）より

### 十三・四 メヒテルトさんを訪ねて

「翠松」二十九号に掲載された十二期文乙の木村登さんの手記でカルシュ先生の長女メヒテルト・セイント・ゴア夫人がテネシー州チャタヌーガ市に住んで居られることを知り同氏の紹介でメヒテルトさんと文通が始まりました。

同市には私の娘婿の会社が進出して居り娘達の家から車で二十分の所に住んで居られるメヒテルトさんに日常生活のことや孫達の教育のことで大変お世話になって居ります。たまたま昭和六十三年八月二十八日から十月三日まで同市を訪れる機会を得ました。同市はテネシー川とチカマウガ湖の沿った人口十七万、松江を思い出させる美しい水の都です。

滞在中メヒテルトさんに四回お目にかかりましたが、最初御自宅をお訪ねした時各部屋を流暢な日本語で案内して下さり、日本の掛軸、タンス、人形、ひな人形、羽子板、精密な民家の模型、数々の民芸品、「ヤマハ」のグラランドピアノ等日本色に溢れて居ました。話題は五十数年前に遡り、湊校の諸先生、数多くのカルシュ先生の教え子、幼な友達、お手伝いさん達の思出話、住んで居た奥谷の近くの神社やお寺の名前もはっきり記憶されて居りまた、カルシュ先生と共に千鳥城や枕木山に登った話等も事細かに話されました。

二回目にお伺いした時カルシュ先生の画かれた安道湖、嫁ヶ島、袖師ヶ浦、大山、山陰の農村風景などの画集を拝見して先生のすばらしい画才の持ち主であられたことに驚きました。メヒテルトさんも西独に住んで居られる妹さんと画を折半しお互いに欠けた画はコピーして一冊の画集とし親の形見として永く保存すると話して居られました。私もコピーを戴きましたが『嵩のふもとに』に掲載して戴ければ幸と考えております。

メヒテルトさんはチャタヌーガの町に日本の会社が進出し、日本人と日本語で日本のことをお話されることを大変喜んで居られ、今後もこの町に来られる日本人もまた色々お世話になることでしょう。十月二日お別れの電話を戴き、帰国すれば松江高校縁りの人々に御健在をお伝えすることを約して、三十七日間滞在の楽

しい思い出を胸に秘め十月四日無事帰国しました。

田島康弘(十四期理甲二)

### 十三・五 カルシュ先生の思い出

カルシュ先生の思い出は四十年にも前に遡る。従って私の記憶が鮮明な部分のみに限られることを予めご了承ください。それは一九六一年三月の初旬、私は初めて西ドイツ、マールブルク (Marburg/Lahn) のカルシュ先生をお訪ねした。美しい中世のお伽噺にでてくるような町ローテンブルグ (Rothenburg ob der Tauber) のゲーティンズチュートで二ヶ月の語学研修を終えてマールブルク大学に到着して間もない頃であった。フンボルト給費生として衛生学教室で早速研究をはじめた私は恩師奥野良臣先生から先生の旧制松江高等学校時代のドイツ語の先生であられたカルシュ先生を是非お訪ねするように云われていたので早速お手紙お差し上げ参上した次第であった。

カルシュ先生のお宅はマールブルクの城に近く木立の多い閑静な住宅地の中にあった。どつしりとした煉瓦造りの家で隠者の閑居を思わせる雰囲気であった。先生は堂々たる偉丈夫だが、見るからに柔和な温厚篤実な方であられ、また、奥様も穏和な優しい方で私の緊張した気持ちをはたどころに氷解した。たどたどしい私のドイツ語に合わせ、分かり易くゆつくりと色々なこと話してくだされた。遠い異郷から遙々勉強にきた学徒を慰める言葉とともに、その異郷の、とくに松江高校教授時代は先生にとっては格別の懐旧の情をもっておられることがしみじみと感じられたのであった。先生は松江の静かなたたずまいや人々の純朴な心をこよなく愛しておられたのであった。古い家具に囲まれた客間の書架から何冊かのスケッチブックを持ってこられ現代の日本では見ることのできない美しい日本の風景画の数々や、また、松江の町の人々の日常的な暮らしの様子を数多くスケッチされておられ、その美しさ、優しさは他の追従を許すことのできない素晴らしいものであった。あのスケッチブックは誰方のもとにあるのだろうか、もう一度カルシュ先生と目にお目にかかりたいものである。

美しい松江でカルシュ先生とともに多感な旧制高校時代を過ごされた松高卒業生の方は幸せである。総じて旧制高校卒業生は現在では大部分の方々は七十歳を遙かに越えておられ物理的に遠からずこの世から姿を

消されることになるだろう。私は旧制高校とドイツおよびドイツ語との関係は極めて重要であり、此処に其の一端を記述して置くことは無駄では無いような気がするものである。

さて、カルシュ先生や奥様と色々な楽しいお話をさせていただき、夕食は市内のレストランでご馳走になった。食後の散歩は商店街を所謂 Window-shopping しながら先生のお話は続いたが、カメラや電機製品店ではその当時から日本製品がたくさん並べられており、先生は我がことのように立ち止まって褒めて下されたのであった。その後、時々お邪魔したが、家内がドイツに來たので二人でお伺いした折り、奥様が日本の古い羽織を着てお接待して下され、庭の珍しい草花などを一々丁寧に説明下されたので家内は大変な感激であった。私達はそれから城の桎の見晴らしのよいレストランでご馳走になったが、ドイツでは五月は最も美しい季節で所謂バラの月 (Rosenmonat) であるので、素晴らしい時を過ごすことができた。

ドイツは大戦後荒廃した街は殆ど戦前と同じように再生され、マールブルグもハイデルベルクと共にドイツの二つの美しい大学町として殆ど戦前のたたずまいを取り戻したと云われている。ドイツ史を繙くまでもなく、古くから多くの神学者や哲学者を輩出しており、グリム兄弟もこの大学で学んだ。私の教室も嘗てベーリング先生がベルリン大学に移られるまで主宰された。カルシュ先生は学生時代マールブルクと隣の町のカッセルの大学で過ごされたと同っている。

郊外に出るとグリム童話を思わす情景がたくさん残っている。当時ヤコブ・フィッシャー先生がおられ、カルシュ先生とも面識がおりのようなのであった。戦後ドイツに帰られ、在日中は日本美術の愛好家、収集家であられたのでドイツでは日本博物館を經營されておられ、私も滞独中お尋ねしたが、經營が苦しいので、日本の企業に出陳を協力してくれと頼まれ、帰国後、同窓会等に打診したが、色好い結果は得られなかった。尤もフィッシャー先生はカルシュ先生と対照的な性格であったせいもあるが……。しかし、ご両人共々熱烈な日本の愛好家であられたことは銘記されるべきである。

平成十三年一月 加納晴三郎による

## 第十四章 カルシュ先生の追悼

私共の恩師、フリッツ・カルシュ先生は、昭和四十六年十一月十八日、故国西ドイツでご逝去になったことは本誌前号でお知らせした通りです。今から思えば、故田村清三郎<sup>2)</sup>の尽力で、私達教え子が先生を日本に御迎えして、旧恩を謝す機会を持つことが出来たことは、本当に良かったですと思います。以下は、浜高同窓会大阪支部名にて、五期文乙、伏見礼次郎と六期文乙、奥 貴雄の御二人が協力してドイツ語に翻訳の上、カルシュ先生未亡人宛に発信した弔慰文の日本文原稿であります。

カルシュ先生奥様へ！

私達がご主人様の御病氣のことを拝承致しましたとき、それは私達には大変な驚きでございました。それと申しますのも、私達は三年前先生を、日本にお迎えしました際のお元気な姿を、思い浮かべるからでございます。旧制浜高のむかしの生徒達は、何れも先生のご病氣が、何とかできるだけ速やかに御回復することを心からお祈り致してまいりました。この私達の熱望にも拘わらず、この度悲しい御便りを承り、何物にも代えがたいものを失った思いで残念でございます。

私達が先生をドイツ語の教官として御迎えした当時のことを想起致します。それはもはや四十六年も以前のことです。爾来先生は、十四年にわたり、私達の敬愛する先生として、松江にお住まい下さいました。この間先生は数多くの若い生徒達のために、単にドイツ語、独文学



亡くなる直前のカルシュ 妻エンメラとともに 1970 年 10 月

<sup>2)</sup> 田村清三郎（島根出身）十三期文乙 島根県立図書館次長 山口県への出張中事故に遭遇し急逝

の講義をせられただけでなく、精神的な教養の領域についても学ぶべき多くのお話もして下さいました。先生の偉大なる御学識と、人間的な温かさというものが、生徒達には大へん有益な影響を与えたのでございます。先生の御努力と、御熱心なる御薫育の御かげで、私達は松江において、若き時代を極めて有意義に送ることができたのでございます。

先生がドイツの御郷里へお帰りになられた後までも、次々と生徒がドイツを訪れたその折りにも、先生には何かとお世話様に預かりました。さればこそ日本に居る昔の生徒達も、先生を日本へお招きしたいとの願望を抱いたのであります。幸いにも先生は私達の願いを御容れ下さいまして、一九六九年秋、先生の日本訪問旅行は実現いたしました。その時、先生は、日本中を旅行せられましたが、沢山の昔の生徒たちは、あなたの御令嬢を伴われた先生を、心から歓迎しました。先生のこのご旅行の中でも松江訪問は、何とも言えぬすばらしいものでございました。

また旧制淞高大阪支部の私達は、先生を当地大阪でお迎え致しました。多分あなたは大阪における集りの写真を御覧下されたことと拝察致します。勿論その晩大阪市及近隣の地域から集った生徒達は、既に以前より年は取っておりますが、それでもその夕べは心から楽しく過し、松江における若きよき日の思い出に耽つたのでございます。それは洵にすばらしい夕べでした。私達は今まで一度も味ったことのない夕べであり、また私達の間においてのみ、体験することのできた夕べでございます。私達は尚今でも私達の先生の親しみのこもったおだやかなお顔が、目の前に浮かんでまいりまして、その嬉しそうなお姿を忘れることができません。私達の親愛なる先生に対する懐旧の念は永久に生き生きと残るであります。

神は、はや私達の尊敬する先生を地上から召されました。先生がやすらかにお眠り下さいますことを祈り申し上げます。茲に私達の心からなる御悔みの言葉を捧げさせていただきます。日本の習慣に従い、御花代として些少のものをお送り申し上げます。

(一九七二年二月五日)



カルシュ夫妻と生後一週間で亡くなった長男  
ゴットフリートの眠るマールブルクの墓

## 第十五章 日本の文化への影響

### 十五・一 学問を通して

カルシュの生涯にわたる意図は有史以来人の思考がすなわち哲学どのように変化してきたのかを示すことであり、実践を通して自らの思想を愛情とともに実生活に実現することであった。彼が人智学からシュタイナーの哲学に入り、人智学・神智学における精神深化の方法との関係から、日本の宗教哲学に入って行ったと思われる。本邦の宗教哲学者の鈴木大拙や哲学者西田幾多郎との親交は在日中も、帰国後も確認されている。また、彼自身に高野山で禅の修行の経験がある。彼は自らの学問や内的修練を通して、シュタイナーが教えた新しい思考への到達努力をした。これらの事柄は彼の残した仕事の中に見い出せるものと確信できる。

彼は松江高等学校の授業の中で人智学という生徒にとって、当時全く新しい哲学の分野とルドルフ・シュタイナー(Rudolf Steiner)の哲学的洞察法を生徒に自然な形で伝えた。人が知ることのできる肉体的なものから、ひとの知識とは異なるが、接近可能な形而上学的な人の信念に大胆に入り込むことによって、見いだしたものが彼の哲学であり、これを自然に受け継いだ彼の門下には多方面にわたって優れた人間味あふれた人材が揃っている。

彼の授業の中にはヨーペンハウエル、カントなどその名がしきりに登場したとのことだ。彼は行動的人智学者であり、シュタイナーの「精神科学」を世に広める者であった。学生にも真剣に対応して人智学に関するいくつかの基礎的概念を教えたのもその表れであった、彼らの考えを基に築いた学校と教育方法が評価され、日本に限らず、世界中で実践されているのを見れば、何もなかった当時の日本国内で、若者に伝え広めることに地道な努力したことはひとえに彼の功績であろう。現にこの教育方法を採用したドイツの自由ヴァルドルフ学校で次女が教育に専念し、日本では「シュタイナー学校」として普及しつつある。なお、彼が自分の師ハルトマンの著書を同僚の高橋敬視教授に紹介したこと。その翻訳協力を通じて、高橋は自らの哲学に大きな影響を受け、最終的に「ニコライハルトマンの哲学 高橋敬視 光の書房 一九四九」としてまとめ、戦後に他の著書と共に第九章のような形で出版したことも間接的な彼の功績である。

十五・二 ヨーロッパの窓口として

当時は、異人さんと言われるほど外国人が珍しかった時代に、十八歳前後の多感な生徒を自らの家庭に招き、ヨーロッパの生活を紹介し、またドイツからの訪問者を積極的に生徒に会わせ、稚拙ながらもドイツ語で議論をさせたり、また、妥協のない彼らの姿やそこから生まれる新たな認識を自然な形で生徒達に浸透させたことだ。

現在でも、なかなかできないことを当時の生徒に身をもって教えたことが、後に専門教育を受けて自分の将来を直接的に決定する基礎となった大学にはるかに優先した思い出であることをほとんどの旧生徒が一致して語っている。このことは編者にとっても印象深いものがある。そして、旧制高校時代の学友、先生はもちろんのことであるが、それにも増して外国人のカルシュをかくも絶えず思い出し、とくに彼の最初の授業を鮮明に覚えているのはなんと評価して良いのか分らない。しかも当時、新しい思想であったマルクス、エンゲルスなどを生徒に易しく解説したことを伝え聞いている。こうした授業の中から学問に対する自然な興味が養われ、生徒自らの学問の方法と生き方の哲学が生まれたのであろう。このことは旧制松江高校の出身者である実業界での多くの成功者を見れば容易に理解できよう。また、赤澤が理想を掲げて堂々と論を張り、当時の政治家と渡り合い、後に自ら政治家になったこと、放射線医学者の永井、免疫学者の奥野、国文学者の宮田など優れた人物をも輩出したことは、カルシュが日本の伝統を尊重しながら生徒にヨーロッパの精神を伝え、合理的な生活と思考を彼らに根付かせた証拠であらう。

これとは逆に、日本人の心を理解して日本的なもの、日本の生活様式、日本の宗教を自らの精神生活に取り入れたこと、日常的に注いだ生徒への愛情については、生徒の今に続く思慕が直接間接の証拠であり、その日本的な精神は連綿として自らの二人の娘にも受け継がれている。

編者に彼らがカルシュを語るときに、涙して語るのはなぜなのか。単なる懐古趣味からではないはずである。おそらく、今忘れられている教育の本質をカルシュの言動のなかに感じるからであらうし、それを現実に体験してきた重みがあるからなのであろう。



## 第十六章 高校生の頃

澤田弘夫は富山出身で六期理乙を昭和四年に卒業し、その後金沢医科大学（現金沢大学医学部）に進学した。本書に卒業アルバムや資料を提供してくれた。この頃の思い出や社会の様子が描かれている。同期の生徒には鹿兒島出身で後に九州帝大医学部に進学した増田義哉<sup>34</sup>がいる。

### 十六・一 高校時代の思い出

#### （一）高校受験から憧れの白線帽を冠るまで

明治も終りに近い頃に、北陸の城下町金沢で生を享け、そこで小学校も中学校も卒えた私が不思議な縁で、気候風土も似かよった山陰の城下町松江で、二十才前後の多感な青春時代を過ごしたことを、今省みて沁み沁みと懐かしく想い出している次第です。

大正十四年三月金沢二中を卒業と同時に、受験した四高の入試に思いがけなくも失敗し、悶々の日々を送っていたところ、文部省から翌大正十五年の高校入試は、全国の官立（国立）二十五高校を二班に分けて、引続き二回受験の機会を与えることに決定したと発表され、全国の高校入学志願者を喜ばせたのです。

即ち第一班は一高、五高、七高、新潟、水戸、山形、松江、大阪、東京、浦和、静岡、姫路、広島、十三高校、第二班は二高、三高、四高、六高、八高、松本、山口、松山、佐賀、弘前、福岡、高知の十二高校とし、受験生は各班から一高校を選び、志望順位を決めて、受験する高校へ入学願書を提出する仕組みになっていたのです。

私は第一志望校を四高とし、松江高校を第二志望校として四高で受験し、両高とも第一志望を理乙、第二志

<sup>34</sup> 増田(安中)義哉(鹿兒島) 六期理乙 九大八年卒 医学博士 眼科学 久留米大、福岡大学教授歴任

望を理甲としたのですが、松江高校の理乙に入学を許可された。この時は三月十日から四日間（第一日は国語、漢文及作文、第二日は世界地理、日本史、物理及び博物通論、第三日は数学、第四日は英語）が一班の入試（各高校同一問題）一日休み、更に四日間同一科目で二班の試験（同一問題）を受け、四月上旬に合格者発表であった。

然しこの方法での入試制度は、各高校の事務係が東京に集まって、合格者確定の打合わせを行わねばならぬ繁雑さに加えて、補欠入学者を決定する際にも、甚しく手間を要するために、この時と次の年即ち昭和二年の二回だけ試行されて廃止されたが、この制度は、全国官立高校合格点数のバラツキ是正と、浪人救済に役立ったことは確実である。

私が第二志望校として松江を選んだ理由が一つある。学んだ中学の国語担任の老先生が島根県出身で、松江中学在学中にラフカディオ・ハーン（小泉八雲）に英語を教わったと言われ、また先生は古くから栄えた出雲の国は名所、旧蹟に富み、宍道湖に望む水の都松江は、東洋のヴェニスとも称せられ、風光明媚な落着いた城下町であると賞讃されたことが、私の耳に強く残っていたからである。

さて私は松江高校に入学を許可されたものの、如何なる道順で、松江駅に到達すべきかと列車の時刻表をめぐり、同じ日本海側にある土地だから、北陸線、小浜線、山陰線の順に乗り継いで行こうと心に決めて、入学式の二日前の午後一時過ぎ金沢駅発の列車に乗り、夕方敦賀駅で小浜線に乗り換え、更に深夜綾部駅で山陰線に乗り換えて、翌午前六時過ぎに目的地の松江駅に到着し、約十七時間の長い旅を終えてホッとした。特急や新幹線を乗り継いで短時間で行ける現在とは雲泥の差であるが、時代の推移であるから致し方ない。

列車を降りて駅前に出た私には高校が何処に在るやも全く分らないので、先ず人力車に乗り、行先を高校までと云ったところ、松江大橋を渡り、市街地を通り抜けて田園地帯の真中にある高校前で車から降ろされた。私は意を決して校内に入り、事務室の方に合格通知書を見せて、新入生の者ですが入寮致し度いと話したところ、先ず入学手続きをとるようと言われ、それまでの落着き先として近くの民家を紹介された。その後自習寮の南一寮三号室に入ることになり、同クラスの安藤貢（岡山医大卒 戦死）と一年間起居を共にすることになった。同君は香川県の三豊中学を卒業後一浪して八高（第一志望校）で受験したとのことであつ

た。彼は特に理数系に強く、理科生でありながら、それらの科目に弱い私を三年間何とかと助けてくれたことを有難く思ったものである。

私等が入学した大正十五年の松江高校理乙合格者三十九名中で、島根県内からは、松江中学二人、浜田中学三人、大田中学一人の計六名が入学したに過ぎず、その他は東北の仙台一中、九州の鹿児島一中や全国各地から集まって来たので、クラスは大変賑かであった。

松江高校に入学する前には全く知らなかったが、当時の学校長は富山県出身の乗杉嘉寿で、ドイツ語の高畠喜市は石川県出身、法経独の加藤恂次郎は福井県出身で、何れも四高を経て東大を出た方々で、私は北陸地方御出身の先生方の居る高校へ入学出来たことを感謝し、今後三年間この風光明媚な落着いた土地で、勉学に励まねばならぬと固く心に誓うと共に、第二志望校に入学したと言う心の底にあった不満感も一気に吹き飛び、前途に明るい希望が湧いてきた。また石川県小松中学出身の徳田英義が同じクラスにいて、一緒に学べることに嬉しい思いであつたが、同君は高校卒業後体調を崩し、若くして病死されたのは残念であつた。

## (二) 高校入学から卒業までの回想

一年生の時の組担任は菟道日出男で、専門は動物であつたが、私等は英語を教えてもらった。音楽愛好の歯切れの良いモダンな方であつたが、病弱で昭和四年に惜しくも亡くなった。国語の水木真弓からは、百人一首の個々について懇切丁寧に詳細な解説があり、先生の授業時間に出席するのが楽しみであつた。植物の古海正福の講義は早口のために、級友一同はノートをとるのに、一方ならず苦労をした。

ドイツ語の会話を習ったカルシュは、顔面に絶えず人懐こい笑みをたたえて、時々書取りの試験をしたが、成績を発表する時は上位から順番に直接手渡すのが常で、誤記の数により例えば、「ツバイ、ゼーヤ、グート」と嬉しそうに、また「ツバンツヒ、ゼーヤ、シュレヒト」と態よく笑いながら、少しも嫌味も言わずに返すので教室の雰囲気も極めて和やかで、後味の悪い思いをしたことは一度もなかった。

其の年も終わりに近い頃に、年号が昭和と改められた。

二年生の時の組担任は神山信二数学教授でしたが、実に温和な方で、代数の授業時間には、何時も黒板の前で考えながら、正確に教えてくれた。二学期の物理の期末試験の問題が非常に難しく、担当の松原武夫教授からクラスの大半の者が五十点以下という余りにも粗末な成績で困っていたところ、敬虔なクリスチャンの先生は、厳かに口を開かれて、「真理の前に忠実に採点した」と言っていたが、クラス一同の懇願を容れて、一律に十点を加算したので、私は辛うじて及第点を得てホッとしたのが深く印象に残っている。

何年か前に、名古屋で開かれた同窓会の全国総会の席上で、何十年振りでお目にかかった先生に当時のことを話したところ、先生は未だ若葉マーク時代のことを明瞭に記憶の中に残しており、唯々苦笑していた。

二年生に進級した私等三十五名に前の残留組十二名を加えて、理二乙は四十七名の大世帯となったので、秋の学校創立記念日に、各クラスから出す催物に、誰れ言うことなく、播州赤穂浪士忠臣蔵四十七士を演じて、学内は勿論、一般開放で集まる市民達を喜ばせてやろうと衆議一決し、当日使用の衣装全部を、松江大橋詰めの劇場から借り受けることにした。記念日は幸にも快晴に恵まれたので出場者一同は互いに何とかメイクし合い、ひとかどの浪士姿となったが、家老の大石内蔵之助良雄役には、剣道部の名マネージャーで、猛者の堀賢朗（熊本医大卒）を最適任者として祭り上げ、其他は抽選で義士名が割り当てられ、出場者一同はキリツと鉢巻きをしめ、紋付羽織袴姿で、山鹿流の陣太鼓を勇壮に鳴らしながら進む堀君を先頭に立て、隊伍堂々と運動場の真中へ繰り出し、最後は西南役で西郷隆盛配下の薩摩兵士等が歌った《孤軍奮闘囀みを破つて帰る》を出場者全員で声高らかに歌いながら意気揚々と引き上げた時には、詰めかけた大勢の見物人達からは一斉に破れんばかりの大拍手、喝采がおこり、何時までも続いたので、クラス一同は大いに面目を施した。そして審査の結果、後日学校当局から格別に最優秀賞を頂戴した時には、皆で大喜びしたものです。

私は自分の性格とは正反対の不破数右衛門役となったが、その後テレビ等で忠臣蔵や赤穂浪士等の放映があり、同氏が出る時には一種の親近感を覚えるようになったことは申すまでもない。

私等はこの入賞を喜ぶ余りに、玉造温泉で盛大な打上げ懇親会を開催したところ、クラス全員が出席し、往復共皆で青春の歌「目もはるばると桃色の」を声高らかに歌いながら、隊を組んで歩いたことを想い起こす

度に、感激で胸が一杯になる。

三年生に進級した時には、正規の一クラスの人数となり、組担任は数学の曾我部忠四郎で、先生からは難しい微分、積分を習ったが、小柄な体で実に良くクラス一同の面倒を見てもらい感謝したものである。

乗杉嘉寿校長は東京音楽学校（現東京芸大）の校長として栄転し、代って四高教頭の河合義文（富山県出身）が後任の校長として来任したが、先生は四高では長年に亘り数学を担当し、その成績が特に悪ければ、他の科目がどんなに良く出来ても、文科、理科の別なく、数学一科目で容赦なく留年させられたそう、数学の不得意な生徒達からは甚しく恐れられていたので、先生の松江行きを、四高の生徒達はホッとして見送ったらしい。有機化学の実験の時間に、土肥秀穂教授から各自に渡される、夫々異った内容の可検物を分析して、出て来た結果を書いて、先生の手許へ提出する際に、隣席の篠田万亀太（東大医学部卒）が毎回真先に、先生のところへレポートを出して実験室を出て行く後姿を、実験の苦手な私は、羨しく眺めることが一再ならずありました。

その年昭和三年秋に、天皇御即位式典が京都御所で厳かに挙行されましたが、学校でも例年の如く、盛大な創立記念祭が催された。

私等理三乙は飾物として格別大きな地球儀の基になるものを何処かの竹細工に作らせ、その上に張った紙に、クラス全員が手分けをして、世界地図を色別に克明に書き込み、出来上がったものを、下から数ケの可愛いキューピー人形が持ち上げ支えているものを案出して、「御大典奉祝世界を挙げて」と題したものを、川津通りに面した校庭内に置き、その下を運動場内に入る見物人達が通り抜ける仕組にした。後日審査の結果、入賞したことが発表された時には、高校生活最後の良い思い出となったと、クラス一同で大喜びした。



記念祭ポスター



忠臣蔵出演記念 (澤田の提供)

尚私等が三年生の時に、同窓生や在校生の総てが待ち望んでいた校歌《嵩の麓に》、引き続き、同期文乙の馬屋原成男（東大法学部卒）作詞の寮歌《笛の音うるむ》が発表されて私等を喜ばせ、昼食後や放課後にクラス一同で合唱したものである。

### (三) まとめ

私等の高校在学中は良く学び、良く遊ぶことをモットーとして、互いに励まし合い、競い合いながら生涯に残る楽しい思い出を作ること努めた。

三年間を通じて世話になったドイツ語の高畠先生、原田先生、カルシュ先生や、当時は、新進気鋭の新谷先生（数学）松原先生（物理）柳井先生（動物）の教室での真摯な姿が高校卒業後七十数年を経た今日でも、眼前に彷彿として懐しく想い出される。

私等のクラス六期理乙三十九名中には、在学中に剣道部、野球部、陸上競技部やボート部で活躍した者も多数いたが、戦死者（二名）、戦病死者（一名）を含めて、大半の者が既に鬼籍に入り、現存者は七名を数えるのみとなり、誠に淋しい限りである。

私は昨秋の初めに体調を崩して、同窓会北陸支部長を辞するまでは、全国総会には殆ど毎年出席し、殊に三年間の青春時代を過ごさせて頂いた心の故郷松江へは、万障繰合せて、出掛けることを楽しみにしていた。そして急速に近代的に変貌した町並を驚異の眼をもって眺めながら、足の赴くままに、島根大学周に「宍道湖の夕映え」を想い起しながら波穏やかな湖を眺めたり、また近くの松高の庭まで足を延ばし、若き日に白湯や袖師ヶ浦から親しい友とボートを漕いで嫁ヶ島へ行ったこと等を想い浮べ、その場を去り難い

ことが一再ならずであった。

三春うたた夢の中に過ぎした松江を懐しく想うことしきりの今日この頃である。夢の多い魅力ある街である松江市の今後益々の発展を心から祈って止まない。

沢田弘夫（六期理乙）

## 十六・二 松江高校同盟休校

文科三年乙在学中の卒業前に、全校生徒が自習寮に一週間籠城という同盟休校を実施した。私はその首謀者の一人である。六日目であったと思う。自習室の医務室で、高島教頭と単独会見する運びとなった。貴君は同盟休校打ちきり反対の急先鋒の一人であるそうだがと、前置きして、強い反省を求めて、諄々と説き、直ちに全校生徒が登校するよう取りまとめられたいと懇望された。ドイツ語の主任教授であり、私はもてがよい方であったので、大いに面くらいなやんだが、先生の説論には応ぜず、つらい思いに沈んだ。

京大に入学して、西田哲学の伝統にあこがれ、純哲を専攻して、フィヒテ著スピノザに取り組んで沈潜していた矢先に、母校の在校生が同盟休校の挙に出た。その応援のために、来校せよとせ数本の電文が届いた。当時、母校の同盟休校支援のため馳せつける先輩の大学生は、ほとんど例外なく、車中で検挙されるのが常であった。私は思惟が乱れ、勉学の中断をおそれるばかりでなく、検挙さわぎにおじけもついて、応援をちゅうちょしていた。しかし、かつては同盟休校の首謀者の一人であったという責任感にさいなまされて、意を決して、途中、検挙されることもなく、やつとの思いで、母校の正門前の岸という商家の二階の一室の闘争本部におちついた。東大経済学部在学中の同級生山本勉君は、私の顔を見るなり、そくさに、引継ぎをおえて急ぎ東京へ引き上げた。自習寮にはところきらわず、ところせましく、《先輩の墮落漢》と朱書したアジビラが張りめぐらされていた。正門前の校舎の二階会議室で、在校生には一人も犠牲者を出さぬことを骨子として、妥結の労をとった。その席上、谷田生徒主事から、中西君は在校中は激情的な面が強かったが、京大生となって理性的な紳士になったとほめられて、面はゆいかなりであった。

松江を去るに当り、高島先生の官宅に招かれて、夫人の手によるウチワで涼風を送られながら、御馳走を

頂き、恐縮汗顔の至りであった。この真夏のひとときの刻印は忘れがたく、いまでも念頭を去らぬ思い出の一つである。<sup>20</sup>

中西利理（七期文乙）

### 十六・三 昭和六年同盟盟休校

昭和六年十二月に起ったストライキは松江高校の歴史の中では最も大きな事件の一つである。もう半世紀以上も前のこととなったが、私たち当時の在校生（第九期から第十二期までの者）にとつては、それこそいろいろな意味で一生忘れれることのできない事件である。このストライキについての記録はかなり詳しいものが『島根大学史』（昭和五十六年発行）に記されているが、当時その事件の渦の真中にあった私の立場から、補足的なものも含めて、その概要を書きとめておくこととしたい。

昭和六年といえば、満州事変が九月にはじまった年である。この年の松江高校は春に松高消費組合が誕生し、また春以来多数のクラスでエスケープ運動が流行した。エスケープというのは生徒に評判の悪い教師の授業時間に一斉に申合せて授業を抛棄し、近くの楽山公園等にピクニックに出かけるなどの小ストライキである。これらのことは左翼勢力が背後にあつたかどうかは別にして、当時の一般的な自由主義、反体制主義、或いは左翼的雰囲気のあるものであつたと見てよいであろう。

その一つが秋の記念祭に前後しておこつた。それは文三乙の生徒を中心として密に行われていた『読書会』が発覚して警察の手入れがあり、主謀者と見られた同クラスの高田富之（当時文科代表の理事。戦後は社会党代議士）他十名余の生徒会員が長・短期の停学処分を受ける事件であつた。

その延長線上に出てくるのが十二月の大ストライキなのである。

この年は学校の創立十周年に当たっており、十二月一日を期して記念式典が開かれたが、その式典に生徒の代表があいさつをすることになり、学校側は理三甲一の畑一夫を指名したが、生徒側は代表は民主的に選

<sup>20</sup> これについては「第十八章 濠校を思い出す座談会 十八・八 左翼風潮の所産の出来事について」でも語られている。後半は「七・十 見つけた講義録」、「十六・三 昭和六年同盟盟休校」で触れられている。見方が違っているのが興味深い。



ばれた生徒理事（当時は文科高田富之、理科酒井正仁であったが、いずれも前述の読書会事件で停学中であり、代行は文科は小生が理科は八田一が務めていた）が当るべきだと主張していた。結果は学校側が生徒側の言い分を認めず、また畑は学校側生徒側の板挟みとなって当日の式典に欠席した。

その夕べ、生徒側は祝賀提灯行列をしたいと学校側に申し出てその許可を得た。せめてものウッペンばらしをやるうという事で計画されたもので、はじめから左翼が指導でデモにしようという意図があった訳ではない。ところが夜暗くなり、提灯をつけ、中には一杯引っかけてくる連中もいるし、何しろ若い者の集りだから、城山を出発して殿町、京店、大橋を渡って白潟本町と行進を続けるうちに終点の白潟天満宮（天神町）に到着する前に「みんなで松崎水亭に行こう」という空気が起こり、遂にそのように決ってしまった。

松崎水亭では学校側が文部省や他の高校の教師、県や市の代表者を招待して祝賀の宴が張られており、そのことを生徒側はよく知っていて非常に不愉快な感じを持っていた。

私は当夜の行列の責任者の一人であったが、行列は北松江駅前広場で解散することに變更し、松崎水亭には少数の代表者が挨拶というか抗議というか、そういうことでその場を納めるつもりであった。しかし事態はそんな甘いものではなく、騎虎の勢いで数十人の者が松崎水亭の玄関に殺到して、大きな声で学校側を非難しはじめたのである。

漸く私たち二、三の代表者が、校長の代理として高畠喜市教頭に面会をし、生徒の気持を伝えて後、北松江駅前に引揚げて行った。その間長い時間のようだったが、三、四十分位であったと思う。

北松江駅前で臨時の生徒大会が開かれ、一部の人（主として左翼系と目される人）は「これから直ちに学校の寮に立籠もりストライキに入ろう」と主張したが、大勢はこれを容れず、そのまま当日は散会となった。

このままで終れば何事もなかったのであるが、学校側は十二月四日に今回の事件に対する処分を発表した。除名処分が五―六人、六十日間停学処分が約十人で、審査も何もないままに未曾有の大処分が発表されたのである。被処分者が次々に処分を申渡されて生徒主事室から出てくる。各クラス共騒然となって授業どころではない。忽ち校庭に自然発生的ともいうべき生徒大会が開かれ、真に学校側に抗議するとともに全校ストライキに入ることが決議された。被処分者のうち除名は恐らく学校側で左翼組織に明かに関与していると認

めたものであろう。停学はそれ以外で日頃から目をつけられていた者、一日の事件に指導的立場にあつたり、特に大きな声で学校側を非難した者などであるが、中には当日その場に居なかったり全然検討違いな人の名もあつて生徒側の批判の的になった。私と理科の理事代行八田一は六十日停学となり、当時文二乙の若槻克彦も同様であつた。六十日間の停学というのは実質的には二期の試験を受験できず、また出席日数の関係から一年落第するということを意味していた。大部分の三年生は次の年の大学入試が受けられないということである。学校側は一步も退かないという強硬態度であり、生徒側も廃校になつても頑張るといふわけで、ストライキは延々後二十日間続くことになつたのである。

ストライキについては、昭和四年即ち私たちの一年生の秋、校長の明治節に於ける勅語誤読を理由にしてはじまつたストライキ（二日間位で解決）の際の経験が多少はあつたものの、いざはじまると大変である。全員寮に籠城ということで、部屋割から引越し、それに何よりも食事の用意が大へんである。後藤さんという寮の賄方請負の方の義侠的な協力で助かつた訳である。

当初は私と八田が委員長格で諸事万端を取りしきっていたが、そのうちに被処分者は一応表面からは引込んだ方がよいということで、委員長に文三甲の吉田嗣延が当ることになり、同君がストライキの最後の收拾まで献身的な努力をしてくれたのである。なお理科の方は広沢道彦（理甲一）が八田の後を引きついで吉田と共に元気で頑張つていた姿が印象に残っている。

ストライキも一種の事業みたいなもので皆が夫々役割を分担する訳で、組織も逐次整備され、委員長と理事数人の下に、交渉、記録、報道、印刷、外出、紛失物などの係と、外交、通信、炊事、衛生、警備、運動娯楽、会計等の部が置かれた。平素の講演部は街頭宣伝に出かけ、新聞部はストニュース（恐らく五十号位まで出たであろう）を発行し、柔剣道部は警備の役割を引受け、各運動部は夫々の部門の校内試合を計画して元氣を出させる等随分と創意工夫で二十日を闘つたものである。中でも演芸大会で花森安治（当時文二甲）がストライキを題材にした演劇を上演して大へんな評判になつた。伝染病らしき病人が出てこれを市内に隔離しなければ寮を追い出されるというので、密かに手配をして犠牲的に看病に當つてことなきを得たといふようなこともあつた。

当時ストライキに参加した各人が夫々印象に残る経験をもっていることと思う。よく昔話をすることはあるが残念ながらまとまった記録はない。

生徒の父兄が全国から松江に集って来て父兄会も活発になり、各大学に行っている先輩たちも続々と駆けつけて来て、生徒側の応援をすると同時に、学校側との間に立って解決に尽力した。ストライキが余り永びくので遂には警察力が入るのではないかと心配が出てくるようになった。考えてみると全く良き古き時代で結局最終段階まで警察は全然介入せず何等の干渉をしなかったのである。後年当時の松江署の署長奥田さんと当時のことを話合ったのであるが、大へん心配をして情報は絶えず取っており、何かあれば出かける用意はしていたということであつた。

恒松於兔二県会議長（前島根県知事恒松制治尊父）に仲介人になつてもらふことになり、解決の交渉が続けられた。十二月二十二日午前二時難航した交渉がまとまって漸く合意に達した。その主な内容は次の通りである。

- 一・十二月二十二日午後二時限り寮は閉鎖す。生徒は原則としてそれまでに退散する。
- 一・第二学期の試験は第三学期の適当なる時期に施行する。即ち二月二日以後に行い、六十日停学処分者の停学処分明けにする。
- 一・処分の撤回、軽減は行わぬ。
- 一・諭旨退学処分を受けた者も改悛の情著しきものは適当の時期に復校さすことあるべし。
- 一・今回の紛争による処分者はださぬ。
- 一・陳謝状は一月六日までに提出のこと。
- 一・停学処分者の欠席日数は進級決定に関して欠席日数に加算せず。

交渉妥結後、午前三時解散の生徒大会が校庭に於て開かれた。十二月の寒空、月光の下で、かがり火をたいた中に涙を流す者、永いストライキの解決でホツとする者、悲喜こもごもの最後の生徒大会であつた。大

会の声明書は次の通りである。

滅理殺法的処分に抗し、戦う可くして戦い来れる吾等の戦は既に十八日を経過せり。この間純乎たる友情、断乎たる正義心に燃えて立ちたる吾等の壮拳を貫徹せんため吾等は鉄の団結を以て、或は社会輿論の支持を求め、或は理解ある先輩の同情に訴え、最大限の能力をあげて処分撤回闘争を果敢に展開し来れり。されど学校当局の態度たるや実に頑迷固陋、吾等の正義を認めざりしのみならず、その過重なる処分をも妥当なりと断言して恬然たり。而のみならず卑劣にも国家権力の牙城に立てこもり、一切の権限をあげて吾等に屈辱的敗北を強いんとす。吾等はこの正しきものの容れられざる矛盾を認めざるもこの権力に抗する能わず、併も吾等は攻撃を知ると共に退却を認識せざるべからず。何となれば吾等は絶対に総ゆる屈辱に甘んずる奴隷に非ず、飽くまでこの正義のため抗争を続け、彼等が砦を粉砕すべき将来を期し、最後まで団結し来れる校友六百はここに涙を呑み而も意気軒昂のうちに解散す。右声明す。

昭和六年十二月二十二日午前四時

松江高等学校生徒一同

ストライキの目的であつた処分撤回は成功しなかつたが、停学処分者の落第は完全に防がれ、卒業や進級に支障がないことになって被害を最小限度に食い止めた。除名処分者の復校についても一応の道を開いたのであるが、その後左翼に対する政府全般の一層きびしい状態が続くことになり、結果的には一名の復校者もなかつた。後年日本共産党更に日本社会党の代議士となつた高田富之はこの時の除名処分者の一人であるが、戦後松江高校卒業生の中に加えられている。

思えば昭和六年松江高校ストライキは昭和初年、所謂一九三〇年代の日本の状況を写した鏡であり、火花であつたとの感慨に堪えない。

細田吉蔵<sup>ミ</sup>（九期文甲）

<sup>ミ</sup> 島根生まれ、松江中出身（九期文甲卒）、東大法 英法卒、旧鉄道省、運輸省（二十五年間、運輸官房長官から政界へ）、国会議員二十七年間。自民党総務会長、中曽根内閣行政管理・防衛庁長官、運輸相歴任。

## 十六・四 勉強よりも運動

さらに白石磷が書いてくれた自らの生い立ちからカルシユ先生との交流が窺える。彼は山口出身で後に京大経済に進学した昭和七年第九期卒である。彼は太正になって最初に生まれた赤ん坊として地方新聞に紹介されたとともに、後年の《ビルマ激戦の生き残り》でもある。後に、(株)ユニチカエステート会長、(株)レナウンホームズ社長・会長を歴任した。日本の陸上競技会発展に貢献したスポーツマンで、長らく高校時代の陸上競技部員の陸友会の会長として、働いてきた。彼の大きな人柄が彼の記した文章にじみ出て来る感がある。

### (一) 入学試験

昭和三年の年末近く、全国の高等学校毎の来春施行される入試学課の発表があった。その時に、自分の力に合っているという感じのする学課が多くある学校は何処かと考えた結果、松江高等学校であるという判断をすぐもつことが出来た。早速、入学志望学科は(第二)が文科甲類、(第二)が文科乙類と書きいれて、その他の必要事項も完全にした入学試験申込書を、松江高校宛てに郵送した。たしか昭和四年三月十六日、十七日が受験日だったと思う。少々小雪も舞っている中やつの思いで試験を終えてホッとしたが、受験した学課で、どうしても不可解だったという問題は一つもなかったので明るい気分で校舎の出口辺りに来たら、生徒達が大勢たむろしていて、壁に貼られた紙掲示を見ろといわれた。それには運動部毎に、名前を知られているスポーツ受験生の氏名が書かれてあり、陸上競技部のところに白石磷の名もあった。私は「陸上競技部の白石です」と名乗ったところ、「私はマネージャーの長尾正(七期理乙)です。貴君の名前は山口縣大会などで承知しています。君は合格するだろうと思って部員も私も一緒に祈っていますよ」という。そして、「合格発表の日には電報で知らせますから住所をこの紙に書いて下さい」といわれたので、その日の夜行列車で行く予定の大阪市にいる次兄の住所を書いて渡した。

たしか十日ぐらいたった日の夕方、「ブンカオツルイニゴウカクオメデトウ、ナガオ」という電報が届

いた。とりいそぎ朝日新聞社の次兄のところに電話をかけて合格の旨を伝えた。「ああそれはよくやったな、親父のところには俺から知らせしておく」と喜んでくれた。翌朝「ゴウカクヲヨロコブチチハハ」という祝電がきた。これを読んで、今まで私の心の中にたまっていた《中学校四年を終了してすぐ官立高等学校に入学せよ》という父の厳命をやっと果し得て「何とか親孝行ができた」という嬉しさが爆発して涙で顔中ぐじぐじよになったことも一生の思い出である。

(二) 松江高等学校におけるドイツ語と陸上競技

昭和四年三月末頃、四月一日入学式出席のため早めに松江に到着して、寄宿舎「自習寮」北三寮に入った。親の許を離れて自分独りの生活をするのはこれが初めてのことである。その時二つ、私の心にかかるものがあった。一つは第一志望を文科甲類にしておいたのが、文科乙類になって合格していること。しかしこれは、松江の受験者が非常に多く、特に文科は甲、乙合わせて八十人の合格者予定数に対し、受験志願者が九八五人という一二倍強の激しい競争率になり、しかも志願者数は文乙より文甲の方がだいぶ多数だったためこの結果になったと副保証人の水木教授から後で説明された。私にとつては、この為にドイツ語が本格的に正課目として勉強の対象とな



昭和5年7月、明治神宮外苑競技場における優勝の記念写真(白石の提供)  
後列中央が総合優勝旗をもつ田村忠雄主将その右隣がトラック優勝旗をもつ小川卓三選手  
(前列右より2番目白石、前列左端赤木、後列右端高橋の3名が生存)

ったのだから、寧ろ喜ぶべき方向であったと今でも思っている。もう一つ気になったことは、陸上競技部のことである。前述の如く、私が山口県中等学校短距離ランナーとして松江高校にまで知られていたこととがわかって正直なところ子供心に嬉しい気持ちではあった。しかし毎日授業を受けている学課は中学時代とは大変ちがった格の高いものであり、また難しいものであった。特にドイツ語は、はじめて見る文字であり文法であるため、いくら勉強きらいの私でも予習復習はどうしても必要と思っていた。

ところが競技部の練習は僅か約三ヶ月しか余裕のない毎年七月に挙行される全国高校陸上競技選手権大会（通称インターハイ）を目標とした厳しいもので、授業が終わると練習衣に着替え、スパイクシューズをさげてグラウンドにかけつけ、夕方まで走ったり跳んだり。その間走った後、腰でも下ろそうものなら「コラーツ」とどなられるので、ハアハアと肩で呼吸しながら五〇〇メートルくらい歩いて、また走り出す練習を繰り返す人の顔がよく見えなくなっているから「よし、今日はこれまで」というキャプテンの声で這うようにして寮の石段を上がって浴場に辿りつき、入浴後の夕食をタラフクに食って部屋に帰り、着替えをすましてホッとすればもう眠くなり、布団にもぐって朝まで熟睡するか、この時、同志が揃って夜の町に出かけてストームを演ずるか、オデン屋かウドン屋に入って一杯やるか、あるいはおとなしく活動写真（映画のこと）を見て帰って寝るかで何れにしても勉強の方は何もできない状態になるのである。いくら陸上競技が勉強より好きであっても、初めて習うドイツ語には始めから打ちこんでおかなければいけないとよく分かっているが、それが出来なかった、その時の自分を情けなく思っている。

昭和五年三月、私がやっと二学年に上がった時の松江の陸上競技部には、二名の名選手田村忠雄（八期理乙）主将と小川卓三（八期理甲）選手が、共にぐんぐん調子を上げていて他の選手もそれに引張られて、松江制覇の気運はすでに出来上がっていた。大会は、七月中旬に明治神宮外苑競技場（現在の国立霞ヶ丘競技場）で開催された。二日間、暑中の激戦であった。そして総合優勝とトラック優勝に輝いたのは、わが松江高等学校であった。

前載の写真で田村主将の左隣で陸上競技部々旗をもった人は、松村博（八期理乙・カルシユ先生門下生、後に戦死）選手であり、この日、棒高跳びで誰も予想していなかった三位に喰い込み、貴重な得点をして優

勝に貢献した勇士である。写真にいる十人の中、文甲、理甲は四人だが文乙理乙のカルシユ弟子は六人いる。田村主将は翌春、九大医学部に入学して後に北九州市の病院長まで勤めた人だから、増田義哉名誉教授（六期理乙）はよくご存知の後輩であろう。私は田村先輩の後をうけて、昭和六年度の主将になったが、強い選手は皆卒業し、後に残ったものと、新入部員で翌年戦ったが、主将の私がインターハイの当日、京大病院に入院手術する惨状で、後々の立直しもできず、申訳なく今も思っづけている。しかし、私の後、松江高校陸上競技部は後を絶たず、若いOBの諸君が陸友会を結成して、その会合は今日まで続いている。私のドイツ語の勉強を妨げてくれた松江の陸上競技についてはこれで終わることとする。

### （三）松江高校のドイツ語とカルシユ先生の思い出

前述の如く私の入学試験の成績が、『第二志望の文乙に合格』になったので思いがけなくドイツ語専攻に変わり英語以外の一外国語が新たに勉強できるのだから、むしろ喜ぶべきと気がついた。それにドイツ語の教授は五、六人いて、それぞれ専門に応じて哲学、文学、経済学、長編小説等々ドイツ語で書かれた一冊の本を教科書にして講義をされる日課が三年間に亘り組まれているためドイツ語の授業がない日は、一週に一日くらいだったと思っている。

一学年の第一学期が始る時に各々の先生がどんな人かが関心の的であったが、特にカルシユ先生がどんな授業をされるか皆興味をもって昭和四年四月（何日かは忘れた）のその日をまつた。その日が来た。はじめて経験するドイツ人教授は、白い顔に微笑をたたえ、六尺豊かの大男、黒っぽいセビロ服（？）の上に教授ガウンを着て、大股で教室に入って来られ、教壇の上で出欠簿（アイウエオ順にローマ字で生徒名が書かれている）を持たれ、いきなり朝日（アッサヒ）足立（アダチ）伊集院（イジユウイン）石原（イシハラ）と次々に読上げて、全員出席を確認された後、出欠簿を机の上においてから、右を向いてこれまた大股で窓際まで二、三歩歩いて、いきなり木製の窓枠を両手で持って「WAS IST DAS?」と第一声を発せられ少し左の方を向いて、優しい笑顔で私たち生徒の顔を見られた。私たちからは発言がないので「DAS IST EIN FENSTER」<sup>1</sup>と第二声を発して、教壇の上に戻って、顔一杯の笑みをたたえて何かドイツ語で話しかけられ



た。当然何の話か全然わからなかったし、後のことは今は忘れてしまったが、ここまでの最初のご対面はよく覚えている。

だんだん時がたつてお互いに馴れてくるにつれカルシュ先生から、教室で色々のお話をきいた。勿論、お話の全部が理解できるはずはないが、その頃「IM WESTEN NICHTS NEUES(西部戦線異常なし)」の日本版はよく売れて話題も多かった。先生からもこの話を聞いたことがあったが先生は「この本は本当のドイツ精神がこもっていない」と深刻な表情で語られていた。また、当時は大学生、高校生の間で関心をもたれていた人物はカール・マルクスであり、共産主義を中心とした種々の論議が当時の警察の取り締りの対象となっていた。わがクラスメートの中にも退学処分になったり、自ら地下にもぐった友人もいた。カルシュ先生の「マルクスはこんな男であった」という我々の質問に答える形で面白く話して下さった時の写真は私が若松先生に提供した資料の中にあり、本誌に掲載されている。

最後に、カルシュ先生が我々によく教えて下さったものの中に唄(歌、謡?)がある。一番初めに教えてもらったのは有名な「LORELEI」であった。これを先生、級友と一緒に教室で合唱した時の気分は格別であった。その他、いろいろの歌を教えていただいた中に、私が今でも覚えていて、時々何気なく口ずさむことがあるものを紹介しておくことにしたい(但し題名はどうしても思い出せないので省略する)その唄は次の通りである。

「Wenn die Soldaten durch die Stadt marschieren, öffnet Mädchen die Fenster und die Türen;」

アイバールム、アイダールム、ブロースベーゲン、チンダララッサ、ブンダララッサ、サー(カタカナの日本文のところは自分もよく覚えてない歌詞)。この外、多少の個人的な接觸はあったけれど皆さんに紹介できる思い出としては写真とその記事くらいのもしかない。結局、カルシュ先生とは、教室において、できる悪い生徒が、いい先生だなあと思ひつつ授業を受けた平凡な弟子という間柄に終ってしまったとしかいえないであろう。かくして昭和七年三月が来て、卒業証書を頂き、一生忘れられない青春の楽しさを満喫した松江を離れ、京都帝国大学に進学した。

白石磷(九期文乙) 平成十二年九月十五日 敬老の日に記す

## 第十七章 カルシュ門下の人々と波及効果

今は消息も含めてまったくわからない人が多いが、カルシュの教え子で世の中で活躍した人は枚挙に暇がない。もちろんこうした人々を輩出した理由はカルシュの影響というよりは、むしろ旧制高校の制度と優れた教師、それにも増して生徒の素質があるだろう。しかし今、健在の人々に聞けば、そして亡くなった人々の話からも、どうしても否定できないカルシュの影響があったと思われる。以下には、編者が種々資料や伝聞を基にしてまとめたものであるが、ここに載せた人物はカルシュに密接に関係のある直接の生徒で四期生から十九期生までに限定してある。しかも、資料が入手でき、たまたま私が知る限りの人達である。したがって、ここに記されなかったが大きな仕事を成し遂げたひと、もちろんたくさんいることを付記する。

なお、カルシュ在任中の間に影響を受けた理甲の生徒の中にも、同様に各界で活躍していた人が沢山いる。以下に述べる嘗ての生徒の活躍はさらにその弟子である「孫弟子」まで及んでいる。それらがすべて間接的なカルシュの業績であることに疑う余地がない。

### 十七・一 学術界へ

旧生徒自身の記録と伝聞から、まず酒井勝郎について述べてみよう。折しも、アメリカ原子力潜水艦と日本本の練習船「えひめ丸」の衝突遭難事件があった。この事件から彼の著書の中の紫雲丸事件の記述に想いを馳せた。これを読んで感じたことを要約してみよう。彼は戦前からの日本で行われていた工学技術に対する批判を述べている。彼は自らはテレビジョンの開発やレーダの開発に従事した科学者である。

本書には、彼の言行が到る所とところに見られるので、ここでは科学者として眼からの側面だけでなく情動的な側面をも敢えて述べることにする。

## (二) レーダ開発の功労者

彼はこう言う。「今までの日本の科学は借り物で固まって、その借り得がねらいであつたようだ。自らあまり努力をせず、損得感情と勘定を念頭に置いていたので取り組みの動機に弱さがあり、人間の本質的要求に応えられないことが少なくない。というのは、科学は草木がのびるような自然の力で、心の自然の欲求に由来しなければならぬからである」という。

故郷の松江川津の修学旅行で小学生を運んだ紫雲丸<sup>28</sup>の「遭難事件」の新聞記事が目に入った。「一体誰が、この悲運の人達に手をつけて謝ってくれるのか。責任ある立場のひとと一緒に死ねば、また辞表を出したのが世間に対して一応いいわけになるのか。でも、それらが残った父母に納得のいく償いになるわけではない」彼は川津經由本庄方面へのバスのなかで窓外の景色をぼんやり眺めながら、ふと自分が開発に関係していたレーダへの過信が遭難原因であつたという記述に思いを馳せた。この事件ではスピード本位に旅程を組み、その食い違いに不満をいつているお偉方の姿が想像される。多少レーダ導入の行政的事情を知っている人ならば「レーダを備えて何事か」というであろうことも想像できる。科学の本質を知らずに、科学の進歩の末端だけを頂戴して、十分に理解せずに、宣伝された性能のみに合わせて装備した機械の操作に慣れないことが事故の遠因である。ときに、行政の都合のみによって運行を定めた大人社会の危険さを認識する必要がある。進歩改良のための厳重な試験使用のなさの油断と惨事は繰り返し起こるであろう。

というように今日の事故や事件の原因の所在の分析に通じる確かな眼が感じられる。

「田舎の大学から」紫雲丸遭難事件を読んで

<sup>28</sup> このときの小学生の一人が江角比出郎で、後に島根大学で酒井勝郎より薫陶を受けた。

## (二) 俳諧の研究を生涯を通して

次に、編者に調査のアドバイスを与えてくれた宮田正信について述べよう。明治以来ともすれば、一旦世の中で何かの評価が定まるとそれが固定されてしまうこと。そしてそれが容易に動かず、よほどのことが無い限り、新しい見方を拒否する日本人の一般的態度を、自らの学問的背景である国文学を通して、編者に丁寧に教示してくれたのが彼である。宮田の自伝的回想の言葉に注目したいと思っている。

中学時代にすでに自由主義教育を体験していたので、高校での自由の精神は当り前のこととして受けとめていた。しかし三年生の頃今という学園紛争で身辺から多くの退校などの処分を受けた者が出た時のショックもあって、どうやらそこに根ざしていた画一的強権力への反抗姿勢が芽生えたようだ。そんな時、体制内的自由論に感心したりした。

高校では良き師の導きもあり、その後も「怪我せず」に文学者の道を歩み、以来好きな研究に打ち込むことができたようだ。高校時代の三年間に生まれた友情の絆は、それから七十年余の生涯の折々に、命の糧として、大きな支えとなつて今に渝らない。とにかく、いまでも続いているよき友人に恵まれた幸せを何にもまして感謝している。

宮田正信（九期文乙）

## (三) ワクチン生産の功績者

松江高校第十四期理乙「昭和十二年」は、入学した時は三十名だったが、現在半分の者が鬼籍に入り、淋しくなつてしまった。しかも、在校当時の豪傑連中、柔道部のキャプテン森新太郎をはじめとして、千田菊磨、野津辰郎、神田貞雄等々の元氣ものが早く亡くなり、平々凡々としていてかすんでいた、小柄な綿谷、奥野や私等が元気に生きている。皮肉なものである。

その中から、特に奥野良臣のような、立派な世界的な学者を生んだことに、我々は大変な誇りをもっている。彼が麻疹ビールの分離・発見、生ビールスワクチンの創作等の偉大なる業績によって、昭和五十三年、紫綬褒章を受章されたことは、ご存じの通りである。彼の地味ではあるが、誠実な研究態度が生んだ賜であ

り、当然の結果である。また、も一つ、「阪大微研のワクチン」として、数々の予防ワクチンを生産、防疫上、国家に多大の貢献をした功績は大きい。私の弟でカルシュ先生の最後の教え子の青山章（十九期理乙）は在学中から谷口奥野教室に出入し、卒業後も彼の指導を受けた研究生生活を送り、彼の弟子の筆頭におさまっている。

戦後間もなくの頃、彼の研究の手伝いをして、私の村の子供達を多勢集めて、奥野教室創生の麻疹生ワクチンを咽頭に塗り、試験接種して、軽い麻疹症状が出たと、大変嬉んでいたことを記憶している。昭和五十年頃のこと、奥野教室で創作された「ムンプス・ビルス」が制癌剤として有効性があるとのこと、東大阪市立中央病院外科へ臨床症例を依頼された。私と医局員の谷岡恒雄とで、入院患者特に末期癌患者に対し「ムンプス・ビルス」を注射し、データを集めた。百数十名に実施した結果、腹水が減少したり、また消失したり、また疼痛が軽減して食欲が出たりして、かなりの効果が認められた。私の長男も外科医で京大でデータを集めて貰った。昭和五十一年秋、日本癌学会に共同で発表することができた。末期癌のみに使用したのと、保存方法が難しく、今後の追求が望ましいと思っている。

彼の弟は、東大阪市で牧浦外科病院を開いていて、親しい外科医の仲間である。彼は大学者であるが、きさくで付き合いやすく、また阪大昭和十六年度クラス会「正修会」の幹事として、よく世話をしてくれている。この会は家族同伴の旅行が多く、奥野夫妻と私ら夫婦が同行することが多い。最近では、奈良古都めぐり、松江日御碕燈台の散策等、楽しい思い出が沢山ある。スナップ写真も沢山とれている。（後略）

青山 博（十四期理乙）

#### （四）カルシュ先生のお蔭

奥野良臣は自らの研究と弟子の育成とその業績の広がり、カルシュの存在が後になって重要な意味を持っていたことを自らの思い出の中で語っている。これを紹介する。

カルシュ先生は、私が松江高校に入学した昭和九年から三年間ドイツ語を教えて下さった先生である。初

めて習うドイツ語は難しく、面白くも無い授業ではあったが、カルシュ先生の型破りの教え方に愉快的時間を持つことも出来た（但し日本人の三人のドイツ語の先生も個性的な立派な先生であつたが）。

昭和十二年阪大に入学し、十六年に卒業した頃は、果てしない戦争が続き、その年にハワイ攻撃から更に熾烈な太平洋戦争が始まって、私の青春時代は戦争一色であつた。同僚、友人なども、特に病人でもない限り、皆、近く戦争の為に動員されることになつていた。しかし応召の遅いものは召集があるまでは、平素と同じく研究室で研究できる期間があつた。私は大学卒業時、父に細菌学をすすめられて、我が国のウイルス学の先駆者である谷口腆二教授の指導を受けることになつた。そして最初の頃は、二年先輩の猪木正三と同級の竹村茂君の三人で、谷口教授のテーマである麻疹ウイルスの分離の為に、たくさんサルを使つて、麻疹ウイルスのサルへの伝達試験に熱中した。自由な雰囲気での研究が面白く、日曜、祭日も無く三人とも良く働いたと思う。しかし間もなく竹村は応召し、フィリピンへ行き、後にレイテ島の激戦で無念の戦死を遂げることになつた。従つて研究室では猪木先輩と私の二人だけが麻疹ウイルスの研究に従事し、他のテーマの細菌教室の人々は、皆その内に応召して、居なくなつた。猪木もその内、原虫学に興味を持ち、原虫学部門に移ることになり、暫くすると谷口教授の研究テーマの仕事は、私が殆ど中心になつて行ふことになつた。

私はまた、すでに大学卒業後まもなく、軍医として働けるように、軍医予備員の研修の為陸軍の二十二部隊に入隊し、一定の期間の後除隊して、応召の機会を待つ身となつていた。その研修の前後に、私は猪木と共に実験中のサルが、人間のマラリア原虫に良く似た形態のマラリア原虫に自然感染していることを見つけた。しかし、その原虫について既に発表があるかどうかを調べる必要があり、他に記載の無いことを確認して、新種のマラリア原虫として発表した。その過程で外国、特にドイツ語、次に英語の文献を広く調べねばならなかつたが、私共は高校時代理科乙類を選んで居たので、マラリアの研究状況を調べることはさほど苦にならなかつた。ドイツ語を三年間習つたこと、特にカルシュ先生からは興味を持って教えられたことが大いに役立ったのである。しかしマラリア原虫を発見し、新種として命名までして発表したことは、原虫寄生虫学会の大先輩を出し抜いたことになるので、日本の最高学者であり、世界的にも或寄生虫の発見者として有名

な某大学の教授から、私共若造の軽率な発表として、学会誌の上でひどく叱られたことがあった。暫く学問上の論戦を行ったが、結局は負けずに終わったと思っている。

こうした論議の結果はともかく、むしろ学問上の論戦が有名になって、人々の注目をひいたのか、サルマラリア原虫の発見は、丁度時節柄日本軍のマラリア対策に格好の利用価値を認められて、重要な「戦時研究」となった（内閣発令）。これが、私自身の運命を一八〇度変えることになったのである。その経過を述べる。やがて私にも召集令状が来たので入隊した。ところが、戦地への出征が始まる日の前日、呼び出され、「君は戻って大学で研究するのだ」との通達があつて驚いた。送ってくれた人や一緒に集まった新しい同僚達に対しては後味の良くないことであつたが、一方では量の上で寝られるのは嬉しいことでもあつた。

もし上記の通達が無ければ、すぐに戦地に赴くはずであり、喧嘩の時など手も口も出す激高派の自分の性分から言つて無事には帰国できなかつたと思つてゐる。この運命の転換をもたらした原因はマラリア原虫の発見であり、それを可能にしたのは、外国、特にドイツの文献で、それらを調べる能力を与えて下さつたのがカルシュ先生なのである。

研究室に戻つた後、抗マラリア剤の研究のほかに、いくつかの業績をあげることが出来た。特に難解であつた麻疹ウイルスの分離に成功したのが、米国のエンダースと略同時であつた。エンダースはこれによつて直ちにノーベル賞を受賞したが、私の方でも文部省にこれを高く評価されて、微研に一つの麻疹研究部門が増設された。私は教授に昇進することが出来、助教授、助手、その他のポストと完全講座の予算を未永く頂くことになった。そのため若い優秀な人材を集めることが出来て、更に多くの研究を進めることが出来たのである。<sup>62</sup>

このように私に望外の仕事が出来たのは、元はと言えばカルシュ先生らのお陰であつたと思つてゐる。

奥野良臣（十四期理乙）

<sup>62</sup> いれについては別に述べる。

## 十七・二 実業界へ

今は消息もがわからない人が多いが、この分野で活躍したカルシュ先生の教え子は枚挙に暇がない。こうした人々を輩出した理由は前期の通り、むしろ旧制高校の制度と優れた教師、それにも増して生徒の素質がある。しかし、どうしても否定できないカルシュに象徴されるような人間関係の影響が見える。ここでは、実業界で指導的な役割を演じてきたひとを、編者の独断ではあるが数例挙げてみた。

まず、編者が親しく接した白石の自伝を紹介しよう。

## (一) ビジネスとドイツ語

高校を卒業後直ちに京都に往き、すぐ角帽を買って、母が独りでいる郷里に帰り、その前年十一月に昇天した父の墓前に置いて頭を下げた後、私の帝大生をみてください、と心の中でつぶやいて角帽を冠って墓地から近いわが家まで母と一緒に歩いて帰った。

京都帝大では、経済学部を籍をおいたが、教室で教授の講義をノートする時間は午後の二時か三時頃で打ち切り、その後の時間は、農学部の敷地内にある五百米の公認グラウンドで、野球部やラグビー部と一緒にかなりきつい練習に励んだ。結局は高校時代の《勉強より運動》と大同小異の生活であった。只、陸上競技に関する京都大学のその頃は、第二の全盛時代に当り強力ランナー、ジャンパーが揃っていた。十一年のベルリンオリンピックには、私の同期生の田島直人、原田（後に藤江）正夫の二人が三段跳に世界記録をもって、並んで金と銀のメダリストに輝きオリンピック史上に不滅の名をとどめている。私の自慢話の種として一生つくづくことになるだろう。中学二年生から始めた私の陸上競技は、練習の下手際は精神的、体力的両面に及んで、結局オリンピック選手には程遠い二流ランナーで終わりを上げたが、終戦后から日本陸上教技連盟や日本学生陸上競技連合などで多少後輩のお世話が出来て今日に及んだことに私なりの満足を憶えている。

昭和十年四月には、半年前から採用が決まっている大日本紡績株式会社に入社することになった。私が



学生から社会人になってからの人生を托するこの会社は、略称日紡、ニチボウと称して、当時の日本経済を背負って活動していた東洋紡績（株）と鐘ヶ淵紡績（株）に並んで、世界三大紡績と称せられてきた総合繊維会社である。（現在は「ユニチカ株式会社」と改称している）入社した私と同期の事務系学卒新社員は二十二人（今、三名生存）で意気盛んであったが、日本の軍部は昭和八、九年頃から中国の北東部、東部などで、政治的、軍事的問題をかかえ込んでそれが国際的批判に発展し、昭和十一、十二年頃は中国相手の戦争に発展して来た。私は昭和十三年に結婚したがすでに不安な雰囲気の中であつた。日紡にしても、若い社員達は兵役義務にかりだされ体位良好なものは次々に戦争軍務に服して、会社は暗い気分に巻き込まれてきた。私も昭和十二年には、陸軍少尉に任官して、十四年には内地勤務の召集軍人としての不馴れな兵役に従事して陸軍中尉になり、昭和十六年十二月八日の第二次世界大戦（日本名 大東亜戦争）勃発と共に実戦部隊の第十五軍兵站部に属して、今のベトナムからカンボジャ、タイ国を経て、ビルマ国に進入して、英、米空軍の爆撃と戦いつつインパール作戦の準備に当たった。ところが昭和十八年八月に、急に東京の陸軍航空本部付に転任という幸運の命令があつて、当時名古屋で私の無事帰還を待っていた妻と長女、次女を伴って東京に移転した。すぐ軍需省という戦争用の新設役所（文官制）に勤務し、陸海軍共用の規格に変わったばかりの落下傘の生産担当官で走り廻っている内に、昭和二十年八月十五日に陸軍大尉で終戦を迎えた。約八年間の戦争軍人の生活は人生の無駄な部分であつた反面、命の大切さを知りいい経験でもあつた。

こうして大日本紡績（株）に復帰して東京で終戦の後始末の仕事をして、二十四年には社長室調査課長を命ぜられて大阪本社に腰を据えた。調査課長の仕事は色々あつて面白さと忙しさと運動不足気味ではあつたが、将来の日本繊維業界の進路を考えるためにも、外国、特にアジア各国の綿業関係の実状を知る必要が出て来た。こうして、日紡としてはまずインド、パキスタン、ビルマ、フィリピン、マレーシア、香港などの工場見学から始めることになった。上記の国々では我々の片言英語と現地で働いている日本商社の社員各位の応援で何とか資料収集することができた。しかしその英語にしても、高校入学試験以来は、高校、大学でも殆ど使わず、戦時中は英語禁止の命令まで出ていた有様で、やはり会話となると苦勞の一つであつた。でも、インドとパキスタンでは、日本は世界の綿糸布の大生産国であり、インド棉の大輸入国であり、現にイ

ンドの平服ともいえる「ドーチー」を輸出しているなどの事情で、その頃はどの工場も好意的に見学させてくれて、想像以上に立派な現場に感心もした。昭和二十七、八年頃の話である。特にニューデリーの近くにある有名なカストラバイ財閥の代表工場に案内された時は印象的であった。紡織関係工場の視察を了えたところで次は加工工場（染色、漂白、プリントなどの工場）の前に来た。インド人の案内人が立ちどまって、この工場は建設されて二、三年しかたっていない。機械はドイツ製で工場長も、今、英語を勉強中のドイツ人であると紹介してくれて中に入った。しかし私はその勉強中の英語の説明の方がインド式英語よりもよくわかったのは、お互いに外国人の英語のせいだったからだろう。それにドイツ語の説明のついた諸資料を色々手渡してくれた。私は出発前にわが社の加工関係の技術課長から、加工関係の資料もあつたら頼むといわれていたので、このプレゼントは嬉しかった。見学もすんで、工場出口のところに来た。インド人の案内人がインド式英語で「よく来て下さった。有難う」といいながら握手のための右手を出した。私はお礼をいうのはこちらの方だと思って丁重に握手して日本式に頭を下げた。ところが、ドイツ人工場長もすぐ握手のため大きな右手を私に差し出して、インド式英語で「Good bye, Thank you very much」といって笑顔を見せた。その時、私はふとドイツ人工場長の好意に対して挨拶をせねばいかんという気持ちを強く感じたのか、思わず、「Ich danke Ihnen sehr, Auf Wiedersehen」と自分でも驚くほどのスムーズさでドイツ語の挨拶が口から迂り出た。「しまった」と思ったが後の祭り、彼は私がドイツ語で話が出来ると思ったのか、握手の右手に力が入り、満面の笑顔で話をしはじめたが私には通ずるはずがない。ドイツ語の返事はせず左手を横に振って片言英語で私は約二十何年前に高校でドイツ語を習っただけで、ドイツ語で話ができないというと、「工場長は私の来訪者でドイツ語で話してくれたのは貴方只一人だ。私は嬉しい。今夜は同じホテルだから、食事と一緒にしよう」といつてきかないので、片言英語とぼつぼつ思い出すドイツ語で小さい夕食会をすませて、夜十時頃までおつき合いをした。翌朝、案内のインド人社員はあの工場長がこんなに喜んだことは今まで見たことがない。私も貴方のドイツ語がとても嬉しく社長にも伝えておきますといってくれた。これで小さいことながら一つの国際親善ができたわけだが、これも、不勉強な中にもカルシュ先生にドイツ語の教授をうけたおかげと思い、改めてドイツにいらっしやるはずの先生に心の中で深甚の謝意を捧げた次第である。

私の出張では、このインドから戦時中の激戦地で私も日本軍人として駐留したなつかしのビルマに行き、タイ国と香港を経由して帰国したが、つづいてビルマには三回も渡航してビルマ棉と紡績工場の件で色々と調査し交渉した経験は今でも大切にしている。

その後のカルシュ先生、ドイツ語と私の関係は一九九〇年（平成二年）にカルシュ先生の長女メヒテルトさん（Mrs Mechthild Maria St. Goar）が来日されて、大阪にも二泊されることになり、奥野良臣阪大名誉教授（十四期理乙）よりのお声がかりで歓迎会と宿泊について協力した一件だけだと思う。しかし、その縁で、毎年末にクリスマス・カードに夫妻の写真をつけて日本語の上手なご挨拶を送って下さるメヒテルト夫人の好意が永くつづくことを祈ってやまない。最後に若松秀俊教授が並々ならぬ熱意をもって、取り組んでおられる、故カルシュ先生顕彰のご企画が立派に完成をみることをこれから期待し、併せて、私も何かとお役に立つべく努めてみた何がしかの動きも、微力と老齢のために、不十分に終ったことを深く陳謝して擱筆したいとおもう。

白石磷（九期文乙）

白石は昭和三十九年の東京オリンピックをはじめ、陸上競技の諸団体にも関係して、日本陸上競技連盟審議員、日本学生陸上競技連合顧問等として若い内外の選手の育成に尽力し、今に至っている。彼と同期の級友である次の岡崎道夫は静岡出身で東京帝大で経済学を修め卒業後、三菱鉱業、住友金属工業を経て、住金物産副社長であった。第二木曜日開催の旧制松江高校の二木会（耳目会ともよぶ）には細田、萩原らと欠かさず参画している。

## （二）松江高等学校と私

男三人兄弟の末弟として静岡に生まれた私は、子供部屋といわれていた一室で二人の兄と起居を共にして育った。二つ違いの次兄とは当分寢床も一緒であったから、長じてからも良い相手になってくれた。昭和三年の暮れのこと、静岡の生徒になっていた次兄と私は進學について相談していた。私は末子の我儘な性格からでしょうが、学科の好悪が強く、問題視された中学校入試で案外上位で合格したのが裏目に出て、好きな

学科しか勉強しない。二年の終りには、最下位、要注意生徒となつて、両親を心配させた。その後兄の指導強化もあつて、每学期成績向上し、兄弟で初めての進歩賞等を頂いたりしたが、代数には後遺症が残り取返しがつかなかった。四年から静高を受験、見事に代数で不合格。さて来年はどうするか。

兄は「官報に依ると入試に代数科目の無い高校が三校ある。激戦になると思うがやってみろ。高等学校は専門学校と異り、国立大学進学希望の中学生を受入れて、大学教育を受けるに相応しい学生たらしめる必須の補習教育を施す予備門的学校だから、何高と特定する必要はない。寧ろ地方の良い環境にある学校の方が望ましい。自分は自然に静高に入ったが今となつてみると、遠い他国に遊学すればよかったと反省している。末子の我儘者には寧ろ必要なことと考えているから、両親には自分から話して許して頂く。島崎藤村の本で讀んだが、松江が良いと思うがどうだ」目に見えない縁というものか、両親からは、大学が一番近い東京ですよと言うだけで松江高等学校受験が決められた。試験の日の松江は山陰特有の曇まじりの曇の日であつた。数学の無い試験だから、自分では全部出来たと思うが、分らない。次兄は大丈夫合格してるよ。と樂觀論で慰めてくれた。一方東京の長兄からは、母が心配するから、慶應大学予科の受験手続きをして置いた。直ぐ上京する様にとの事である。第一日は英語で大体出来た。長兄は英語が良ければ通るだろうと銀座で夕食を奢ってくれた。東京も悪くないなと楽しく兄の下宿に帰ったら、松高合格の知らせが入つていて、嬉しいよりも、いよいよ親兄弟を離れてあの寒いところで三年かとか淋しい気持が先立つたのが本音である。

入学手続きを郵送した日、次兄は愈よ男子郷関を出ずだ。これは餞別だと片山独和大辞典を渡して、第一外国語にドイツ語を選んだ以上、入学早々からABCで大変だろうが、一学期中手を抜くな。代数で覚えがあらう。文法の基礎を頭に入れてしまえば、三年間楽に勉強出来る。この辞書を俺だと思つて毎日引きこなせ。頑張れよ。俺は一足先に東大に行つて、待っているぞ、と励ましてくれた。母は柳行李と一緒に私を人力車に乗せて、駅には行かない、落ついた頃に、必ず会いに行きます。と言つて見送ってくれた。その約束通り、五月に入ると両親が揃つて松江に来てくれた。兄の予言通り、ドイツ語の集中学習で些さかホームシック気味であつた私には、地獄に仏で、両親の宿で過ごした時間が余程嬉しかったのであらう。今でも忘れない。

湖畔の町松江の春は爛漫であつたが、ドイツ語に迫はれる新入生には他所の花でした。テキストこそ違え、五人の教授が入れ代わり立ち代わり、文字通り鳥の鳴かぬ日はあつてもドイツ語は毎日である。ABCの発音からの生徒の方は、テキストを前に辞書を引こうにも活用、変化を知らないから一つ一つの言葉の原形を探すことが出来ない。文法担任の藤野先生は大学出たての新進気鋭で生徒の窮状は百も承知、出欠を採る間ももどかしく、教科書数頁を一気呵成に講義し、級全員に二巡する程繰り返し発音の練習を命じ、終わりに宿題を渡す。出した宿題は次の日に丁寧に誤りを訂正記入され、点数まで入って返される。毎日同じことが続くのだから、先生もさぞかしお忙がしかつたろうと思うが、こちらは息つく暇も無い。それでもよくしたもので、一ヶ月もすると字引が引ける様になり、テキストも讀めるから不思議である。この難行の末、六月の学期中間試験では組の大半が六十点以下の注意点という始末。

藤野先生からは真赤に訂正された答案が一人一人に渡され、学年末試験で注意点が一科目でもあれば落第、留年ですと声を大にして念を押された。こうなれば遮二無二突破するより仕方無い。高島先生は教頭の古参教授だが、テキストはゲーテ自叙伝。授業のスピードに年齢は感じさせない。書出しの三行を讀解するのに一晩かかったことを覚えてゐる。ドイツ文法について著書があるという小林先生は、外国語は文学書の記事を正しく音讀することによって理解出来るものだとお説で、テキストのロマンをさらさらと讀んで下さるのはよいが、全文を訳してはくれない。

質問するとヴォルトゲフールに適合する日本語が無いからと仰言る。後でその部分が試験に出たから私なりに訳してこれで宜しいでしょうかと先生に渡したら、先生は一讀、本当の訳文には成つていないがまあいいでしょう、と受け取って窓外に眼を転じられた。その無愛想な横顔がとても印象的で、高校の先生は立派だな、と思ふと同時に外国語のヴォルトゲフールまで理解するなんてことはその国に住まない限り到底出来るものではないと考えるようになった。

哲学者である高橋先生のテキストは、アリストテレスの「精神について」の独訳書で、中学生程度の頭脳にはドイツ語と内容のダブルパンチになった。上級になつて先生の哲学の講義を受けて初めて理解出来た。

この様な諸先生のドイツ語時間の中で、カルシュ先生は一種の救いであつた。灰色の軍服の上に教授ガウ

ンを羽織った大柄な先生は、教壇に上ると先ず笑顔で頷き点呼を始めるが、名称は諳んじている様で、生徒一人一人の顔を見乍ら呼名し最後の名の者にゆつくりウントをつけて呼び、またにつこり頷く。テキストは無く会話であるが、ポイントには英語、日本語を交えて、必ず判りましたか（フェルシュテーエン）と念を押す。お話の内容はドイツの地理、歴史、ドイツ人の物の考え方、政治、宗教等で、わかり易い。時には国歌からリートまで教えて頂いた。ローレライ、リンデンバウム等。Rの発音の柔かい美しいドイツ語で、先生のお話では、何処の国でも、言葉は地方によつて違いがあるものだが、ドイツではドレスデンの言葉が最も美しいとされることだ。「出雲の日本語はどうですか」と質問した。

かくて二学期ともなれば、ドイツ語はもとより、学校、町にも馴れ、友人も出来た。松江は湖畔の町、堀割の多い水の都でもある。学校の長艇を出して市中をめぐり、湖上の嫁ヶ島から莊厳な落日を眺めて感激したり、クラス会、ストーム。自由な校風、暖かい市民の寛容の中で、若人の楽しみは限りない。寮歌にある通り「三春転た夢の裡」であつた。

二年生への学年末試験では、例の注意点で、四十人中十人が留年、上から十一人落ちて来て勘定が合ったのには驚いたが、主因は微積分数学でドイツ語ではなかった。数学はいつまでも試験での致命的科目である。カルシュ先生は賜暇で一時帰国されたが、再び微笑と共に教壇に戻られ、文法の藤野先生もすっかり優しくなつて、お好きなヘッセの文学を講じる。

勿論高等学校教育の主眼は語学でなく生徒の人間形成にある。文理（科）を挙げて多くの良師から極めて有益な教育を受けた。国文では、平賀先生から新しい和歌について、水木先生の俳諧、川柳の講義等は生徒にも人気があり、後半その途で文学博士となつた級友もいる。理科の教授も文科生への講義には特別な配慮があつた。動物学の柳井先生は、人間の歴史、進化、遺伝、染色体、今の生化学の基礎講義であり、大いに啓発された。物理学の松原先生は「物質とは何か」とのテーマで分子、原子論に及び最小単位である原子の解明は神の手にあると結論された。先生は敬虔なクリスチャンであられた。この外、日本、東洋、西洋史についても、中学校では教えられなかった史実について知り得たと共に、歴史の正しい受取り方についても懇々と教えられた。青春の人間形成にとつて、本当にありがたい学校あつたと感謝している。この稿に

挙げた先生方の總てが故人となり、私自身もやがこの高校の思い出と共に自然消滅に到るであろう。已むを得ない時の流れである。

岡崎道夫（九期文乙）（平成十三年五月記）

### （二）カルシュ先生断想

次に、鳥取県出身で十五期理乙、昭和十三年卒で現在もお現役の千代賢治に自らのこれまでの歩みとカルシュ先生の思い出を語っていただく。

饅頭屋に入って饅頭をたべるのも、映画館に入って映画を見るのも、停学覚悟だった地方の旧制中学出身者にとって、旧制高校の生活はめくるめく変化であった。その一つが経験したことのない外国人からの講義を受けることだった。

「ダスイストダスフェンスター」これがドクターカルシュの第一声だった。窓を指しながら繰り返される中で、どうも窓のことらしいと感じたが、正に紅毛の駄舌だった。社会人になってから、訳の分からないものに対して本格的な学問でない単純なことを繰り返せたエネルギーは一体何だっただろうと考えたことがあった。

また先生は教室では、一切日本語を使わなかった。お嬢さんが小学校に通っておられたことでもあり、多少はご存知だったはずである。コンパ等でご一緒した時の我々の話はある程度わかっておられるのではないかと感じたが、我々にはすべてドイツ語で話す建前を自分で守っているように感じた。

高学年になってからだと思うが、当日の終業後クラスの連中と高下駄の齒を鳴らしながら下宿へと向かっている時、ふっと気づくといのが私で、何か話さないと悪いと思い、「ツアラトストラかく語りき」（ニーチエ）に入った。直ぐ近くにいたのが私で、何か話さないと悪いと思い、「ツアラトストラかく語りき」（ニーチエ）のいい解説書はありませんかと話しかけた。先生は一瞬驚かれた感じと共に我が意を得たりという調子で、日本で翻訳されているかどうか分からぬが、こんな著者のこんな本がある。また別の著者の本も挙げられ、

岐れ道まで先生は情熱的に話した。先生の話は全部は分からなかったが、先生から一生懸命話しかけられ、エライ事になって私が困っているなという感じを出していた友人の顔が忘れられない。

ドイツ語担当の教授陣に、丸刈りの胡麻塩頭の小林教授がいた。順番に進められる我々のドイツ語の解釈の中で、適当な日本語が見つからない時は、身が教壇にあることを忘れ長考することがよくあった。「あとで念の為、カルシュさんに聞きます。カルシュさんがいるので我々は本当に助かる」と述懐されたことを覚えてる。

往事茫茫。カルシュ先生の哲学的立場などを詳しく聞いた覚えも無い。ただ靴の踵の音高く大股で正しい姿勢で歩まれるその印象がカルシュ先生の全存在を示唆しているようにも思われる。千代賢治（十五期理乙）

### 十七・三 政界へ

#### （一）硬骨漢政治家

赤澤正道はカルシュからみて政界を代表する最初の生徒である。彼は思ったようにことが運ぶと周囲の眼を気にせず喜びを表現し、気に入らないときには相手の様子に拘わらず嘯みつく天衣無縫のひとであったという。そして、また夫人が病気の時など枕元で三晩徹夜の看病をした純情な愛妻家であったという。このひとが云ったことに、「議員が派閥をつくるのは、親分から選挙のとき資金を貰いたいのと、もう一つは人事で早く大臣、政務次官、常任委員長などにして貰いたいためだ。このほうが大きい。そのため国会議員は国政にはげむより、せっせとゾウリ取りをして、論功行賞にありついた方が出世が早いということになる。かくて政党の非近代的状態が生まれてくる」がある。時を経た現在でも、全く同じ論議が行われていることがこのテーマの空しさを物語っている。

編者が学生運動を経験した頃の話である。「大人の世界」に批判的な立場から世直しを我々若者が提言したの思い出す。自分たちが若者であった年代と当時の若者の年代を置き換えれば、見方はよく類似していて、ほとんど何も変化が無かったといえよう。彼は高校生の頃松江高校を訪問した現職大臣と渡り合った硬骨漢



であつたという。

大学在学中は外交官志望であつたが、卒業時に土建業の父がなくなり家事に従事した。昭和二十一年戦後第一回衆議院議員選挙に初当選。自民党近代化のために幹事長に直属する人事局が生まれ、その初代局長になった。派閥人事を解消し、人材の適材適所主義を貫こうとする考えである。そのために、彼は組織調査会の中で党員の勤務評定のあり方を検討したいと当時の抱負を高らかに語っている。

なお、カルシュと接触し多大の影響を受けた同年代の著名な政治家がいる。自民党の代議士で要職をつとめた福永健司と細田吉蔵である。カルシュの直接の生徒ではなかったので深く言及しなかったが、カルシュ先生はやはり思い出深いひとであつたようだ。

## (二) 高校中退の秀才

次に直接の生徒であつた高田富之<sup>8)</sup>の経歴と伝聞を述べてみよう。彼は埼玉出身の九期文乙卒で松江高等学校中退後東北大法文法を卒業し、通算十期衆議院議員 共産党、後に社会党に所属した議員であつた。

思い出は何といつても『カルシュ先生』だ。授業前の点呼「アッサヒ、アダチ、イシワラ、イジユミ、イジユン……」を思い出すね。辻が言いにくかつたようで「ジチ」と発音したのではないかな。ドイツ語はよく勉強したね。一年生の秋恒例の弁論大会が開かれた時にドイツ語で演説しようと思つて、大新聞の社説に出た「階級闘争の弊害」を自分なりに翻訳して小林先生に見せたら全面的に訂正されたものの、とにかく全部暗記して「ファルシュ、フォン、クラッセンカンフ」の題名で演壇に立つて一席ぶつた。これをカルシュ先生が聴いていて「シェーネ、レーデ、ゲマハト」と大変褒められた。戦後に同じ衆議院議員として一緒にいつ語で演説するんだから驚いた奴だよ」とよくいわれた。

<sup>8)</sup> 埼玉県に高田健一が父富之の記念館を創設している。

大人になってからの私の人生は松江の三年足らずの高校生活に重大な源をもつ。戦争は、松江でも苦しんだ喘息の持病で入隊と戦死を免れて、戦後より私の天職となった衆議院議員も松江で形成された政治感覚により共産党代議士から出発して、後に社会党に移って通算十期、二十九年五ヶ月を政治と共に過ごしてこれた。松江では私の一生の中の『初体験もの』も色々ある。実に懐かしい。しかしこれらは密かに私の大事な秘宝としてずっと胸中にしまっておくことにしたい。

高田富之（九期文乙）

#### 十七・四 法曹界・社会活動へ

十期文乙の矢崎憲正がカルシュ先生に関する思い出と自らのこれまでの歩みを語る。彼は京都帝国大学法学部卒で広島高等裁判所長官を務め、退職後は弁護士として社会活動していた。

#### （二）カルシュ先生との触れ合い

若松秀俊教授が編集したカルシュの追想のなかに、奥谷の洋館の写真があった。まことに、なつかしい。この洋館は表通りにあり、私は、すぐ裏通りにあった知人の二階に下宿していた。春の夜中に、ドイツチュランド、ドイツチュランド、ユーバーアルレスの大声がしたので、下宿から出てみたら、学生二人が肩をくんで先生のお宅の洋館の門前で歌っており、間もなくカルシュ先生が出て来た。学生は卒業間際の三年生と思われた。カルシュ先生を慕うてのことなのだろうが、先生は夜中のことだし、そんな大声では近所の迷惑になるからと諭していたように感ぜられた。奥谷には先生のお宅が多く、私の下宿の隣が高橋敬視先生のお宅で、先生はいつも机の前でペンを走らせておられました。英語の内山敬二郎先生、独語の小林松次郎先生、物理の山口鎌次郎先生のお宅も近くにあった。

私は裁判官になり、東京地方裁判所に勤務していたが、昭和十七、八年頃だったか、大蔵省主計局勤務の若槻克彦から電話があり、これからカルシュ先生に会いに行こうということであった。若槻は淞高十期文乙

の同級で、クラストップの秀才で、三年ほどドイツに勤務して大蔵本省に帰ってきたことであつた。カルシュ先生も若槻は良くおぼえていて、なつかしく話しかけていた。先生は元気で精気にあふれているような感じを受けた。私は高校三年間を剣道と飲み屋めぐりに熱心で、ドイツ語の方はなまけがちだったが、先生は私の顔をうつすらと覚えていてくれた。先生の温顔は、むかし通りで、ニコニコとし、元気にドイツ大使館で活躍しているように見受けられ、私共の訪問をよろこんでいた。

若槻君はその後に広島に転任したが、あの原爆で亡くなった。将来は大蔵を背負うひとりになると思っていたが、残念至極である。私にはカルシュ先生と若槻の顔とが、重なりあつて浮かんでくる。先生に署名して頂いた御一家の写真と同封し、先生と若槻の冥福を祈っている。

矢崎憲正（十期文乙）平成十四年一月六日

次の永井隆については、いろいろなところで様々な話が紹介されているので、松江高校の当時三奇人と云われた福田、酒井との交友からの物語を載せよう。

## （二）奇人の永井君

私は永井隆と、松江中学で同学年だったので、本当は一年のときから顔は知っていたわけだから、今記憶に残る最初の印象は、確か三年のときだ。作文がうまくて、その作品を吉川先生が読みあげられる度に感心したものだった。教室の席も、私の斜めうしろで、当時成績のいい者程うしろに居ることになっていた。中程にいた私の一すうしろだから、大した秀才ではなかった。然し、変に大人びていず、のびのびとした子供っぽさが好感をいだかせ、そのふつくりした暖かい情感のこもった作文に魅せられて、この人の存在に心をひかれたのが、当時の私の状態だった。

義兄が「お前は松江高等学校で、永井博士と親しくしていて、三奇人の一人だったそうだが本当か」と、眼をまるくしたことがあつたが、この三人の交遊は深かった。三人一緒に鰯淵寺へ紅葉を見に行ったときのことだと思ひ出される。丁度小雨にあい、紅葉の色はかえって美しく冴えていたが、たまたま寺の入り口に立

つ地蔵さまが、赤い紅葉を背景にしているのが永井の目にとまり、「このお地蔵様は美男子だ」と言ったことに、岡田の論難がひっきり、また大論戦がはじまった。「美とは何だろう……」

美についての論争がはじまり、美しい紅葉の鰯淵寺から山超しして、遙勘峠にのぼっても、まだつきない。

「まあこゝらで腰降ろそう」と、道端へ座って議論をした。この為松江への終電におくれて、岡田の家へ泊めて貰ったのだ。この時の思い出は、永井も強く印象を残していたらしく、後年、彼の長崎の病床から岡田へ漫画入りの手紙が届いている。私も心の底が疼くような、楽しい思い出だ。そのうち永井は、平賀先生の短歌会へ出席したり等して文学青年的な発展をする傍ら学生スポーツにも関係し、開校後日が浅くて、整っていない学校の運動クラブを充実しなければならんと言っていたが、やがて籠球部を新設した。この時、最初は同好者として誘われて仲間入りしたが、やがて彼らはユニホームを着て、新クラブがスタートした。次に大弓部がまた彼らによってスタートした。私もすすめられて、弓を一寸ひいてみたが、弓弦で強く耳を弾いて吃驚して、それでやめてしまった。永井君はこうして、大いに人の世話焼きをやり、社交的な発展をし、クラスの人気者になり、私達二人の眼を見張らせたが、それでもこの三人の交遊はちつとも変わらない。

(中略)

突然永井君が立ち上がった。そして言った。演説口調である。

「諸君。我々は今日これから、それぞれの運命に従って、或は西へ、或は東へ、別れていくのです。思いでの深い今、過ぎ去った年月を振り返ってみましょう。私達は三年前の春に会いました。それからあの狭い……」

(中略)

永井の出征もあり、手紙がなしの礫になり、音信が途だえ、住所不明になった。思い出しても手紙が出せず、終戦を迎えたのであった。再び手紙のやりとりがはじまったのは、終戦後、彼の病臥後である。新聞で重病を知り、友人の医者、白血病、レントゲン照射過多と、専門的見解をきかされて、事態の重大なことを知った。私はじっくり彼のことを考えてみた。

科学の未知の世界をまさぐるには、身の安全を保証されない突込みの要求されることが、間々ある。勿論保証の制度はあろう。然しそのような制度は経済的見地からかなり、貧弱で、新分野では野ばなしの所が多い。こんな分野での科学者はよく挺身突込みをやる。即ち身の危険を承知して、新分野開拓をやるのである。これが時に優秀有意の学者の犠牲という惨事を起している。古来このような例は、珍しくない。こんな立場に当面した彼が、持ち前の情熱に身を焦がし、勇んで突込んで行ったであろうことは創造できる。彼にはそんなことがありそうだと思っているうちに、好んでやったのではなかるうかとさえ思うようになった。殊にこのことが精神尊重特攻礼賛の戦時中のことなので尚更その感が深い。

ここで私の思いは更に進んで昔を思い出した。高等学校のグラウンドの隅ではらばい乍ら、彼が話しかけ、私が「情熱を化学に生かすさ」という返事で信念を言われた時、彼が「そうか」と簡単にだまったことを思い返したのである。彼が自分の実践をこの私の言葉にのせたのではないかと考え愕然とした。科学を軽視したのはまずい。科学は峻厳なんだ。行つて見舞いをしなければならぬ。松江の同窓生とも話し合い、出来るだけの援助をしなければならぬまいということにした。

終戦で打ちのめされた私の生活は、経済的余裕がなく、とても長崎まで行けない。とに角、余裕をつくつてからと、あせるだけだ。尤もひるがえつて考えてみよう。私が行つたつて死病がなおるわけではない。それでいて、行かねばならんと思う心は一体何か。新聞記事や手紙を見ると、盛んに死ぬことを豫定してかいてある。成程、白血病は死病だそうだ。彼が科学者であり医者であれば、この病気がとりかえしのつかないもので、先の見えているものだということがはつきりしてるのだろう。然し私はどこまでも夢のような高校時代の彼を思つた。不能を知らない青年時代の彼を思つた。

学問は未知の世界を開拓するのが仕事だ。情熱は、未知の世界へ、学者をかりたてる鞭なのだ。この情熱に人間のモラルでもつて、誤りなく方向づけて、身を挺してこそ本当の学者ではないのか。その学者が誤つて業病にかかり、死を豫期するのは仕方がない。これを豫定して作文し、これ程大勢の人に読ませることは、私にはどうもうれしくない。畏敬する永井君の為に、この私の意見をつたえるべきだと思ひ行きたかつた。

然しまた考えてもみた。病苦もある。肉親に対する限らない愛情、運命と諦めても尚残る愛情の悶え等考えてみなければなるまい。こんな所へ私のような元気な者が意見を言つて、諦観から呼び戻して、果して気の毒なことにならないだろうか。私は迷つた。然しやつぱり、大切な友の貴重な残り少ない人生の為にと思つて、手紙をかいた。「神様の奇蹟を信ずる心で、生きることを考えて呉れたまえ」

然し彼から来た手紙は実に美しい諦観で一杯だった。

……キュリー夫人も、この道を行つた。それからブランクも死んだしらせを見た。

今日もまた 生きてめざめぬ

玉の緒のいのち尊く思ほゆるかも

……

しかしねえ、大辞典は重くて、手であつかいかねるよ。……

度々手紙を書いたが諦観はかたかった。時には私を皮肉つても来た。これは程々に負けねばならない。闘病生活は、科学者永井君にとって精魂傾けた大仕事なのだ。彼をまもらねばなるまいと、心にきめた。彼の心の平安を乱さない為には、曾ての友の私が、あまり元気のいい手紙をだすのも控えた方がよくはないだろう。何という情けないことになったのだろう。情熱に身をまかせ、未知の世界にとびだし、災難を受けて破壊して行く彼の友の一人として、悲しくも思い、口惜しくも思つた。「どうして一寸した自重をして呉れなかつた……」然し業病にあえぐ友に、これが言えない。

昭和二十五年十二月やつと余裕を得て博多へ行き長崎まで足をのばした。終戦後陰うつな山陰にいた私に、この旅は明るい。殊に長崎に近づくとき車中の人情も暖かい。

窓外には蜜柑の山がつづく。餅つきに三人が杵をもつて、臼のまわりをまわり乍らポンポンと調子よく搗く風景も珍しく車中から見える。昔、青年永井君がとおつてきたにちがいないこの道を思い偲びながら長崎へついた。

原子野に立つ浦上の天主堂を見、如己堂を童児にきいて、マリア様像の立つ高みに、それを探しあてた。

離れが病室ときいていたので、いきなりそれとおぼしい部屋の前に立った。

「アア」私は思わずうなつた。「高熱の為面会謝絶」私は溜息をついた。「たつた障子一枚なのに……」「ヨウ」と言つていきたい衝動を抑えて、別棟のおも屋で弟さん夫妻を訪ねた。見舞いのべ、看病のことや病状をきいた。「要するに栄養物をとつて造血して、やつと生きていますのです。それでもこれだけ生きるのは例のないことなのだそうで、これは兄の信念の力によるものだと思います」ひたむきに精進しているその生活は、如何に信仰の力と言われても、私には科学に精進している姿に見える。私はここで強引に面会をお願いしないことにした。残念だった。然しこれが、科学する友として、とるべき態度だと心に言いしかせた。

闘病中も尚童心を思う彼の心は、病室の傍らにある子供図書館に、はつきり見える。弟さんはいう。「近所の子供の出入が多くて、病氣にわるいのだが」

私は昔の彼を思った。童心をこよなく愛した彼を。

「変わらないなあ」しばらく話してから、庭に出た。真白いマリア様の像の前で心を宥め、多分永久の別れになるだろう永井君への訣別の心をこめてみつめた。すると寒空にたつこのマリア様の真白い、気高い顔が、私にほほ笑を見せている。よくみるとこの面差しが永井君のそれに似ている。私の訣別を受けているのだ。私の胸はこのとき、ときめいて、身体中の血が暖かくわいた。私はじつと、ときめきをおさえて、まばたきもせずこの顔をみすえた。

「そうだ、昔の赤ら顔の彼が、これだったのだ。そして、紅葉をバックにした鰐淵寺の地藏様も……」

私は寒さを忘れて立っていた。心ばかりのお見舞いで、弟さんに別れをつげた。言うべきことを言うことの出来ない人間の訪問はこれ位で引き下がるのが適当と考え、昔の友としてこれが正しいと割り切り、去りがたい足を長崎の町へ向け、如己堂を去った。

理屈つけて思いきつても、私の胸はそう簡単にはおさまらない。理科の化学専攻のこの私が今日は、大きな造船所の前を通つても、うつろな眼をして通りすぎる。本当は、今度の博多出張は海洋関係の研究連絡だったのだが、有名な海洋気象台へ寄つてみる気もしない。この世から消えるらしい永井君への思いが大切に、とてもそんな脇眼がふれないのだ。

汽車は夜半に出る。それまでこの胸を抱いて、町をさまようことにした。まず、浦上の天主堂へ引き返し、それから、はじめてのこの町にでて、いろいろの風物を見ることにした。私の友をうばったこの長崎の町を、よくよくみたいのだ。船着き場にも行ってみた。寺の門もくぐってみた。オランダ文物の遺跡らしいものもある。町には何となしに異国情緒があふれている。丘あり埋立地あり、雑多なものが入りこんでる癖に、東京や大阪のように荒々しくない。眼の光ったトゲトゲ人があまり見当たらないのである。西海の暖かさからくるものか、歴史の古さからくるものか。そのように雑多な風習の人々が随分開放的に暮らしているらしいのに、ここの密集群居がうまく落ちついている。松江等では考えも及ばない程雑多なものが、隣合わせていながら、夫々の生活を、夫々自己流に展開している。玩具箱の中をみ、雑然としたものがキーキー声をあげずに、うまく暮らしているように見えた。二十数年前、永井君が童心を抱いて、ここにいった気持ちに何かピンとくるものがあつて、次第に成程と思つてきた。

日が暮れて、雨が振りだしてきた。雨宿りする所も一寸ないし、駅は遠い。思いついて映画館をさがしたら、丁度「長崎の鐘」がかかつていた。「これは」と思つて入った。元松江の映画館へかかった時、是非見ようと思つたが、どうもその時の看板絵の醸す、永井君に似せた異物のイメージに辟易し、とうとう見そこなつてしまつたのだつた。この時の看板絵も決して上等ではなかったが、然し今度は、私自身の状態がまるでちがう。浦上で病死の床に喘ぐ友への思いは、たぎつて平素の気持ち吹き飛ばしていた。しばらくは画面にでてくる、彼永井君によくぞ似せおつたこの異物、それに安っぽいムードをさそう伴奏音楽に、気分をこわされながらみてるうちに、次第に筋に引き込まれるのだつた。場面は私の知っている高校時代をいい加減に素通りして、知らない長崎の生活にうつつた。こうなると、私の心をさすアラが見えなくなり、筋にたづなれて映画に心がけ込んでいった。初め嫌味さえ感じた俳優の演技について魅せられて、眼頭がじっとりして来る。悲しい友の話を、この映画で更に味い、いいものを、いい時見せて貰つたと思つた。気障な主題歌に追われて、館を出ると、外は雨が本降りだ。私は濡れるのをかまわず町へでた。傘なしで。どうせ汽車にのれば、暖かいから少々濡れていたつていい。それより、大切な友のゆかりの地に少しでもゆつくり名残をおしむことが大事だ。



夜行列車は、大して混むという程でなく席はとれた。やがて発車して、轟々と東にすすむ。ゆっくり腰かけて、眼をつぶったが、とても眠るどころではない。今日一日永井君を想って長崎をさまよったことが、一つ一つ頭の中を駆けめぐる。これを繰返し繰返し考えてみれば、いずれこの世を去るであろう永井君が、私の心に不滅の金字塔としてやきつけられよう。私はこれを心に期待し、祈りながら瞑想をつづけた。「ヨウ」といって、せめて片手位はのべて懷しがって呉れると思つて訪れた私だった。

一重の障子に隔てられ、マリア様の像に別れを告げ、町をさまよつて、昔の彼を偲びながら、映画館にはいつて、また彼の思いでのイメージに泣いた。「切支丹伴天連はええぞ」といつてとび込んだ、純情な彼が私と別れてから長崎で辿った道は、彼自身名誉市民であるにふさわしく、長崎の土地そのものに深く吸い込まれ、他処者の手の届かない所へ行つてしまったのだ。「会えなかったのも、当然だ……」

長崎の町が玩具箱のようにみえた。そしてこの町では、その玩具の一つ一つが、みんな大人の社会で、夫々魂をもち、眼をもち口をもち現代に息づいている。これが長崎を形づくっているのだ。

「長崎は、僕好きなんだ。いいところだぜ」といった。多感な彼が、何を考えていたかを思うと、幾多先人先駆者の血を吸い取ったこの地のサウルが、まざまざとしてくる。業病に喘ぐ彼の運命を遠くから気の毒に思い、同情し、しかも忠告がましい気持ちで来た私だったが、来てみればやっぱり昔のような畏敬の友だった。羨ましいとさえ思う。

考えているうちに、夜半もすぎ、車中の客は大半ねむりこけている。汽車は激しく蒸気を吹かせながら、冬の闇をついて東へ東へと驀進する。やがて茜色に明けそめるであろう、東の空をめざして。

田舎の大学から 永井隆君を想う 酒井勝郎

## 第十八章 湊校を思い出す座談会

岡崎道夫、白石磷、高田富之、増田輝男、松田美太郎、宮田正信、森山岩治

平成元年九月 大阪市北浜大阪俱樂部にて

今にして思う松江三春の花の影

—— 当時の世相・校風・先生・友人などを知る一助として ——

司会 白石——なつかしい面が揃ったな。始める前に一言。厚顔にも司会を勤めるが、これは入学間もなく学級総代の互選があつて故朝日重雄と俺が選ばれて卒業までこのクラス小使役をつづけたその延長ということでお認め願いたい。(異議なしの声)

それでは早速話題に入ろう。まず入学。

十八・一 何故松江高等学校を志願したか

岡崎——静岡中学のとき、当時静岡高生の次兄が「代数が弱いならその入試がない高校を受ければよい。中学生ではあるまいし親の許から通う必要はない、松江なんかいではないか」というアドバイスが原動力になつて受験することにした。

高田——僕は埼玉の深谷商業学校から受けるのだから当然数学をさける必要があり、弘前、佐賀と他にもあったが義姉が境港にいたので近い松江を選んだ。

森山——僕も数学コンプレックスだったから松江にした。大体母方の祖父小林竹陰が優秀な数学者だったことが周囲に知られていたために反動的に嫌いになつていた。

増田——私も同じく入試に数学がないことが主因だが、大都会嫌いだったせいでもある。試験問題は全科正

解だったと今でも確信している。

白石——昭和三年の秋当時すでに六十四歳になっていた老父が来春ぜひ『四修』<sup>2</sup>で高校をうけて入学せよ、との厳命。仕方なしに数学のないこと、中学の成績が良い学科の多いところを探したら松江しかなかった。俺の合格を父が一番喜んでくれたが、二年後にはその父は他界したので只一つ「始めて終り」の親孝行ができたことに満足している。

松田——二文乙佐中壮先輩のアドバイスで家から近い松江を選んだ。私は数学をむしろ得意としていたので、数学のない入試が十二倍余の激戦を呼んだことに却って不安を感じたが、『四修』だからと余裕をもって受けたのが良かった。大体私の第一志望は高等師範学校だったが、松江に入ったのでよく境港の実家に帰り、皆からまたオッパイかと羨しがられた。

宮田——僕は大阪育ちだから地方の高校へ行きたかった。「高校一覽」を眺めていて、しきりに遊び心をそそられた松江にきめた。その松江にはじめて着いた時、人力車にのせられて市内を走った初体験は鮮烈だった。今にして入試問題を省みると、現在の共通一次などとは天地の差があつて人間味のある全人格的テストであつたことを懐かしく思うね。

岡崎——成程ね、「脱数学」でないのが二人いたね。何れにせよ皆が全国最高の競争率を突破して顔を合わせるので、我々は得がたい友人に恵まれているといえる。(その通りの声)

皆さんも同感の人が多いと思うが、初めて見たその頃の松江は、前時代的のくすんだ町で、早春には雨が多く、何だか一人で住むことにたじろぎを覚えたものだ。私は入試後に大社詣でをして帰ったが、そのお陰で合格したのかもしれない。合格通知は慶応受験中に受けとつた。何だか淋しい気がしたがそれなら行こうかと腰を上げた次第だ。

それでは次に数学の話をしよう。

<sup>2</sup> 当時中学校は五年であつたが、四年で受験が可能であつた。合格すればそのまま高校に進学できた。不合格の場合はそのまま在学した。

十八・二 数学について

高田——何といっても僕が発言するよ。折角数学なしの入試で合格したのに神山教授から濃厚な高等数学の教科書を渡されて講義を受けたのだからたまったものではない。何ひとつ解らないばかりか、「方程式とは何のことですか」と質問したら数学嫌いの級友までがゲラゲラ笑い始めて、結局数学の神様の「ガウス」を通称にされてしまった。この綽名は白石あたりがつけたようだな。(笑)

増田——微分積分なんて一つも解らない。それで試験は徹底的に暗記してみた。ところが一、二学期は教科書の中で憶えていた個所がびったり出題されて数学の成績が他の学課より一番良い結果になった。それで、三学期は安心して白紙を出したがゆうゆう及第したという次第だ。(笑)

白石——暗記さえもろくにできなかったのに通して下さった神山先生に感謝している。

岡崎——中学校でさぼった代数の穴埋めにと分かって分かったやいなや高等数学を暗記で通ってきたよ。

松田——皆暗記でよくやったものだ。文科の一年生で微分積分なんて、今さら数学でもあるまいと何もせずにおいて落第した気の毒な男もいたよ。(誰だの声)

白石——その他の学科で何でも……

十八・三 その他忘れられぬ学課について

岡崎——青山先生の《歴史学》は中学時代に学んだ日本史・東洋史の概念を根底から変えたすばらしいものだったね。

それから松原先生の『物理学』で分子、電子、原子の話を聞いて大体どんな物かがわかった。

柳井先生の『動植物学』では、性の決定とか遺伝子とか今の生化学の講義は頭に残っている。

松田——そう、それに山口先生の『天文』、土肥先生の『化学』「エントロピー」の実験付講義は面白かった。『国語』の水木先生の百人一首と狂歌・川柳は忘れられない。

白石——先生のお名前がだいぶ出てきたから、次は先生の思い出についての話だ。

#### 十八・四 恩師についての回想

宮田——まず『平賀先生』。三年生の時の担任だった。大学進学 of 相談に行ったら大黒様のようなお体をゆすって「国文に行きなさい」とすすめて下さった。ある時教室で「茶化しては文学はわかりませんよ」といわれたお言葉が妙に耳について離れない。

『水木先生』は副保証人として三年間お世話になった。当然ご指導も蒙るはずにて北堀のお宅を訪問すると、大てい鹿野、白石、武内の級友が先生の麻雀のお相手をしている場合が多くお話を承る場ではなかった。しかし京大の国文科で卒論を書く時に「雑俳史」を題目にしたのは先生の感化によるものだった。そのため大変なお世話になってしまったが、その大恩にいまに充分にお報いしてないのを申し訳なく思っている。

『加藤先生』には原書でリーフマンの経済原論の講義をうけた。昭和十一年に大阪府の視学官になられ、当時ゆるんでいた大阪府の綱紀の引締め尽力されたが私個人も大変お世話になった。頭に特徴がある先生だ。白石——さっき宮田が話していた『水木先生』は俺も副保証人だったが、教室は典薬之介、川柳の教授で、お宅では専ら麻雀の教授で最初から手ほどきを受けた。特に三年生の時は下宿が北堀のお宅から八十米くらい、鹿野と同宿だけによくお呼び出しがあった。武内も常連の一人だった。川柳の我国最高の学者、全く勿体ない麻雀師範だった。

俺はそれにもう一人の先生の話がしたい。漢文の『佐川先生』。同郷の山口県人で俺の名前の「麟」を正しく「きよし」と読んだ最初の人で流石と思った。

黒板いっぱいに中国本土の地図を書くことで有名だが河川の曲り方など殆ど本物どおりだった。

岡崎——僕は今にしてもその佐川先生についてもっと「史記」の勉強をすべきだったと思っっているよ。「学成り難し」の言葉通りにね。そして次に『高橋敬視先生』について一言したい。

我々のうけた哲学の講義「ゼーレについて」はアリストテレスの著書。難しく分かりにくいものであったが、後日少々哲学がわかってきた時に高橋先生の話を思い出し、松江高校の代表ともいえる偉い先生の教えに感謝したよ。

森山——さつき学課のところで話が出た『青山先生』だが、すばらしい見識を鋭い口調で語りしかも何となくユーモアが漂う見事な講義であった。「君たちは及第したと思っているが六十点以上をとった者は数名だけだぞ」と一発かませ「支那非国家論」を堂々と展開して、ジョンやジャックなどが「ラフカディオ・ハーン」と呼ぶ小泉八雲は松江市役所に出した文書に「ヘルン」と自署している、ヘルンが正しいんだといった調子。漢文で佐川先生の得意の堯、舜、禹の講義をボロクソに批判をしていた青山先生の雄姿がなつかしいね。

増田——『山下左平先生』は心理学の教授で厳しい人柄のようだが胸の中は優しい温い心の持主であった。偶々私の叔父が東大で山下先生の先生に当るので私のことも蔭から色々気にして頂いたようだ。私の副保証人はさつき岡崎が話していた高橋先生で、私が一年生の三学期に病気になるって欠席日数が多く心配になって先生に相談に行ったら、「健康の方が大切だから無理せずもう一年残ってやりなさい」と超然とした哲学のご返事に大慌てで私なりに無理してやつとこさ及第したことがあった。その時の私を山下先生も気にしておられたらしく先生もホッとされて私の叔父宛に無事及第すと電報を打って下さって、却って私が慌てたという思い出がある。日教組の幹部に知せたい話だ。

岡崎——白石と小沢もたしか山下先生の温情に浴したことがあったのではないか。

白石——その通り。後のクラスメートと下宿の項でも話すが、二年の時は北田町で小沢と一緒に下宿生活をした。二人とも夜の町が好きで帰宅がおそくなり従って朝寝が多く二学期の試験で山下先生の心理学がある朝も目がさめず、大急ぎで登校したが答案を書く時間はない。それで先生に二人揃って「寝坊して遅くなつてすみません」と謝ると、先生は「二人とも病気だろう」といわれたので再び「いや寝坊して……」といいかけてると先生は話が聞えない様にして「病気なんだろう。病人の来るところではない。二人ともすぐ医者に行つて診てもらいたまえ」。これで先生の真情が胸をうち、直ちに知り合いの医院にいくと「いい先生だね」といいながら「偏頭痛」の診断書を下さったので急いで先生のところ以最敬礼して提出した。後で試験の結果

が最低合格点がついているのを見て小沢と二人で感激おく能わず先生の温情をかみしめた次第。(嘆声)  
次は級友の思い出だが、現存者は措いて物故者に限りたので悪しからず。

#### 十八・五 物故クラスメートを偲んで

松田——『竹下勇』だ。米子中学からずっと同じコースを歩いて湊高自習寮も同室の生活だった。品行方正で童顔の美少年のため上級生から目をつけられて誘われてカフェーなどの酒飲み屋に出入りするようになった一方、次第に左翼方向に傾き遂に三年生秋の提灯デモで首謀者と見られて退校処分になってしまった。後日いろいろ苦勞して九大の専科生から本科に移って法学士で卒業して宇治川電気に入ったが、召集されて惜しくも太平洋上で戦死した。皆から愛された好男子だった。

高田——東北大学関係の二人。一人は『朝日重雄』で松江からずっとあの温和な人柄にずい分世話になった。他の一人は『宇佐美清』東北帝大入学では先輩、柔道マンだったが、左翼で松江を放り出された似た経歴の主。戦後役人にもなったが、神田の学士会館で最高の囲碁の名人で七段だった。僕は八目おいてやったが三年前に他界した。体や面はこついが気の優しい男だった。

岡崎——入学最初に訪ねて来てくれた『伊集院郁三郎』、『杉山一太郎』の兩人がなつかしい。二人は北三寮七室の住人だったので私もよく行つてストームまで一緒にやり園山寮主任に嫌われる因を作った。杉山は戦死、伊集院は東大から五十年七月の逝去まで仲良くつきあつてきた。

白石——一緒に下宿した二人と、卒業後仕事で世話をかけた一人について話しよう。二年生では『小沢精一』が同宿人だが、皆もよく知っている多喜子夫人との恋愛結婚で名をあげた好男子で思い出はつきない。三年生の同宿は『鹿野明』だ。教室の席も「シカノ、シライシ」と並んでいた。湊高には珍しい大連一中の卒業生。気持ちのいい男だった。後の下宿の項でまたこの二人の話をすることになるが、宮田からも色々話があるだろう。卒業後仕事で世話になった男は三和銀行で若くして常務に進んだ『田中収』。仕事のしすぎで昭和五十年に入院。秋の臨終一週間前に見舞いに行ったら「仕事より先ず自分の健康が大切だぞ」と握手しな

がらの話が『収』の遺言になった。

増田——一年生の時に質屋の効用を教えてくださいました同県人『大日方』。二年連続ドツペった勇士だった。もう一人は『松浦安一』で共にドイツ語の成績不良者、小林先生の試験の前夜一緒に勉強をはじめたのは良かったが、すぐ寝てしまつて当日は白紙答案を出したら教官室に呼ばれてこつぴどく油を絞られた思い出がある。提灯デモで竹下同様退校処分、後に戦死した。全く善人の快男子だった。それに忘れられないのは数え年十六歳で入学した秀才の『辻久一』。驚いたね。

森山——その『辻久一』だが、クラス一番の若年、クラス一番の学業成績。巨大な頭に強度の近眼、上体も前屈しても手の指先が膝までしかつかない固い体、五十頁くらいのノート記入文なら見ずにその通りが何時でも書ける、漫才のレコードは二回かけたらずに真似が可能、毎夜寝る前に小説を一冊必ず読了して筋書きはすぐ書ける。ヘビースモーカーで映画娯楽論にこだわった異色秀才、語学は短時間でマスターする天才で兵役で上海にいる時二週間の研修をうけた中国語で間もなく通訳までしたと今でも伝えられている賢人が私たちのクラスメートの一人だった。(惜しい男だ!の声)

宮田——『小沢精一』、中学の一年先輩で元氣なもの。出征の際大阪ガスビルで在阪有志が集って壮行会をした後、夕闇の御堂筋を北へ歩み去る後姿を『竹下勇』らと見送ったのが最後。その竹下もしばらくして三宮駅で送られて出征したが、二人とも南溟に鬼人と化した。いずれ劣らぬ純情正義の熱血漢だった。惜しみても余りある友。

次は『鹿野明』だが、戦争で一番貧乏くじを引いた男といえる。彼の思い出を書けば一冊の本になる。重傷の不運にもめげず後半生は郷里津和野の町長を二期つとめて貢献度も大であった。良妻良子に恵まれた生活は最も幸せな時期であつたろう。一つ彼の友情秘話をきいてほしい。私は戦後山口市にいて彼と行き来していた時に塩が不足しているのを知った彼がある日リュックサックに一杯塩をつめて戦傷の不自由な体で山口まで運んでくれたのである。私は嬉し涙にくれた。その彼の葬式には増田と二人で参列したが、もう去年のことになってしまった。

次に『多久和興』、クラス一番の変り者だった。京大在学中のある日、新京極でばったりあつたが同じ文学



部にいながら久し振りに顔を見たので「どうしてる」と声をかけると、「歩いとる」の返事、二の句がつけなかった。戦後に山口在住の頃この男一晩とめろ、とやって来ただけで消息なしだったが、後で聞けば神戸少年鑑別所々長を最後に引退して松江に帰り数年前に逝去したとか。

白石——次は自習寮と下宿の話だ。

#### 十八・六 自習寮と下宿の話

松田——竹下勇と同室から始った自習寮の生活で忘れられないのは昭和五年に寮に払っていた食費が十五円から十二円に下がり小遣金が三円も増えたことである。当時寮の食堂の担当者は八期理乙の田村忠雄さんで賄側との長時間に亘る交渉において二割

値下げを要求して譲らず理をつくして説明して相手の説得に成功したお陰である。その時の田村さんの言動は実に立派だったことをよく憶えている。彼は当時陸上競技部の主将をつとめその年の夏のインターハイで松江高校が全国制覇した時の機関車的存在であった。(快男児だったの声)

宮田——一年生は下宿、二年生は寮、三年生はまた下宿で過した。入学時入寮許可を得たが畳がヘリのない荒いものに辟易して直ちに川津村役場裏の野津さん方に下宿をきめた。岡崎が橋の上から大声で呼んでいる声が今も聞えるようだ。二年の時は南二寮にある籠球部の一室に入った。三年生はまた下宿にして川津村の石倉さん方に行つて比処で先住の岡崎、森山と同宿になり同じ釜の飯を食つて卒業した。今でも松江に行った時には寄っているが、温かい心で歓迎してくれるのが嬉しい。

岡崎——三年間寮をやめて下宿住いした。入学直後は石橋の自転車屋の二階に一ヶ月いてすぐに北堀の材木屋に移ったがこれも一ヶ月でかわつて川津村の橋本地区の石倉さん方に入居して卒業まで落ち着いて過した。先住者の森山と一緒に三度の食事主屋の炬燵で食べて家族以上に親切にもらった。三年生の時に宮田が同家に来て川津の三人衆といわれることになった。寮の伊集院と杉山の室によく通つたのは前に話した通



自習寮(学寮)

りだ。

森山——もう私のいうことはないようだ。

増田——私も三年間下宿だったが、今から思えば寮なしでは高校生活の気分を半分しか味わってないような気がするよ。

白石——一年生は陸上競技部のいる北一寮で級友の『小山定』と同居でたのしかった。寮生活の思い出は『ストーム』と『寮雨』<sup>※</sup>。ストームで窓ガラスを割って園山寮主任から二、三枚の始末書をとられ、そのために翌年は入寮不許可で北田町に小沢と同じ下宿生活となった。二人とも『活見』、正直屋、東京庵<sup>※</sup>通いで、朝寝坊が多く

山下先生の試験におくれて温情に助けられたのは前述の通り。翌年は一学期が南二寮で二学期から北堀の水木先生の宅に近い持田久栄

さん方で鹿野明と同宿して彼の優しい心根に恵まれ、持田さんの親切なもてなしで卒業まで楽しい下宿気分を味った。水木先生の麻雀のお相手は前に話した通りだ。

高田——下宿ばかり。石橋通りにある寺の裏の小部屋に住んでいた。左翼に走り出した頃は当時非合法の共產党との連絡に使われていたなつかしい住いだ。連絡オルグの千金貫次さんが横の墓地进行「第二無産者新聞」等の秘密出版物をもって周囲を気にしながら訪ねて来てた頃を思い出して感無量の思いである。

白石——次は運動部に進もう。



木製仮橋に佇む高校生

※ ストームとは生徒たちが紋付き、袴に下駄履きの出で立ちで、「富士の白雪ノエ」を歌いながら宿舍の廊下をガタガタ音を立てて歩き、皆をたき起こす。記念祭の時などは街に出て、松江大橋の行き着くところ、たもとに交番があつて看板をはずしたり、お巡りさんを冷やかしたりする悪さをしたが、大目に見られた。酔うと二階の窓から並んで一階に放尿するのを当時『寮雨』と言ったそうである。編者が寮生であつた大学紛争以前はこのようなことが伝統として一部残っていた。

※ オデン屋（正直屋）、ウドン屋（東京庵）でいわば松江高校生の溜まり場でもあつた。自習寮には門限十時に遅れるとノートにその理由を書いた。その時の理由としての活動写真見物のことを『活見（かつけん）』といった。

## 十八・七 運動部の回顧

森山——スキー山岳部にいた。スキーでは大山、三瓶山に出かけたが、低いわりにはアルプスの景観があつて良かった。競技会は試験を前にした悪条件の下で行われていたが面目は保てる成績だった。

岡崎——馬術部で三年間楽しい部生活を過した。伊集院、朝日、理科の里村、落合、小林と一緒にだった。今年の四月に松江でOB総会が開かれて久振りに出席したが清水部長先生との昔話で若き日をなつかしむことができた。

白石——最初から陸上競技部に所属した。二年生の昭和五年に東京の神宮競技場で開催された全国高校大会（インターハイ）でわが松江が強豪六高を破り全国制覇し大優勝旗を松江に持ち帰った。これは淞高史上を飾る壮挙で今は亡き八期理甲一小川卓三、八期理乙田村忠雄両先輩の目覚ましい活躍によるものである。俺は次年度の主将だったが、痔のため大事な時に不振。だがこれを機に陸上競技にずっと関係し、今も各競技団体の顧問をつとめている。

増田——白石と一緒に陸上競技部に入ったが、運悪く傷、病に妨げられ応援部員に終って残念でならない。しかし好きなスポーツだったから部のOB会に毎年出席している。

松田——入学時勉強より健康と信じて自分の体力相応と思つた籠球部に入部。部員も少なく中学時代に無経験の私が二年生でレギュラーになったがこの年のインターハイで浦和高校に勝つたのが創部以来の最初の勝利であった。

ここにいる宮田がマネージャーだった。卒業後に変強化され昭和十年前後インターハイで毎年優勝候補になっていた。今OB会も行われている。

白石——次は当時の一般傾向として左翼運動が非法法の壁を少しづつ押しのけて頭を出し、高校界でもこの風潮が次第に高まりを見せて各校生徒に退校、停学等の被処分者が次第に増加し更には警察力の介入が見られて学外の左翼団体との関係が取締の対象となる傾向が出てきた。大都市程ではないが松江でも例外ではなかった。

従つて此処では、この左翼風潮の先頭部隊々長ともいえる高田元共産・社会党代議士がいるので、その頃の事情を話して貰おう。

# 十八・八 左翼風潮の所産的出来事について

高田——その話をする前に一言述べておきたいことがある。それは、《昭和四年のストライキ》のことである。これは行動は同盟休校であつてもその由つて来る事情は左翼的要素など全然感じられない事件である。即ち河合校長の教育勅語の読み違いを糾弾するストライキで珍しいケースといえる。僕たち一年生はただ上級生のいいなりに面白い気分です々騒いだ程度であつて、森山のいう純情そのものといえる。ただ僕はクラス委員に選ばれていた記憶がある。

では本題。私は入学まではクリスチャンであつたが、級友の同じ商業学校出身の寺本義雄が「高田これを読んでみる」と佐野学の「無神論」を貸してくれた。読むほどにだんだん心ひかれる状態となりこれが僕の左への出発になつた。それから進んでマルクス主義等の本を読みあさり、一年先輩八期文甲の石谷龍さんという恰好の指導者が現れて学校内外における具体的運動について立案し実行に移していった。校内の動きとして地下では既存の読書会を強化し、表立つては学校行事の理事改選に文科の理事に文乙の推薦で立候補することにし、文甲の吉田嗣延も立候補して争うことになつてから、文乙級友が集つて選挙運動を起して「学問研究の自由」「消費組合の創立」を主な目標として掲げ、前に述べた僕の下宿で応援演説の練習まで始めた。投票日が近付いたので一度校長室にデモをかけたところ案外激しいものとなつた。ところがこのデモに加わつていた吉田が突然立候補を辞退した。当然選挙はなく自動的に僕が選任され、理科からは最初から無競争の酒井正仁が出てこの二人の新理事が生まれたわけだ。僕はそれで理事選の公約だった消費組合の創立に力

☞ 後に京大哲学科に進学した中西利理（七期文乙）は、教育勅語を誤読した校長の排斥運動に首謀者の一人として七日間のストを決行、校長を缶詰にしたり、文部省に退官を直訴したり、裏切り者とわたり合うなど熱血漢の本領を発揮した。（川津富美子による。利理は彼女の夫の叔父）

を入れた。まず我々の文乙全員が協力を約束してくれた。文甲の細田吉蔵の応援、新理事酒井正仁が理科の方を受持つてくれたこと、など多くの校友が力を貸してくれたが、やはり一番の味方は文乙の力だった。かくして無事に消費組合が出来上って新時代たる昭和六年が始ったわけだ。ここで左翼的運動として関心が高まったのは読書会の動きであった。僕と一年上の石谷龍さんと二人で責任を引受けてからどんどん拡大され全校で七、八十名くらいの組織になり、文乙でもここにいる白石ほか十名くらいだったはずだ。

白石―その通り。しかし同志は殆んど死んでしまつて今何人が残っているかな。それはそうとこの十人程度の同志は十月に皆学校に捕われて停学になったが、『ガウス』はもうその頃には我々の前から姿を消していたようだが…。

高田―そうだ。前に云つた通り共產党などの非合法組織と地下で連絡しつつ運動をつづけている中に松江地方の左翼の一斉検挙が暑い盛りに行われて僕は松江署のブタ箱入り。しかし持病の喘息で入院させられて少し回復したところで検事局に廻され起訴猶予になったが、学校は取敢えず学年末まで停学、という処分であった。僕としてはもう松江には帰れないと覚悟し、専ら地下で非合法活動をする決心でその準備で密かに埼玉に帰って表に出なかった。それで級友の停学も年末の提灯デモも二回目のストライキも僕は関与していない。

白石―それでわかつた。今でもわからないのは十月の読書会停学処分を喰つたのは我々文乙だけで文甲も理科も処分者がいないことだ。何故だろう。それから、いま高田の話した夏の―一斉検挙は大規模であつて大戸幸平も宇佐美清も酒井正仁も時日はちがつても一緒にやられて学校も退校になっているはずだが、詳細を知らない級友が多いと思う。

次にいこう。テーマは、提灯デモとストライキについてだ。この二つの出来ごとは左翼的風潮をめぐつて学校と生徒の対立の典型だが、皆も思い出深いものであつても語らんとすれば同じ話で量も少いと思うので、このテーマは本件の立役者の一人者たる細田吉蔵が「忘れ難き人々」に詳細に書くはずの記事を後日読むことにして、ここでは終わりにしたいと思う。(賛成の声)

では次はたのしかった記念祭の話。

十八・九 三回経験した記念祭物語

松田―私たちが入学した年に浜口内閣が成立して国民に節約生活を強いていた。そして世界金融恐慌の波が押しよせ金解禁問題とも重って、農村も工業界も窮乏のため打つ手を失った惨状にあった。こうした内外苦難の中に一年生の記念祭をのんびりと迎えた幸せな我々だった。しかもその『出し物』は当時浜口首相の政策を皮肉ってできた「咲いた花でもしぼまにやならぬソウジャナイカ……緊縮しよう緊縮しよう」という流行歌を歌う仮装行列なんだから大したもんだよ。（「大学は出たけれど」の時代に、の声）

高田―金解禁をテーマにしたこの文一乙のショーの発案者は実はこの僕だったが、これに「レビュー緊縮時代」と命名したのは辻だったよ、流石だね。皆でハリボテのライオンを作ったりして大変だったなあ。

白石―二年生の時は理事選挙で忙しかったのか、前年のような凝ったものはやめて「一間の大魷」という展示物にしたよ。誰の発案か忘れたが、六尺の木の板を買ってきて赤インキをぬりつけて血にみせて板血を作り張り幕の中に展示する、人を食った見せ物だったよ。

岡崎―三年生の時に忘れられないのは、さっき話に出た読書会の停学処分が十人位もいて教室はガランとして淋しいものだったが、その最中に残っている連中で記念祭の出し物を考えたことだ。結局「ユングフラウ」という名の喫茶店をやることにして専門家に色々教えを乞い分担をきめた。その内停学組も次々に帰ってきてにぎやかに開店してみると予想外の好評で、大勢のお客さんに恵まれた。ために、あれがない、これが足らんと慌てたこともあったが結局、めめてみると相当の黒字なので一部を赤十字社に寄附し、残金でクラス揃って玉造温泉の長楽園で大祝賀会をやって本当に楽しかったよ。全くいい時代、いい学校だったなあ。

白石―次は大学及びその後の話にしよう。

## 十八・十 大学進学とその後について

岡崎——我々の三年生三学期は、提灯デモとストライキに荒れて延期になった二学期の試験がずれ込んで、それにすぐ続いて所謂卒業試験が行われ、その間を縫って進むべき大学の入試についても備えるという多忙な日程であって、大学を選ぶことについて色々悩んだ連中もいたようだ。しかし私は湊校受験の時に次兄からいわれた「高校は松江で親や兄弟と別々であっても、大学は兄達と東京で一緒になれば親父はそれで満足するよ」という言葉を守って最初から東大の経済に行くときめていた。兵隊や戦争の話はしたくないね。

宮田——私は平賀先生のアドバイス通り京大の文学部国文科に進んだ。入ってみると文甲の大坪、南波、藤原が一緒に皆真面目に勉強した。昭和九年は前述の卒論の仕上げに努力したが、まず松江で水木先生に一方ならぬお世話になり、八月から東上して上野図書館に日参した。九月に入り私は帰洛の日をきめ、離京際に東大組の岡崎、松田、伊集院の三人と逢う手筈をきめて楽しみにしていたところ、当日になって三人が急に午前中の講義に出ることになったので私も夜行列車の予定を変更しすぐ帰ることにして三人は東京駅まで見送ってくれた。これが命拾いになるうとは。近畿地方はその翌朝に室戸台風の襲来をうけ、私が乗る筈の夜行列車が瀬田の鉄橋上で脱線する大事故にて大騒ぎとなった。今でもこの三人を命の恩人と感謝している。森山——大学は東大法。時代は二、三人集って話しても特高の私服がつきまとう状態で、末弘教授の労働法をゼミにした僕はヘーゲル左派だということで、志望の三井鉱山は入社出来ず、三菱関係の米国系コーンプロダクツ会社に入り平壤に赴任してそこで終戦になった。それで話は終戦後になるが聞いてくれ。

平壤は北鮮の都となり僕たち日本人は北鮮保安署に捕われの身になったが、取調べに当って僕の蔵書を人民委員会が評価するところとなり、北方送りを免れて帰国できた。そして経済調査庁に身をおいていたが、その頃GHQのコーンミッションの長として前職会社の工場長だった米人が来日して僕の株が一躍上った。また僕がずっと勤務した行政管理庁の監察局長が、在学中に厄介かけた本富士署の当時の署長で、東大で騒いだ奴は君たちか、ということで大変親しくなれた。若し三井鉱山に入社していたら農林行政関係で認められることもなかったろうし、人間万事塞翁が馬の言葉が身にしてみている。

増田——我々文乙は京大に入った者が多く法、文、経に分れて角帽姿になった。私は経済学部に入ったが、特に経済には松江時代から親しくしていた連中が多く互いに下宿を往来して麻雀をやり、カルタをやり食事などで時々集って、松江の延長みたいに愉快な京都生活を楽しんだものだ。

白石——大学は増田の話と同じだ。一つ附加すれば京大の陸上競技部から熱心に入学を勧誘してくれたのも京都にきた一因だった。戦争中は兵役でビルマに放り出されて死ぬる目にあつたが幸運にも帰還できた。

高田——僕は皆さんのように順調に帝大に入り学士になったわけではない。前に話した通り松江生活を諦めて地下運動に専念する決心で一時帰郷したが、その脱出の時は文甲の細田から変装用の服を借りてバスで逃げる方法をとった。

その時は夕日に沈む嵩山を眺めて夢のような高校生活を振り返っていささかセンチな気分です涙を押えたのであつたが、全く大学生になれるなんて考えたこともなく、先の闘争生活の不安ばかりが胸にあつた。帰省した後しばらくして運動を再開して石谷龍先輩と連絡しつつ頑張っていたところで川崎警察署に捕つてまたブタ箱入り。やっと出してもらつて家業の呉服屋を手伝い機を見ていた或日、上野公園で宇佐美清にパッタリ会つた。僕のすぐ後で同じく退校処分になつたはずの彼が帝大の角帽をかぶっているので大変不思議に思い尋ねたところ、東北帝大に「聴講生」という制度があり、これに合格すれば勉強次第で学士になれる道もあるという説明だった。大学を諦めていた私は希望に燃えて、夢中で勉強して昭和九年に聴講生に合格した。

ところがその夏休み中に退学処分の命令が来た。松江高校に在学した履歴を隠していたのがバレたためだったが結局、宇野弘蔵先生等の「保証」が効いて「退学を命ず。但し宣告を保留す」に変わった。即ち執行猶予のような形で卒業まで退学の「宣告」がなく、その間に試験にも合格して本科編入を果し、法学士の肩書きもついて苦労つづきの卒業をとげた次第であつた。宇佐美清のお陰だ。(いい話だの声)

白石——まだ話はつきないが回顧すればきりがないのでこの辺りで、今にして想起する松江の三春について結びをつけたいと思う。



## 第十九章 旧制高等学校への想い

人生の大切な一コマであった。ロマンスもあり、良き先生、良き先輩、良き級友に恵まれて松江市民の純朴な親しみを肌を感じつつ過ごした三年間は最高の心の宝物という外ない。大人になってからの人生は松江のこの三年の高校生活に重大な源をもつ。松江では一生の中の「初体験もの」も色々あった。実に懐かしいが秘宝でもある。松江時代は自由の意味を知り友情の価値を悟った大切な期間であった。そして大人の世界に少しづつ足を踏み入れてすべてが楽しく希望にもえた時期ともいえる。今でも崇高のためになることがあれば、小さいことでも出来る限りしてみたいと思っている。今日までこうして生きて来れたのは松江時代に身についた自由の賜物と思う。そしてこれも「哲学とは哲学の歴史が物語る」としてアリストテレスを淡々と講じた先生の如き筋の通った教育の結果であったと思う。

旧制高校には独特の雰囲気があると思っている。それはデモクラシー自由の風を背景に、「末は博士か大臣か」という天下国家に必要な人物を養成する目的のもとに創立せられた帝国大学の予科的性格が与えられ、入学は難しいけれども帝大進学については他種校とは大きい格差のある容易性が認められていた。これがおおらかにしてユニークなエリート意識ともなり、今なお同窓会、クラス会、寮歌祭さらに各種競技別旧制高校OB大会等に脈々たる深い友情の鎖となつて繋がっているものと思っている。高等学校は全くだいじな学校であつた。

高校での自由の精神は当り前のこととして受けとめながら、三年間に生まれた友情の絆は、それから七十年以上の生涯の折々に、命の糧として、大きな支えとなつて今に渝らない。高校生にとつて初めて親の許を離れて暮らした松江の三春は正に我らの青春そのものであつた。そして美しい風土に築かれた高校の日々には、教室で、グラウンドでそして外の町々で、何ものにも換え難い友人との美しい交わりと最も貴い自由があつた。よき友人に恵まれた幸せを感謝したい。当時内外の社会には不況が拡がり、左右の争いが激化し、革命思想が頭を擡げ、治安維持法強化の所産的事件が続出するような暗い世情に傾きつつあつたけれども、成長期の我々は自我の認識を強め、少年から青年への精神的脱皮に進んだ貴重な時期でもあつた。こうして戦

十九・一 松江高等学校寮歌

争を体験した後、国家活動の多くの部面で活躍するようになった我々昭和初期の高校生の努力で、今注目されている昭和後期の経済的繁栄が形成されたといっても差支えなからう。その自負を支えるのが当時の教育環境であった。とにかく旧制高校は素晴らしい学校であった。

九期文乙の岡崎、白石、高田、増田、松田、宮田、森山らのことばから

あゝ青春そいのちなる

血潮高鳴る男子らの若く

雄々しくまなやけけ

焰と燃えて果てしらず

さわれ恵みの丘の上の

夢安らけと思出の

園にかがやける

大日輪のおごりかな



集会室 六期生アルバムより（澤田の提供）

千鳥城頭春たけて

若葉青葉に風薫り

紅蓮の色に燃え出づる

空道の湖の夕映えに

彼岸は遠く輝きて

幸い多かる吾が行手

## 青春の歌

目もけろげろと桃色の  
春のくも行く大空を  
仰ぎて立てる若人に  
三春清き花のかげ  
あこの若く円かなる  
丘にむすべる夢と夢  
永遠の命にとけてゆく  
行方は知らず霞むかな  
ふるさと遠く焰は落ちて  
四方の山脈むらさきに  
夕月登るみづうみの  
舟に遊子の思いあり

## 翠松廻る

翠松廻る山陰の  
古都の歴史は三千年  
文化起こりし源に  
冬籠もりせし文の花  
天地の精気受け伝え  
今を春辺と咲き出でぬ  
嗚呼山陰の一角に  
目覚めて立ちし健児らに  
日本海の荒波は  
高き理想の試金石  
鍛え上げたる腕には  
世の濁流ものならず



校舎から 六期生アルバムより（澤田の提供）

旧制高校時代の思い出が『嵩のふもとに』でも語られているが、この調査の中で最も重要な役割を演じた一人である白石より、自分の生涯への関わりから今の教育を考える上で何が素晴らしかったのかを拝聴する。

十九・二 ああ旧制高校！ 友よ！ 恩師よ！

ここで、僭越ながらも、この場を借りて、思い出と共に日頃の小生の胸の内を少し述べさせて戴ければ幸いである。

小生は昭和四年の高校入学から卒業までの三年間、級友の朝日重雄（戦死）と共に学制のクラス総代（別名高等小使）の役目を果たしてきた。この九期文乙は在学中にストライキを二度も経験し、消費組合を創立して従来の高値売店を追い払い、陸上競技部に二人の選手を送ってインターハイ大会の総合優勝を成し遂げたクラスであった。社会主義研究のための読書会に名を連ねた十名が学校当局から停学処分を受けて楽しめるべき記念祭には欠席を余儀なくされ、そして十一月には創立十周年の祝賀提灯行列の生徒群が、同じ祝賀挙行中の教授団の席に土足でなだれ込み、早速断行された退校・停学等の大量処分に全生徒の怒りが爆発して、皆が自習寮に立て籠もる第二回目のストライキに突入した経験をもつ。我が同期には超熱血漢が多く、重処分者も出たので団結も固く、処分撤回を叫んで年末の解散式まで頑張った。そして共產主義者と警察から睨まれた優秀な二人が地下に潜入して遂に正式卒業を逸し、この結果入学時は四十名だったクラスメートも卒業前には二十八名に減少し、淋しくはなったが最後まで仲よく松江を楽しんで別れたユニークなクラスであった。

このような雰囲気の中で三年間もクラス総代をつとめた二十歳そこそこの私がどんな人生勉強を強いられただのか、そして昭和初期の古い勉強が今の老人生活をどう左右しているのか、の二つの問いに対する答えは難しいものではないだろうと、同じ道を歩んだ同期生とともに後世の人々にも伝えたい思いである。

最後に、小生が七十余年前に前記の「高等小使」であったことが、困難なこの仕事の推進にとって天が与えた幸運であったと若松氏が何度も何度も繰り返し返して、語っていたことと、かつて小生をその「高等小使」に選んでくれた我が同期生を最大の誇りにして、胸を張って読者に訴えたいと思

いながら、筆を置くことにする。

九期文乙 白石磷

十九・三 私も旧制高校生でした

次に他の高等学校卒業生でカルシュと交流があつた加納の言葉を紹介したい。

美しい松江でカルシュ先生とともに多感な旧制高校時代を過ごされた松高卒業生の方は幸せである。総じて旧制高校卒業生は現在では大部分の方々は七十歳を遙かに越えておられ物理的に遠からずこの世から姿を消されることになるだろう。私は旧制高校とドイツおよびドイツ語との関係は極めて重要であり、此処にその一端を記述して置くことは無駄では無いような気がするものである。旧制高校の授業内容は語学の時間が圧倒的に多いことである。甲類(英語)、乙類(ドイツ語)、丙類(フランス語)を問わず少なくとも二ヶ国語を含めて一週十数時間に及ぶのである。入学試験も現在と異なり学力試験以外に内申書審査、身体検査が課せられ、その上にM検なるものがある。激烈な入試にパスした生徒諸氏教官の先生方からは旧制中学時代と全く異なり、紳士扱いされる。また、一年生は全寮制であり、生徒諸氏の大部分は家庭環境も良く、心身共に国の将来を担う者としての矜持(現在の貧弱なる学歴エリートとは全く異質のものである)を保ち、社会的にとくに地方都市では大切に扱われた。

官立旧制高校は二十五校(外地二校)定員は六乃至七千人位だったと思われる。因みに、ドイツは第二次大戦後アメリカに依る学制改革を拒否し大部分は旧体制を保っており、我が国の教育事情が将に亡国的様相を呈していることは対照的である。日本は明治以来ドイツ及びイギリスを規範として来たから、ドイツは青年達のあこがれの国であり、ドイツはインテリのシンボルであった。しかし同じゲルマン系であっても英語のように商用語として発達した言語に比べてドイツ語は煩雑で片言の単語は覚えても語学全体をマスターすることは容易ではない。従って、ドイツ語はやや敬遠され勝ちで特に甲類の諸君はそうであるように思われるが。とはいえ、私は旧制新潟高校理科甲類に学んだのだが……

新潟高校出身・加納晴三郎

# 十九・四 カルシュの調査に協力して

平成十三年九月から腰痛のため脚にも痛さを感じて歩行に困難が生じてきたので長年行ってきたゴルフをやめ、目下、整形外科の治療にかかりきって、色々なリハビリを試みているが、なかなか痛みが取れず従って外出も控えて休養本位の老人生活に甘んじている。一年半ほど東京医科歯科大学の若松秀俊教授の松江時代のカルシュ教授を顕彰する運動の手伝いをしていて、充分にお役に立たないうちに、体調不良を生じ同教授には申し訳ないが、大切な読み書きも次第に不自由になって来た。

平成十二年四月の中頃、若松氏から、突然の電話があつて、何事かとびっくりした。話によれば、カルシュ先生の教え子とそれらの縁者との接触を目指して方々手を尽くしているとのことであつた。懐かしい名前であつた。昭和四年から七年の多感な時期に、あの松江高等学校で、教わつたカルシュ先生のことであつた。カルシュ先生に興味をもつて調べているとのこと。当時三歳のメヒテルトの名も出てきた。しかし、同氏が語るドイツで偶然に遭つたフリーデルンのことは全くの初耳であつた。

聞くところでは、若松氏がメヒテルト女史と電話と手紙で何度か接することができ、彼女が知っている「数人の日本人」の住所、氏名をアルファベットで書いて送つてくれたとのことであつた。あとでわかつたことだが、一九六八年十月に松江高校同窓会がカルシュ先生を日本に招待して各地で歓迎会を催した時に、同伴したメヒテルトが、今も時々手紙で交流のある何人かを紹介してきたとのことだつた。対応する住所氏名の電話番号を調べ、カルシュ先生の調査を開始したとのことであつた。そのなかで先生に縁のある酒井氏、増田氏、遠藤氏、江上氏それに小生に連絡をとることができたとのことであつた。まもなくこの五氏からカルシュ教授に関連各種の資料が届けられたとのこと。その頃の若松氏は松江市の現状も、旧制松江高校の知識も持っていなかったのだ、この時期の見聞では本筋は何も把握できなかったとのことだ。しかし島根大学の図書館で旧制松江高校時代の職員録を、また履歴書を紹介され、カルシュ先生の公式記載を確認したそうだと、これでカルシュ教授が昔この地に創設されていた旧制松江高等学校で教鞭を執られた客観的証拠を掴んだとのことであつた。職業柄とはいえ、なんとも彼の粘り強い調査に感心したものである。

帰京後、若松氏が小生にこの話をしてくれた。小生は『貴殿を友人たちに紹介しましょう』とだけいって、電話を切った。数日後にカルシュ顕彰の運動に関しては皆年をとってしまつて時期を逸した感はあるが、(貴殿の熱意に感銘して希求されている各種の資料を提供してくれると思われる同窓生に協力の依頼と共に(若松秀俊氏が懐く当運動の方向を紹介した手紙を出しておいた)と電話で話した。しかし、《何しろ大半が八十才代の人だから、積極的にこれら旧制松高生徒らに接触して、カルシュ教授の真姿を読みとつてほしい》という意味のことを送付したと記憶している。

その詳細は、我々九期文乙の同級生(岡崎、宮田。同窓会関係(中村、西上。カルシュ家との懇親者(田島、奥野。松江の地元関係(細田、金築、河本。その他である。彼らは皆「カルシュ顕彰運動」には「彼が日本のためにどんな働きをした人であるか」を日本人一般に衆知させるに役立つ各種資料を収集して、これを一冊の刊行物に纏め上げて世の中に供することが必要であると思つた。そのためには旧制松江高校同窓生の支援が望ましく、資料の提供や旧生徒との橋渡しが行われなければならない)と云つた。

若松氏はこれらの実施については小生に相談を常に持ちかけ、打ち合わせていた。すると、まもなく見も知らない人から必要な資料や情報を受け取れるようになってきた。また、同窓会長中村氏やカルシュと関係の深い田島氏、竹原氏、松本氏などからも健在の生徒の情報を得ることができた。このころ、同時にメヒテルト女史から事実を明らかにする有力な手がかりが送られて、彼女が提供してくれる資料の公開のすべてを若松氏が一任されたことも知つた。そこで、《カルシュ先生顕彰発起人会》を設立し、将来実行すべき計画案の方向を協議してみる時期に來たと考えて、六月に岡崎、宮田、奥野、若松と小生が芦屋に集合し、いろいろと懇談した。先行き多難の声は予想されたが、実行準備の発端として価値ある会合であつたと皆思つた。

それにしても、小生の《この顕彰事業の要所と道順の丁寧な指南》を若松氏がことあるごとに感謝して下さつたことは、私に大きな励みでもあつたし、平素松江高校のためなら、いつでもできる限りのことをしたいといふかねての願いにも合致し、小生にとつてはまことに嬉しいことであつた。

それから一年後、小生が上京した折りに、毎月第二木曜日に同窓会生が情報交換と親睦を重ねる「じもく

かい」と発音する二木会（別名耳目会）で若松氏と共にこれまでの活動を報告したところ、瀧谷氏を中心として細田氏らとのご尽力のもとに、この顕彰運動が拡がりをみせて、現在に至っている。

白石磷（九期文乙）

メヒテルト手持ちの絵画と写真は寄附いただければ、松江市図書館か県の美術館に保管し、適当なものを引伸ばして再築された異人館の壁面に飾れたらいいなと思っている。ドイツ館とでも名づけて観光都市の中のシュパツィールガング地区の案内・休憩所として、コーヒースービスぐらいはできる老人ボランティア施設にしておけば、神戸の異人館なみに維持できるのではないかと目論んでいる。

まだ、よく考えてはいないが、市民の「町づくりの会」のひとは意見を交わしてきた。

松本昭（二十五期理科二組）

想い出の多いドイツを後に帰国し、奥野先生にカルシュ先生の近況と訪日の気持ちを報告するとともに松高、京大出身史の畏友の当時、塩野義製薬末松正雄部長にも話した。以前から松高出身の多くの方々がカルシュ先生と交際しているので同窓会として一九六八年先生の来日が実現され、さらにメヒテルトさんの来日も一九九〇年実現された。この来日の間の事情は勿論のこと、当時の美談として日刊紙にも大きくとり上げられ、詳しく記載されているとおりである。誠に日本の旧制高校を飾る敬服すべき美談の一つであった。私は幸いにして恩師奥野先生を始め、松高同窓会の方々のご厚意に甘えて、大阪に於ける歓迎会にも招待を受け、先生に感激の再会をさせて戴き、誠に心より御礼申し上げたい。

承るところに依れば、今回再びカルシュ先生のご遺徳を顕彰される企画が有るやに聞いており、ご成功を祈っている。

新潟高校出身・加納晴三郎



## あとがき

最初に私の手許にあったのはたった一つ、フリーデルンの住所だけであつた。そこから、芋蔓式に色々な事実が次々と私の眼前に現れた。その事実の間に絡まる縁の不思議さにただただ驚きとロマンを感じ、今更のごとく感慨に耽っている。調査のさなか旧制高校から輩出した多くの人材を知るうちに、異質の文化に密度濃く接することが若者の成長に如何に重要であるかを痛感した。とくに、人の心に余裕を生み出すものが何か、それは旧制高等学校を卒業した人々が戦後に社会を再建し今もお活躍している姿の原点ををみれば自ずと推測できる。当時の教育に見えることは、周囲との密な接触、未熟もの同士の接触と相互の刺激と自由な議論で、このなかから芽が出て、それがやがて開花したことではなからうか。もちろん自分の意志で自分の道を見いだすことは、決して容易ではなかつたであろうが、悩みながらも自ずと見い出していけるその下地を感じる事ができる。一旦価値観が決まればそれを具現すべく方法は自ら探求する努力をするであろうし、実際にそれを自然な形で行ってきたようだ。この本をまとめながらそう考えた。

この本をまとめた動機は確かに《カルシュ》にあつたが、生徒達の手記をみるなかで、先生と生徒の双方が作用しあつて、ともに精神の高揚をみたことが推測される。可能ならば、「旧制松江高校生の肉声」の記録したいと思つていたが、時間の制限もあつて思うようにはいかなかった。今後は、日本人研究者による「カルシュ氏の研究」の呼びかけを行うだけでなく、関連資料の永久保存を関係者に提言するつもりである。

具体的にはカルシュの永久記念のために Karsch-Haus またはカルシュ記念館を創設したいと思つているが、その場所として松江市奥谷町の公務員宿舎（官舎）を提案し、国または地方公共団体の管理、あるいは法人化したいと思つている。というのは、この官舎は本文中にあるように、数少ない歴史的価値のある洋館のひとつとして是非保存しておきたいと思つているからである。

なお、本文は概ね、平成十三年現在で綴つた『忘れられた異人さん（私家本二〇〇一年）』をもとにして、その前後の時点での記述を主としたものである。したがって、手記の書かれた時がそれぞれ異なることと、さらに出版時に追加したものがあつたので年数の数え方が各章によつて部分的に異なることをお断りしておく。

## 付 録

### A・一 最初の手掛かり

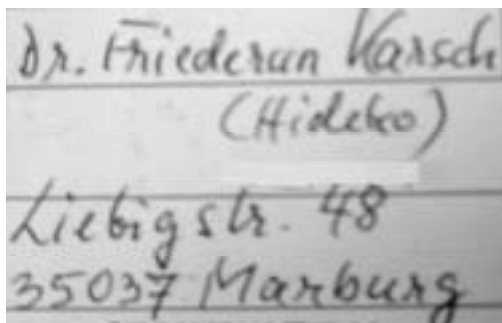
フリーデルンとの別れ際に小生の名刺を手渡した。彼女は名刺の持ち合わせがなく旅行案内書に書いていた葉書に住所を書いてくれた。ここに、自分の日本名「ひでこ」を併せて記してくれた。この一枚が調査の総ての出発点であり、これ以外にカルシュ先生を知るすべは全くなかった。

### A・二 カルシュ顕彰の一步

#### カルシュ先生を顕彰する会の創設 趣意書

本年四月、東京医科大学の若松秀俊氏より突然電話があったのが、そもそもこの話の発端でした。昨年九月シュトゥットガルトで偶然が同氏をカルシュ先生の娘さんのフリーデルンさんとの出会いに導いたとのです。彼は若き日にドイツの大学に留学し、現在ドイツとの学術交流も多く、日独文化交流に尽力している一人の科学者であります。フリーデルンさんと姉のメヒテルトさんを通じて、カルシュ先生に縁のある旧制松江高等学校の生徒に辿り着いたそうです。現在、同氏はカルシュ博士の足跡を順次精力的に明らかにしております。カルシュ博士が昭和十四年に一時帰国して昭和十五年に再度来日してから、昭和二十二年までの戦中

※ カルシュの旧生徒の岡崎、白石、宮田、奥野らと若松によるミーティング（平成十二年六月十九日）があった。この会の呼びかけは白石の努力によるところが大である。この会での懇談の結果、カルシュ博士顕彰の行動を合意した。



フリーデルンから別れ際に手にした紙片

戦後の混乱期に横浜、東京、軽井沢に居住し、その間ドイツ大使館で、外交官として両国の友好関係に尽力しております。松江では文豪小泉八雲氏のことが何びとにも顕彰されていません。彼の文学的業績、日本の貢献からいってこのことは当然ですが、カルシ博士の十四年に及ぶ教師としての松江の滞在期間と外交官としての東京滞在八年間と、彼の門下から輩出した各界の著名人とその業績を見れば、カルシ博士が顕彰に値することは誰にでも納得できることです。また日本の哲学や宗教の研究家としての業績、知日家外交官としての功績も十分に確信できます。戦中、戦後の混乱に紛れて彼の業績が散逸し、まどめるに十分ではなかったことと、混乱期にあつて彼の足跡を記録として関係者の誰も留め置くことができなかったのが、今にして松江では僅かに彼と関係のあつた人しか、その事跡が知られていない大きな理由でしょう。彼の足跡を是非明らかにし、埋もれた彼の功績を客観的な方法で発掘し、世に明らかにしたいと思つています。当時の日本を深く愛し、日本の人々を慈しみ、自分の持てる知識を惜しみなく学徒に与えたこの偉人をまず松江の人々に知ってもらい、広く日本の人々にも知ってもらえるような環境を整えたいのです。同時に、外交官としての友好の証も周辺の関係者の証言とともに明らかにし、日本とドイツの友好にも役立てる所存です。また、彼の未整理の研究を世に出し、札幌農学校のクラーク氏や文豪小泉八雲氏に注目し、眼と眼と高きから、公平で客観的な眼でカルシ博士のすべてを評価したいものです。総合的な形でカルシ博士の周辺の客観的状況を示す資料をできるだけ集め、彼の業績と日本との深い関わりを明らかにし、日本の人々に彼の存在を明らかにしたいと思つております。運命の地の松江で、ヨーロッパの精神を学徒に伝え、自らの精神生活をも磨きあげたこと。また、自分のライフワークとして人智学的にみた東洋哲学史の膨大な未刊行原稿を残し、さらに外交官として日本の混乱の時期をも経験したこと。後に、彼が出雲大社で神々に感謝の言葉を述べ、少年期に夢見た風景と全く同じ風景を松江周辺の景色に見ることができたと語ったこと。それらを通して彼の心情に我々は深く感銘しております。彼自身の手になる戦前の絵画や写真、松江の文化財として市に寄付を約束されております。折しも今年がドイツでは「日本年」です。彼の未整理の原稿には日本に関する記述も見いだされておりドイツで教育に携わっている人の協力やドイツ関連の公的機関の協力もやがて得られることと思われ、若き日にドイツの文化とそれを生んだ風土に触れ、今このカルシ先生顕彰を天命と感じている若松氏らとともに、この事業が順調に進められるように、本会の発足を提起し、ここにカルシ先生直接の録の旧生徒からなる發起人を代表してご挨拶申

し上げ、同時に関係者の皆様からご尽力を賜るよう心よりお願い申し上げます。

平成十二年七月吉日

發起人代表

旧制松江高等学校同窓会会長 昭和十五年十七期文乙卒 中村啓成

同發起人

|      |       |        |      |       |        |
|------|-------|--------|------|-------|--------|
| 酒井勝郎 | 昭和三年  | 五期理乙卒  | 沢田弘夫 | 昭和四年  | 六期理乙卒  |
| 増田義哉 | 昭和四年  | 六期理乙卒  | 岡崎道夫 | 昭和七年  | 九期文乙卒  |
| 白石 磷 | 昭和七年  | 九期文乙卒  | 宮田正信 | 昭和七年  | 九期文乙卒  |
| 遠藤捨雄 | 昭和十一年 | 十三期理乙卒 | 奥野良臣 | 昭和十二年 | 十四期理乙卒 |
| 江上正孝 | 昭和十五年 | 十七期理乙卒 |      |       |        |

A・三 資料公開の許可と協力呼びかけ

メヒテルトから送付されたカルシュに関する資料の公開の許可書とメヒテルトからの調査の初期に入手した手紙の部分も載せた。

さらに、編者がドイツ人関係者に調査協力を直接に呼びかけたドイツ語による手紙文を掲載した。

Mechtild Maria St. Goar (Karsch)  
1502 Hixson Pike  
Chattanooga, TN 37405-2431 U.S.A.  
Den 20. April, 2000

Prof. Dr. H. Wakamatsu  
Faculty of Medicine,  
Tokyo Medical & Dental University  
1-5-45 Yushima Bunkyo, Tokyo 113 JAPAN

Sehr verehrter Herr Dr. Wakamatsu

Hiermit möchte ich Ihnen meine Einwilligung geben, Briefe, Publikationen und Informationen aller Art, die sich auf meinen Vater, Dr. Fritz Karsch, beziehen, für Veröffentlichungen in jeder Ihnen passenden Form zu gebrauchen, zu veröffentlichen und zu zitieren. Meine Schwester, Dr. Friederun Karsch, gibt ebenfalls ihre Einwilligung, dass Sie von dem Lebenslauf unseres Vaters, den sie Ihnen seinerzeit geschickt hatte, Gebrauch machen können in jeder Ihnen notwendig erscheidenden Form.

Hochachtungsvoll,

Ihre Mechtild St. Goar

Mechtild Maria St. Goar (Karsch)  
1502 Hixson Pike  
Chattanooga, TN 37405-2431 U.S.A.  
Den 20. April, 2000

Prof.Dr.H.Wakamatsu  
Faculty of Medicine,  
Tokyo Medical & Dental University  
1-5-45 Yushima Bunkyo, Tokyo 113 JAPAN

Sehr verehrter Herr Dr. Wakamatsu

Hiermit möchte ich Ihnen meine Einwilligung geben, Briefe, Publikationen und Informationen aller Art, die sich auf meinen Vater, Dr. Fritz Karsch, beziehen, für Veröffentlichungen in jeder Ihnen passenden Form zu gebrauchen. Meine Schwester, Dr. Friederun Karsch, ist ebenfalls bereit, ihre Einwilligung, dass Sie von dem Bericht, den sie Ihnen seinerzeit geschickt hatte, Gebrauch zu machen. Als wir diese Woche miteinander telefonierten, hat sie sich sehr gefreut, von Ihrem Vorhaben zu hören. Ich habe inzwischen schon Einiges herausgesucht, dass für Sie von Wert sein kann. Eigenes werde ich Ihnen per Luftpost zustellen, und eigene andere Artikel werde ich kopieren lassen und Ihnen ebenfalls schicken. Die kopierten Unterlagen können Sie selbstverständlich behalten. Die Bücher, die Professor Sakai mir persönlich schenkte, möchte ich gern irgendwann wiederhaben zur Erinnerung an Herrn Professor Sakai.

Vor etwa einem Jahr hatte sich jemand für alte Fotos und dergleichen über das alte Matsue vor dem 2. Krieg interessiert. Ich weiss nicht genau, wie er an mich kam, aber er wollte gern von mir Fotos bekommen. Die Alben mit den Fotos sind aber auch für mich Erinnerungen an meine alte Heimat. Negative hatte ich nie. Aber so etwas kann kopiert werden. Dann existieren auch originale Pastellbilder, die mein Vater von Matsue gemalt hat. Ich besitze die Hälfte der Originale, meine Schwester die andere Hälfte. Von ihnen kann ich z.B. auch kopien machen, beziehungsweise mit Kopien schicken lassen von meiner Schwester. Nach meinem Tod könnten diese Originale Ihnen für Matsue von meinem Sohn zugeschickt werden. Meine Schwester wäre ebenfalls gewillt, so etwas zu tun. Wir sprachen schon mal darüber.

So, nun will ich Ihnen aber als Erstes die Adressen angeben von ehemaligen Schülern meines Vaters, und einigen Freunden, die meines Wissens jedenfalls noch lebten um Neujahr herum, als ich von ihnen zuletzt gehört habe. Wenn Sie ihnen Kontakt aufnehmen, können Sie sicher noch viel mehr erfahren, als ich Ihnen im Moment sagen kann.

Dies wären die Adressen der ehemaligen Schüler, die noch in Verbindung mit mir stehen.

..... entfält .....

Die weiteren werde ich mich hinsetzen und versuchen, Ihnen noch weitere Anhaltspunkte über das Leben meines Vaters zu geben. Leider hat er Zeit seines Lebens nie Tagebuch geführt. Nach seiner Rückkehr nach Deutschland 1947 hat er in der Erwachsenenbildung gearbeitet und viele Vorträge über Japan gehalten an vielen verschiedenen Orten. Er war ein guter Redner, aber er sprach immer frei, ohne Notizen zu machen. So existiert, soviel ich weiss, leider nichts von dem Inhalt seiner Vorträge. Ich weiss, dass seine deutschen Zuhörer sehr beeindruckt gewesen sind von dem, was sie noch irgendwelche anderen Unterlagen hat Vaters Tätigkeiten hat. Soviel ich weiss, hat sie mir so ziemlich alles gegeben, was nach seinem Tode aufgefunden wurde in seinem Schreibtisch und unter seinen Büchern

Lieber Wakamatsu-san, ich danke Ihnen von ganzem Herzen für das Interesse, dass Sie meinem Vater zollen. Alles Gute wünsche ich Ihnen und gute Reise Nach Matsue! Gerne würde ich mit Ihnen gemeinsam dort sein und Ihnen meine "Furusato" zeigen.

Mit lieben Güssen,

Ihre Mechtild St. Goar.



カルシュ家が住んだマルブルク周辺

## Dr. Karsch und Japan

Möglichkeit einer Veröffentlichung seiner Beiträge und Verdienste  
14 Jahre als Lektor und 5 Jahre als Diplomat

Gestatten Sie mir, Ihnen plötzlich zu schreiben. Ich bin Professor der medizinischen Systemtechnik an der medizinischen Fakultät der Tokyo Medizinischen und Zahnmedizinischen Universität. Von 1972 bis 1986 habe ich an der Messung und Regelung der Organismen am Institut für medizinische und zahnmedizinische Technologie der selben Universität gearbeitet. Für einige Jahre nach 1986 lehrte ich automatische Regelungstechnik an der elektronischen Abteilung des Ashikaga Instituts für Technologie und an der technischen Fakultät der Universität Fukui. Dann bin ich im Jahre 1992 zur Tokyo medizinischen und zahnmedizinischen Universität zurückgekehrt. Mein Hauptfach war ursprünglich die Regelungstechnik des Systems, aber die Anwendung des regelungssystems auf die Organismen oder Entwicklung neuer Maschinen oder Geräten in dem Fachbereich Medizin ist langsam geändert worden, weil ich als Stipendiat der Forschungsumgebung der Biokybernetik an der medizinischen Fakultät in Deutschland vorbereitet wurde, und weil mein Forschungsthema im Institut der Mitte der Medizin war. Ich verwende die Hochtechnologie, um die wirklich gewünschte Umgebung einzurichten, auf welcher ärztliche Instrumente, die Arbeitskraft und Menschenmaterial für die Wohlfahrt und ärztliche Behandlung ausgenutzt werden können.

Übrigens, wie in Beilage 1 zu sehen ist, schreibe ich Ihnen diesen Brief, um mit Ihnen über einen bis heute unbekannten deutschen Wissenschaftler, über seine Leistung in Japan und seine Beiträge zu Japan usw. sprechen zu können.

Am Anfang war es die einfache Geschichte von dem Vater der Lehrerin, Frau Dr. Friederun Christa Karsch in Marburg, die ich zufällig in Stuttgart getroffen hatte. Unsere Unterhaltung drehte sich um Dr. Fritz Karsch, der von 1925 bis 1939 an der Nationalen Hochschule in Matsue gelehrt hat. Aus den Informationen von Dr. Friederun und den ehemaligen Schülern von Dr. Karsch kann man seinen kurzgefaßten Lebenslauf und seine Leistungen ansehen, und wie er, ein Mensch von Format und Charakter, auf seine ehemaligen Schüler einen tiefen Eindruck mit seinem fesselnden Unterrichten und seinen beeindruckenden Vorlesungen gemacht hat, und vor allem formten sich auf persönlichen Austausch mit seinen Schülern auch enge Freundschaften. Aber ich finde, daß durch die Verworrenheiten in und nach dem zweiten Weltkrieg bedauerlicherweise seine Leistung wie verloren und zerstreut worden ist. Ich vermute, daß er nicht genügend Zeit wegen des unbeständigen Lebens in Deutschland gehabt hat. Auch danach in Japan und in der späteren Zeit in Deutschland hat er nicht Gelegenheit und genügend Zeit gehabt, um seine Leistung und seine Erfahrungen schriftlich auszuwerten. Daher wurde er nicht



bekannt und allmählich vergessen, besonders in Japan. Wir aber wissen, daß z.B. unveröffentlichte Manuskripte von über 7000 Seiten bei seiner Tochter Mechtild in den Vereinigten Staaten aufgehoben sind. Da ich mich an all diesem sehr interessiere, fragte ich an im Matsue Rathaus, der Shimane Provinzregierung und Shimane Universität, um dort einige offizielle Dokumente von Dr. Karsch zu finden.

Mit Hilfe von Friederun-san habe ich mit ihrer Schwester Mechtild-san glücklicherweise korrespondieren können. Nun habe ich bessere Möglichkeiten, um die Tatsachen und etwas Unbekanntes von Dr. Karsch nacheinander zu finden auf Grund der Informationen, die ich von den zwei Töchtern erhalten habe.

Dr. Fritz Karsch war Lehrer von Deutsch, Literatur und Philosophie an der Nationalen Hochschule Matsue vor dem zweiten Weltkrieg. Ab 1940 war er Diplomat an der deutschen Botschaft in Tokyo und hat das Seine getan, um die Freundschaft zwischen den beiden Ländern zu fördern. Er hat zwei Töchter, die eine ist Frau Dr. Friederun Karsch, Lehrerin (ihr japanischer Name ist Hideko, 63 Jahre alt), wohnhaft in Marburg, Deutschland. Die andere ist Frau Mechtild St. Goar (ihr japanischer Name ist Hoshiko, 72 Jahre alt), sie wohnt in Chattanooga, Tennessee, USA. Dr. Fritz Karsch und seine Familie kehrten nach Deutschland zurück im Jahre 1939. Anfang 1940 kam er wieder nach Japan mit seiner Familie als Diplomat. Sie wohnten in Yokohama von 1940 bis 44, in Tokyo von 1944 bis 1945 in Seijo, und in Karuizawa von 1945 bis 1947.

Wie oben erwähnt, hatte ich nicht genügend Zeit, mit der jüngeren Schwester zu sprechen, der ich in Stuttgart zufällig begegnet war, und Eingehenderes von ihr zu hören. Aber telefonisch habe ich neulich direkt mit der älteren Schwester gesprochen. Und ich erfuhr, daß sie ihres Vaters gesamten Manuskripte, Papiere und Briefe hat, farbige von ihm gemalten Landschaften von Matsue, und viele Photos von dem alten Matsue, sowie auch Adressen von ehemaligen Schülern und Bekannten.

In Japan ist ein Journalist und Schriftsteller, Lafcadio Hearn, öffentlich ausgezeichnet worden. Der Grund war selbstverständlich, weil durch ihn zum ersten Mal im 19. und 20. Jahrhundert Japan in Europa bekannt wurde. Aber bei unserem Dr. Karsch kann man vermuten, daß er noch größere Beiträge über Matsue und die Hochschule Matsue und Verdienste als Diplomat in seinen insgesamt 22 Jahren Aufenthalt in Japan hinterlassen hat. Tatsächlich gibt es viele bekannte Persönlichkeiten unter seinen Schülern, die sich große Verdienste in verschiedenen gesellschaftlichen Kreisen erworben haben. Menschen seiner Umgebung, denen seine Beiträge und Verdienste gut bekannt waren, konnten vermutlich wegen der Konfusion in und nach der Kriegszeit seine hinterlassenen Spuren fast gar nicht beschreiben. Ich wünsche von Herzen, daß sie und seine versteckten Leistungen aufgeklärt werden können, während die Beteiligten noch gesund sind. Von jetzt an werde ich durch eigene Untersuchungen und Erkundungen den Beweis der Freundschaft aufklären, wie Dr. Karsch das damalige Japan von Herzen liebte, wie er die Japaner seiner Umgebung liebevoll behandelte und besorgt war. seinen

Schülern seien Erkenntnisse weiterzugeben. Ich hoffe aufrichtig, daß er breiteren Schichten der japanischen Bevölkerung bekannt gemacht werden kann. Es ist mir aber praktisch unmöglich, mich allein damit zu beschäftigen, weil ich selbst eigenen Dienstpflichten nachgehen muß und wissenschaftliche Forschungen an unserer Universität habe, weil ich dafür keine genügenden Zeit und nicht die nötigen finanziellen Unterstützungen habe. Ich hoffe, daß ich zeitlich und räumlich Hilfe von vielen Leuten bekommen kann. Darum möchte ich auch um die Hilfe meines seit etwa 30 Jahren mir bekannten Freundes, Herrn Andreas Stief, bitten, der als Erzieher in der Ausbildungsinstitution in Kaufbeuren arbeitet. Ich möchte natürlich auch um die Hilfe der zwei Töchter von Dr. Karsch bitten. Obwohl ich von seinen Beiträgen auf dem Gebiet der wissenschaftlichen Texte noch nicht Bescheid habe, ist es klar, daß er als Nachrichtentechniker in seinem früheren Leben arbeitete, und daß er von 1940 bis 1945 als ein Japankenner und Diplomat um Freundschaft zwischen Japan und Deutschland bemüht war. Die Einzelheiten seiner eigenen Werke will ich untersuchen. Sein Lebenslauf ist wie eine Beilage 2, die ich von Dr. Friederun erhielt.

Am Ende möchte ich erwähnen, daß ich das Stipendium in der Zeit von 1973-1975 als Stipendiat vom Deutschen Akademischen Austauschdienst, von der Deutschen Regierung in herzlicher Dankbarkeit erhielt. Ich nutzte die Gelegenheit der Forschung von der Biokybernetik mit Prof. Dr. W. D. Keidel und mit Prof. Dr. K.-H. Plattig an der medizinischen Fakultät der Universität Erlangen-Nürnberg.

Außerdem hatte ich Gelegenheit in Deutschland, deutsche Kultur und ihre Witterungsverhältnisse dahinten gleichzeitig in meiner Jugend zu erfahren. Und dann wollte es der Zufall, daß ich während der Zeit des Internationalen Kongresses in Deutschland einer der Töchter von Dr. F. Karsch zu begegnen, wie schon erwähnt. Es kommt mir vor, als wäre es eine Schicksalsfügung und eine Aufgabe, die mir von Gott gegeben worden ist, daß ich so unerwartet mit dieser Arbeit beschäftigt sein würde. Ich bin sehr froh darüber, daß ich Ihnen Dr. Karsch mit einigen Unterlagen vorgestellt habe. Obwohl ich nur oberflächliche Kenntnisse und keine Fähigkeit dazu habe, und obwohl ich noch Angst habe, vielleicht einen großen Fehler zu machen, möchte ich Sie darum bitten, mich etwas davon wissen zu lassen, wenn es nicht lästig für Sie ist, und wenn Sie mir ein wenig Zeit spenden könnten, mit Ihnen über diese Dinge zu sprechen.

Dr. Hidetoshi Wakamatsu

Kontaktadresse. : Prof. Dr. H. Wakamatsu  
 TEL : +81-3-5803-5366 FAX : +81-3-5803-0162  
 Dept. Biomedical System Engineering, Faculty of Medicine,  
 Tokyo Medical and Dental University  
 1-5-45 Yushima Bunkyo-ku Tokyo 113-8519  
 E-mail : wakamats.mtec@med.tmd.ac.jp

## A・四 ドイツ大使からの調査激励

ドイツ大使公邸に招待された折りに、ドイツ大使ケストナー博士にカルシュ調査の激励を受けた。その後、手紙で再び激励を受けた。この頃ドイツ学術交流会東京事務所長リンス博士、横山夫人にカルシュ調査の協力を得た。この直前のドイツ学術交流会設立記念式でも関係者より激励を受けている。

また、メヒテルトから送付された資料が必要に応じて編者自らの判断で公共の利益のために公開する許可を彼女から前述の文面のみならず、寄贈される物品についても口頭で繰り返し約束を得ている。



2000年6月16日ドイツ学術交流会(DAAD)設立75周年記念式場にて左からリンスDAAD東京所長、通訳、石川DAAD留学生会会長、ケストナー駐日ドイツ大使。佐藤文部事務次官



駐日ドイツ大使ケストナー博士の激励文

ドイツ大使公邸に招待された折りに、ドイツ大使ケストナー博士に調査の結果を説明し、資料を差し上げる機会を得た。二〇〇〇年六月二十八日樋口日独協会会長とケストナー大使から招待されたガーデンパーティーでのことである。

A・五 カルシュ家の歴史

- 一八九〇年 ラフカディオ・ハーン松江に入る
- 一八九三年 フリッツ・カルシュ、ブラゼヴィッツに生まれる
- 一八九九年 市立小学校入学
- 一九〇一年 父ヘルマン肺炎で死亡
- 一九〇三年 王立ドレスデン・ノイシュタットギムナジウム入学
- 一九〇六年 ブラゼヴィッツ職業ギムナジウム転校
- 一九一一年 ドレスデン国際博覧会開催
- 一九一四年 大学入学資格試験に合格
- 一九一四年 ドレスデン工科大学入学
- 一九一四年 第一次大戦 通信兵として従軍
- 一九一八年 復員
- 一九一九年 マールブルク大学入学
- 一九二一年 エッメラと結婚
- 一九二三年 マールブルク大学で哲学博士授与
- 一九二五年 松江高等学校着任
- 一九二八年 メヒテルト誕生
- 一九三一年 アクセンフェルト教授 日本眼科学会の招待により来日、各地を巡回講演
- 一九三一年 ドイツ一時帰国・親類との交流
- 一九三七年 ウッドマン家全焼
- 一九三七年 フリーデルン誕生
- 一九三九年 松江高校退任・ドイツ帰国
- 一九四〇年 ドイツ大使館勤務 副武官
- 一九四五年 終戦

一九四七年 ドイツ強制送還  
 一九四七年 メヒテルト、ホルトンと結婚  
 一九五四年 メヒテルト離婚  
 一九五四年 メヒテルト、ヘルベルトと再婚  
 一九五五年 エドワード誕生  
 一九五七年 フリッツ、米国チャタヌーガ訪問  
 一九五七年 エリザベート誕生  
 一九六〇年 日本週間に三笠宮崇仁殿下主催のパーティに招待される(マールブルク)  
 一九六七年 年金生活にはいる  
 一九六七年 アルベルト・コルベ(老人ホーム)入居  
 一九六八年 日本訪問(旧制松江高等学校同窓会の招待による)  
 一九七一年 フリッツ、カッセルで死亡  
 一九七八年 エッメラ死亡  
 一九九九年 著者とフリーデレンと偶然の出会い  
 二〇〇一年 著者とフリーデレン・メヒテルト夫妻との面会  
 二〇〇二年 著者とメヒテルト夫妻との面会

#### A・六 旧制松江高等学校でカルシュ在職中に薫陶を受けた著名人

①政界では衆議院議員で自治相を務めた赤澤正道(一九二七年卒業の四期文乙)、元衆議院議員の檜橋勇(六期文乙)及び高田富之(九期文乙)、元衆議院議員・労働大臣の山手満男(十一期文乙)、衆議院議員・国務大臣十回・衆議院議長を歴任した福永健司(七期文甲)、衆議院議員で自民党総務会長・行政管理・防衛庁長官・運輸大臣を歴任した細田吉蔵(九期文甲)や元島根県知事の伊達慎一郎(五期文乙)がいる。  
 ②外交官としては元イラン・インド・中華民国・ブラジル大使歴任の宇山厚(九期理甲)、海外移住事業団理事、ウルグアイ大使を歴任勲二等瑞宝章受章の大城斉敏(十期文甲)がいる。

③法曹界では、大阪弁護士会会長、日弁連会長を務めた和島岩吉（五期文乙）、元福岡高等裁判所長官で国士舘大学学長を務めた綿引紳郎（十五期文乙）、元広島高等裁判所長官の松本冬樹（八期理甲）と同じく、元広島高等裁判所長官矢崎

憲正（十期文乙）が挙げられる。

④学術界では元長崎医科大学放射線医学教授で「長崎の鐘」で知られる永井隆（五期理乙）、レーダ開発に従事した元島根大学教授・元琉球大学教授の酒井勝郎（五期理乙卒）、元北海道大学印度哲学教授、僧侶で鈴木大拙後継者の古田紹欽（十期文乙）、元滋賀大学国文学教授で雑俳史研究家の宮田正信（九期文乙）、元大阪大教授微生物病研究所長で紫綬褒章を受章したウィルス分離研究の奥野良臣（十四期理乙）がいる。

⑤芸術界・出版界では元カリフォルニア州立フランクフルト大学教授でドイツ留学後欧米で活躍した舞踏家の邦正美（朴永仁）（八期文甲）、「暮らしの手帖」社設立編集長を務めた花森安治（十期文甲）、岸田国土の劇作同人、大映グランプリ羅生門のプロデューサー・放送作家の辻久一（九期文乙）など枚挙に暇がない。

## A・七 著名なエッセイの縁者

テオドール アクセンフェルト（伯父）

フライブルク大学教授 一九三一年日本眼科学總會に招待され、来日。日本各地を巡回講演。眼科学の世界的権威。  
モラー・アクセンフェルト菌（モラクセラ・ラクターナ）を発見。

エディット アクセンフェルト（従妹）

フライブルク国立音楽大学教授 多数の日本人ピアニストを弟子にもつ、世界的ピアニスト、チェンバリスト。草津アカデミーには一九八一年（第二回）から参加、講師として生徒を指導するとともに数多くの名演を残した。十一回目の参加となった一九九六年（第十七回）の来日を最後に演奏活動から身を引いていた。

ヘルベルト セイント・ゴア

メヒテルトの夫で戦時中は米兵として従軍。ドイツシュピーゲル紙に「パリ滞在中のヒトラーのカラー記録映画」を公開、売却。この記事が縁で、二〇〇二年九月にセイント・ゴア市長より招待された。なお、彼の出身地はライン川流域の古都市セイント・ゴアで約二〇〇年前の市長 ラッファルス・ヴォルフ・セイント・ゴアの子孫。

#### 聖エリザベート

石棺の装飾に記録チューリングン出身、エリザベート教会が彼女に因んで命名。エッメラの約七百年前の祖先と推定される。

#### カルシユ家族の住所など

Fritz als Student an der Liebigstraße neben Café Klingelshöhe, (Emmela als Studentin: Schlossstrepp 1 am Obermarkt gegenüber dem Rathaus);1921-1925, Weiburgstr.32 (Heute:Schückingstr.32);1948-1960: Barfüßerstr.4; 1960-1967: Barfüßerstr.5 vor dem ehemaligen Stadtor; Grab von Dr. Karsch und Frau mit Sohn, Friedhof an der Ockershäuser Allee bei der Kappelle  
Frau Mechild M. St. Goar 1502 Hixon Pike, Chattanooga, TN 37405-2431, U.S.A.  
Dr. Friederun C. Karsch Liebigstrasse 48 35037 Marburg Bundesrepublik Deutschland

#### A・八 カルシユ関連新聞報道

左記は編者らが行ったカルシユ顕彰に関する報道記事である。

- 一 東京新聞 夕刊 心のファイル「忘れられた 日本の恩師 ドイツ人哲学者」(二〇〇〇年十月四日)
- 二 日本経済新聞 文化欄 「遠来の師今なお追慕」(二〇〇〇年十二月二十日)
- 三 産経新聞 関東版 文化欄 「独人哲学者、フリッツ・カルシユ氏 日本を愛し、偉大な足跡を残す」  
(二〇〇一年一月十三日)
- 四 産経新聞 関西版 文化欄 「第二の故郷、日本を愛して、あるドイツ人哲学者のこと」(二〇〇一年一月一八日)

- 五 読売新聞 島根県版 「カルシユ先生のこと 知って」、旧制松江高で十四年間教壇（二〇〇一年三月二日）
- 六 山陰中央新報 「カルシユ博士の情報提供を」 第二のハーン 顕彰へ 東京の大学教授呼び掛け（二〇〇一年四月六日）
- 七 読売新聞 島根県版 「カルシユ博士と学生の交流小説に」、旧制松江高で十四年間教べん、松江での功績知って
- 八 東京医科歯科大・若松教授が出版（二〇〇二年七月十八日）
- 九 山陰中央新報 「明窓」 岡部康幸（二〇〇二年七月二十八日）
- 十 山陰中央新報 江角比出郎 文化 残した足跡明らかに 若松秀俊著『湖畔の夕映えーカルシユ博士と松江ー』  
を読む（二〇〇二年七月三十一日）
- 十一 東京新聞 著者に聞く「偶然の出会いで調査にのめり込む」『湖畔の夕映えーカルシユ博士と松江』の若松秀俊さん  
（二〇〇二年八月四日）
- 十二 山陰中央新報 「松江での足跡たどり偉大な業績に再び光り」（二〇〇二年八月十六日）
- 十三 山陰中央新報 石川明 「日独文化交流とカルシユ博士」（二〇〇二年十二月十一日）

# A・九 編者による著作・出版物

- 一 日独協会機関誌「かけ橋 Die Brücke」カルシユ一家が住んでいた官舎 Die ehemalige Wohnung der Familie Karsch.  
二〇〇一年五月号表紙
- 二 日独協会機関誌「かけ橋 Die Brücke」日独文化交流を支えた人々第一回 旧制松江高等学校教官 フリッツ・カルシユ博士  
Förderer des japanisch-deutschen Kulturaustausches (1) Lektor an der Matsue Kotogakko Dr. Phil. Fritz  
Karsch (1893-1971) 二〇〇一年九月号 七〜八頁
- 三 若松秀俊 「湖畔の夕映え カルシユ博士と松江」 文芸社 二〇〇二年六月
- 四 若松秀俊 「第二のラフカディオ・ハーン」 致知 二〇〇二年九月号 八十七〜八頁



## 参考文献

一 嵩のふもとに（旧制松江高等学校校史）

### 第三章 恩師列伝

カルシユ先生 酒井勝郎 七十二頁

カルシユ先生、ギルソン先生 田総武光 七十七頁

高橋敬視先生 勝部真長 七十八頁

### 第六章 忘れ難き人々

松高を思い出す座談会 岡崎、白石、高田、増田、松田、宮田、森山 四五八頁

ワクチン生産の功績者 奥野良臣君 青山博 四五二頁

カルシユ先生と田島君 奥野良臣 四五二頁

メヒテルトさんを訪ねて 田島康弘 四五三頁

二 翠松 旧制松江高校同窓会報

### ①カルシユ関係

チャタヌガの町メヒテルトさんからの便り 木村登 二十九号 六頁

チャタヌガの町メヒテルトさんを訪ねて 田島康弘 三十六号 五頁

六十二年前のカルシユ先生 木村登 三十七号 十二頁

カルシユ先生の長女 メヒテルトさん「ふるさと」訪問 竹原敏夫四十&四十一号 四頁

東京でのメヒテルトさん 田島康弘四十&四十一号 六頁

メヒテルト女史・大阪の四日間 四十&四十一号 奥野良臣 七頁

メヒテルトさんよりの回想録 四十&四十一号 十一頁

② 「カルシユ旧生徒の手記」 松九会 六十三号 白石磷 五頁

③ 洋館について

柴田午朗 北堀の思い出 おもしろ紙三号 一九九七年三月

- 柴田久美子 奥谷町の西洋館 おもしろ紙三号 一九九七年三月
- 松本 昭 異人館の人達 翠松五六号、八〇一〇頁 おもしろ紙十号 一九九九年三月
- 三 大阪支部会報松友  
カルシユ先生を迎えて 大阪支部会報松友 七号 十六頁 一九六九年  
カルシユ先生を悼み 十一号 七十四頁 一九七二年十二月  
カルシユ先生の授業 大阪支部会報松友 臨時号 十六頁 一九七一年  
Brief zu Frau Karsch 十一号 七十五頁 一九七二年十二月
- 四 東京松高会報  
カルシユ先生の訪日について 創刊号 三〇頁 一九六八年五月  
追悼田村清三郎君(十三文乙) 暉峻凌三 創刊号 二十五頁 一九六八年五月  
雁信「メヒテルトからの便り」 渡部 忠(十六文甲) 五号 三十六頁 一九七三年十一月
- 五 カルシユ旧生徒の手記  
旧生徒同士の逸話
- 六 カルシユ講義録  
宮田正信所有の講義録(一九三一〜三二年)
- 七 資料  
自治大臣 赤澤正道のカルシユ博士への自筆手紙  
Dr. Heilerを通じて三笠宮殿下より Marburg Kurhotel に招待 一九六〇年九月十三日  
朝日新聞報道(カルシユ訪日) 一九六八年十月五日  
松江地方新聞報道(カルシユ来訪) 一九六八年十月五日  
長崎地方新聞報道(カルシユ来訪) 一九六八年十月十六日  
絵画の写真コピー 宍道湖、嫁ヶ島、袖師ヶ浦、大山、山陰の農村風景(田島、竹原コピー所有)  
メヒテルトからの写真 前記写真と重複するものもある。  
旧生徒からの写真 個別送付の写真 江上、白石、宮田  
卒業アルバム借用(澤田弘夫所有一九二九年)  
卒業アルバムより(故溝上三郎所有一九三〇年)

卒業アルバムより（奥野良臣所有一九三七年）

松江高等学校一覧

松江高等学校「新寮歌」

カルシユ先生を顕彰する会の創設趣意書

日本医事新報二二七六号 一九六六年一月八日

日本医事新報二二三三二号 一九六九年一月四日

## 八 家族の証言

Fritz wurde am 19. Februar 1883 in Dresden/Blasewitz geboren.

Emmela wurde am 3. Oktober 1896 in Godesberg geboren.

Sie starb ebenfalls in Kassel am 4. August 1978.

Mechtild wurde am 27. Januar 1928 geboren.

Friedrun wurde am 23. April 1937 geboren.

## 九 同窓会員名簿

## 十 関連著書

① 酒井勝郎 田舎の大学から 高浜印刷（私家版）一九六九年（奥田雅重より二〇〇〇年十月入手）

② 酒井勝郎 初旅のヨーロッパ三週間 酒井九ボ堂（私家版）一九七五年

③ 酒井勝郎 カルシユ先生 酒井九ボ堂（私家版）一九八〇年

④ Fritz Karsch: Das Freiheitsproblem bei Kant und Nicolai Hartman. Japanisch-Deutscher Geistes Austausch Heft 1. Japanisch-Deutsches Kultur Institut, Tokyo (1928).

⑤ Fritz Karsch: Die ethischen Grundlagen der nationalen Bewegung in Deutschland. Beiträge zum Verständnis der nationalen Bewegung in Deutschland. Japanisch-Deutscher Geistes Austausch Heft 5. Japanisch-Deutsches Kultur Institut, Tokyo (1934).

⑥ Hans Schwalbe: Deutsche Botschafter in Japan 1860-1973 Tokyo (1974), Herausgegeben von H. Schwalbe und Heinrich Seemann Verlag Deutsche Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens

## 十一情報入手源

## 《官庁・公的機関など》

文部省人事課任用班、福祉班、島根県教育庁高校教育課、国立島根大学総務課人事係 図書館員、松江市役所 国際交流課、出雲大社社務所、東京都世田谷区役所、横浜市役所、日独協会、ドイツ文化会館、ドイツ学術交流会、東京大学独文科、筑波大学図書館、衆議院前議員室、宮内庁、外務省、外交資料館、旧官立松江高等学校生徒同窓会、ドイツ連邦共和国ドレスデン市庁住民局、カッセル市庁住民局、アルベルト・コルベ・ハイム、インターネット情報検索

## 《旧制官立松江高等学校(カルシユ旧生徒)》

赤澤正道(鳥取)(四期文乙) 米子市日の出町一・六・四〇三二、一九八二年一月逝去、池田内閣(一九六四く六四)、

佐藤内閣(一九六七く六八) 自治相

柴田午郎(島根) 京大経(四期文乙) 元松江銀行、一畑電鉄専務、他島根信用金庫理事

永井隆(島根) 長崎医大(五期理乙) 元長崎医科大学教授 一九五一年逝去

酒井勝郎(島根) 東大理 化学(五期理乙) 東京都国分寺市内藤二・一〇・一三 元浜松高専教授 元島根大教授

元琉球大教授 (長男妻 瑠美子)

萩原憲三(島根) 東大法(五期文乙) 東京都中央区明石町八・一 聖路加レジデンス二三〇一 電気興業株式会社 取締役会長

沢田弘夫(富山) 旧金沢医大(六期理乙) 石川県金沢市尾張町二・一六・七九

増田義哉(鹿児島) 九大医(六期理乙) 福岡市城南区東油山二・三・一七 久留米大学名誉教授、元福岡大学教授、医博

中西利理(鳥取) 京大哲学(七期文乙) 労働大臣官房参事官、社会党、民主党鳥取県連会長、日出製鋼取締役、千歳映画

社長など歴任

溝上三郎(奈良) 阪大医(七期理乙) 大阪市東淀川区瑞光一・一一・三三 一九九九年三月逝去 節子夫人

坪内謙吉(島根) 長崎医科大(八期理乙) 医博 島根県八束郡宍道町宍道二二九六・二

白石磷(山口) 京大経(九期文乙) 芦屋市東芦屋町一・二・四〇三三(株) ユニチカエステート会長、元(株)

レナウンホームズ社長・会長

岡崎道夫(静岡) 東大経(九期文乙) 神戸市東灘区御影山手一・一・一〇七〇一 元住友金属工業、元住金物産 副社長

宮田正信(大坂) 京大文国文(九期文乙) 枚方市香里園町二六・四五 滋賀大学名誉教授 文学博士

松田美太郎（鳥取）東大法（九期文乙）東京都杉並区下井草一・二九・一七 日本興業銀行、大興製紙  
 森山岩治（新潟）東大法（九期文乙）東京都多摩市豊ヶ丘三・一・一六〇 日本穀産工業（平壤）本四連絡橋公団  
 矢崎憲正（山口）京大法（十期文乙）小金井市貫井南町三・一・三四 元広島高等裁判所長官、弁護士  
 木村 登（東京）東大文独文（十二期文乙）東京都港区元麻布二・九・一 朝日新聞特派員  
 遠藤捨雄（京都）京大農 農化（十三期理乙）京都市右京区龍安寺塔ノ下町一・二六  
 暉峻凌三（東京）東大文 哲学（十四期文乙）東京都世田谷区代沢二・一八・八一 一九九二年逝去 娘入江奈保子  
 青山 博（岡山）阪大医（十四期理乙）大阪府都島区東野田町四・一九・六 元大阪府市立中央病院院長 一九九九年逝去  
 奥野良臣（奈良）阪大医（十四期理乙）大阪府茨木市総持寺一・六・三〇 元阪大微生物研究所長 阪大名譽教授、医博  
 千代賢治（鳥取）京大法（十五期理乙）神戸市東灘区御影山手五・二〇・二〇 元住友生命社長・会長、相談役  
 江上正孝（大分）九大医（十七期理乙）北九州市小倉北区黒原二・一・五 内科医 福祉施設を運営  
 中村啓成（広島）東大法（十七期文乙）東京都港区高輪四・二・二二 東都水産（株）元社長・元会長・現相談役 豊海冷蔵  
 《旧制松江高等学校生徒および関係者》  
 福永健司（滋賀）七期文甲、陸上選手（棒高飛び） 国會議員連統四〇年、国務大臣七回、衆議院議長歴任  
 一九八八年逝去  
 田総武光（鳥取）東大文英文（八期文甲）安房中教諭、鳥取大学教授、女子短大教授歴任 英語教育に尽くす  
 細田吉蔵（島根）東大法 英法（九期文甲）旧鉄道省、運輸官房長から国會議員、自民党総務会長、行政管理・防衛庁長官  
 中曽根内閣運輸大臣  
 金築忠雄（島根）（九期文甲）松江市上乃木一・一六・三三 県立島根女子短大教授  
 勝部真長（東京）東大文 倫理（十四期文甲）東京都文京区大塚二・三・一・三〇四 音羽ハウス NHK、東大講師、  
 お茶ノ水女子大教授、昭和音大教授  
 田島康弘（和歌山）阪大工（十四期理甲）東京都世田谷区上野毛三・一六・一六〇七 キグナス石油精製（株）元社長  
 稲生 肇（愛知）名大工金属（十七期理甲）愛知県半田市亀崎高根町四・一五  
 黒田瑞夫（島根）東大政治十八期文甲 鎌倉市植木一九・二アルス鎌倉A・八〇・二 エジプト、オーストラリア、国連大使、  
 新日鉄顧問、ユネスコ日本代表、国際文化フォーラム理事長など歴任  
 竹原敏夫（島根）京大理物理（十九期理甲）島根県松江市奥谷町一七〇・一 島根大学名誉教授



**編者略歴** 若松 秀俊 昭和二十一年福島県生まれ。昭和四十七年横浜国大工学系大学院修了後、東京医科歯科大医工器材研究所助手、足利工大助教、福井大工学部教授を経て、平成四年より東京医科歯科大医学部教授。現在同大学院教授。専門は生体機能支援システム工学。昭和四十八年～五十年ドイツ学術交流会奨学生としてエルランゲン・ニルンベルグ大学医学部バイオサイバネティクス研究所客員研究員、米国オレゴン州立大学、中国首都医科大学、南京航空航天大学、韓国釜山立大学などの客員教授・研究員兼任。工学博士（東京大学）。

近藤 茂（京都）京大医（二十一期理甲二）大阪医大、ニューヨーク医大客員教授  
河本 清（島根）京大経済（二十三期文二）松江市上乃木九・一九・二二 元県立松江緑ヶ丘養護学校長、松江市立女子高等学校長  
木幡修介（島根）九州大経済（二十五期文三）島根県八束郡宍道町一三三五山陰中央新報社社長  
滝谷健二（大阪）東大政治（二十五期文二）東京都杉並区善福寺四一七一 元日立金属副社長  
藤田 田（大阪）東大政治（二十五期文二）東京都新宿区西新宿六・五・二新宿アイランドタワー日本マグドナルド社長  
松本 昭（島根）阪大理化（二十五期理二）大阪市都島区都島南通二・二・二〇二〇 元大阪府科学教育センター部長  
元日赤愛知短大教授  
梶谷晴男（奈良）北大農（二十七期理一）大阪市生野区新今里町四・四・一三  
加納晴三郎 旧制新潟高校、京大薬学部大阪府高槻市北昭和台町一四・八  
東 史 宮崎県都城市郡江元町二九〇四・一四 メヒテルの少女時代の友  
石川 巖 京都府京都市山科区西野櫛川町五八・五三萩原憲三の秘書一九六八年訪問時の世話役  
鮎澤 巖（茨城）カルシウム借用の住居所有者 東京都世田谷区成城四二九一九二三年国際労働機関帝国事務所事務嘱託、一九二四年十一月 国際労働機関東京支局長、第二次世界大戦前にジュネーブの国際連盟日本代表  
荒井 寿光 通産省 東京都足立区千住曙町四一・一・一七〇五  
江角比出郎 松江市下東川津町一四二三 紫雲丸事件の生存者、酒井勝郎の学生  
前田俊明 松江市春日町五八・二・六 春日郵便局長  
柴田久美子 松江市北堀町二八・一 柴田午郎は義父 まちづくり会  
金澤庸治 松江市北堀町一四一まちづくり会  
川津富美子 松江市東本町一・八 夫君の叔父が中西利理

---

忘れ得ぬ偉人

私家版印刷

初版第一刷 二〇〇二年一月十八日

初版第二刷 二〇〇七年二月十二日

著者

千葉県我孫子市我孫子七五二―二

電話 〇四七一―六九―四二五〇

若松 秀俊

印刷

福岡県北九州市門司区社ノ木一―二―一

株式会社マツモト

発行所

東京都文京区湯島一―五―四五

東京医科歯科大学 大学院

---